

2015 年度

年次報告書

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

2017(平成29)年3月

まえがき

2015年度（平成27年度）は国立大学法人にとって、第2期中期目標期間の最終年度にあたり、アジア・アフリカ言語文化研究所も、共同利用・共同研究拠点（以下、拠点と略）制度の下、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として6年目を迎えた。

本研究所は、拠点としての目的を「今日、人類の7割を超える人びと（世界総人口約66億人のうち48億人以上）が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語文化のあり方を研究し、中長期的には、21世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目的達成のために、以下の三つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進している。

- 1) 臨地研究（フィールドサイエンス）に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

拠点認定にあたっては同時に、拠点認定の審議において「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」との意見が表明されたことも通達された。これを受けて本研究所では、組織体制および研究戦略の本格的な見直しに取り組み、2010年度からはその具現として、4つの基幹研究が活動を開始している。とはいえ、拠点の様々な活動の中で最も重要な活動が、公募に基づいて審査・採択される共同利用・共同研究課題であることは言を俟たない。2015年度に本研究所は、新規採択分と継続分を合わせ、共同利用・共同研究課題26件を実施した。

2013年度に実施された共同利用・共同研究拠点の中間評価において、本研究所は「拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究拠点を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される」また「共同利用・共同研究拠点として、言語学、歴史学、人類学、地域研究の各分野において国内外から多数の研究者の参画を得て、活発な活動が展開されるとともに、貴重な資料やデータベースの充実にも努めている点が評価できる」と評価され、A評価（S, A, B, Cの4段階評価）を受けた。しかしながら他方で、「今後は、共同研究課題への応募数の拡大を図り、成果の更なる質の向上に努めることが望まれる」とのコメントも受けており、このコメントを踏まえて、2013年度後半には、共同研究課題を所外の研究者コミュニティによりいっそう開かれた、応募しやすいシステムとすべく、制度の検討と改善を行った。その成果は、2014年度に所外代表による共同研究課題の応募数が大きく増加するという形で実を結んでいる。

一方、本研究所では、共同利用・共同研究拠点の中間評価と同じ2013年度に、拠点機能以外の研究所活動全体について所外の有識者による外部評価を実施し、その結果を踏まえて、研究所の共同利用性の拡大や、共同研究の質の向上に取り組んできたが、2015年度には拠点としての6年を総括する期末評価を受け、中間評価に続いて、総合評価A（拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される）を得た。しかしながら、期末評価結果には同時に、「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討するとともに、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」との助言が付されており、中間評価結果のフォローアップ状況についても「具体的な改善措置が取られ

ている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価が下された。これを受けて当研究所は、2018年度当初に予定されている拠点第2期の中間評価に向けて、国際共同研究の成果増大、共同研究課題の応募数拡大、研究成果のさらなる質の向上に取り組む一方、研究所全体としての特徴を明確にすべく、2016年度当初からは所内プロジェクト研究部と基幹研究の編成を一新するに至っている。

このように、全国共同利用研究所時代と比べると、競争的性格が強まったことは明らかなうえ、国立大学や拠点を取り巻く環境は、拠点の中間評価や研究所の外部評価が進行する前後から急激な変化を見せてきた。文部科学省は、第3期中期目標期間もイノベーションを生み出す大学改革やグローバル人材の育成を重視して、大学内の資源配分の見直しや組織再編、年俸制や混合給与の導入といった人事給与システムの改革を求めており、国立大学法人東京外国語大学に附置されている本研究所も、大学内の他の部局と同様、国立大学改革への対応を迫られるようになっている。資源の限られた小規模大学の附置研という条件の下で、このように困難な状況に立ち向かい、研究の継続性や高度化を担保していくためには、今後、これまで以上に所員の努力が求められることだろう。

この年次報告書は、国立大学に附置される共同利用・共同研究拠点として、99に及ぶ共同利用・共同研究拠点（平成28年4月1日現在）の中での競争を経ながら、共同研究を中心とした研究所のさらなる発展を目指すべく、2015年度の本研究所の成果について自己点検を行なうものである。

飯塚 正人
2016年8月31日

2015 年度年次報告書 目次

I-1 研究計画と点検評価体制	1
I-1.1 年度計画と達成状況の総括.....	1
I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」	1
I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括	1
I-1.2 点検評価体制.....	2
I-1.2.1 概要	2
I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価	3
I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価.....	3
I-1.2.4 個人研究に関する評価	4
I-1.2.5 経年教授に対する評価	4
I-1.2.6 本研究所の活動に対する期末評価の結果について.....	4
I-2 研究活動.....	7
I-2.1 概要.....	7
I-2.2 基幹研究.....	8
I-2.2.1 概要	8
I-2.2.2 言語ダイナミクス科学研究	9
I-2.2.3 人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関.....	10
I-2.2.4 中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成.....	11
I-2.2.5 アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求	13
I-2.3 共同利用・共同研究課題.....	14
I-2.3.1 概要と外部評価.....	14
I-2.3.2 共同利用・共同研究課題	14
I-2.4 センター.....	39
I-2.4.1 情報資源利用研究センター	39
I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター	40
I-2.5 既形成研究拠点.....	41
I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点 (GICAS)	41
I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点	42
I-2.6 所員の個人別研究活動.....	42
I-2.6.1 概要	42
I-2.6.2 所員の研究業績一覧.....	42
I-2.6.3 受賞	78
I-2.6.4 人事評価.....	78
I-2.7 外部資金による研究活動.....	78
I-2.7.1 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2	78
I-2.7.2 科学研究費などによるその他の研究活動.....	80
I-2.7.3 寄付金	80
I-2.7.4 受託研究・受託事業	80

I-3 組織運営	81
I-3.1 センター	81
I-3.1.1 情報資源利用研究センター	81
I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター	81
I-3.2 外部委員会	81
I-3.2.1 運営委員会.....	81
I-3.2.2 共同研究専門委員会	82
I-3.2.3 研修専門委員会.....	82
I-3.2.4 海外調査専門委員会	82
I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会	84
I-3.2.6 フィールドネット運営委員会.....	84
I-3.2.7 編集専門委員会	84
I-3.2.8 国際諮問委員会	85
I-3.2.9 海外拠点専門委員会	85
I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会.....	85
I-3.3 内部委員会等	85
I-3.3.1 企画運営委員会	85
I-3.3.2 研究戦略策定委員会	85
I-3.3.3 文献資料（図書）担当	86
I-3.3.4 国際交流担当.....	86
I-3.3.5 出版担当.....	86
I-3.3.6 基礎データ担当	87
I-3.3.7 広報企画担当.....	87
I-4 研究者コミュニティと一般社会とに開かれた研究プラットフォームの構築	89
I-4.1 若手研究者養成プログラム	89
I-4.1.1 言語研修の実施.....	89
I-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ	89
I-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー.....	89
I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー.....	90
I-4.1.5 短期共同研究員（公募）の受け入れ.....	90
I-4.1.6 大学院教育の現在.....	90
I-4.1.7 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員	91
I-4.2 国内連携研究活動	91
I-4.2.1 国内研究者受け入れ（フェロー等）	91
I-4.2.2 海外調査専門委員会の活動	94
I-4.2.3 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動.....	94
I-4.2.4 フィールドネット運営委員会の活動.....	94
I-4.2.5 四大学連合文化講演会	94
I-4.3 国際連携研究活動	94
I-4.3.1 国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等.....	94
I-4.3.2 海外研究拠点.....	94
I-4.3.3 外国人研究員招聘.....	94
I-4.3.4 外国研究者受け入れ（フェロー等）	95
I-4.3.5 海外学術機関との研究協力協定.....	96
I-4.3.6 研究未開発言語文化の調査事業.....	98

I-4.3.7	その他外部資金による国際連携研究.....	98
I-4.4	研究成果の国内外への公開.....	98
I-4.4.1	AA 研フォーラムの実施.....	98
I-4.4.2	公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣.....	98
I-4.4.3	出版および広報.....	98
I-4.4.4	収集資料等の展示・公開.....	98
I-5	成果と課題.....	99
I-5.1	2015 年度の成果.....	99
I-5.2	課題と展望.....	99
II-1	年表.....	103
II-2	予算・組織・機構.....	105
II-2.1	研究所の予算.....	105
II-2.1.1	2015(平成 27)年度予算.....	105
II-2.1.2	運営費交付金 (2015 年度)	105
II-2.1.3	科学研究費補助金	106
II-2.1.4	受託研究・受託事業等.....	106
II-2.1.5	寄付金等.....	106
II-2.2	外部委員リスト.....	106
II-2.2.1	運営委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	106
II-2.2.2	共同研究専門委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	107
II-2.2.3	研修専門委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	107
II-2.2.4	海外調査専門委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	108
II-2.2.5	フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会 (任期: 2015 年 4 月 1 日~2017 年 3 月 31 日)	108
II-2.2.6	フィールドネット運営委員会 (任期: 2015 年 4 月 1 日~2017 年 3 月 31 日)	109
II-2.2.7	編集専門委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	109
II-2.2.8	国際諮問委員会 (任期: 2015 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	109
II-2.2.9	海外拠点専門委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	110
II-2.2.10	中東研究日本センター諮問委員会 (任期: 2014 年 4 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)	110
II-2.3	内部委員会・業務担当.....	110
II-2.3.1	内部委員一覧.....	110
II-2.3.2	各種業務分担 任期: 2015.4.1~2016.3.31 (1 ヶ年)	111
II-2.3.3	全学委員一覧.....	111
II-3	研究活動の詳細.....	113
II-3.1	センター.....	113
II-3.1.1	情報資源利用研究センター.....	113
II-3.1.2	フィールドサイエンス研究企画センター.....	116
II-3.2	共同利用・共同研究課題.....	118
II-3.2.1	共同利用・共同研究課題実施状況.....	118
II-3.3	外部資金による研究の詳細.....	177
II-3.3.1	言語ダイナミクス科学研究プロジェクト 2	177
II-3.3.2	科学研究費等によるその他の研究活動	183

II-4	研究者コミュニティと一般社会に開かれた研究プラットフォームの構築	191
II-4.1	若手研究者養成プログラム	191
II-4.1.1	言語研修の実施状況.....	191
II-4.1.2	フィールド言語学ワークショップ実施状況.....	191
II-4.1.3	中東☆イスラーム関連セミナー実施状況.....	192
II-4.1.4	文化／社会人類学研究セミナー実施状況.....	193
II-4.1.5	短期共同研究員（公募）受け入れ状況	194
II-4.1.6	大学院教育の現在	194
II-4.1.7	研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員.....	195
II-4.2	国内連携研究活動	196
II-4.2.1	国内研究者受け入れ（フェロー等）	196
II-4.2.2	海外学術調査総括班の活動.....	203
II-4.2.3	四大学連合附置研究所長懇談会	203
II-4.2.4	シンポジウム等	204
II-4.3	国際連携研究活動	208
II-4.3.1	国際シンポジウム等一覧.....	208
II-4.3.2	外国人研究員招聘	218
II-4.3.3	外国研究者受け入れ（フェロー等）	218
II-4.3.4	研究未開発言語文化の調査事業.....	220
II-4.4	研究成果と資料の公開	220
II-4.4.1	出版.....	220
II-4.4.2	データベース構築・公開状況一覧.....	223
II-4.4.3	公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣.....	229
II-4.5	公共的利用	232
II-4.5.1	共同利用スペース等の稼動状況	232
II-4.5.2	文献資料室の利用状況.....	237

I 報告編

I-1 研究計画と点検評価体制

I-1.1 年度計画と達成状況の総括

I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」

アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）は、文部科学大臣に認定された言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点として、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を行い、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識枠組み提供のための基盤形成に寄与することを目的としている。

この目的を達成するために、

1. 臨地研究に基づく国際的研究拠点として共同研究プロジェクトを推進すること
2. アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源拠点及び研究成果の発信拠点としての活動を進めること
3. 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じての後継者養成を行うこと

【以上、国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所規程より】
を重点的活動目標としている。

この理念に沿って研究活動をいっそう充実させるため、本研究所では全国共同利用研究所時代の1996年度（平成8年度）以来、自己点検評価や第三者評価に基づいて、自己点検評価報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」を刊行してきた。本報告書は、2015年度における本研究所の研究体制と、それによって達成された研究および実施された活動の全体を報告するものである。

本報告書は「I 報告編」と「II 資料編」の2部からなり、「I 報告編」は、諸種の研究（基幹研究、両センター、共同利用・共同研究課題、既形成拠点、個人研究など）と諸種の活動（所内組織運営および共同利用・共同研究拠点としての教育・情報発信・資料構築及び公開・研究連携事業など）の概要を報告し、現状分析と今後の課題の概括を添える。「II 資料編」は、「I 報告編」において概括されている諸研究と諸活動の詳細を報告する。

I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括

本研究所における2015年度の研究活動は順調に進捗し、本報告書に報告するとおり、充実した成果を挙げた。本年度の研究・運営計画は十分達成されたと言える。以下、いくつかの項目ごとに本年度中に達成された研究・事業などの概要を記す。【2015年度の成果の概括は、I-5.1 2015年度の成果の項を参照】

研究教育等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置に関するもの

- 研究の質の向上に向けた組織的取組状況としては、以下の事項をあげることができる。
 1. 共同利用・共同研究拠点「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として、中期的研究戦略の共同研究軸である4つの基幹研究に予算を優先的に配分するとともに、公募による共同研究課題26件、科学研究費助成事業（基盤B以上）による基礎的研究9件を実施した。
 2. 基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」で、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院と連携し、研究未開発言語及び多様な言語システムに関する総合的研究を推進した。【詳細はII-3.3.1 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2を参照】
 3. 情報資源利用研究センターでは、研究資源の構築と発信を通じた共同利用を進めるため、国内外の研究者が利用可能な電子辞書の充実（モンゴル語、満洲語、ヨルバ語、チュルク諸語など）、またヒンディー語・ウルドゥー語形態素解析システムの改良に努める一方、新たにベンデ語の学習教材“Tusahule Sibhende”（2015）のマルチメディア（Web）版を作成し、簡単な語彙集とあわせて公開した。【詳細はII-3.1.1「情報資源利用研究センター」を参照】
 4. フィールドサイエンス研究企画センターでは、当該分野の新たな研究手法の開発を目指す「フィールドサイエンス・コロキウム」および領域横断的な研究の可能性を発掘する「フィールドネット」の両事業を推進する一方、地域研究コンソーシアムの年次集会に会場を提供し、併せて一般公開シンポジウム「境界領域への挑戦と『地域』」を企画・実施した。【詳細はII-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センターを参照】
 5. ベイルート海外研究拠点では、ベイルート・アメリカン大学、レバノン大学、ドイツ・ベイルート東方研究所との共同研究を推進した。また、コタキナバル海外研究拠点では、サバ州政府系のサバ開発研究

所 (IDS)・マレーシア・サバ大学との共同研究を推進した。【詳細は II-3. 1. 2「フィールドサイエンス研究企画センター」を参照】

6. アジア・アフリカ地域における現地調査研究やその他の専門的業務に役立たせることを目的に、アラビア語パレスチナ方言、古ジャワ語、モンゴル語の言語研修を実施した。あわせて、教材の開発と公開を行った。
- その他の目標として、情報公開や情報発信等の推進に関する目標の達成状況は次の通りである。臨地研究の成果を社会にわかりやすく発信するため、広報誌『FIELDPLUS』(No.14, 15)を刊行した。

I-1.2 点検評価体制

I-1.2.1 概要

本研究所の研究の一層の充実を目指して、国立大学法人化後の第一期中期計画(2004～2009年度)に盛り込まれた方針、すなわち「所内に評価制度を設け、研究成果の評価基準を策定し、定期的に業績の評価を行う」に従い、2003年(平成15年)に教授会決定された自己評価書の作成手順および研究業績評価指針は次のとおりである。

1. 研究所の基幹研究プロジェクトをはじめ、研究及び研究関連業務全般にわたる年度目標とその達成状況を評価し、成果の概要及び一覧を付して年度ごとの自己評価書を作成・公開する。
2. 業績評価基準を設ける。
 1. 評価結果は、人事に適切に反映されるように努める。
 2. 実績が研究資源配分などに反映される制度を検討する。
 3. 多様な研究活動の必要性に相応した柔軟で効果的な勤務形態を可能にする。
3. 中期計画に従い、人事評価基準を、次の三項目に大別する。
 1. 学術的な個人業績に関するもの
 2. 学術的な共同研究に関わるもの
 3. AA研の活動及びその成果普及に関わるもの

本研究所における研究活動自己評価は、2010年度に本研究所が全国共同利用研究所から新設の「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も、1年間はこの指針に従い、共同研究(4つの基幹研究、情報資源利用研究センター、フィールドサイエンス研究企画センター、2つの既形成拠点、共同研究課題/共同研究プロジェクト等とその関連業務)と、その基盤をなす個人研究という2種の研究活動について、前者に関しては外部からの評価を受け、後者に関しては自己申告する体制をとった。すなわち、(1)学外委員を中心とする運営委員会、専門委員会等による助言や評価と、(2)年度当初に所員が個別に提出した研究活動計画の翌年度当初における達成度自己申告、という2種の評価体制である。このうち、(2)に関しては、本研究所の共同利用・共同研究機能をより重視するという観点から、2010年度をもって自己評価書への掲載をとりやめ、各年度の所員の研究業績一覧だけを記載することとした。また、2013年度に自己評価書の名称も「年次報告書」に改めた。

なお、一部の例外を除いて委員の過半数を学外有識者が占める専門委員会等による助言と評価は、(1)所の研究活動及び関連業務全般に関しては「運営委員会」(2)共同利用・共同研究課題に関しては「共同研究専門委員会」、(3)その他の研究活動及び関連業務に関しては「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」がそれぞれ実施している。【所外委員を含む各委員会の詳細は I-3. 2 外部委員会の項を参照】

年度計画の提出は、基幹研究、両センター、既形成拠点、共同利用・共同研究課題、所員個人の各レベルに義務づけられている。ただし公募による共同利用・共同研究課題は、例年10～11月頃に開催される審査会を経て採択されることから、審査にあたった共同研究専門委員会の評価を考慮し、場合によっては必要な修正を施した上で確定されている。

このように本研究所の自己評価体制は、一方では、所の活動全般(「運営委員会」)、主要な研究活動(「共同研究専門委員会」)、主要な業務(「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」)について外部からの評価・助言を受け、また他方では、所内諸組織の各レベルについて個別に研究活動計画の達成度を申告するという、種々の角度から幾重にも点検・評価する仕組みとなっている。

外部の意見を取り入れた自己点検・評価作業の集成として毎年作成される本報告書は、過年度をふり返り、新年度の研究の活性化と組織の柔軟性を保障する上で重要な役割を果たしている。すなわち、本報告書により、AA研における種々のレベルの研究の全体像を所内外の研究者が共有し、所の将来を展望するための確たる基盤を形成しようとするものである。

I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価

共同利用・共同研究拠点である本研究所のあり方全般について学外の研究者・有識者から助言と評価を得るために、運営委員会が設置されている。【詳細は I-3.2.1 運営委員会の項を参照】

また、研究者コミュニティの意向を反映した共同利用・共同研究のあり方を維持するために、所外の研究者を加えたいくつかの委員会が設置されている。

なかでも共同研究専門委員会は、公募による共同利用・共同研究課題の質の向上を図るため、すべての共同利用・共同研究課題の審査と評価に当たっている。また、海外学術調査総括班の活動や、言語研修、編纂・出版事業の運営に学外からの意見を生かすため、海外調査専門委員会、研修専門委員会、編纂専門委員会がそれぞれ設置されている。【詳細は I-3.2.2 共同研究専門委員会、I-3.2.3 研修専門委員会、I-3.2.4 海外調査専門委員会、I-3.2.7 編纂専門委員会の項を参照】

さらに2010年度からは、国際的な「共同利用・共同研究拠点」としての一層の発展を目指し、国際諮問委員会と海外拠点専門委員会が設置された。後者は、ベイルート海外拠点の運営のために2007年以来設置されてきた中東研究日本センター専門委員会を発展させたもので、コタキナバル・リエゾンオフィスの運営も、併せて助言と評価の対象としている。ベイルート海外拠点の運営についてはほかに、現地の有識者による中東研究日本センター諮問委員会も設置されている。【詳細は I-3.2.8 国際諮問委員会、I-3.2.9 海外拠点専門委員会、I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会の項を参照】

I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価

本研究所の理念に沿って、2015年度には公募による共同利用・共同研究課題26件（うち11件が所外代表）が組織され、活発な共同研究事業が展開された。

人文社会系で初の全国共同利用研究所として設置されて以来、本研究所の活動の根幹を成してきた共同研究プロジェクトに対する評価は2004年度から試験的に開始され、2005年度には評価を担当する「共同利用委員会」が設置されて、2006年度より同委員会による評価が完全実施されてきた。その結果、全国共同利用研究所における最重要事業のひとつであった共同研究プロジェクトは格段に充実してきたと言える。こうした評価体制は、2010年度にAA研が「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も基本的に変更されることはなく、新設の共同研究専門委員会が年度末に共同利用・共同研究課題の実績報告を受けて、書面審査を実施し、助言と評価を与えている。【詳細は I-2.3 共同利用・共同研究課題の項を参照】

一方、新設の「共同利用・共同研究拠点」制度が、「募集による共同利用・共同研究の実施」と、「採択にあたって学外委員が半数を占める審査委員会の審査」を義務づけていることに鑑み、2015年度も共同利用・共同研究の新規課題を公募し、過半数を学外委員が占める共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった10件のすべて（うち4件が所外代表）を採択した。なお、審査に関しては、2010年度の共同研究専門委員会による指摘を受けて改善を図った結果、2011年度以降は次の4項目について審査し、5段階で評価を行っている。

- 研究の背景：研究目的が明確で、本研究所の共同利用・共同研究拠点としての目的に合致しているかどうか。研究の意義、特に課題として展開することの意義が明確かどうか。
- 期待される研究成果：期待される研究成果が明確、具体的で、我が国の言語学・文化人類学・歴史学・地域研究とその関連諸分野の発展に貢献できるかどうか。
- 研究の実施計画：計画、方法が十分に練られ、かつ研究組織、研究者の構成が妥当なものかどうか。公開計画が実現性の高いものかどうか。
- 全体評価

I-1.2.4 個人研究に関する評価

本研究所ではこれまで、「個人別達成度自己評価」という形で、所員が実施する共同研究と個人研究の両面を含む研究活動を、個人別に評価する方式を採ってきた。これは、各所員が年度当初に基幹研究、両センター、既形成拠点、公募による共同研究課題／共同研究プロジェクト等の共同研究ならびに個人研究の両研究活動に関する研究活動計画を提出し、翌年度初頭にそれがどこまで達成できたかを個別に自己申告するものである。

しかしながら、本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたのみならず、基幹研究や既形成拠点、さらには2つのセンターによる事業が展開されるに至った現在、これらの研究活動は当然、各個人の研究業績にも反映されることになる。換言するならば、共同研究、基幹研究、2つのセンターによる事業とかかわりを持たない「個人研究」は存在する余地がないと言えるだろう。したがって、2011年度からは共同研究と個人研究を別個のものとしてとらえる前提に立脚していた「個人別達成度自己評価」の自己評価書への記載を取りやめ、各所員の研究業績を列挙して、公開する形に変更した。【詳細は I-2.6.2 所員の研究業績一覧の項を参照】

I-1.2.5 経年教授に対する評価

2005年度より、AA研の教授職に一定年限在職し、かつ定年まで実施年を含め3年以上の残余年がある教授について、当該在職期間中の研究業績の評価を外部研究者に委託して実施している。

1. 研究方法の独創性：従来の研究に比して方法論的に新しい点、優れている点
2. 研究成果：研究がもたらした新しい視野
3. 学界への貢献：研究の学界に対するインパクト・後続研究に対する先駆的役割・研究者交流に対する貢献等
4. 総合評価

3名の外部研究者が、上記に示した4項目を総合的に評価し、4段階（特に優れている・優れている・やや劣る・極めて劣る）の何れかに位置づける方法で行われる。本年度は該当者がなく、実施しなかった。

I-1.2.6 本研究所の活動に対する期末評価の結果について

本研究所は2010年度にそれまでの全国共同利用研究所から新設の共同利用・共同研究拠点へと移行したが、制度上、2010年4月1日に認定された共同利用・共同研究拠点の有効期間は一律、2016年3月31日までの6年間となっている。その6年の半分にあたる3年が経過した2013年度に文部科学省は共同利用・共同研究拠点に対する中間評価を実施したが、2015年度には「中間評価のフォローアップを行うとともに、第3期中期目標期間における各大学における拠点の位置づけの明確化や拠点機能の向上に向け、学術研究の基盤強化と新たな学術研究の展開に資する本認定制度の目的及び意義を踏まえ、共同利用・共同研究拠点認定制度の創設以後初となる期末評価を実施」し、「期末評価の結果により、次期認定を希望する拠点の認定の更新を行う」ことになった。

期末評価は、2015年2月下旬に作成依頼のあった期末評価用調査書を同年5月末までに文部科学省に提出し、省内に設置された専門委員会が書面審査を行う形で実施され、必要な場合にはヒアリングが行われることになっていたが、本研究所へのヒアリングは省略された。

期末評価結果は9月30日付で通知され、本研究所は中間評価に続いて、総合評価S（拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献も多大であったと判断される）こそ得られなかったものの、総合評価A（拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される）を得ることができた。ちなみに、人文・社会科学系でSと評価されたのは4拠点（36%）、Aが6拠点（55%）、Bが1拠点（9%）である。

期末評価結果にはさらに「共同利用・共同研究拠点として、セミナー等を通じた次世代研究者の育成とともに、研究者以外を対象としたシンポジウム等による成果発信について積極的に取り組んでいる点が評価できる」との評価コメントが付されていたが、同時に「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討するとともに、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」との助言もなされていた。また、中間評価結果のフォローアップ状況についても「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言いがたく、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価が下された。これを受けて当研究所は早速11月の運営委員会に、期末評価結果への対応について諮問し、2018年度当初に予定されている共同利用・共同研究拠点第2期の中間評価に向けて、国際共同研究の成果増大、共同研究課題の応募数拡大、研究成果の更なる質の向上に取り組む一方、研究所全体としての特徴を明確にすべく、2016年度当初から所内プロジェクト研究部の編成を一新している。

なお、期末評価要項によれば、本研究所に関する評価の観点は以下のとおりであった。

【第2期中期目標期間中の評価】

①拠点としての適格性

- 研究実績，研究水準，研究環境等に照らし，当該拠点の目的たる研究の分野における中核的な研究施設であると認められるか。（規程第3条第2号関連）
 - ・ 下記のような点を総合的に考慮して，各拠点が当該分野における中核的な研究施設であると認められるか。
 - ▶ 当該研究施設におけるこれまでの研究成果
 - ▶ 競争的資金等の採択状況
 - ▶ 卓越した研究者やリーダーの存在
 - ▶ 共同利用・共同研究に参加する関連研究者が利用できる研究スペースや宿泊施設等の確保
- 共同利用・共同研究に必要な施設，設備及び資料等を備えているか。（規程第3条第3号関連）
 - ・ 当該研究施設が有する共同利用・共同研究に必要な施設，設備，学術資料，データベース等の整備状況等。
- 共同利用・共同研究に参加する関連研究者に対し，施設の利用に関する技術的支援，必要な情報の提供その他の支援を行うための必要な体制が整備されているか。（規程第3条第6号関連）
 - ・ 共同利用・共同研究に参加する関連研究者に対する支援業務に従事する専任職員（教員，技術職員，事務職員等）が配置されているか。
 - ・ 技術的支援について，例えば，技術職員の配置や設備のスムーズな利用等の面で，適切な体制が整備されているか。
 - ・ 関連研究者に対して必要な情報を継続的に提供するための体制が整備されているか。
 - ・ その他拠点の活動内容に応じて，例えば，事務体制や研究スペースの確保，宿泊施設の確保等が適切に行われているか。
 - ・ 関連研究者に対する支援を行うに当たり，必要な全学的支援（予算・人員の配分等）が行われているか。

②拠点としての活動状況

- 全国の関連研究者に対し，共同利用・共同研究への参加の方法，利用可能な施設，設備及び資料等の状況，申請施設における研究の成果その他の共同利用・共同研究への参加に関する情報の提供が広く行われているか。（規程第3条第7号関連）
 - ・ 下記のような情報について，例えば，ホームページやメーリングリスト，ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS），学会誌での情報提供等により，広く情報提供が行われているか。
 - ▶ 共同利用・共同研究への参加の方法（課題の公募要領，施設の利用要領・利用資格等）
 - ▶ 共同利用・共同研究において利用可能な施設，設備及び資料等の状況
 - ▶ 拠点における研究の成果
 - ▶ その他共同利用・共同研究に参加する際に得られる支援の内容等
- 多数の関連研究者の参加促進・関係分野への働きかけや大型プロジェクトの企画運営等，関連分野の発展への取組が行われているか。（規程第3条第8号関連）
 - ・ 特に公私立の研究者の参加を促進するための取組が行われているか。
 - ・ 共同利用・共同研究を活かした人材育成が行われているか。
 - ・ 大型プロジェクトの発案，運営，ネットワークの構築等に参画し中核的な取組をしているか（日本学術会議のマスタープラン，科学技術・学術審議会のロードマップへの貢献等）。
- 拠点の運営に当たり，広く外部の意見を取り入れているか，または，取り入れることのできる仕組みとなっているか。（規程第3条第4号関連）
 - ・ 例えば，全国の関連研究者の意向を反映させやすいような体制や組織構成となっているか。
 - ・ 積極的にコミュニティからの意見を取り入れるような取組がなされているか。
- 共同利用・共同研究に多数の関連研究者が参加しているか。（規程第3条第8号関連）
 - ・ 共同利用・共同研究の実績（設備の利用状況，データベースへのアクセス数，共同研究の件数，研究

集会やシンポジウムの開催数、共同研究者数等）は研究施設の規模や実績と比較して十分か。

○ 共同利用・共同研究の課題等の採択に当たり、公平な審査が可能な仕組みが整備されているか。（規程第3条第5号関連）

- 共同利用・共同研究の課題等の募集方法や採択方法が適切か（広くコミュニティに開かれているか、公平に採択されているかなど）。

③ 拠点における研究活動の成果

○ 拠点認定時の申請内容がどの程度達成されているか。

- 拠点に申請した際の目的・目標に対してどの程度達成されたか。

○ 共同利用・共同研究を通じて優れた研究成果が生み出されているか。

- 下記のような客観的な指標から、当該拠点の共同利用・共同研究を通じて優れた研究成果が生み出されているといえるか。

▶ 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数、高いインパクトファクターを持つ雑誌等への掲載、共同利用・共同研究が発展してプロジェクト研究につながったもの等。

- 共同利用・共同研究機能でしか成し得ない研究成果が生み出されているか（異分野融合による新分野の創成等）。

○ 拠点活動を通じて共同利用・共同研究者（外部研究者）への波及効果が生み出されているのか。

- 外部研究者自身の研究成果につながっているのか。

○ 研究活動の成果が地域社会や広く国際社会に対しても貢献できているか。

- 公開講座や公開講演会等の実施状況。

④ 関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献

○ 関連研究分野や関連研究者コミュニティの発展に貢献できているか。

⑤ 中間評価結果のフォローアップ状況

○ 中間評価結果について、改善点の見直しや新たな取組の実施等、拠点としてどのようにフォローアップしているのか。

【第3期中期目標期間に向けた評価】

⑥ 各国立大学の強み・特色としての国立大学の機能強化への貢献

○ 国際化へどのように貢献していくのか（国際化へ向けた体制の強化や国際公募の状況等）。

○ 若手・女性・外国人研究者の人材育成及び博士課程学生の教育にどのように貢献していくのか。

○ 企業との連携等によるイノベーションの創出にどのように貢献していくのか。

○ 地域の中核拠点として地方の活性化等にどのように貢献していくのか。

○ 年俸制やクロスアポイントメント制度の導入等により人材の流動化にどのように貢献していくのか。

⑦ 第3期における拠点としての方向性

○ 国立大学改革が進む中、第3期において、拠点としてどのような方向性をもって取り組んでいくのか。

- 重視する方向性の例：グローバル化、人材養成機能の強化、新分野創成、異分野融合研究の推進等。

○ 当該分野の拠点として、第3期において、どのようなミッションを持ち、当該分野を発展させていくのか。

I-2 研究活動

I-2.1 概要

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする大学間の共同利用研究所として1964年に設置された。基本的に言語学、文化人類学、歴史学、地域研究の各分野の研究者から構成されている。2014年に創立50周年を迎えたが、過去半世紀以上にわたって、国内外の共同研究や海外調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野の研究推進に主導的な役割を果たしてきた。

2010年度から新たな共同利用・共同研究拠点（以下、拠点と略）制度の下で、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」（研究分野としては言語学、文化人類学、地域研究）としてスタートを切るにあたり、本研究所は、拠点としての中長期的な目標を「今日、人類の7割を超える人びと（世界総人口約66億人のうち48億人以上）が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語・文化のあり方を研究し、中長期的には、21世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、その達成のために以下の3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進していくことを活動の中心に据えた。

- 1) 臨地研究（フィールドサイエンス）に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

以上のような研究活動・研究事業を強力に推進するため、本研究所は2008年度以来所内及び運営諮問委員会において継続的な検討を行ったすえ、国立大学評価委員会からも高い評価を受けていた研究ユニットをより重点化する形で、2010年度より4つの基幹研究（「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるミクローマクロ系の連関」「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」）を発足させた。これらの基幹研究は、本研究所が重視する研究領域を明示するとともに、共同利用・共同研究課題とも連動しながら拠点としての活動を一層深化・充実させようとするものであり、2013年度に行った外部評価を踏まえて、次期拠点認定期間に合わせて新たな体制へと移行すべく、2015年度には集中的に新体制の検討を進めた。また、従前から設置されていた2つのセンター（情報資源利用研究センター及びフィールドサイエンス研究企画センター）はもとより、これまで対外的に形成されてきた2つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点（GICAS）及び中東イスラーム研究拠点も既形成拠点として研究活動を継続している。所員の多くは基幹研究、既形成拠点またはセンターに所属し、共同利用・共同研究拠点にふさわしい国内外の研究者との密接な協力に基づく共同研究活動を推進している。

2015年度に遂行した具体的な研究活動は次の通りである。

1. 特別経費「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究」に基づく共同利用・共同研究課題（26件）を実施した。
2. 特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」（言語ダイナミクス科学研究プロジェクト）による共同研究や国際ワークショップなどの研究活動を実施した。
3. 4つの基幹研究、すなわち「言語ダイナミクス科学研究」、「人類学におけるミクローマクロ系の連関」、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」、「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」が活動を行い、引き続きそれぞれが国際シンポジウム、公開研究会、公開セミナー、ワークショップなどを組織した。
4. 海外研究拠点（ベイルートの中東研究日本センターおよびコタキナバル・リエゾンオフィス）を維持・運営し、共同研究、国際ワークショップ、講演会、若手研究者報告会を実施した。
5. 東京会場においてアラビア語パレスチナ方言及び古ジャワ語、大阪会場においてモンゴル語の言語研修を実施した。
6. 次世代研究者養成事業として「中東☆イスラーム研究セミナー」、「中東☆イスラーム教育セミナー」、「文化／社会人類学セミナー」などを引き続き実施した。
7. 科学研究費補助金を含む外部資金の導入による各種研究プロジェクトを実施した。

I-2.2 基幹研究

I-2.2.1 概要

本研究所において、多くの所員がそれぞれ一つの共同研究プロジェクトの主査となることは、研究の多様性という点では評価できるものの、研究所が全体としてどのような研究を目指し、何を達成しているのかが見えにくい。

こうした意見は 1990 年代に入ってから再三表明されてきた。すなわち、研究所として重点をおくべきテーマをより明確にすべきではないかという指摘である。当時「重点共同研究プロジェクト」というカテゴリーを設定したのは、そうした問題提起への主体的な回答に他ならない。その後、必ずしも議論が深まったとは言えないものの、2004 年度に国立大学法人化を迎えるに至り、本研究所は 1 プロジェクト研究部（言語動態、情報資源戦略、コーパス、文化動態、政治文化の 5 研究ユニットから構成）、2 センター（情報資源利用研究センターとフィールドサイエンス研究企画センター）体制のもとで、第 1 期中期目標期間に臨むことになった。このうちプロジェクト研究部内の 5 つのユニットは、機械的に所員を分類するのではなく、なんらかのテーマのもとに、実質的な所員同士の共同研究がなされることを目指して設置された。

このプロジェクト研究部に関しては、本研究所が共同利用・共同研究拠点に移行し、かつ第 2 期中期目標期間に突入した 2010 年 11 月 5 日付で、国立大学法人評価委員会から、柔軟な研究実施体制の整備の具体的取組例として「プロジェクト研究部の中に設置した複数の研究ユニットを通じて、『小規模コーパスデータ分析のためのツール開発』『心身論』『異文化交渉がつくる歴史認識』『言語の構造的多様性と言語理論』等の機動的な研究プロジェクトを実施している【東京外国語大学】」との評価を得たものの、同時に問題点も存在していた。

まず、研究所としての重点研究領域が明示されなかったことは、研究所を代表する事業と個人研究との間の線引きや、研究事業・プロジェクト間における優先順位の設定を困難なものにした。次に、1 プロジェクト研究部・2 センター体制の下では人員の流動性を確保することも極めて困難であった。言うまでもなく、一定期間ごとに所員をユニットやセンター間で異動させても、所全体としての研究が活性化するわけではない。このような状況の中、2010 年度からの共同利用・共同研究拠点制度の導入や第 2 期中期目標期間開始を前にして、本研究所所長（当時）は所員の活力源としての各自の研究テーマを尊重するとともに、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を提起した（2009 年 4 月の教授会）。

その後、本研究所が 2009 年 6 月 25 日付で共同利用・共同研究拠点として認定された際に、期せずして「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という拠点認定審議における意見が合わせて通達された。本研究所執行部はこの意見を真摯に受け止めるとともに、重点研究領域を明確にするプロセスの加速が必要であると考え、将来計画検討委員会（当時）とともに具体策の検討を重ねた。

その結果、所内で重点となる研究領域（テーマ）を立て、所員がその研究領域（テーマ）について研究を推進することが提起され、重点となる研究領域は「基幹研究」という名称をもって呼ぶことが定められた。そして基幹研究は、共同利用・共同研究課題と有機的に連動することによって、本研究所が主導し、外部の研究者コミュニティとともに行う重点研究を明示するものとして位置づけられることとなった。2010 年度からの基幹研究発足を目指し、2010 年 1 月から 2 月にかけて所員のイニシアチブにより、共同利用・共同研究拠点としての分野に応じて 3 件から 4 件の基幹研究を採択するという方針のもと、「言語ダイナミクス科学」（言語学）、「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」（人類学）、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」（歴史・地域）「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」（歴史・地域）の 4 件が基幹研究として採択された。基幹研究は、発足から 3 年目の中間評価を経たうえで継続が認められるほか、予算の配分、新規採用人事に関しても重視されることになった。本研究所における基幹研究の 3 年に及ぶ活動は、2012 年 11 月 7 日に公表された「国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況」において、国立大学法人評価委員会から、共同利用・共同研究に関する「特色ある取組例」として取り上げられ、「アジア・アフリカ言語文化研究所では、中期的研究戦略の共同研究軸である 4 つの『基幹研究』へ予算を優先的に配分するとともに、公募による共同研究課題計 22 件（継続分を含む）を実施している。【東京外国語大学】」と評価されるに至った。なお、人文社会系の国立大学附置研究所の中で取り上げられたのは本研究所の事例のみであったことを付言しておく。

2012 年度にはさらに、前述の方針に従って、外部評価委員会による基幹研究の中間評価が実施された（2012 年 12 月 8 日）。なお、外部評価委員会委員は、佐藤源之（東北大学東北アジア研究センター・電波応用工学）

関本照夫（国立民族学博物館・人類学）、堤研二（大阪大学大学院文学研究科・人文地理学）、長野泰彦（総合研究大学院大学副学長・言語学）、林佳世子（東京外国語大学総合国際学研究院・歴史学）の5氏に委嘱し、①研究の実施計画、②研究活動・成果の公開、③今後3年間（2013年度～2015年度）の活動計画について、各基幹研究代表から提出された書類と当日のプレゼンテーションに基づき、個々の基幹研究に対する評価を行っていただいた。その結果、4つの基幹研究はいずれも2013年度以降2015年度までの活動継続が認められた。

2013年度以降は、中間評価におけるコメントを踏まえ、それぞれの基幹研究が研究内容の充実を図る一方、研究活動や成果が所外からよりいっそうアクセスしやすくなるよう、研究所ホームページの一部改修を行った。新たな大型研究資金の獲得に取り組み始めた基幹研究もある。さらに4つの基幹研究は、2014年に本研究所が創立50周年を記念して開催したシンポジウムでも、現在の所の研究を代表する形で研究報告を行い、最終年度となった2015年度もそれぞれに活発な研究活動を展開した。

もともと、現行の基幹研究は2015年度いっぱい6年にわたる活動を終え、第3期中期目標期間の始まる2016年度には、新たに「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（言語学）、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」（文化人類学）、「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」（地域研究・歴史学）の3つの基幹研究が発足する。3つの基幹研究はそれぞれ、国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して研究活動を進める一方、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」（2016～2021年度）にも取り組んでいく。この全所プロジェクトは、アジア・アフリカ地域の直面する現代的諸問題の解決に向けて、緊急解決すべき問題が等しく「少数派／弱者の危機」という側面を持つことから、3分野の基幹研究が有機的に連携し、合同研究集会を実施して、現代的諸問題研究の飛躍的発展を図るもので、文字どおり第3期中期目標期間の研究所の顔となることが期待されている。

1-2.2.2 言語ダイナミクス科学研究

代表者：中山俊秀

関連所員：呉人徳司、澤田英夫、塩原朝子、星泉、渡辺己、山越康裕、児倉徳和

研究の概要

本基幹研究は、長期的な全体構想において、国際的な連携体制のもとに危機言語問題や言語多様性に関する研究を促進するための学術的ネットワークを拡充するのみならず、一般社会への研究還元をおこなうネットワークの構築をもその射程に含めることを目的としてきた。そのような国際的ネットワークの構築およびその活動基盤のインフラ整備には中長期的なコミットメントが事業の成否に関わる。

これまでに得られた国際的協力体制・信頼関係は、長期的な継続性を念頭に築かれており、機関間ネットワークも中長期的な事業継続があつてこそ大きなインパクトをもたらさう。本研究は2012年度までを当初研究期間として活動したが、想定した以上の成果があがり、国内外から予想を越える高い評価を受け、継続的な活動を期待されたため、2013年度から3年間を第2フェーズとして活動を延長することとした。

本研究の第2フェーズの活動は、これまでの3年間に築いた危機言語の記録と言語多様性に関する共同研究体制を維持発展させながらも、第1フェーズにおける研究の進展と近年の危機言語研究を取り巻く社会的要請の変化をふまえ、学術成果の社会還元により力を注いだ。

これまでの危機言語研究活動の成果物は学術的性格が強く、その成果を現地コミュニティに効果的に還元する手法の開発が後手に回っていたため、一層深刻化する少数言語の破壊・消滅に対して十分に有効な貢献とはなり得ていない部分があった。そのため、最近では危機言語コミュニティのニーズに応えるような技術や方法的知識を広く供与することが全世界的に強く求められている。本研究では、そうした動向にいち早く対応し、危機・少数言語コミュニティへのアウトリーチ活動を効果的に支援するための国際コンソーシアム Consortium on Training in Language Documentation and Conservation (CTLDC) の設立を中核メンバーとして支え、平成24年1月から活動を開始させた。これは現地コミュニティでの活動を強く意識したこれからの危機言語研究を先取りした先駆的な取り組みとして国際的関心を集めている。

本事業は、これまでAA研で行ってきた共同研究事業、共同利用拠点としてのノウハウ、言語研修や様々なワークショップ・セミナーの実績に加え、第1フェーズでの連携事業を通して形成した国際連携基盤を最大限に活用し、危機言語・言語多様性研究に今新たに求められている以下のような研究、社会還元活動を先導した。

- ・ 社会的応用・還元の方法と技術の開発、およびそれを支えるインフラの構築までを含む研究活動
- ・ 能力育成型還元を通じた現地コミュニティ支援：言語の記録・保存のための技術や方法論・再活性化のノウハウなどのトレーニングを軸とした支援活動を通してコミュニティ自らが問題に取り組む能力を育成

- ・相互支援ネットワークであるコンソーシアム (CTLDC) を基盤とした効率的で持続可能な国際連携体制の構築

関連プロジェクト

- ・AA 研共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点から見た琉球諸語のケースマーケティング」
- ・AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」

研究計画

2015 年度は以下の活動を計画していた。

- ・9 件の連携する共同利用・共同研究課題の国内及び国際研究会の開催
- ・言語ドキュメンテーション研究に関する国際ワークショップの開催
- ・危機言語、研究未開発言語に関する資料・リソースの共同利用の研究
- ・『アジア・アフリカの言語と言語学』(AALL) の企画編集

研究成果 (2015 年度)

本年度は以下の活動を軸に、研究事業を活発に展開し、計画は十分に達成された。

研究面では、共同利用共同研究課題を今年度新たに3件発足させ計8件の共同研究プロジェクトを組織し、危機言語及び言語多様性に関する学術研究ネットワークを拡充させた。研究集会（国際2回、国際・国内研究集会24回）を通じて言語の構造的多様性と研究未開発言語の記録・再活性化に関する研究を多面的に推進した。また、研究未開発言語調査派遣、研究資料の電子化を通じて少数言語の記録・記述研究を進めた。

研究理論、研究手法に焦点を当てたワークショップ（海外研究機関との連携による国際ワークショップ2回及び国内ワークショップ4回）提供や共同研究企画運営インターンシップを通じた若手養成事業も計画通り進行した。

研究還元面でも、インドネシアやロシアの現地コミュニティなどを対象としたアウトリーチ活動を行い、国際的的事业を活発化させるとともに、国内向けにも公開映画上映会・講演会など（6回）を開催した。また、アーカイブ構築に向けた研究、技術インフラの整備などにより研究成果共有・研究交流ネットワークの形成を進めた。また、インドネシア、中国、アメリカ、ロシア、ドイツ、イギリス、オーストラリア、カナダ、マレーシア、ミャンマーなどの研究機関を訪問し、連携事業をより活発化すべく研究交流関係の構築を行った。

学術研究・社会還元のための研究資源・成果共同利用を目的としたオンラインデータベース（4件）などの構築・公開を行った。

以上のように、本事業の活動は当初の目的を十分に達成し、昨年度構築した事業基盤を効果的に拡充することができた。

【詳細は I-2.7.1 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト 2, II-3.3.1 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト 2 の項を参照】

I-2.2.3 人類学におけるマイクロマクロ系の連関

代表者：西井涼子

関連所員：河合香吏、栗原浩英、佐久間寛、高島淳、床呂郁哉、深澤秀夫

ウェブサイト：<http://www.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>

研究の概要

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、イスラーム文化圏、中華文化圏、インド洋海域世界

といったトランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティブへの関心が高まってきた。

また他方では、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など、マイクロ・パースペクティブを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究をこえた次元での新たな概念化と理論化の試みである。本研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。

本年度は昨年度来行ってきた、マイクロ・マクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に関する共同研究からさらに焦点化して、「リスク・ハザード」に対処する人類の知の検証とそれが切り開く可能性にむけてテーマ設定を行った。

具体的には本年度は、国際ワークショップや公開セミナー、合評会、および公開シンポジウム等を通じて共同研究をすすめ、人間の不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない状況のもとで、アジア・アフリカからの「在来知」の個別を人類学が現場＝フィールドから、個別を越えた普遍的視野において探究することを本基幹研究のさらなる先導的課題として導いた。

関連プロジェクト

- AA 研共同利用・共同研究課題「人類社会の進化的基盤研究 (4)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」
- AA 研共同利用・共同研究課題「『もの』の人類学的研究 (2) (人間/非人間のダイナミクス)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究 (第二期)」

2015 年度の主な研究活動

本年度の主な研究活動は以下の通りである。

- ウェブサイトの構築を更新した：<http://www.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>
- 国際ワークショップ 2 回、公開シンポジウムを 1 回、公開セミナーを 1 回、公開合評会を 2 回開催した。
- 若手育成の研究セミナーを日本文化人類学会と共催により開催した。【I-4.1.4 文化/社会人類学研究セミナーを参照】
- 昨年度 2014 年 7 月の公開シンポジウム「〈情動 sense, emotion and affect〉と〈社会的なもの the social〉の交叉をめぐる人類学的研究」の報告書、12 月の第 2 回公開シンポジウム「河合香吏編『制度—人類社会の進化』(京都大学学術出版会, 2013) をめぐって」の報告書、及び 2014 年 11 月、2015 年 1 月、2015 年の 3 回行われた合評会の報告書、計 3 冊を刊行した。

I-2.2.4 中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成

代表者：黒木英充

関連所属：飯塚正人、小田淳一、荻谷康太、近藤信彰、高松洋一、床呂郁哉、錦田愛子

ウェブサイト：<http://meis2.aacore.jp/?lang=ja>

研究の概要

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて「多であること」の問題性を追究する。多元的社会の生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関などの問題に取り組む。

本基幹研究は、2005 (平成 17) ~2009 (平成 21) 年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展形である。ペイルート、コタキナバル両海外拠点管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS (Middle East and Islamic Studies) 「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、ペイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究/教育セミナー、ペイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成に当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

関連プロジェクト

- AA 研共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

- AA 研共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存（第2期）」
- AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第2期）」
- AA 研共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究」

研究計画

具体的な研究推進，次世代研究者育成，研究成果の社会還元活動は以下を予定していた。

1. 共同利用・共同研究課題をバイルートJaCMES, コタキナバルKKLOにて国際共同研究として実施する。
2. 中東☆イスラーム研究／教育セミナーにより次世代研究者の育成に資する。
3. JaCMESにおける若手研究者報告会により次世代研究者の育成に資する。
4. オスマン文書セミナーにより当該地域の歴史研究者の養成に資する。
5. 中東都市多層ベースマップシステムの充実を図る。
6. 本研究活動の全体をウェブサイト上で公開する。
7. JaCMES, コタキナバル・リエゾンオフィスにおいて講演会を開催し，研究活動の現地社会還元を図る。

研究成果（2015年度）

具体的な研究推進，次世代研究者育成，研究成果の社会還元活動は以下の通りである。

1. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存（第2期）」の第4回研究会をバイルートの中東研究日本センター（JaCMES）にて2015年9月1・2日に，第5回研究会をAA研にて2016年2月16・17日に実施した。2回の研究会を通じて海外の共同研究員と共に，参集者全員が英語による研究報告を行った。
2. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第2期）」の第4回研究会を2015年7月5日にAA研にて，第5回研究会を9月27日にコタキナバルのHotel Meridien Kota Kinabaluにおける国際ワークショップとして，第6回研究会を2016年2月21日にAA研にて開催した。
3. 共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」は，第5回研究会を2015年7月12日に，第6回研究会としてオスマン文書セミナーを2016年1月9・10日にAA研にて，国際ワークショップを1月11日に本郷サテライトにて，第7回研究会として国際ワークショップを3月17日にAA研にて開催した。
4. AA研共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加」は，第4回研究会を2015年7月25-26日に名城大学名駅サテライトMSATにて，第5回研究会を12月5日に，第6回研究会を2016年3月2日にAA研にて開催した。
5. AA研共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為」は，第6回研究会を2015年6月7日に，第7回研究会を2016年3月13日にいずれもAA研にて開催した。
6. 次世代研究者養成のために，2015年9月21～24日に21名の受講生を対象に「中東☆イスラーム教育セミナー」を，12月18～20日に7名の受講生を対象に「同研究セミナー」を，いずれもAA研にて実施した。
7. 次世代研究者の育成のためにJaCMESにおける若手研究者報告会を2015年11月27日に実施し，4名の報告者による報告と，4名のコメンテータによる討議を中心としたセミナーを開催した。
8. 2016年1月9・10日にAA研にて「オスマン文書セミナー」を開催し，30名の受講生を対象にオスマン帝国史を中心とした歴史研究者の養成に貢献した。
9. 中東都市多層ベースマップシステムについてトップページの改良を行うなど，さらなる技術的改良を加えた。
10. 本研究活動の全体を俯瞰できるウェブサイトを維持・発展させ，研究成果の公開に資した。
11. 2016年3月22日にバイルートの映画館Metropolis Empire Sofilにて第13回JaCMES公開講演会・映画会議“Lebanon 1949: The New Born State on Film”を開催した。
12. 2016年3月10日にJaCMESにて国際ワークショップ“Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Groups in the Middle East”を開催した。
13. 2015年9月7日にKKLOにて「ボルネオの言語研究とマレー語研究の過去と現在」を開催した。
15. 2016年3月30日にAA研にて，本基幹研究に所属する研究機関研究員2名の研究成果報告の研究会を開催した。

I-2.2.5 アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求

代表者：深澤秀夫

関連所属：石川博樹，荻谷康太，椎野若菜，目黒紀夫

ウェブサイト：<http://www.aa.tufs.ac.jp/~africa>

研究の概要

本基幹研究の主たる目的は、グローバル化のなかで大きな変容を迫られているアフリカ諸地域の文化を研究する本研究所の研究者が、人類学や歴史学といった専門にもとづく各自の研究活動に立脚しつつ、共同で多元的世界像の探求・構築を進めることである。

アフリカ文化研究の具体的なトピックとしては、たとえば、植民地経験と社会変化、農耕と地域文化の連関、アフリカ史叙述の方法論、社会のなかの女性／シングル、人間と野生動物の関係などがあげられる。メンバーが個々にこのようなトピックで研究をすすめてつつ、研究班全体として、公開研究会・セミナーの開催、海外研究者との連携によるシンポジウムの開催などを行い、ウェブサイトなどをつうじて研究成果の発信を行う。

以上のようなアフリカ文化の基礎研究は、地域社会・生活空間の歴史的な変容、人間と自然のあいだの関係性の再考、アフリカ史の包括的検討など、現代アフリカの抱える諸問題の理解と解決に不可欠であるばかりでなく、それらの問題の根本にある近現代世界の構造そのものを問い直し、多元的な世界像を構築するのに寄与するものと期待される。

関連プロジェクト

- AA 研共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化 (2)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」

年度計画

2015年度の年度計画は以下のとおりであった。

1. 公開研究セミナーを年間6回程度開催する。
2. 共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化 (2)」と連携し、公開シンポジウムを開催する。
3. 2012年度に開催したナイロビにおけるシンポジウムの成果論集を英文で刊行する。
4. AA 研所蔵アフリカ関連書籍・画像・音源を一覧化し、HP上で公開する。
5. アフリカ関連の人類学・歴史学研究文献の整備に努める。
6. 以上の活動の広報・成果公開のため、ウェブサイトを維持・運営する。
7. 以上の活動の遂行のために研究機関研究員1名を雇用する。

研究成果 (2015年度)

2015年度、下記の活動を行った。

1. 公開研究セミナーを2015年度内に8回開催した。
2. 公開シンポジウム「食と農のアフリカ史を考える」を2016年3月13日(日)にAA 研共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化 (2)」とともに開催した。
3. 2012年度に開催したナイロビにおける討論会の成果論集 Wakana SHIINO, Soichiro SHIRAISHI, & Tom ONDICHIO (eds.), *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa & Nairobi: JSPS Nairobi Research Station, 2016 (ISBN 978-4-86337-219-1)を刊行した。
4. AA 研に所蔵されているアフリカ関連資料の調査を行い、所蔵情報をウェブサイト上で公開した。公開URL <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/africa/journals.html>
5. アフリカ地域の民族誌および地域研究書誌の系統的収集については、2015年度配分予算の縮減に伴う予算の重点執行の観点から、文献購入を断念した。
6. ウェブサイトを維持・運営し、上記諸活動の広報・成果公開を行った。
7. 2014年4月1日付で採用した研究機関研究員1名を引き続き雇用した。

I-2.3 共同利用・共同研究課題

I-2.3.1 概要と外部評価

本研究所は、文部科学大臣によって言語学、文化人類学、地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」であり、公募による共同利用・共同研究課題は、共同利用・共同研究拠点としての本研究所が最も重視する事業であることから、公募によらずに実施してきた従来の共同研究プロジェクトとは区別して、「課題」という新たな名称を採用している。共同利用・共同研究拠点の認定制度は、国公立大学を通じて研究者が共同で研究を行う体制を整え、わが国全体の学術研究をさらに発展させる目的で、2008年に文部科学省が創設したもので、大学に附置された研究施設のうち「全国の関連研究者に利用させることにより、わが国の学術研究の発展に特に資する」と認められたものだけが共同利用・共同研究拠点に認定された。

このようにして認定された共同利用・共同研究拠点に対し、文部科学省は「募集による共同利用・共同研究の実施」と「採択にあたって学外委員が半数以上を占める審査委員会の審査」を義務づけており、これに従って、本研究所では共同利用・共同研究拠点に移行する2010年度を前に、全国の関連研究者から新たに共同利用・共同研究課題を公募し、学外委員が過半数を占める審査委員会の厳正な審査を経て11件の共同利用・共同研究課題を採択した。続く2010年度にも同様の方式で8件、2011年度に6件、2012年度に8件、2013年度に11件、2014年度に8件の共同利用・共同研究課題を採択し、結果として2015年度には計26件の共同利用・共同研究課題を実施することとなった。ちなみに、これら課題に参画するメンバーの数は所員延べ60名、共同研究員延べ341名の合計401名、2015年度中に開催した課題研究会の総数は84回、研究業績総数は論文・図書を合わせて476点にのぼる。

これら進行中の共同利用・共同研究課題に対する評価は、年度末に提出される「実施年次報告書」を共同研究専門委員会が書面審査する形で行われ、翌年度以降の研究の発展に寄与している。

他方で、本研究所は2015年度も共同利用・共同研究の新規課題を公募し、共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった10件のすべてを採択した。これにより、2016年度には計29件の共同利用・共同研究課題を実施することになった。なお、公募による共同利用・共同研究課題の審査にあたっては2010年度の共同研究専門委員会による指摘を受け、従来の5項目の審査基準を3項目（「研究の背景」「期待される研究成果」「研究の実施計画」）に整理したうえ、それに基づいて各共同利用・共同研究課題に対する点数評価を行った。

【本年度の各共同利用・共同研究課題の成果の概要等については、I-2.3.2 共同利用・共同研究課題を、研究会実施状況及び研究業績一覧については、II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況を参照】

I-2.3.2 共同利用・共同研究課題

複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性

研究代表者名：中山俊秀 参加者：所員 4、共同研究員 16

研究期間：2013（平成25）年度～2015（平成27）年度

研究計画

最終年度となる平成27年度には、本課題の中で新たに構築することを目的とする動的文法研究モデルの基盤的議論を取りまとめ、研究第2フェーズ（次期課題として申請準備中）において進める方法論および理論的枠組みの充実化につなげる。

具体的には、以下の成果を取りまとめる：

- (a) 動的文法研究アプローチの特性を具体的に示すため、特に従来の研究の中で扱いにくく例外とされてきた現象や構造パターンに注目し、動的アプローチの利点を意識した議論を盛り込んだケーススタディを集め、論集をまとめる
 - (b) 文献リスト、基盤的概念の概説などの研究リソースをまとめる
 - (c) 動的文法研究アプローチの特性に照らして扱いやすいテーマと扱いが難しいテーマを整理し、アプローチの特長を活かした研究成果が期待できる研究領域を明確にすることで、発展的研究の方向性を示す
- (b)と(c)については、オープンな課題研究会の他、ワークショップ企画などを通して公開するとともに、ウェブ

サイトでも公開する。

研究実績の概要（2015年度）

平成27年度には、言語の動的体系性を示唆する文法現象のケーススタディを吟味しつつ従来の記述・理論枠組みが抱える問題を明確にする一方で、共同研究期間を通して重ねてきた予備探究的議論を取りまとめた。それにより、本課題が対象とする言語の動的体系性という問題領域を明確に整理し、次期課題として申請準備中の第2フェーズの基盤を確立することができた。

プロジェクト研究会では事例研究報告に基づく議論、理論的問題を設定したディスカッションを中心に理論的な研究を進めた。それと並行して、小規模ながらよりオープンな読書会（Usage-based & Emergentist Linguistics 読書会）を2週間に1度のペースで定期的に開催し、関連論文を議論する機会をもった。読書会には近隣の研究者のみならず大学院生なども集まり、動的文法研究アプローチに対する関心を広げることに効果的であった。また、本プロジェクトでの議論および研究の成果は、論文や個別の発表に生かされるだけでなく、ワークショップ、シンポジウム、パネルなどの企画の基盤として研究活動の方向づけにも役立った。

終了報告

本課題は、文法を言語使用や歴史から常にフィードバックを受け変化しつつある動的な知識の体系として捉える研究アプローチの発展基盤の形成を目的としてきた。研究会や読書会での関連研究の批評と議論を通じて、動的文法研究の必要性と可能性を探求するとともに、分析枠組みや方法論開発、成果を生みそうな課題領域の特定、研究参入に必要な基盤的文献やリソースの特定など、アプローチの理論的発展に必要な研究基盤を構築することができた。その点で、本課題の当初の目的は十分に達成された。

本課題の活動を通して得られた成果は研究内容上の進展にとどまらない。むしろより重要だと考えられるのは、動的文法研究アプローチに関心を持つ研究者や学生が広がりを見せてきていること、狭い意味での「文法研究」以外の研究者との広いつながり（問題意識やアプローチの共有など）を作ることができたことである。動的文法研究アプローチを軸とした研究者のつながりや研究交流の場を作ることで、今後研究活動を育てていく上での重要な足がかりが得られた。

成果の公開状況、計画

- プロジェクトの内容、研究会の開催通知・報告、発表要旨を含む活動記録はプロジェクトサイトで公開している (<https://sites.google.com/site/ubagram>)
- 関連読書会（Usage-based & Emergentist Linguistics 研究会）の会合記録は勉強会サイトで公開している (<https://sites.google.com/site/toshinaklab/sg/ube>)
- 動的文法研究アプローチに関する情報発信やリソース構築もオンラインで始めている (<https://sites.google.com/site/toshinaklab/lingdys>)
- 研究会、勉強会における研究や議論の中で蓄積されてきた研究関連情報を公開用リソースとしてまとめる作業は十分に手が回らなかったため、その部分に取り組む。具体的には以下のリソースを充実させていく：
 - 文献リスト
 - 基盤的概念の概説
 - アプローチの特性を理解する上で役立つ議論・論争のまとめ
- また、動的文法研究アプローチに関心がある研究者コミュニティを拡大していくために、以下のような活動をしていく：
 - 動的文法研究アプローチの特性に照らして扱いやすいテーマと扱いが難しいテーマを整理し、アプローチの特長を活かした研究成果が期待できる研究領域を例示（発展的研究の方向性を示すために）
 - 研究者が情報交換できる場作り（メーリングリスト、SNS グループなどを活用）

研究成果：学術論文14件、口頭発表等22件、図書2件、社会に向けた成果発表2件

通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造

研究代表者名：内海敦子 参加者：所員 1, 共同研究員 19

研究期間：2013（平成25）年度～2015（平成27）年度

研究計画

本研究会は平成25年度に通言語的視点からの情報構造に関する理論的枠組みを研究会構成員の間で共有した。

また、名詞の情報構造ステータスがどのように表現されているかのケーススタディの発表も行われた。平成26年度は引き続き名詞句の情報ステータスに関して研究成果を発表し合い、「新情報・旧情報」の別がどのような影響を統語論に与えているかについて知見を共有した。平成27年度はこれまでの成果を踏まえ、以下の点に特に注力していく。

- ① 有標な情報構造を表す統語構造 (Topic-marking construction, cleft sentence など) について、理論的枠組みの共有と、それを各言語に応用した成果の報告。
- ② 態の交替を持つ言語 (典型的にはフィリピン型の受動態が複数ある諸言語と、二つの態の交替を持つインドネシア型) と、態の交替を持たない言語が、それぞれ新情報・旧情報の標示においてどのような違いを見せるか。
- ③ プロソディ、イントネーションと情報構造との関係について、理論的な枠組みと方法論を共有し、それを各言語に応用した成果の報告。

以上の内容を4月と10月の研究会で国内メンバーの間で研究し、2016年2月に予定している国際研究会では国外のメンバーおよび情報構造の専門家を招聘して議論を深める。

以上の成果を一冊あるいは複数冊の刊行物としてまとめ、発行するための活動を行う。

研究実績の概要 (2015年度)

平成27年度の最初の研究会である国内の第7回研究会においては、統語論と情報構造の関係を重点的に取り上げ、形態的な情報構造標示についても知見を共有した。John Bowden氏 (AA 研客員研究員) は特別に研究会に参加し、インドネシア語のジャカルタ方言 (口語) における統語構造がインドネシア語標準語と異なっており、情報の新旧のちがいが選択された構文と連関していることを示した。北野浩章氏はカパンパガン語における補文や名詞節と情報構造の関係を示した。塩原朝子氏はいくつかのイベントが連なって表現されるときに選択される態と、名詞句の情報ステータスの関係を示した。降幡正志氏と内海敦子は名詞句に付加する情報ステータスの表示について、それぞれスダ語と西マラヨ・ポリネシア諸語について整理した。第8回研究会 (国内) においては新情報と旧情報の名詞句標示について、知見を共有した。米田信子氏はバントゥー諸語のマテング語を例に理論的な視点をもたらした。吉田朋彦氏は日本語について、月田尚美氏はセデック語について、野元裕樹氏は古典マレー語について、トピック (旧情報) とフォーカス (新情報) に付加する標示について整理した。

第10回研究会 (国際) では、フィリピン、インドネシア、ドイツ、フランスより研究者を招聘し三日間にわたって発表と議論を行った。プロソディについてはGerman氏が理論的な枠組みについて、また通言語的な視点について発表し、Riesberg氏とHimmelman氏が音声的フォーカスがオーストロネシア諸語にどのように現れているかを発表した。トピックとフォーカスの表れがピッチの上下によって示されていることも内海などから報告があった。また、Riester氏から情報ステータスの分析について理論的枠組みが示され、タガログ語やインドネシア語における応用例がLatroute氏や塩原氏より報告があった。その他の研究者から各自の専攻言語より記述的報告があった。

これらの研究会により、理論的枠組みを共有し、各自の記述の方向性を確認した。

終了報告

本研究会はバントゥー語、日本語、英語からの知見を基に、通言語的視点からの情報構造に関する理論的枠組みを研究会構成員の間で共有した。「新情報・旧情報」の別がどのような影響を形態・統語論に与えているかについて知見を共有し、プロソディがどのように情報構造を示しているかについて知見を共有した。3年間で以下の点に特に注力した。

- ① 名詞句の情報ステータスを表す指示詞、名詞句マーカについて Gundel et al 1997 を初めとする cognitive status と名詞句標識の関係を論じた理論的枠組みを用いて、各自の専門とする言語を記述し、整理した。
- ② 有標な情報構造を表す統語構造 (Topic-marking construction, cleft sentence など) について、定義の共有をし、各言語に応用した成果の報告を Kapampangan や Tagalog などのフィリピン諸語について行った。
- ③ 態の交替を持つ言語 (典型的にはフィリピン型の受動態が複数ある諸言語と、二つの態の交替を持つインドネシア型) と、態の交替を持たない言語が、それぞれ新情報・旧情報の標示においてどのような違いを見せるか、記述を行った。古マレー語、口語インドネシア語、フィリピン諸語について、連続して動きを描写する際に目的語が定の場合は必ず受動態が用いられ、目的語が定でなくても受動態が好まれることを確認した。
- ④ プロソディ、イントネーションと情報構造との関係について、記述的な知見を共有した。オーストロネシア諸語については音声的なフォーカス (特に強く大きく発音される語) がどれにあたるかが明確に分からないため、情報構造を表示する手段として音声的フォーカスが用いられていないことが示唆され、代わりにピッチ

チの上下とポーズによって主題(旧情報)やフォーカス(聞き手にとって新情報と話者が考える情報)が表される言語の報告があった。

成果の公開状況、計画

第3回国際研究会(2013年度)の予稿集が電子的に発行されており、以下のURLにて公開している。

http://lingdy.aacore.jp/en/activity/is-austronesian/proceeding_informationStructure.html

2014年度の成果については、第六回国際研究会の発表を基にproceedingsを電子出版した。URLは以下の通りである。https://publication.aa-ken.jp/proceeding_2IW_IS_Austronesian_2015.pdf

2015年度、第9回国際研究会に関してはproceedingsの原稿がすでに集まっており、第3回、第6回のproceedingsと同様に電子出版する予定である。

その他、本研究会にかかわるすべての成果を集め、電子出版を予定している。Language Science Press(<http://langsci-press.org/>)との交渉を進めており、情報構造と音声・プロソディ(仮)「情報構造と名詞句(仮)」「情報構造と統語構造(仮)」の3部構成でオープンソースの電子書籍として出版することが、研究員の間で確認された。

研究成果：学術論文17件、口頭発表等18件、図書2件、社会に向けた成果発表5件、その他1件

日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究

研究代表者名：角田三枝 参加者：所員 2, 共同研究員 7

研究期間：2013(平成25)年度～2015(平成27)年度

研究計画

一昨年、各言語のノダに類する文末形式の用法を調べるために、角田三枝が漫画による調査票を考案、作成した。それを全員で検討したうえで30種類ほどの漫画を用意し、それを用いて各言語の研究者が実際の調査を行った。昨年度はその調査結果を精査し、主に、(i)各言語特有のノダ相当の形態の用法を考察し、(ii)角田三枝が各言語のノダ相当の形態および類似の形態を含めて、おおまかな用法の全体図(この図を仮に「意味と用法の全体図」と呼ぶ)を作成した。

本年度は、以下のことを目標とする。

- (1) 「意味と用法の全体図」の内容を精緻化する。
- (2) すべての言語について、これまでの調査結果と考察から、ノダ相当の形態の用法の分布が何を表しているのかを考察する。
- (3) ノダに類する文末標識がどのような場合に出現するかということをもとに、出現の類型化、言語の類型化を試みる。
- (4) 各言語におけるノダに類する文末標識の用法の特徴を検討する。
- (5) 平成26年度に、調査研究の成果を筑波大学の大学院生、海津洋介さんに統計学の手法で分析していただいた。その結果を今後の研究に生かす。
- (6) 第3回目研究会をワークショップにおいて、研究成果をワークショップにおいて発表する予定なので、その発表内容を具体的に表す。

平成28年1月に、AA研においてワークショップを行い、これまでの研究成果を公開する計画である。

研究実績の概要(2015年度)

第1回目研究会(2015年5月9日、10日)では、角田三枝が前年度に行った調査結果の統計学的分析(筑波大学の大学院生(海津洋介氏)に依頼)の結果も参考にして、それまでの調査結果の全体の概要をまとめた。統計学的分析では、本共同研究で扱っている八つの言語(日本語、モンゴル語、ビルマ語、ネパール語、朝鮮語、カム・チベット語、アムド・チベット語、シベ語)について、各言語のノダ相当形式の用法の違いから、言語間の距離などを見ることができた。角田三枝がその結果をふまえて、八つの言語とノダ相当の形式の用法にかかわる言語類型論的に重要な発見があることを図式化して示し、報告した。その特徴は、角田三枝(2004)で述べている、「思考プロセス」の「サイクル1」から「サイクル3」の分類とも合致する。八つの言語がおおまかに二つのタイプに分かれることを示し、さらにその中に各言語の特徴により、さらなる分類があることを示した。各言語のメンバーも、それぞれの言語における「思考プロセス」との関係を再度検討した。

また、第2回目研究会では、年度末に計画している公開ワークショップの準備を兼ねて、それぞれの言語の担当者が、「思考プロセス」の観点から、各言語の特徴や新たな発見を発表した。

第3回目の研究会の第1日目は、公開ワークショップにあて、メンバー全員がそれぞれ発表を行った。外部からの参加者と質疑応答やディスカッションも行った。

終了報告

正式な研究期間前であったが、2013年1月に、LingDyの補助により、研究会を1回（2013年1月26・27日）行った。

2013年度から2015年度にわたり、研究会等を以下のように実施した。

2013年度：研究会を3回（2013年5月11・12日、10月26・27日、2014年1月25・26日）行った。また、調査票のサンプル検討会を2回（4月5日、7月6日）行った。

2014年度：研究会を3回（2014年5月24・25日、2014年11月8・9日、2015年1月24・25日）行った。

2015年度：研究会を3回（2015年5月9・10日、2015年12月5日・6日、2016年1月23・24日）行った。

本プロジェクト全体の概要は以下のとおりである。

- (1) 日本語のノダに関する角田（2004）の「ノダの思考プロセス」の理論をもとに、アジアの八つの言語のノダ相当の形態の、文末表現としての用法を比較した。
- (2) 文末表現の用法の比較には、文脈のある調査票が必要である。角田三枝が漫画による調査と調査票を新たに考案し、各メンバーが各言語の調査に用いた。こうして、言語調査における、新しい調査方法を提案、実践した。
- (3) 調査の結果から、以下のことを発見した。
 - (i) 今回調査したすべての言語についてノダ相当の形態の出現が「思考プロセス」にかかわり、しかも言語ごとに特徴があること。
 - (ii) ノダ相当の形態が出現する通言語的な条件があり、言語類型論的に重要な発見があること。

漫画による調査と、メンバーの努力により、比較的短い時間で大きな研究成果をあげることができたと思われる。

成果の公開状況、計画

- (i) 桐生和幸が2015年7月に国立国語研究所のシンポジウムにおいて、ノダ相当形式に関する口頭発表を行った。
- (ii) 上記のように、2016年1月23日にAA研において、メンバー全員で公開ワークショップを行った。
- (iii) 星泉（2016: 188-189）が、ノダ相当の形式について記述した。

角田三枝が、漫画による言語調査について、論文を執筆し、AA研のジャーナルに投稿したいと考えている。また、発表時期は確定していないが、メンバーそれぞれ論文執筆等の準備をすすめている。

研究成果：口頭発表等1件、図書1件

“人間—家畜—環境をめぐるミクロ連環系の科学”の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ

研究代表者名：星泉 参加者：所員 1、共同研究員 7

研究期間：2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

ウェブサイト：<http://nomadic.aa-ken.jp/>

研究計画

昨年度に構築した共同編集用チベット牧畜語彙データベースをさらに充実させ、辞典制作のための準備を行う。具体的には以下の通りである。

- (1) 牧畜語彙の記述とデータベースの整備
昨年度現地調査で収集した1,000語あまりの牧畜語彙の記述を共同編集用データベース上で、分担して進める。テキストによる記述だけでなく、イラストや写真を用いた記述にも力を入れ、辞典の編集作業に入る。データベースの一部はウェブサイトで一般公開する(<http://nomadic.aa-ken.jp/>)。
- (2) 現地調査とアウトリーチ活動
青海省黄南チベット族自治州ツェコ県の純粋牧畜村および周辺都市において牧畜語彙収集および記述の精緻化のための追加調査を行う。その際現地の学生や若手研究者を対象とした調査法に関するワークショップを実施する(科研費申請中)。調査結果の一部は昨年度同様、論文の形で発表する。
- (3) 牧畜に関連する研究者との交流

牧畜辞典の記述を豊かなものにするため、関連する知識を有する研究者を研究会に招き、研究交流を実施する。

研究実績の概要（2015 年度）

2015 年度に実施した現地調査および研究により、青海チベットにおける牧畜民の生活知の様々な面を明らかにすることができた。具体的には、まずヤクを中心とする家畜の認識語彙の調査結果を「年齢・雌雄・役割、毛色・角の有無、模様、大きさ、性格」といった観点から体系的にまとめることができた。また、乳文化については、牧畜専業か半農半牧かにかかわらず、同じ乳加工技術が広く用いられていることが明らかになった。さらに搾乳をはじめ、バター、チーズなどの乳製品の加工、およびそれらに関わる儀礼の詳細なデータを記録することができた。また、放牧地や家畜の管理、肉の加工、食生活、テントやかまどに関する語彙、糞・毛・皮に関する語彙についても調査・記録が進んだ。宗教儀礼については、特に日常生活に関わりの深い儀礼を中心に記録を進め、家畜の放生や山神信仰から呪術に至るまで、多岐にわたる語彙を記録した。調査地の言語の音声特徴を明らかにするための言語調査も行なった。

記録した単語は共同編集用のデータベースに蓄積し、整理を進めた。また、調査結果をもとに雑誌で「牧畜民の暮らしと文化」という巻頭特集を組み、上記の点から重要なものをピックアップして一般向けの記事を執筆した。

本課題のメンバーで申請していた科研費基盤研究 (B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(2015-17 年度) が採択されたため、現地調査の継続実施のみならず、牧畜民の生活知のあり方を映像(動画・イラスト)の形で記録できるようになった。現地の若手映像制作者や大学院生との協働により、調査時に現地の牧畜民の暮らしを撮影し、100 分程度の映像に編集し、記録映像としてまとめた。映像の公開に関しては現地の協力者と十分な協議を行い、DVD 化やインターネット公開は見送ることになった。映像公開にかかわる現地の感情と倫理的な問題について学ぶ貴重な機会となった。

成果の公開状況、計画

- (1) 2015 年 4 月に本課題のメンバーによる共同現地調査の結果をまとめた乳加工体系をテーマとする共同執筆論文が、Milk Science 誌に掲載された。
- (2) ウェブサイト(<http://nomadic.aa-ken.jp>)にて研究成果の一部を公開している。
- (3) 2016 年 1 月に刊行された『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 3 において「牧畜民の暮らしと文化」という 60 頁におよぶ巻頭特集を組み、本課題のメンバーが現地調査の分析・研究結果を一般向けに公表した。
- (4) 2016 年 6 月にノルウェーで開催される国際チベット学会にチベット牧畜の縮減とイノベーションというテーマでパネルセッションを組み、本課題の共同研究員および研究協力者のうち 6 名が研究発表を行う。
- (5) 2017 年 1 月にチベット牧畜に関する公開ワークショップ(映像上映会を含む)を実施する。
- (6) 2017 年 1 月にチベット牧畜に関する企画展(映像上映会を含む)を実施する。
- (7) 2017 年 3 月に『チベット牧畜文化辞典(仮題)』の評価版を刊行する。

研究成果：学術論文 7 件、口頭発表等 6 件、図書 1 件、社会に向けた成果発表 16 件、その他 1 件

インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築

研究代表者名：塩原朝子 参加者：所員 3、共同研究員 19

研究期間：2014(平成 26)年度～2016(平成 28)年度

研究計画

昨年度同様、以下の 5 つの事業を継続して行う。

- (1) 共同研究員および研究協力者がフィールドで得た一次データの処理について知見を共有する。
- (2) 共同研究員および研究協力者がフィールドで得た音声データ、動画データをメタデータ・アノテーションとともにアーカイブする作業を進める。
- (3) インドネシアのクワンで言語ドキュメンテーションに関するワークショップを開催し、現地の研究者と共同でのデータアーカイビングを検討する。また、既に得られたデータを用いた次の新しい試みを開始する。
- (4) 文法研究に利用するアノテーションの方法の検討。
- (5) 現地に研究成果を還元する方法の検討。

(3)で交流を持つ現地話者ととも、現地の民話を収集し、出版する方法を検討する。(4)については文に現れる名詞句の指示物の animacy と文法関係に関するアノテーションをつける手法である GRAID(Haig and Schnell 2011)や名詞句の談話的ステータスに関するアノテーションのための手法 RefLex(Riester and Baumann 2013)の導入を検討する。(5)については4月に共同研究員であり外国人研究員として着任中である Anthony Jukes 研究員の研究協力者である Jahja Polih 氏をインドネシアから招聘し、インドネシアの危機言語の一つである Tombulu 語の辞書作成を行う。また、(3)で交流を持つ現地話者ととも、現地の民話を収集し、出版する方法を検討する。

研究実績の概要 (2015 年度)

今年度は各共同研究員が収集したデータを公開するウェブページの作成を重点的に行った。

作業は昨年度試行的に構築した言語データ・メタデータ公開のためのブログのフォーマットを用いて共同研究員各自が行った。(7人の共同研究員・所員が参加した)

Center for Language resource and information of indigenous languages in and around Indonesia

<http://id-lang-rc.aa-ken.jp/>

この他研究会ではメンバーが各自の活動報告を行った。第1回研究会では阿部優子共同研究員が2014年度にAA研から出版した『ベンデ語教科書』を話者と編集した経緯を報告した。また、第2回研究会ではインドネシアから招聘した2名のゲストが、第3回研究会では外国人研究員2名が各自の研究成果・活動について報告した。

また、この研究会の企画で特別経費 LingDy2 経費によるインドネシアでの言語ドキュメンテーションワークショップを4件(ジャンビ、マナド、デンパサル、クワン)開催し、現地の話者コミュニティに言語ドキュメンテーションの手法に関するトレーニングを行った。いずれのワークショップにも共同研究員・所員が参加した。このうち、クワンのワークショップにおける実習で現地の大学院生・教員が録音した一次データは転写・翻訳などのアノテーションを付けた形で上記のウェブページから公開されている。

成果の公開状況、計画

各自が収集・メタデータ・アノテーションをつけたデータを以下のサイトから公開中である。

Center for Language resource and information of indigenous languages in and around Indonesia

<http://id-lang-rc.aa-ken.jp/>

研究成果：口頭発表等6件、社会に向けた成果発表3件

朝鮮語アクセント・イントネーション研究

研究代表者名：伊藤智ゆき 参加者：所員 1, 共同研究員 7

研究期間：2014(平成26)年度～2016(平成28)年度

研究計画

2015年度は、2014年度に行ってきた調査・研究を継続し、より多くのアクセント資料の収集を行うとともに、更に詳細な分析を進める。特に以下の点について、重点的に研究を行っていく予定である。

- (1) 全羅道方言のアクセント体系分析と借用語アクセント研究：他方言に比べ、研究があまり進んでいない全羅道方言について、より多くのアクセント資料を収集し、アクセント体系と分節音との相関関係、借用語アクセントにおける原語(英語、日本語等)のアクセントの影響等について、分析を進める。
- (2) 延辺朝鮮語の複合語アクセント分析：延辺朝鮮語の複合語アクセントは、原則として後部要素決定型と考えられているが、その実態の解明を目指すとともに、中期朝鮮語アクセントとの比較対照を行う。
- (3) 慶尚道大邱方言の固有語アクセント研究：前年度より継続し、大邱方言の固有語アクセントにどの程度バリエーションが見られるのか検討する一方、中期朝鮮語との対応や慶尚南道方言との比較を行う。
- (4) 中期朝鮮語文献諺解作成者の言語的背景分析：例外的な地域出身のハンゲル資料作成者が、諺解作成においてどのような役割を担っていたか、検討を進める。また、金安國によるさまざまな著作において、誰が諺解を行ったのかなど、資料自体に即して検討を行う。
- (5) 慶尚道方言・江原道方言アクセントの共時的分析：前年度提案した新しい解釈により、慶尚北道・南道のアクセント体系・複合語アクセントパターンの違いや、現在進行中のアクセント変化がどのように分析されるか、検討を進める。
- (6) 慶尚道方言の合成語アクセント分析：合成語の資料を、複数の話者から収集することにより、どのようなバリエーションが見られるか明らかにする。また、アクセントパターンについて、音節量や語彙種も踏まえ、分析を進める。

研究実績の概要 (2015 年度)

2015 年度は、2014 年度より行ってきた朝鮮語諸方言の調査を更に進めるとともに、主として以下のテーマについて、各共同研究員が調査・分析を進めた。

- (1) 慶尚北道大邱方言の用言のアクセント研究：慶尚北道大邱方言における用言のアクセント交替について調査を行い、語頭長母音とアクセントパターンとの相関性について明らかにする一方、中期朝鮮語アクセントとの比較を行った。
- (2) 全羅南道光陽地域方言アクセント研究：全羅南道光陽市に位置する多鴨面・金湖島・光陽邑方言の名詞について調査を行い、それぞれの基本的なアクセント体系と、音声学的実現の違いについて明らかにした。
- (3) 全羅道諸方言アクセントの変化様相に関する研究：全羅道方言のうち、特に全州方言と光州方言について分析を進め、これら二方言と、ソウル方言との比較を行った。それにより、これら三方言はいずれも、頭子音のタイプにより音調型が決まる傾向があるが、その相関性はソウル方言>全州方言>光州方言の順に強いこと、また、全州・光州方言においては、一音韻句の音節数が長くなるほど、ソウル方言のような体系に近いことを明らかにした。
- (4) 中国吉林省延辺朝鮮語の用言アクセント研究：延辺朝鮮語の用言アクセントに観察されるバリエーションと歴史的発展について、最適性理論の枠組みに基づき、モデル化を行った。
- (5) 中期朝鮮語用言アクセント分析及び朝鮮語祖語再建：中期朝鮮語における用言のアクセントパターンについて、分節音との相関性を明らかにし、それに基づき、朝鮮語祖語の音韻体系再建を試みた。
- (6) 延辺朝鮮語の複合語アクセント研究：延辺朝鮮語の複合名詞アクセントについて、それらを構成する単純語アクセントとの比較を行い、単純語におけるアクセント変化は、複合語の後部要素において、より反映される傾向があること、逆に複合語の前部要素は、保守的なアクセントパターンを保持する傾向を見せることを明らかにした。
- (7) 小倉進平による朝鮮語音声の観察の分析：小倉進平が『朝鮮語方言の研究』(1944) などの論著において行った方言調査の報告について、そこで用いられている音声表記や、彼が行った音声学的観察について、基礎的分析を行った。

成果の公開状況, 計画

一部の研究成果は、学会・研究会での発表や、論文刊行により公開している。まだ刊行されていない研究成果については、各共同研究員が(単著もしくは共著により)論文を執筆中であり、完成次第、学術誌へ投稿することが見込まれる。また、関連学会での発表も随時行っていく予定である。

なお、2016 年 7 月 2~3 日、日本語・朝鮮語のアクセント・イントネーションに関する国際シンポジウムを、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開催する。同シンポジウムにおいて、本共同研究課題共同研究員は、ほぼ全員が発表を行う予定である(主査の伊藤のみ、シンポジウムの企画・運営、進行係を務める予定)。

研究成果：学術論文 9 件、口頭発表等 4 件、社会に向けた成果発表 1 件

アジア地理言語学研究

研究代表者名：遠藤光暁(青山学院大学) 参加者：所員 2, 共同研究員 18

研究期間：2015(平成 27)年度~2017(平成 29)年度

ウェブサイト：<http://agsj.jimdo.com/>

研究計画

アジア全域をカバーする 1000 地点以上の密度の言語地図の作成を始める。今年度は「太陽・稲・乳(milk)」の 3 語を 3 回の研究会でそれぞれ扱う。語族が重合しあう地域の扱いや、語族を超えて語形が分布する場合の扱いなど、解決を待つ基本的な問題に取り組む。共通ソフトとして Arc GIS online を使用し、その使用方法を各担当者が習得するのも重要課題である。また基礎データの文献目録も作成し、各地点の経度緯度情報のデータベースも作成する。

今年度は内部でのデータ集積を開始し、研究期間終了後、学界の共通のインフラとして公開する計画である。研究グループ内部での情報交換のための閉じたサイトと、実用段階に達したデータや研究成果を公開するためのサイトを構築する。

研究集会は各回とも英語で行い、可能な限り海外からのゲストメンバーも 1~2 名参加してもらおう働きか

ける。共通項目の3語以外に関しても適宜分担者の興味に応じて発表してもらおう。その論文集である *Studies in Asian Geolinguistics* を3冊作成し、またPDFファイルでウェブ上に公開する。

研究実績の概要（2015年度）

当初アジア全域の1000地点からなる言語地図を作成することを目指していたが、分担者の努力により、初年度から2000地点を超えアジアのほぼ全体をカバーする言語地図を作成し、かつその形成過程について語族ごとに解釈を与えることができた。更に語族間でかなりの語形の類似が認められ、このような「太陽・稲・乳」のような基礎語彙であってもかなりの言語接触による影響関係が存在することが浮き彫りになった。また太陽の擬人化ないし信仰を反映する語彙はアジア東部に集中するなど、文化圏を反映する現象も見出された。また言語普遍により様々な言語におそらく独立に発生したと思われる形式もあった。このように、実証面・理論面ともに予想以上の成果が得られた。

成果の公開状況、計画

各回の研究会のかなり詳しい報告は既にAA研のウェブサイト公開している。第1回・第2回の研究会の論文および関連論文を掲載した英文雑誌 *Studies in Asian Geolinguistics* も第1号と第2号が既に完成しており、ほぼ公開直前の段階となっている。

AA研で2016年度より電子出版物が公開されるようになったということで、7月締め切り分に *Studies in Asian Geolinguistics* の第1, 2, 3号の公開の申請を出す準備中であり、2016年中にもすべての研究成果をウェブ上で公開できる見込みである。そのもととなった各地点の経度緯度情報・語形・基礎資料などのデータはまだ形式の統一が必要な段階であり、最終年度までにはエクセル形式で何らかの形で公開し、また言語地図作成のためのマニュアルも公開したいと希望している。

研究成果：学術論文22件、口頭発表等2件、図書1件、社会に向けた成果発表1件

東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究

研究代表者名：Eric Mcready（青山学院大学） 参加者：所員 1, 共同研究員 17

研究期間：2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

初年度である2015年度は、研究の基礎固め、データ収集、談話小辞や形式的アプローチに関する背景知識についての全メンバーの間での共通理解の確保を目標とし、以下の活動を行う。

- ① 本課題で扱う各言語の談話小辞に関し、先行研究における記述を把握し、必要であればフィールド調査を含む、母語話者への聞き取り調査を行う。
- ② 研究会を3回開催し、形式理論上の背景知識や談話小辞の意味論・語用論に関する先行研究について、情報を共有する。各言語の談話小辞の体系の概要についても、メンバーの間で情報共有を図る。

研究実績の概要（2015年度）

研究会を3回開催し、形式理論上の背景知識や談話小辞の意味論・語用論に関する先行研究について、情報を共有した。

さらにこれまで共同研究員が行ってきた、マレー語、中国語、日本語の談話小辞の研究についてそれぞれが発表し、研究の現状についてメンバーの間で情報共有を図った。

成果の公開状況、計画

研究成果：学術論文13件、口頭発表等23件、図書1件、社会に向けた成果発表3件、その他3件。

なお、研究期間終了後の2018年度に本研究の成果を論文集としてRoutledge社から出版すべく、準備を進めている。今後の研究会では、各執筆者の章の内容をメンバー全員で共有・議論する。それにより、各論文の質の向上を図るとともに、論文集が全体として一貫性のあるものになるようにする。

「アルタイ型」言語に関する類型的研究

研究代表者名：山越康裕 参加者：所員 4, 共同研究員 14

研究期間：2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

本研究課題では、3年間の研究期間において「アルタイ型」とされる言語の文法記述のありかたと、その類型的特徴をとらえなおすことを目的とする。

2015年度は「アルタイ型」言語の動詞の形式とそれに関わる文の構造をどのように記述すべきか、という問題について各言語のデータをもとに検討する。具体的には、以下のような点が議論の対象となる。

1. 「形動詞」や「副動詞」として説明される形式は（西洋言語になら）派生形式と位置付けてよいのか
2. またそれら形式を主要部とする文成分を句・節のどちらとみなすべきか（もしくは区別せずに記述すべきか）
3. そうした文成分が従属的なのか等位的なのかを記述できるのか
4. 「文」をどう規定できるか

ただし、限られた研究会のスケジュールで上記のテーマすべてを扱うことは難しい。そのため、アルタイ諸言語を俯瞰的に研究している風間伸次郎氏（東京外国語大学）に文法記述に関する問題点を第1回研究会において報告していただき、その内容をもとにテーマを絞り込む。場合によっては動詞に関する問題にかぎらず、より柔軟にテーマを再考し、検討していく。

研究実績の概要（2015年度）

3年間の研究期間の初年度にあたる2015（平成27）年度は計3回の研究会を開催し、主に動詞を基本とした対象言語のふるまいについて参加者全員が確認したほか、メンバーによる個別の研究報告4件、外国人研究員による報告1件を研究会上でおこなった。

本研究課題のスタートとなる第1回研究会では本研究課題の主旨を説明した後、課題の根幹となる「アルタイ型」とはどのようなものか、どう設定されるのかという点を、当該言語及びその他のアジア地域の言語を対象に整理することを試みた風間伸次郎氏の報告のもと、全員で議論した。そのうえで「アルタイ型」とされる類型をなす第一の前提が語の屈折にかかわる「連辞性」と「節連結」にあらう、という仮説を立て、第2回以降はそれに沿った議論をおこなった。

第1回研究会後にウェブページを設けて連辞性にかかわるトピックを共有し、そのトピックに関して対象言語ではどのようなふるまいを見せるのかを第2回研究会で議論した。また、節連結に関しては白尚燁氏に報告していただいた。ツングース語族内での条件節述語と主節述語の関係がどのように類型化されるのかを、とくに周辺言語との関係をもとに整理した内容である。第3回研究会では非「アルタイ型」の立場から「アルタイ型」を俯瞰する渡辺己氏の報告、「アルタイ型」言語でしばしば問題となる「派生」と「屈折」の境界に関連して、日本語の動詞屈折について論じた江畑氏の報告、アルタイ諸言語のいくつかに見られる複数種のコンピュータの使い分けに関連して、ブリアート語のコンピュータ動詞について論じたAA研外国人研究員のバダガロフ氏の報告、の3本の報告があった。

成果の公開状況、計画

現時点において具体的な成果公開はおこなっていない。なお、研究会の内容をふまえたフィードバックについては、ウェブページを設けてウェブ上でおこなっている。（URL: <https://sites.google.com/site/altaiotypstudy/>）

研究課題終了後に『アジア・アフリカの言語と言語学』にて成果を発表するか、もしくは単著として論文集を公刊する予定である（どちらの形式をとるかは最終年度に検討する）。

研究成果：学術論文16件、口頭発表等17件

通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング

研究代表者名：下地理則（九州大学） 参加者：所員 1、共同研究員 13

研究期間：2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/ryutyp/>

研究計画

本研究は、琉球諸語のケースマーケティングに関する類型論的研究である。特に、類型論的にも珍しいとされる有標主格型の格体系に焦点をあて、①その共時的な存立メカニズムと②歴史的な成立過程を解明することを目指す。②については、有標主格を生む母体となる体系や、有標主格からさらに変化した体系なども考察すべきであり、その点で有標主格型ではない様々な方言の格体系を参考にすることが必要である。よって、本研究に参加するすべての共同研究員のフィールドデータが重要になってくるであろう。

本年度は3回の研究会開催を予定している。上記①②を議論するうえで必要となる基礎的なデータ（共同研究

者の記述データ)の報告を共有しあい、次年度以降の研究の方向性を絞り込むことを目指す年度と位置付ける。第1回目の研究会では、研究代表者が問題提起を行うとともに、先行研究を読みあわせつつ、研究協力者(全員が先行研究の執筆者)と意見交換を行う。それを踏まえ、次回以降に報告すべき各方言の格体系に関する Analytical Questionnaire (調査者用の調査票)を作成し、各共同研究員に配布し、夏休み中のフィールドワークで調査項目を埋めるよう依頼する。第2回目、第3回目の研究会では、各方言の格体系を、あらかじめ定めたAQの観点に沿って報告する。

研究実績の概要 (2015年度)

「無助詞」の問題を正面から扱い、来年度以降の本研究においてこの問題を重要なサブテーマとして据えるという共通認識に至ったことが最大の成果である。

琉球諸方言の記述にとどまらず、広く日本語研究一般にも波及効果をもたらす。実際、科学研究費補助金基盤C「日本語諸方言の分裂自動詞性」(代表:竹内史郎)のメンバーも本研究会に参加し、情報交換を行うことにより、琉球語研究と日本語研究(方言・古典語研究を含む)の共通の問題として、無助詞をどう扱うかという問題を議論できた。さらに、国立国語研究所にて「格とアスペクトのシンポジウム」を、国語研究所(消滅危機方言プロジェクト・木部暢子研究代表)と共同で企画して開催し、多数の聴衆を招いて議論を行うことができた。なお、この企画は国立国語研究所の消滅危機方言プロジェクトの予算で書籍化が決まっている。

成果の公開状況、計画

共同研究ホームページ(<https://sites.google.com/site/ryutyp/>)を用意している。現在、研究会の議事録は公開しているが、今後、発表原稿を公開予定。上述の国語研との共催企画の書籍化が2017年に行われる予定である。

研究成果: 学術論文2件、口頭発表等2件

公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究

研究代表者名: 児倉徳和 参加者: 所員 3, 共同研究員 10

研究期間: 2015(平成27)年度~2016(平成28)年度

研究計画

初年度である2015年度は研究に重点を置き、以下の活動を行う予定である。

- (1) 文法記述の検討: データ入力班のミーティング(月2回程度)では、2014年度に準備段階として対象言語のうち保安語と土族語の文法記述を検討してきた。これを受け2015年度は東郷語、東部裕固語の文法記述を検討する。
- (2) 語彙・テキスト資料のデータベース化: 2014年末までに、対象の5言語の語彙とテキスト資料について対照言語と漢語訳の入力、および保安語についてはチベット語の対応項目の入力が完了している。これを受け、2015年度はデータの校閲とデータベース化の作業を共同研究員の栗林均氏との連携により行っていく。データベースのプラットフォームについては、当面AA研情報資源利用研究センター(IRC)で公開されている全文検索エンジンを利用する計画である。
- (3) 周辺言語の立場からの文法記述、言語データの検討: 年3回開催予定の全体ミーティング(研究会)では、データ入力班のメンバーが(1)のミーティングの成果を踏まえ文法記述についての問題提起を行い、分析注釈班のメンバーが周辺言語の立場からコメント、および分析の提案を行う。
- (4) データ利用に関する協議: 内蒙古大学の照日格図氏との間で、作成中のデータベースの公開方法および公開範囲についての協議を開始する。

研究実績の概要 (2015年度)

- ・ 2015年度は3回の研究会の他、全体の研究会ではデータ入力班から音韻、名詞・代名詞の数と格、動詞の証拠性について報告があり、周辺言語を専門とするメンバー(アムド・チベット語/海老原志穂)からの情報提供があった。
- ・ 東京外国語大学所属のメンバー(データ入力班)によるミーティングを前期10回、後期10回行い、2014年度の予備的研究会を含め保安語・土族語・東郷語・東部裕固語の文法記述についての検討を終えた。
- ・ 資料のデータベース化についてはテキスト資料(保安語の一部を除く)・語彙集(ダグール語の借用語項目を除く)・文法記述の日本語版(ハンドアウトに基づく)が入力され、Toolboxにて分析中である。

成果の公開状況、計画

2016年3月末時点でデータベース含め成果は未公開である（但し、本研究課題で入力した東郷語と東部裕固語の語彙資料は共同研究員である栗林均氏により2017年3月末にデータベースを公開予定）。また、テキストの一部（5言語で内容が対応している日常会話部分）に注釈を加えたものを作成し、2017年度以降紙媒体で公開する計画である。

研究成果：学術論文1件、口頭発表等1件、その他1件

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間

研究代表者名：宮原暁（大阪大学） 参加者：所員 1，共同研究員 9

研究期間：2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

平成27年度、本研究では、女性の経験世界を内側から検討するローカル空間の調査と、「外界」との関係から検討するディアスポリック空間の調査の二つの民族誌的調査を国内外の研究者の共同研究によって実施し、ディアスポリック空間において社会関係やアイデンティティ、身体観等が交渉され、創造される過程、及びそうした空間が生起する過程を解明するため、各分担者が現地調査で得た民族誌的データを持ち寄り、3回の共同研究会において検討する。

研究実績の概要（2015年度）

社会関係やアイデンティティ、身体観等をめぐる交渉と創造の過程、およびディアスポリック空間が生起するメカニズムの解明について、研究代表者、研究分担者、研究協力者が分担し、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、ミャンマーにおける民族誌的フィールドワークの成果を持ち寄り、共同研究を行った。また研究代表者、研究分担者、外国人招聘研究員が参加した中国・福建省での共同調査を行った。

上記の共同研究をもとに、国際学会での分科会報告、ディスカッション・ペーパーの刊行を行った。

成果の公開状況、計画

国際人類学・民族学会（バンコク・タマサート大学）にて *Death, Burial and Cremation Rituals and Cemeteries among Diasporic Chinese* と題する分科会を海外の研究者も交えて組織し（代表者：宮原，宮原，片岡，木村が報告を行った（2015年7月）。

また第6回 *International Conference of Institutes and Libraries for Chinese Overseas Studies (WCILCOS)*（廈門：華僑大学）において、*Women's Experiences in "Chinese Diasporic Space" in Southeast Asia* と題する分科会を組織し、宮原，三尾，王と、外国人招聘研究者の朱が報告を行った。

本研究の課題に関する個別報告を各分担者が実施した。また東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のホームページにおいて研究成果の一部を公開した。

本研究課題に関するディスカッション・ペーパーをウェブサイトで公開する予定であったが、技術的な問題から公開が遅れている。28年度の早い段階で、他のディスカッション・ペーパーとともに公開を計画している。

研究成果：学術論文12件、口頭発表等12件、図書4件

「もの」の人類学的研究（2）（人間／非人間のダイナミクス）

研究代表者名：床呂郁哉 参加者：所員 3，共同研究員 16

研究期間：2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

2015年度の本研究課題では、前年に引き続き各地における人間と非人間の「もの」（人工物、自然物、動植物などを含む）の関係の諸相と、その関係の構築における広義の技術に焦点を当て、新たな視点から人類学的に検討することを主な目的としている。

3年計画の中間に当たる本年度では主として下記の2点に関して検討を行う。

- (1) 2014年度に引き続き、「もの」の人類学的研究の方法論的、理論的基盤：先行研究や先行する関連プロジェクトにおける知見等のレビューを実施し、研究計画全体への基礎とする。今年度は狭義の文化（社会）人類

学者や霊長類学者に加えて、哲学、生物学、認知科学、芸術研究など関連分野の研究者も協力者として研究会で報告してもらい、より学際的な視点から人間と非人間（non-human）の存在者（ヒト以外の生物、人工物、自然物）の関係についての理論的視座を比較検討する。

- (2) アジア、アフリカなど各地の異なる文化・社会・生態的環境に応じた「もの」と「わざ」（技芸）の多様性についてアジアやアフリカなど各地で調査を実施しているメンバーによる民族誌的報告を基礎に比較検討する。なお研究会を実施した後は毎回、できるだけ速やかに AA 研の HP 上などでその報告等の要旨などを公開していく予定である。

研究実績の概要（2015 年度）

本研究課題の 2 年目となる 2015 年度においては、同課題の基本的・理論的な方向性を再確認したうえで、各研究会で世界各地の「もの」をめぐる個別の事例に関して共同研究員による事例報告と質疑応答を実施したことに加えて、より抽象度の高い理論的な参照枠組みについても検討を試みた。より具体的に言えば、例えば第 2 回研究会における山崎は現代医療の現場における患者の身体と家族や医師らのインタラクションの事例を題材に、「ひと」と「もの」の間の存在論的境界をどう捉えなおすのかという点へと検討を実施した。第 3 回研究会では、ボルネオのプナン社会、チンパンジー、イヌイット社会、第 4 回研究会ではインドにおける廃棄物の事例など、広範な地域とトピックが事例として取り上げられている。また第 1 回研究会における内堀や、第 2 回研究会での檜垣、第 4 回研究会における湖中などは、単なる個別事例の報告を超えて、各地における「もの」と人の関係をどう理解するのかに関する一種の理論的参照枠についても哲学などの分野との学際的協働を通じた検討を実施した。こうして本年度では個別の事例研究とより一般的・理論的な枠組みとの相互往還を通じた研究の進化が見られた点が特筆に値する。

成果の公開状況、計画

本研究課題のメンバーは、個別に学会や論文等で本課題に関係した研究成果を発表しているのはもちろん、それに加えて AA 研の広報誌『FIELDPLUS』15 号上で本課題の巻頭特集（「ひとものの関係性を探る—人間と非人間の揺らぎと越境をめぐって」責任編集：床呂郁哉）を組み、本課題の代表者の床呂をはじめ複数のメンバーが執筆するなどして研究成果の一部を広く公開した。また論集『人はなぜフィールドに行くのか？』（床呂郁哉編、東京外国語大学出版会 2015）や『他者』（河合香吏編、京都大学出版会 2016）などにおいても本研究課題の複数のメンバーが本課題の研究主題にも関係する成果の一部を公表している。また各研究会の概要に関しては下記の HP で公開している。<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp202#jrp20203>

2016 年度の課題終了以降には、本課題の成果論集を出版する予定で現時点から準備を進めている。

研究成果：学術論文 29 件、口頭発表等 29 件、図書 8 件、社会に向けた成果発表 10 件

人類社会の進化史的基盤研究（4）

研究代表者名：河合香吏 参加者：所員 3、共同研究員 19

研究期間：2015（平成 27）年度～2017（平成 29）年度

研究計画

本共同研究課題は、2005 年度以来、「集団」、「制度」、「他者」とテーマを進めながら継続的に展開してきた共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」の第 4 期であるとともに、その総括と位置づけられる。研究主題としては、生態学的・社会的環境に生存することのぎりぎりの条件と状態を探ることを念頭に、霊長類社会生態学、生態人類学、社会文化人類学の 3 分野から統合的に迫る。換言すれば、本課題は、一連の共同研究において、通奏低音としてあった「環境」と、そこでの「生存」を意識化し、その極限的な局面を詳らかにすることを目指す試みであり、人類の社会性（sociality）の進化についての理論構築を目指すものである。初年度である 2015 年度は、3 つの学問分野において、「生存」、「環境」、「極限」といった概念がどのように扱われてきたか、あるいは、扱われうるのかについて、それぞれ明瞭化し、これをメンバー全員で、確認、共有することを第一の目的とする。そのうえで、「環境における生存」をキーテーマに、その様態の極限を見定めるための方法を検討する。「生存」はまずは生物学的／生態学的に捉えうるが、人類を含む霊長類が群居性動物として生きる以上、それは社会的な要素をもち、それ故にその方法（生存戦略）は、非決定論的で可変的でコミュニケーション的なものとなる。この点に焦点化し、人類の社会性の進化の解明に向け、新たな視座を追究する。

研究実績の概要（2015 年度）

2015年度には上記の通り3回の共同研究会を実施した。第1回研究会では初回に当たり、まず全員が自己紹介を兼ねて各自の専門と本研究課題への抱負を語り、課題代表者から趣旨説明を行った。具体的には、本課題はこれまで3期10年にわたって「集団」、「制度」、「他者」というテーマで継続されてきた共同研究課題（旧・共同研究プロジェクト）「人類社会の進化史的基盤研究」の第4期にあたり、「生存・環境・極限」をテーマとするとともに、これまでの研究の「総括」をかねていることについて説明した。その後、本研究課題が霊長類学、生態人類学、社会文化人類学の3学問領域に属するメンバーから構成されていることから、それぞれ本研究課題に対する関与のしかたの可能性を述べてもらい、今後の議論展開の見通しを討論した。第2回と第3回は、それぞれ3名ずつ、上記の演題で個別の事例研究を中心に発表をし、これに対して全員で討論をした。発表内容は、AA研および本研究課題独自のウェブサイト[<http://human4.aa-ken.jp>]の「研究会報告」欄[<http://human4.aa-ken.jp/meetings.html>]に詳細を記しているのをご参考にいただきたい。

以上、3回の研究会以外に、2015年7月18日（土）には、第31回日本霊長類学会・自由集会にて「サル屋とヒト屋の共同研究とは？：『人類社会の進化史的基盤研究』の試み」というタイトルでメンバーから3人（伊藤詞子、北村光二、内堀基光）が発表をし、霊長類学会員から3人のコメンテーターを得て討論を行った。また、2015年10月11日（月・祝）には、第10回人類学関連学会協議会合同シンポジウム「群れる・集う—人間社会の原点を問う—」において、課題代表者が「ともに生きる—共同研究『人類社会の進化史的基盤研究』の試みから—」というタイトルで本研究課題の成果紹介を行った。

成果の公開状況、計画

本共同研究課題は1年目を終えたばかりであるため、研究全体をまとめた出版物（紙媒体）による成果報告はまだ刊行していない。初年度の2015年度には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の広報誌『FIELDPLUS』に、巻頭特集として「ともに生きる—霊長類学と人類学からのアプローチ」（責任編集：河合香史、執筆：伊藤詞子、竹ノ下祐二、寺嶋秀明、大村敬一）を公開した。また、共同研究会の内容については、その要旨を上記の通り、AA研のHPに掲載するとともに、本研究課題独自のウェブサイト[<http://human4.aa-ken.jp>]に随時、掲載してきた。

現時点では、2016年度、2017年度には出版物（紙媒体）による成果公開の計画はない。本共同研究課題終了後の翌年度（2018年度）に最終報告として成果論文集を刊行する予定である。なお、成果の口頭発表としては、2015年度と同様に、2016年度、2017年度ともに、日本霊長類学会大会の自由集会や日本人類学会進化人類学分科会シンポジウム等において、成果報告を企画する予定である。また、共同研究会の報告（発表要旨）等については、2015年度と同様に、AA研のHPに掲載するとともに、本共同研究課題独自のウェブサイト[<http://human4.aa-ken.jp>]で随時、公開していく。

研究成果：学術論文31件、口頭発表等22件、図書7件、社会に向けた成果発表8件

『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために

研究代表者名：中村隆之 参加者：所員1, 共同研究員8

研究期間：2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

本共同研究は、主にフランス語で出版されている黒人文化誌『プレザンス・アフリケーヌ』（1947年～現在、以下PA誌と略記）を資料対象にし、とりわけ「政治と文化」の主題が焦点化する第2期以降を扱いながら、この雑誌の射程を3年間にわたって総合的に検討する試みである。

研究開始年度にあたる2015年度に行う作業軸は、主に3つある。

- (1) コーパスの作成。PA誌の第2期のうち、1955年から1960年までの日本語・フランス語（可能であれば英語も）による目次を作成する。それと共にこの時期の傾向を同時代の植民地／宗主国の政治・社会状況を考慮しながら検討する。
- (2) 1955年から1960年にかけてのPA誌の議論を辿る。これは個別の研究発表として行う。とくにセゼールとドゥペストルの間でおこなわれた「民族詩論争」、1956年と1959年の2つの黒人芸術家作家会議の特集号を論じる予定である。
- (3) 上記(2)の作業と関連するものとして、PA誌収録の代表的論文をはじめ、関連文献・資料（映像資料も含む）を紹介し、PA誌をめぐる理解を相互に深める共同研究活動もおこなう。

研究実績の概要 (2015 年度)

初年度に当たる平成 27 年度には研究会を 3 回実施した。実施を通じての本課題の成果は主に 5 点あげられる。

- (1) 『プレゼンス・アフリケーヌ』誌 (以下, PA 誌) の目録作成: 1947 年から 2015 年までの総目次を作成する作業を佐久間所員が担当した。執筆者, 主題, 各年代の傾向などを分析する基礎データとして今後活用可能である。
- (2) 「新たな政治=文化学」の構想に向けたプラットホームの構築: 第 1 回の中村研究員および第 2 回の小川研究員の報告と, 各コメンテーターの問題提起およびその後の議論により, PA 誌のなかで繰り広げられる政治と文学をめぐる錯綜した関係への考察が研究員間で十分に共有された。
- (3) エメ・セゼール研究: PA 誌の中心的人物であるセゼールの詩と思想について, 第 2 回の佐久間研究員および第 3 回に招聘した松井氏の各報告を通じて, 参加者の相互認識を深めた。
- (4) 学際的研究: PA 誌の特色に合わせて, 本研究会には, 文学, 人類学, 歴史, 社会学にまたがる学問分野の研究者が参加している。第 2 回の小川研究員, 佐久間所員, 第 3 回の中村研究員により, 文学, 歴史, 人類学, 社会学を架橋する複合的な研究が行われた。
- (5) 他誌との比較: 第 3 回研究会で行われた中村研究員による, カリブ海の雑誌『アコマ』に関する報告により, アフリカ・カリブ文化人の問題意識の共通性と相違を, 参加者で共有した。

成果の公開状況, 計画

本課題に参加する所員および研究員による平成 27 年度の成果発表は, 学術論文 11 件, 口頭発表 10 件, 図書 3 件, 社会に向けた成果発表 10 件である。AA 研名義での成果発表は今後の課題である。

平成 28 年度の成果公開計画については, 2 件の計画を予定している。1 件は, 佐久間所員作成の PA 誌目録の公開である。公開方法は検討中である。もう 1 件は, PA 誌掲載論文の翻訳および解説の公開である。いずれも平成 28 年度中に公開できるよう心がけたい。

研究成果: 学術論文 11 件, 口頭発表等 10 件, 図書 3 件, 社会に向けた成果発表 10 件

中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存 (第 2 期)

研究代表者名: 黒木英充 参加者: 所員 4, 共同研究員 13

研究期間: 2013 (平成 25) 年度~2015 (平成 27) 年度

ウェブサイト: http://meis2.aacore.jp/jr_me_urban_societies

研究計画

最終年度として, 9 月の年度第 1 回研究会 (通算第 5 回研究会) において, 研究報告書「*Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Aleppo, Beirut, Jerusalem, Istanbul, and Cairo* (仮)」執筆に向けた各人の具体的な論文題目と概要の提示を行う。仮題と仮の構成でも可とするが, これを全員が行うこととする。また, 報告書の執筆要領に関して合意・確認する。

2 月の第 5 回研究会では, 研究報告書の担当論文の最終的な内容紹介, 執筆の準備・進捗状況を全員で報告し合うとともに, 報告書の構成案について意見を述べ合う。また黒木による Introduction 案 (研究の総括を含む) に対する批評を行う。(そのうえで, 論文の提出期限を 2016 年 8 月末に設定, 10 月末の所内締切までに編者による編集作業を行い, 査読期間を経て印刷, 2016 年度内に刊行する。)

研究実績の概要 (2015 年度)

9 月のベイルート, 2 月の AA 研におけるそれぞれ 2 日間にわたる研究会は, 従来通り, 参加者全員の報告と欠席者から提出されたペーパー要旨の検討とからなるものであった。いずれも成果論集執筆にむけての具体的な内容の報告であり, 9 月のベイルート研究会での議論を経て変更・修正・改訂されたものもあった。テヘラン, イスタンブール, カイロという, 今日メガロポリスの規模をもつ中東の代表的都市 (国家の首座都市) と, ベイルート, アレッポ, エルサレムという中規模都市 (地域における首座性も持っているものの), それぞれにおける人口移動に関する具体的なデータ分析, その空間的性格の変容の分析, さらにその意味付けの問題にいたる射程のなかで, 議論を行うことができ, 論文執筆に向けて態勢が固まった。

終了報告

本課題は, 2010~12 年度に実施した同名の第 1 期の課題の発展系として, 従来の研究対象であるベイルート, アレッポ, イスタンブール, テヘランの 4 都市にエルサレムとカイロを加えて 6 都市を対象とした。当初予定して

いた2013年9月のベイルートJaCMESにおける第1回研究会は、内戦状態の隣国シリアにおける化学兵器事件と米欧の軍事介入の切迫した状況のために開催を見送ったが、以後2014年2月(JaCMES)、9月(JaCMES)、2015年2月(AA研)、9月(JaCMES)、2016年2月(AA研)の計5回の研究会を実施した。毎回2日間にわたって、参加メンバー全員の研究報告と質疑討論、ならびに不参加メンバーから送付された報告要旨の確認を行った。言語はすべて英語であった。5回の研究会を通じて、第2期の研究報告書(第1期に関しては Hidemitsu Kuroki (ed.), *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 1: Tehran, Aleppo, Istanbul, and Beirut*, Tokyo: ILCAA, 2015 として刊行済み)での執筆内容を変更・修正したり、より精緻化したりすることが可能となった。これにより、上記の成果論集の第2巻に相当する報告書(2016年度中に刊行予定)の章ごとの関連が強まる結果を生んだ。各都市を舞台にした、宗教宗派と民族毎の人口推計やその空間的配置、統治組織との相互的影響関係、人々の多元的空間を生きる際の経験知とその表現、といった問題に議論を収斂させて、現代中東地域の都市社会を理解するための重要な手掛かりを提示することが可能となった。

成果の公開状況、計画

ウェブサイトでの研究会日程の開示についてはhttp://meis2.aacore.jp/jr_me_urban_societies、また、本プロジェクトと並行して進めてきた中東都市多層ベースマップシステムについては<http://meis2.aacore.jp/?p=2050>にて公開している。2016年度中に成果論集“*Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Istanbul, Cairo, Aleppo, Jerusalem, and Beirut*”として刊行予定である。

研究成果：学術論文15件、口頭発表等43件、図書5件、社会に向けた成果発表8件、その他1件

ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容

研究代表者名：菅原由美 参加者：所員 3、共同研究員 8
研究期間：2013(平成25)年度～2015(平成27)年度

研究計画

本年度は、1. ジャワ語研究ウェブサイトの完成、2. 昨年度国際シンポジウムの成果の出版、3. 国際シンポジウムでの議論を踏まえた「ジャワの宗教」の変容と痕跡、およびその概念に関する検討、4. ジャワ研究の基盤整備と公開研究会の開催、5. 次期の計画作成をおこなう予定である。

1. ジャワ語コンコーダンスを掲載するための、ジャワ語文書研究ウェブサイトを開発用に作成する。どのような情報を掲載する必要があるかを検討し、作成する。また、今後、コンコーダンス上のテキストの数を追加するための手順について検討する。
2. 昨年度開始したシリーズの出版を継続させる。シリーズ用に、国内外の研究者による編集委員会を立ち上げた。今年度内に、国際シンポジウムの成果と外国人研究員の研究成果の計2点を出版する予定である。
3. 昨年度の報告に書いた通り、昨年度のシンポジウムでは、碑文から20世紀の出版物にいたるまで、ジャワ語文書に表象されるジャワの宗教の有り様を総覧したが、時期間、事例間の比較ができなかった。しかし、このシンポジウムでの議論を踏まえ、「インド化」や「ジャワの宗教」のような、これまでジャワの宗教について言及されてきた幾つかの概念を核として、それぞれの事例について再検討し、国内研究会でジャワの宗教変容について考察する。その考察をもとに、次回の国際シンポジウムの企画を考える。
4. 次世代研究者を育てるために、またジャワ語史料に関する知識を、他の東南アジア関連研究者に共有してもらうために、各時代、各分野のジャワ語史料に関する基本的な研究会を開発でおこなう。
5. 本共同研究プロジェクトを継続するための検討会をおこなう。

研究実績の概要(2015年度)

昨年度より開始した *Javanese Studies Series* によって、ジャワ研究及び研究史資料の出版を進め、今年度もAA研外国人研究者の研究成果を2巻出版した。v.3は古ジャワ語マハーバーラタ文献翻字・翻訳(英語)、v.4は各地のジャワ語及びマレー語写本より収集したマレー世界のシャタリヤ派タリーカの系譜資料であり、どちらも出版が強く望まれていたものであった。また、v.4でようやくジャワのイスラーム期にたどり着き、海外の関係者からの反響は十分に大きかった。なお、v.5として2015年の国際シンポジウム論集の出版を予定していたが、年3冊の出版は難しかったため、来年度に回した。

国内研究会では、まず、次世代研究者を育てるために、またジャワ語史資料に関する知識を、他の東南アジア関連研究者に共有してもらうために、各時代、各分野のジャワ語史資料に関する基本的な研究会を開発でおこない始めた。また、海外からの外国人研究者2人に研究成果を発表してもらった。Worsley氏からは、古ジャワ語文

学の史的有用性について解説をしてもらい、Wieringa 氏からは西欧価値観とジャワ・イスラーム的価値観の狭間で板挟みになっている 19 世紀末のジャワ宮廷詩人の作品に関する発表があった。

ジャワ語コンコーダンスは、昨年夏以降インフォマージュ社とのやり取りを通じて、より使いやすく、公開に耐えるものに改編することができた。また、コンテンツについては、昨年度オランダで作成した OCR ファイルのジャワ語を、インドネシア大学スタッフの協力により、訂正し、コンコーダンスへの掲載の準備を整えた。

また、昨年夏には、本課題に合わせた古ジャワ語研修を、AA 研語学研修として開催し、一般公開の講義も合わせておこなった。テキストは、以下の URL にて公開中。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/training/ilc/textbooks/2015oldjavanese1.pdf>

終了報告

研究会は、計 12 回おこない、その内、1 回は国際シンポジウムである。2013～2015 年の 3 年間における成果は以下の 5 点である。

1. Javanese Studies Series を立ち上げ、2015～16 年に 4 巻（毎年 2 巻）出版し、これまでなされてこなかったジャワ研究史資料の英語による出版を進め、研究基盤の整備に貢献した。東南アジア最古（9 世紀）の文学である古ジャワ語の Ramayana は、ローマ字翻字されたことがなく、英語翻訳もなされていなかった。
2. 2015 年 2 月に、ジャワ語史資料を用いる研究者をオランダ、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、イスラエル、インドネシアから招聘し、ジャワの宗教変容についての国際シンポジウムを開催し、ジャワ語史資料研究ネットワークを築いた。
3. 植民地期から現在までに出版されている古ジャワ語・ジャワ語文献リストを作成し、多くのジャワ文献を保管していたオランダの KITLV（王立言語地理民族研究所）協力の下、出版された文献のデータを収集し、古ジャワ語・ジャワ語コンコーダンスを作成した。
4. ジャワ研究について、国内の次世代の研究者または他分野の研究者に関心をもってもらうために、ババッド・タナ・ジャウィなどの基礎的なジャワ語史資料研究会を公開でおこなった。
5. 古ジャワ語研修をおこない、古ジャワ語に関心を持つ研究者に学習の機会を与えた。古ジャワ語の学習テキストは、これまでインドネシア語版しか存在していなかったが、今回、英語による教材を作成した。

今期は、研究基盤の整備については十分に進んだと思われるが、ジャワの宗教変容という課題について十分な議論をおこなうことができなかった。第 2 期はイスラーム化に焦点を絞り、課題分析及び議論をおこなう予定である。

成果の公開状況、計画

Javanese Studies series.

- v.1. *Rāmāyaṇa. The story of Rāma and Sītā in Old Javanese. Romanized edition*, by Willem van der Molen.
- v.2. *The Old Javanese Rāmāyaṇa. A new English Translation with an Introduction and Notes*, by Stuart Robson.
- v.3. *The Kakawin Ghaṭotkacāśraya by Mpu Panuluh*, by Stuart Robson.
- v.4. *Shattariyah silsilah in Aceh, Java and the Lanao area of Mindanao*, by Oman Fathurahman.

1. 2015 年 2 月におこなった国際シンポジウムの成果を上記の Javanese studies series v. 5 として今年度中に出版予定。
2. 本プロジェクトのために招聘した AA 研外国人研究員 Prof. Peter Worsley と Prof. Edwin Wieringa が提出した論文についても AA 研ジャーナルに投稿を予定している。
3. 2016 年 9 月 26・27 日、ジャカルタ、インドネシア国立図書館で行われるインドネシア写本学会国際シンポジウムにて、コンコーダンスを公開する。URL: <https://jvdo.aa-ken.jp/>（公開中）

研究成果：学術論文 10 件、口頭発表等 10 件、図書 5 件

歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化（2）

研究代表者名：石川博樹 参加者：所員 2、共同研究員 15

研究期間：2013（平成 25）年度～2015（平成 27）年度

研究計画

本共同利用・共同研究課題は、2010 年度から 2012 年度にかけて実施した共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化」の第 2 期にあたる。本共同利用・共同研究課題では、第 1 期、第 2

期の成果をまとめた出版物として、アフリカの食と農の歴史に関わる新たな研究の視点および可能性を提示する『食と農のアフリカ史（仮題）』の刊行準備を進めている。本年度はこの出版企画を進めるとともに、2回の研究会を開催し、本出版企画に関わる研究発表と原稿の合評を行う。また基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」との共催企画として、『食と農のアフリカ史（仮題）』の出版を記念した公開シンポジウムを年度末までに開催する。研究会および公開シンポジウムにおける研究発表の内容については、概要を本共同利用・共同研究課題のウェブサイト（<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/agriculture2010/>）上で公開する。また『食と農のアフリカ史（仮題）』の寄稿者でAA研広報誌『FIELDPLUS』の巻頭特集を担当する準備を進める。

研究実績の概要（2015年度）

研究期間の最終年度にあたる2015年度は、成果出版物の刊行に重点をおいて活動を行った。成果出版物については、本共同利用・共同研究課題の参加者のなかから14名、さらに近畿大学の池上甲一氏とアジア経済研究所の佐藤千鶴子氏が寄稿すること、またサハラ以南アフリカの農業と食文化の概説と研究手法の解説を主たる内容とする「総説」部と、寄稿者がサハラ以南アフリカの農業と食文化に関する歴史的側面からの研究に見出している研究の可能性を個々に提示することを主な目的とした「個別論考」部で構成することが、2014年度中に開催した研究会で決定しており、その方針に則って研究会での議論を進めた。2015年7月11日に開催した第1回研究会では、個別論考部に掲載する原稿を寄稿者が持ち寄り、その合評を行った。10月25日に開催した第2回研究会では、池上甲一氏による個別論考の内容解説の後に、総説部の内容検討を出席者全員で行った。2016年3月13日に開催した第3回研究会は、AA研基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」との共催による公開シンポジウムとした。本シンポジウムでは、代表を務める石川博樹（AA研）が成果出版物の概要を説明した後、成果出版物の編者3名（石川博樹、小松かおり、藤本武）が、本共同利用・共同研究課題における議論と成果出版物の編集において得た知見を基にして、各専門分野におけるサハラ以南アフリカの農業と食文化に関する歴史的側面からの研究の可能性を論じる3つの報告を行った。その後池谷和信氏（国立民族学博物館）、池上甲一氏にコメントをいただき、さらに質疑応答を行なった。そして2016年3月31日に、本共同利用・共同研究の成果として、石川博樹・小松かおり・藤本武（編）『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』（昭和堂）を刊行した。

終了報告

2013年度から開始した本共同利用・共同研究課題は、2010年度から2012年度にかけて実施した共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化」の後継プロジェクトである。本共同利用・共同研究課題では、3年間に8回の研究会と1回の公開シンポジウムを開催した。研究会では、サハラ以南アフリカの農業と食文化について歴史的観点から検討する際の研究手法や研究テーマ、またこの分野における新たな研究の可能性を提示することを主たる目的とした成果出版物の内容検討に重点をおいて議論を進めた。一連の研究会における議論の成果として、2016年3月13日に、AA研基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」と共催で、公開シンポジウム「食と農のアフリカ史を考える」を開催するとともに、本共同利用・共同研究課題の参加者を主とする15名が寄稿した成果出版物、石川博樹・小松かおり・藤本武（編）『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』（昭和堂、2016年3月31日）を刊行した。

成果の公開状況、計画

本共同利用・共同研究の成果については、2016年3月13日に開催した公開シンポジウム「食と農のアフリカ史を考える」においてその一部を公表するとともに、成果出版物、石川博樹・小松かおり・藤本武（編）『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』（昭和堂、2016年3月31日）を刊行した。また本書の出版をはじめとする関連情報について、本共同利用・共同研究課題のHP（<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/agriculture2010/>）で広報を行った。

本共同利用・共同研究課題の成果出版物、石川博樹・小松かおり・藤本武（編）『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』（昭和堂、2016年3月31日）の内容を基にして、一般向けのトークイベントの開催を計画している。

研究成果：学術論文27件、口頭発表等10件、図書5件、社会に向けた成果発表4件、その他2件

イスラームに基づく経済活動・行為

研究代表者名：福島康博 参加者：所員 2, 共同研究員 10

研究期間：2013（平成25）年度～2015（平成27）年度

研究計画

本研究課題の目的は、イスラームに基づく産業における経済活動、および六信五行の実践やシャリーアに則つ

た生産・分配・消費というムスリムの経済行為に注目し、複数のディシプリンから多角的な分析を通じてこれらの現象の現代的な意味と意義を明らかにすることにある。上記の目的のため、本研究課題では共同研究員を研究テーマ、トピックごとに5つのサブ・グループに分けている。このうち2015年度は、2014年度までに報告を行っていなかったサブ・グループである「イスラーム・グッズ」および「イスラームと地域経済」に属する共同研究員が報告を行う。

具体的には、「イスラーム・グッズ」については赤堀研究員から中央アジアの、小牧研究員からは南アジアの事例について、それぞれ報告される。他方、「イスラームと地域経済」については、川端研究員から東南アジアの、佐竹研究員からは中央アジアの事例について、それぞれ報告される予定である。

そして、今年度最後の研究会は、3年間続いた本研究課題の研究活動・成果を踏まえ、各サブ・グループから1名づつ報告者を立てて、シンポジウム形式で実施する。広く広報することで出席者を募り、研究活動・成果を広く社会還元することとする。

また、これまでの研究員の研究活動およびシンポジウムを踏まえ、成果論集を作成することとする。

以上のように2015年度は、単年度の活動はもとより、本研究課題の研究活動を締めくくり総括するものと位置づける。

研究実績の内容(2015年度)

本年度は、2回の研究会で計5本の報告が行われた。対象地域は、南アジア、湾岸諸国、東南アジアおよび欧米で、いわゆるイスラーム諸国を広範に扱うとともに、非イスラーム諸国も検討の対象となった。また、報告の対象となったテーマは、化粧品、イスラーム金融、ポスターやラミネートカードなどの宗教グッズといったイスラームに基づく商品、およびこれら商品を扱う小売店や製造する工場などであった。

このように多様な地域と商品・産業を横断的に取り扱うことにより、地域間および商品・産業間の共通性と相違点が明らかとなった。まず、商品・サービスのハラール性をめぐっては、そのあり方の根拠をクルアーンやハディースなどに求めている点はいずれも共通している。ただ、イスラーム金融やハラール食品のように、イスラーム性が問われるのは商品・サービスの構成・内容のみの場合もあれば、化粧品のように原材料がハラールであったとしても、そもそも化粧を行うことの是非や、化粧をしたままで礼拝を行うことの有効性など、商品の内容以外の点でのイスラーム性が問われる事例があることも指摘された。

また、ビジネスという視点からみた場合、イスラームに基づく商品・サービスを扱う製造・販売者の間で認識の相違が明らかとなった。例えば、必ずしもハラール性が担保されていない商品を扱う、欧米のモスクに併設された小売店の店主による「ムスリムの生活に役立つものを提供したい」との発言がある一方、宗教グッズを製造する非ムスリムの工場従業員の「売れるのであれば何でも製造する」との語りも存在する。

信仰生活を支える商品・サービスの希求するムスリム消費者と、ムスリムであるにせよこれらを提供する製造者・供給者とは、イスラームを媒介としていわば経済関係が成立している一方、イスラームへの理解や信仰という点では両者の間に思惑の違いがあることが、本年度の研究報告によって確認された。

終了報告

本研究課題は、イスラーム金融やハラール食品、化粧品などイスラームに基づく産業における経済活動、およびこれら商品・サービスに対するムスリムによる生産や消費といった経済行為に着目し、複数のディシプリンと地域を対象とする研究者による共同研究を通じて、これらの現象の現代的な意味と意義を明らかにすることを目的として、2013年度より3年間にわたりプロジェクトを実施した。この間、計7回の研究会にて12本の報告を行った。

本プロジェクトを通じて明らかになった点は、以下の通りである。そもそもムスリムを対象とする商品・サービスは、イスラームが誕生したのと同時に生まれたと考えられる。しかしながら、なぜ現代において重要性が高まったかと言えば、グローバリゼーションの進展によりムスリム消費者がイスラーム性を有しない商品・サービスに接するようになったため、イスラーム性を担保するための認証制度や基準作りが整備されたこと、およびこのような商品・サービスの需要の高まりを見込んで非ムスリムの企業もこれらを提供するようになったことを指摘できる。イスラームに基づく商品・サービスへの希求の高まりは、イスラーム諸国に暮らすムスリムのみならず、非イスラーム諸国に生活拠点があるムスリムの間にも高まっている点は確かである。そして、そのような商品・サービスは、金融や食品に始まり、化粧品や旅行へと種類・産業が拡大する傾向にある。

しかしながら、グローバリゼーションの進展と認証制度など基準化の普及は、同時にこれらのあり方をめぐり地域・国ごとの差異を際立たせている。マレーシアなど東南アジア諸国では、ハラール産業を国の産業振興に位置付ける一方で、一部の中央アジア諸国のようにハラール産業の興隆が過度のイスラーム化を招くとして制限を加えている事例も見受けられる。ハラール・ビジネスは、単なる経済活動にとどまらず政治的・社会的事象と関

連しながら各地で影響を与えていることが明らかとなった。

以上、本研究プロジェクトが当初掲げた研究目的と研究成果はおおむね達成できたと考えられる。ただ、プロジェクトの運営上、研究会の開催方法や AA 研の関連組織との連携のあり方などで課題が残った。また、ムスリム・フレンドリー・ツアーなど、イスラームと経済活動をめぐる新たな動きもみられることから、2016 年度より本プロジェクトの第二期を発足し、さらなる研究の深化を目指していきたい。

成果の公開状況、計画

研究会は、打ち合わせを除き原則として公開で行った。

平成 25 年 8 月より独自のウェブサイトを開設・運営を行っている。同サイトにおいては、過去の研究会の報告要旨を掲載するとともに、共同研究員による「リレー・エッセイ」を毎月掲載している。本コーナーは、共同研究員が行う研究会での報告内容とは別に、①報告内容とは異なるテーマ、ないしは②現地調査・報告のこぼれ話について、1,200 字程度の原稿と数枚の写真によって構成されている。なお、本コーナーに寄稿された原稿は、最終年度に作成する予定の成果論集のコラムとして再掲する予定である。

共同研究員による本研究課題の成果の公開・社会貢献の一環として、AA 研発行『FIELDPLUS』16 号（2016 年 7 月発行予定）において、「イスラームに基づく商品とサービスの多様性」という巻頭特集が生まれ、福島（責任編集、ハラール産業の概説、沖縄県でのムスリム観光客に対する接遇）、上山（中東におけるイスラーム金融）、川端（日本企業によるハラール・ビジネスの動向）の論考が掲載される予定である。また、共同研究員の論文をまとめた成果論集を商業出版する予定である。

研究成果：学術論文 8 件、口頭発表等 20 件、社会に向けた成果発表 15 件、その他 1 件

新出多言語資料からみた敦煌の社会

研究代表者名：松井太（大阪大学） 参加者：所員 1，共同研究員 9

研究期間：2014（平成 26）年度～2016（平成 28）年度

研究計画

2015 年度の実施計画はおおよそ以下の通りである。

第 1 回研究会（5 月）：敦煌石窟の銘文資料および壁画資料に関する昨年度の調査状況、またこれに関係する世界各国所蔵の敦煌文献の研究の全般的動向について、参加メンバー全体で認識を共有する。4 月から外国人研究員として迎えるオルメズ教授と特にウイグル・モンゴルテキストのデータを検討する。成果刊行物の編集にも着手する

第 2 回研究会（7 月）：第 1 回研究会の情報交換をふまえ、石窟銘文資料については、各自の集積してきたテキストデータについて、引き続き言語横断的分析を行う。また、各国所蔵の敦煌文献の原文書調査（7～9 月にメンバー個別に実施予定）計画も協議する。オルメズ教授にもスーパーバイザーを担当していただき、成果刊行物の構成を検討する。

第 3 回研究会（2～3 月）：敦煌石窟の現地調査（11 月もしくは 12 月に実施予定）の成果、また第 2 回研究会に引き続き各国所蔵の敦煌文献の原文書調査の成果を相互に提示し、到達点を検証する。成果刊行物の編集会議も継続する。

以上、3 回の研究会で得られた個別的な学術上の知見は、参加メンバーが個人または共同で論文として刊行し、すみやかに学界に提供する。また、研究会を通じて、石窟銘文資料の校訂テキストデータの公刊範囲の選定などの議論を継続的に行なう。

研究実績の概要（2015 年度）

第 1 回研究会（5 月）・第 2 回研究会（7 月）では、特に敦煌石窟のウイグル語題記銘文資料を中心的な検討材料とした。外国人研究員として招聘したオルメズ教授だけでなく、第 1 回研究会には中央アジア出土トカラ語文献を研究する荻原裕敏・慶昭蓉両氏をコメンテーターとして招聘し、トルコ文献学およびトカラ語文献学・仏教学との比較的視点からコメントを頂戴し、テキストデータ校訂に関わる議論を進めることができた。

なお、オルメズ教授滞在中には、ウイグル語文献の校訂に関するスーパーバイザーを担当していただくこともできた。

第 3 回研究会（3 月）では、2015 年 11 月・12 月の敦煌現地調査の成果を相互に提示し、到達点を検証した。さらに、2016 年度の敦煌現地および海外研究期間への調査計画、および報告書を刊行するための打ち合わせを入念に行なった。

成果の公開状況、計画

参加メンバーの学術上の知見を、個別的に論文・学会発表の形で公開したほか、一般向けの雑誌などにも寄稿し社会に向けても公開した。本課題の中心的な成果刊行物となる、『河西地域石窟諸言語資料集成』（仮題）の編集を進め、2017年度中の刊行を予定している。

研究成果：学術論文 29 件、口頭発表等 29 件、社会に向けた成果発表 2 件

「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」

研究代表者名：陶安あんど 参加者：所員 1，共同研究員 14

研究期間：2014（平成 26）年度～2016（平成 28）年度

研究計画

本年度の最大の目標は、里耶秦簡の第 5・6・8 層出土簡牘の和訳と訳注の作成である。昨年度の共同研究によって得られた様式分類体系に基づいて全史料を分類集めた上、原史料に訳文と注釈を施す予定であるが、様式論的分析の深化に伴い、釈字や綴合関係等を訂正し、釈文そのものにまで深くメスを入れる予定である。

今まで里耶秦簡は、第 5・6・8 層出土の簡牘のみが纏まった形で公表されてきたが、2014 年には、第 9 層を中心に、未公開史料が部分的に公表されたので、その講読にも取り組む予定である。断片性のため、まだ系統だった訳注作りには時期尚早ではあるが、第 5・6・8 層出土の簡牘の訳注の重要な参考資料として活用する予定である。

昨年度に引き続き、嶽麓秦簡『為獄等状』と五一広場後漢簡牘を共同して講読し、さらに、昨年新たに公開された『肩水金關漢簡（参）』にまで講読の範囲を広げ、比較材料の拡充に努める予定である。

以上は主として史料研究に重点を置いて今後の研究計画を纏めたが、秦・漢の継承と変革に関する研究は、本研究の中から生まれ且つ多くの共同研究員が参加する科研プロジェクト「西北周縁領域の歴史的展開から見た中国古代史の再構築に関する基礎的研究」（高村武幸代表）に発展的継承する予定である。

研究実績の概要（2015 年度）

2015 年度は、引き続き里耶秦簡・肩水漢簡・五一広場後漢漢簡を講読し、秦・前漢後半から後漢初期まで・後漢中期というように時代が異なる文書史料の比較を行った。里耶秦簡は、『里耶秦簡壺』以降部分的に公表された第 7 層・第 9～12 層・第 14～17 層の簡牘、肩水金關漢簡は、『肩水金關漢簡（弐）』、五一広場は、『文物』2013 年第 6 期に公表された簡を対象とした。

里耶秦簡第 5・6・8 層の訳注の作成では、全簡を様式論的に分類し、読み下し文を様式論的特徴に応じた表形式に纏め、訳注の基本テキストの構築に努めた。また、暦日・地名・人名・官職名に関わる記載を網羅的に蒐集し、索引と初歩的注釈を作成した。目下残っている作業は、テキストおよび暦日・地名・人名・官職名の注釈の校正と確定と、釈読上の個別問題に関わる討議と注釈作成である。

2016 年 3 月には、代表者の陶安と一部の共同研究員が台湾中央研究院において居延漢簡の実物調査を実施し、簡牘形態分類法を開発した高村武幸共同研究員の指導の下で、簡牘の再加工および廃棄に関するデータを集めたほか、形態分析に必要な実測図作成などの調査技法を、今まで調査経験がなかった若手研究員へと伝えた。

成果の公開状況、計画

研究成果については、別紙の通り学会報告・論文・図書を発表した。（II-3.2「共同利用・共同研究課題実施状況」参照）また、本研究課題の HP への史料メモの掲載により研究の迅速な公開に努めたが、直接に訳注に反映させたため、未公開のままとなっている史料メモも少なくない。（<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/>）

訳注を完成させて出版すると同時に、HP 上の個別史料メモの公開を通じて、訳注の基礎となった議論の内容を整理して広く送信する予定である。

研究成果：学術論文 10 件、口頭発表等 12 件、図書 3 件、社会に向けた成果発表 12 件

近世イスラーム国家と周辺世界

研究代表者名：近藤信彰 参加者：所員 3，共同研究員 19

研究期間：2014（平成 26）年度～2016（平成 28）年度

研究計画

年3回の研究会およびオスマン文書セミナー（第3回に相当）を開催する。第1回は、東南アジア・南アジアと近世イスラーム国家との関係について、第2回は近世イスラーム諸国家における国境の問題に関して、第4回は、近世イスラーム国家の王権についての研究会を開催する予定である。いずれの研究会も公開で行い、大学院生や若手研究者の参加を促す。また、オスマン文書セミナーでは、昨年度に引き続き、遺産に関するシャリーア法廷関係文書と嘆願書の講読を予定している。講師は高松所員と秋葉淳氏（千葉大学）に依頼し、比較史的観点からオスマン文書を研究するとともに、大学院生・若手研究者のスキルアップを図る。

なお、中東イスラーム研究拠点経費による外国人招聘が認められた場合には、ボストン大学の Sunil Sharma 氏を招聘して、近世イスラーム諸国家の文化的背景をなすペルシア語文化に関する国際ワークショップを開催する。また、代表者が申請した科研費が採択された場合には、これと連携して活動をしていく予定である。その場合には、さらに1回、研究会が増える可能性がある。

研究実績の概要（2015年度）

本年度は、通常の研究会1回、国際ワークショップ2回、オスマン文書セミナーを開催した。国際ワークショップでは、ボストン大学から Sunil Sharma 氏とテキサス大学から Azfar Moin 氏という南アジアを専門とする第一線の研究者を招聘し、ペルシア語文化圏における宮廷文学と権力の関係、および南アジアにおけるイスラームと権力、正統性の関係を扱った。いずれの報告も世界最先端のものであり、日本の学界にとっても重要であっただけでなく、今後の国際的な共同研究への展望を得ることができた。

オスマン文書セミナーでは、近代史の研究に不可欠なイラーデ（勅旨）とアルズハール（嘆願書）を扱った。文書の形式をアーカイブズ学的見地から解説したのち、実際の文書の講読を行った。地域的には、北海道や九州など全国から、専門もさまざまな参加者が両日それぞれ27名集まった。

関連する科研費基盤Aが本年度採択になったこともあり、研究会が他のプロジェクトと共催となることが多く、通常の研究会をあまり開くことができなかつたことが反省点である。最終年度にあたる2016年度は、本来の趣旨に立ち返り、通常の研究会を中心に進めていきたい。

成果の公開状況、計画

研究報告は随時、要旨をウェブページに掲載している。来年度に報告書の刊行をめざす。

http://meis2.aacore.jp/jr_islamic_states_surrounding_world

研究成果：学術論文33件、口頭発表等47件、図書3件、社会に向けた成果発表14件、その他1件

シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—

研究代表者名：錦田愛子 参加者：所員 2、共同研究員 13

研究期間：2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

本年度は、これまでの議論で共有されてきた、シティズンシップと政治参加をめぐる枠組みをもとに、実態と制度の両側面から比較研究を進めていく。具体的には、移民／難民が滞在国において外国人として認められている権利の範囲や、それが各国で市民権および人権保護の観点からどのような論争を生んでいるのか、また生みうるのか、各国の事例の比較を通して検討する。またそれらが各国の政策や制度の中にどれだけ反映されているかを検討する。

検討の過程では、本共同研究会のメンバーのみならず、同様の問題関心をもち名古屋多文化共生研究会（NAMS）などとも交流の機会をもち、議論を深める予定である。初回の研究会では、外部の報告者を招聘して相互に報告し、コメントをしあう機会を設けるほか、NAMS と共催でシンポジウムを開催する計画である。シンポジウムでは共同研究会メンバーが報告、コメントを行う予定であり、議論の幅を広げるとともに、一般参加の場を設けることで研究成果を社会全体へ発信していく。

研究実績の概要（2015年度）

本研究課題は、移民／難民の滞在国でのコミュニティや政策とのかかわりについて検討する。二年目となる本年は、初回の研究会で、問題関心の近い名古屋多文化共生研究会（NAMS）と共催の一般公開シンポジウムを行

った。シンポジウムでは共同研究員から、外国人の人権保障をするうえで、憲法と国際人権法はどのような関係に立つか、また地方自治体への参政権についてどのような議論があるか、条文や判例を踏まえた報告がされた。また医療の必要性に基づき在留特別許可が認められるかという問題について、NAMS 会員の弁護士から報告があり、共に議論を深めることができた。最後の報告では、日本とフィリピンとの国際結婚移民について共同研究員が報告し、入国管理政策の厳格化が偽装結婚の増加につながっている事例が指摘された。シンポジウムの翌日は、引き続き名古屋で、共同研究員の他に、名古屋難民支援室の方にも報告を頂き、課題のテーマについて議論を深めた。支援室の方からは、日本でも難民認定申請者が近年急増していることや、認定手続きの実態、認定申請者に対する支援室からの支援事業の内容などについてお話し頂いた。これに対して共同研究員の方では、スウェーデンの移民/難民受け入れ政策と、その政治的・歴史的背景、近年の動向とその中でのハラール食品をめぐる議論などが報告された。両日を通して、移民/難民のシティズンシップをめぐる法的・政治的・社会的な問題点が指摘され、政策とのかかわりや、コミュニティとの関係について考察を深めることができた。年度内2回目、3回目の研究会では、湾岸アラブ諸国の移民労働者をめぐる報告があった。その中では、劣悪な就労状況への国際的批判やホスト国社会との文化摩擦等が、国家主導の移民居住区整備として「レイバーシティ」の建設を促している例が紹介された。また移民の増加と権威主義体制の維持の関係について理論的考察が提示され、移民がもたらす人口変動が政治的にホスト国の政治制度選択に影響を及ぼしている様子が論証された。政治理論に関する別の報告では、移民/難民の送出国における社会福祉の向上が、人の移動がもたらす諸問題への根本的な解決につながるという提言がなされた。国際法に関する報告では、構造的な少数者（マイノリティ）に対する権利保障のあり方として、内的自決権の保障による集団的権利の保護の重要性が指摘された。これら今年度の報告からは、移民/難民の受入国でシティズンシップを付与する上で展開される政治的議論の諸側面や、社会統合にも様々な態様がありえることなどが確認された。

成果の公開状況、計画

本課題の共同研究会での議論の内容については、AA 研課題のホームページで記録を公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp207>

また今年度初回の研究会では、名古屋多文化共生研究会（NAMS）との共催で一般公開シンポジウム「外国人の人権とシティズンシップ」を開催した。シンポジウムでは本課題の共同研究員3名がパネリストとして報告し、モデレーターとコメンテーターも共同研究員が務めた。シンポジウムには多数ご来場頂き、本課題での研究成果を NAMS 関係者ほか一般の参加者の方々に対して公開し、議論を深めることができた。翌日の共同研究会では、特定非営利活動法人名古屋難民支援室の方を招き、難民支援の現場で活躍される実務家との間で意見交換を行い、課題成果を共有することができた。

本研究会での議論の成果を一般に公開するため、2017 年度に成果論集を刊行する予定である。本年度はその内容の構成や、出版社の選定、政策提言の可能性について共同研究員の間で協議を行う。

研究成果：学術論文 25 件、口頭発表等 20 件、図書 2 件、社会に向けた成果発表 4 件

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第二期）

研究代表者名：富沢寿勇（静岡県立大学） 参加者：所員 5、共同研究員 19

研究期間：2014（平成 26）年度～2016（平成 28）年度

研究計画

本課題は複数の分野（人類学、地域研究、歴史学、政治学等）の研究者によって東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関して共同研究を進めていくことを目的としているが、本年度では前年の研究成果を踏まえながら、さらに中東など域外を専門とする研究者らの協力を通じて、地域間比較の観点から東南アジアにおけるムスリム/非ムスリムの関係性の特質などについて検討していく。例えば第 1 回研究会においては東南アジアと中東のイスラーム圏における紛争を主題として取り上げ、具体的にはフィリピン南部の「モロ」と呼ばれるムスリム・マイノリティの分離独立紛争の事例、中東に関してはレバノンの多民族共存状況の実態と、それがいわゆるイスラーム国（IS）をめぐる紛争によっていかに影響を受けているのかという事例を取り上げ、双方の事例の比較を通じて共通性と差異に関して検討を行う予定である。なお研究の進め方として、AA 研の海外拠点コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）を中心としてこれまでに構築してきた東南アジアの研究者とのネットワークを活用しながら国際的な共同研究として実施していく。具体的には東南アジア研究者との共同によるコタキナバルでの国際ワークショップを開催する。成果に関しては前年度同様 HP へアップするのはもちろん、KKLO の実施し

ている講演会を通じて研究者以外の聴衆へのアウトリーチ活動等も実施する予定である。

研究実績の概要（2015年度）

本研究課題の二年目にあたる2015年度においては、概して本研究課題のテーマの一つである文化・宗教的多様性・多元性がもたらす紛争や対立・葛藤などに注目して研究会を実施した。具体的には、第1回研究会ではゲスト・スピーカーの末近によって中東におけるイスラーム主義をめぐる運動と紛争に関する報告が実施された。後半はメンバーの床呂により南部フィリピンのムスリム少数民族（「モロ」）の分離主義運動に関する報告が行われて現地の分離主義運動と紛争をめぐる状況を社会的、政治的、文化的な背景などからの分析が行われた。コタキナバルで実施された第2回研究会ではマレーシア人研究者らと交えた国際ワークショップとして開催されたが、東南アジアからはマレーシアとインドネシアにおけるイスラームと文化多様性をめぐる個別報告、中東からは「イスラーム国（IS）」をめぐる状況を含めた報告が実施された。第3回ではボルネオ島、タイ南部、インドネシアの各地におけるイスラームと文化多様性をめぐる状況に関する個別報告とディスカッションが実施されたが、いずれの回においても、単に個別の地域のローカルな詳細だけではなく、東南アジア内での事例の比較さらには中東研究者も交えて、中東と東南アジアとの比較というマクロな視点からの分析と検討が行われた点をユニークな特徴として挙げることができる。

成果の公開状況、計画

まず、各研究会の内容等に関してはAA研のホームページ（<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp209>）で公開しているほか、学会等でメンバーが個別に成果発表を実施した。これに加えて研究成果発信と社会還元のため、本研究課題代表の富沢が長崎大学で開催されたグローバル化と食文化に関する公開シンポジウムで「食をめぐる異なる価値との共生～グローバル化の中のハラールとローカリティ～」と題して基調講演を行い、本研究成果の一端を披露した。副代表の床呂は長野で開催された講演会において、東南アジアのイスラームと文化多様性に関する研究成果の一部を一般市民・企業関係者を含む聴衆へ向けて発表した。さらにメンバーの西井も同様に都内で開催された講演会を通じてタイ南部を中心とするイスラームに関しての知見の一部を公開する趣旨の講演を実施するなど、研究成果の一般向けの公開・発信などいわゆるアウトリーチ活動も積極的に実施した。

第3回課題研究会にて積極的な成果公開を既に行っていることに加えて、最終年度である2016年度の終了後のできるだけ早い時期に、英文の成果論集を取り纏めることを予定し、すでに準備作業の一部に着手している。

研究成果：学術論文26件、口頭発表等36件、図書3件、社会に向けた成果発表11件、その他2件

アフリカに関する史的研究と資料

研究代表者名：苅谷康太 参加者：所員 2、共同研究員 8

研究期間：2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

実施2年目にあたる本年度は、まず第1回（通算第4回）研究会において、共同研究員（もしくは研究協力者）が口頭伝承やオーラル・ヒストリーに関連する研究発表を行い、それを受けて、アフリカ史研究とそこで利用される資料群を考える上で避けて通ることのできない非文字資料の問題を参加者全員で議論する予定である。

第2回（通算第5回）研究会及び第3回（通算第6回）研究会も、共同研究員及び研究協力者による研究発表が主となるが、発表者及び発表テーマについては、第1回研究会終了後に決定する。

なお、いずれの研究会も、共同研究員及び研究協力者による研究発表については公開とし、また、可能な限り、東京外国語大学本郷サテライトで開催しようと考えている。更に、各研究会で行われた研究発表の内容は、その概要（報告書）を本共同研究課題のウェブサイト（<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp208>）で公開する。

研究実績の概要（2015年度）

2015年度は予定通り3回の研究会を開催した。

第1回（通算第4回）研究会では、共同研究員2名が発表を行った。最初に、網中昭世氏が「文書史料と非文書史料の交差—植民地期モザンビーク農村社会に関する調査から」と題し、記録者・保有者の異なる文書史料と非文書史料（オーラル・ヒストリーや遺物など）を組み合わせることで分析の視点を多元化し、それによってモザンビーク南部の農村社会の歴史を生活者の視点から立体的に描き出すことが可能になる点を詳説した。次に、社会人類学の観点から文書を生み出す社会における文書の意義を問うた坂井信三氏は、文書の生産から流通、参照、転用、廃棄までの社会的過程全体を「文書活動」と定義した上で、14世紀頃から植民地期までの西アフリカ

内陸地方におけるアラビア語の文書活動の歴史を、その地域的な分布状況の偏りや時代的な盛衰、イスラーム法学やスーフイズムの影響、そしてイギリス及びフランスによる植民地統治の影響などに着目しながら詳しく論じた。

続く第2回(通算第5回)研究会では、研究協力者として吉田早悠里氏を招聘した。吉田氏の発表は大きく前半と後半に分かれ、前半では、エチオピア南西部カファ地方に住むマジョリティの農耕民カファと、かつて狩猟を生業としていたマイノリティのマンジョとの間で、慣習的な忌避関係が基本的人権の概念や国家による権利保障の問題と結びつくことで「差別」へと変化していった歴史的過程を明らかにした。更に後半では、「研究者の研究成果が、今日、フィールドでどのように読まれ、解釈されているのか」という問いを立て、カファ研究の枠組み形成に大きな貢献をしたフリードリッヒ・ユリウス・ビーバーの残した資料群(民族学的資料や、日記、書簡、草稿を始めとした文字資料)を紹介した後、彼の研究成果がカファの人々の歴史観やアイデンティティーに影響を及ぼすようになっている現状を報告した。

そして、第3回(通算第6回)研究会では、2名が発表を行った。最初に、研究協力者として招聘した新谷崇氏が、ファシズム期イタリアの東アフリカ植民地統治における人々の分類・把握・管理の様態をテーマに、従来の研究で十分に活用されてこなかった、カトリック教会所有の東アフリカ関係史料を用いた研究の可能性を説明した。また、本報告では、カトリック教会が運営する在イタリアの複数の文書館に関して、その具体的な利用方法や史料探索の展望も詳しく解説された。次に、共同研究員の眞城百華氏は、エチオピア及びエリトリアの現代史研究に活用できる史料の状況を、その所蔵機関に関する詳しい情報も交えて紹介した。更に、こうした文字史料群の情報を提示した上で、自身がこれまでの研究の中で活用してきたオーラル・ヒストリーの重要性と可能性について、「社会史の構築」という観点から、具体的な事例に即して論じた。

成果の公開状況、計画

2015年度に開催した研究会は、全て公開とした。そして、3回の研究会でなされた研究発表の内容については、本共同研究課題のウェブサイト(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp208>)において公開している。今後も全ての研究会において研究発表は公開とし、その内容を随時、本共同研究課題のウェブサイト(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp208>)において公開する予定である。

研究成果：学術論文15件、口頭発表等12件、図書3件、社会に向けた成果発表5件、その他2件

中国雲南におけるテキスト研究の新展開

研究代表者名：山田敦士(日本医療大学) 参加者：所員 3, 共同研究員 17

研究期間：2015(平成27)年度～2017(平成29)年度

研究計画

研究計画初年度である本年度は、雲南地域のテキスト研究を深化させるための共通基盤の構築を最優先の課題とする。研究会では、地域性・民族系統などに基づくいくつかのセッションを設定し、多分野・多領域からなる研究員の相互理解と融合をはかる。共同研究員は、それぞれが対象とする地域・民族におけるテキスト状況について報告をおこなう。その際、個々のテキストに対する内容分析のみならず、テキストのもつ道具性やテキストに付随する社会的活動(作成、保存、継承など)などにも着目し、それぞれの専門領域の視点から分析をおこなう。共同研究員だけでカバーしきれない領域についてはゲスト講師を迎えて、意見交換をおこなう。なお、年3回の研究会については、個々の研究員が研究会の成果をそれぞれの研究に取り入れやすいよう、十分な間隔を置いて開催する。また、こうした議論をふまえたうえでの、個々の研究員の研究成果発表も並行しておこなっていく予定である。

研究実績の概要(2015年度)

研究計画初年度である平成27年度は、雲南地域のテキスト研究を深化させるための共通基盤の構築を目的として、以下3点に関する活動をおこなった。

(1) 研究課題の出発点の明確化

本研究課題は、先行研究課題「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」および「東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触：タイ文化圏を中心として」を継続・発展させるものである。上記プロジェクトにおけるテキストの掘り起こしと内容分析に加え、テキスト自体をとりまく諸活動へのアプローチを特徴とする。こうした視点を導入するために、代表者の研究事例を土台に、課題の継続性と発展性に対する認識の共有をおこなった。

(2) 新しいテキスト研究領域の開拓

歴史研究においては、テキストの史料性が重要となる。第2回目の研究会では、これまで史料性の観点から未開発であった「墓誌」や「他文字・他言語による表象」に焦点をあてた。雲南地域にはこうした未開発のテキストが多く存在する。本研究課題の視点からは、研究対象として少なからぬ価値のあることが確認された。

(3) 異なる研究領域の視点の融合

本研究課題は多分野の協働が一つの特徴である。第3回の研究会では、ナシ族のテキストを共通のテーマに、歴史学および言語学という異なる専門領域からのアプローチを実施した。多分野による協働は、研究者自身の視座を広めるのみならず、既存テキストの史的価値も高める。こうした共通の土台を設定することは、多分野の研究者の参加する本研究プロジェクトにとって極めて重要である。

成果の公開状況、計画

本年度は研究課題に関わる成果物として3冊の資料集が出版され、通算7冊程度の資料集の刊行を予定している。

研究成果：学術論文14件、口頭発表等24件、図書6件、社会に向けた成果発表2件

I-2.4 センター

I-2.4.1 情報資源利用研究センター

年度計画

1. AA 研の言語文化に関する情報資源の蓄積、加工、公開に関する研究手法の開発を行う。
2. IRC プロジェクトを通じて、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を行う。
3. IRC ウェブサイトの充実を図り、情報資源の発信体制をより一層強化する。
4. 所内基幹研究班、特別経費プロジェクト等との連携研究を実施する。
5. IRC ワークショップを開催し、研究手法の普及、発展を推進する。
6. 情報資源利用の新展開のため他の研究機関との連携、共同研究を模索する。

実施状況

1. アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化に関し、以下のプロジェクトを支援した。
() 内は代表者名である。
 - 1) 「ベンデ語の語学教材 (“Tusahule Sibhende” (2015)) のマルチメディア (Web) 版の作成」(阿部優子)
 - 2) 「インド洋民話のDB化」(小田淳一)
 - 3) 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」(奥田統己)
 - 4) 「電子辞書プロジェクト」(高島淳)
 - 5) 「モンゴル文語・満洲文語辞書の電子化利用に関する研究」(栗林均)
 - 6) 「ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析」(町田和彦)
 - 7) 「ハウサ語、ヨルバ語電子辞書の作成と公開」(塩田勝彦)
 - 8) 「ソンガイ語テキスト集の電子化と公開」(佐久間寛)
 - 9) 「オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化」(江川ひかり)
 - 10) 「アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラム」(高松洋一)
 - 11) 「チュルク諸語対照基礎語彙(第2期)」(児倉徳和)
 - 12) 「言語データベースツール」(渡辺己)
 - 13) 「Toolbox データのウェブ公開用ツール」(渡辺己)
2. 上記プロジェクトのうち、「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」、「モンゴル文語・満洲文語辞書の電子化利用に関する研究」、「ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析」、「ハウサ語、ヨルバ語電子辞書の作成と公開」、「オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化」は、所外の研究者と連携して行ったプロジェクトである。また、「インド洋民話のDB化」は基幹研究「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」と、「アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開」は基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」と、また、「ベンデ語の語学教材 (“Tusahule Sibhende” (2015)) のマルチメディア (Web) 版の作成」、「言語データベースツール」、「Toolbox データのウェブ公開

用ツール」,「チュルク諸語対照基礎語彙(第2期)」は基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」と関連の深いプロジェクトである。

3. IRC ウェブサイトの維持・充実をはかった。
4. 研究手法の普及・発展に資する IRC ワークショップを開催した。
 - 1) IRC 国際ワークショップ「レユニオン島—混成の調和を有する複雑なフランスの南半球領土」(2015年4月7日, AA 研セミナー室(301), 講演者: マリー=アニック・ジャンス(人類学, レユニオン精神衛生公共法人))
 - 2) IRC 国際ワークショップ「アフリカ史再構成のための神話学への統計学の応用」(2016年2月3日, AA 研マルチメディア会議室(304), 講演者: ジュリアン・デュイ(神話学, エコール・サントラル・パリ))
 - 3) IRC ワークショップ「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える: 言語体系を例に」(2016年3月4日, AA 研セミナー室(301), ディスカッション: 阿部 明典(千葉大学文学部行動科学科教授), 伊藤 克彦(京都大学医学研究科分子病診療学准教授), 内海 彰(電気通信大学大学院情報理工学研究科教授), 村井 源(東京工業大学大学院理工学研究科価値システム専攻助教), 森 浩禎(奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科教授))

I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター

年度計画

1. 臨地調査に関わる研究者間の連携を強化するため, 6月下旬に海外学術調査フォーラム及び海外学術調査フェスタを開催する。
2. 臨地調査の手法の実践的・理論的な洗練と, 「フィールドサイエンス」という「現地学」の構築にむけた研究活動を推進する。
3. フィールドサイエンスを専門とする異なる分野の研究者の連携を図るオンラインのフィールドネットの整備を進め, 分野を超えたフィールドサイエンス創成の方向性を模索する。
4. 研究所の有する2つの海外研究拠点である中東研究日本センター(JaCMES: レバノン共和国ベイルート)及びコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO: マレーシア連邦・サバ州)の運営と整備を進める。
5. 研究所が幹事組織を務めている地域研究コンソーシアムの運営に携わる。
なお, 各事業のおおまかなスケジュールは以下のとおり。

4~6月	・海外学術調査フォーラム ・第1回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会 ・第1回フィールドサイエンス・コロキウム
7~9月	・第1回海外調査専門委員会 ・第1回フィールドネット運営委員会 ・KKLO「標準マレー語・インドネシア語とその変種に関するセミナー」
10~12月	・第2回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会 ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム ・JaCMES 若手研究報告会 ・KKLO 第1回現地講演会 ・フィールドネットワークワークショップ ・フィールドネット第1回公募制ラウンジ ・第2回海外調査専門委員会 ・第2回フィールドネット運営委員会
1~3月	・第3回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会 ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム ・海外拠点専門委員会 ・JaCMES 諮問委員会 ・KKLO 第2回現地講演会 ・フィールドネット第2回公募制ラウンジ

実施状況

2015年度のフィールドサイエンス研究企画センター(以下 FSC)は, 床呂郁哉(センター長), 太田信宏(副

センター長), 黒木英充, 西井涼子, 深澤秀夫, 錦田愛子, 塩原朝子, 石川博樹, 山越康裕, 佐久間寛から構成された。

1. 臨地調査に関わる研究者間の連携強化
2015年6月27日(土)に海外学術調査フォーラム及び海外学術調査フェスタを開催した。
II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター「4. 海外学術調査総括班活動」を参照
2. 臨地調査手法の洗練, フィールドサイエンスの構築
フィールドサイエンスの研究手法の開発及び洗練にむけて, 以下の活動を行った。
 - 2010年度発足の「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」の企画立案により, 所内基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」との連携をはかりながら, 少人数で集中的に討議をおこなう公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」を2回開催した。
 - ・ 「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは(第1回)」(2015年7月10日(金)開催)
 - ・ 「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは(第2回)」(2015年12月26日(土)開催)
 - 文理各専門分野の研究者が情報を交換する組織として2008年度に設置したフィールドネットの機能を強化する目的で, 2011年度に発足したフィールドネット運営委員会を通じ, フィールドネットの企画・運営体制の整備を継続した。
 - フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を2回(7月10日(金), 12月26日(土))開催した。
3. フィールドネットの整備と公募企画の開催
 - 利便性の向上をはかるためにウェブサイト画面の改良作業と整備を続行し, 2015年度は38名の新規登録者を得た。
 - 公募企画「フィールドネット・ラウンジ(公募形式)」2件を開催した。
 - ・ ワークショップ「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家:20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」(2016年1月9日(土)開催)
 - ・ ワークショップ「装い/社会/身体:フィールドワーカーによる通文化比較研究」(2016年1月10日(土)開催)
 - フィールドネット運営委員会を1回(2016年3月29日(火))開催し, フィールドネットの今後の活動方針を策定した。
4. 海外研究拠点の運営と整備
II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター「3. 現地研究拠点」を参照
5. 地域研究コンソーシアムの運営
II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター「5. 地域研究コンソーシアムとの連携」を参照

I-2.5 既形成研究拠点

I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点(GICAS)

代表: 荒川慎太郎 副代表: 澤田英夫

関連所員: 伊藤智ゆき, 小田淳一, 高島淳, 町田和彦

年度計画

アジア諸文字情報資源の蓄積と公開(GICAS 図書資料・展示資料の整備と管理)

アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

実施状況

2015年度の年度計画に沿った活動成果は, 以下のとおり。

1. アジア諸文字情報資源の蓄積と公開(GICAS 購入図書・展示会物品等の整理・管理)
 - プロジェクトスペース(207)に設置されている特別書架の貴重書の整理を行い, 研究者の利用の便を図った。
 - GICAS所蔵, アジアの各種文字のタイプライター展「アジア諸文字のタイプライター」を開催した(AA研, 2015年10月26日~11月27日)。

2. アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

- a) IRC のサーバを利用してモンゴル語全文検索に関して、昨年度の内容を修正・拡張し、公開した。
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_20.html
(解説用ページは <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>)
- b) IRC のサーバを利用してヒンディー語とウルドゥー語の自動形態素解析ソフトを、昨年度の内容を修正・拡張し、公開した。
ヒンディー語用 (http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_08.html)
ウルドゥー語用 (http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_09.html)
(解説用ページは <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hirdu/html/Morphological Analysis.htm>)

I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点

代表：飯塚正人 副代表：黒木英充

関連所員：近藤信彰，高松洋一，床呂郁哉，西井涼子，錦田愛子，宮崎恒二

年度計画

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」と密接に連携・協力しながら、2005年度から5年間に渡って実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」によって形成された研究拠点を維持・運営していく。

具体的には、1月前半に Dr. Sunil Sharma (ボストン大学教授) を招聘し、南アジア・ペルシャ語文化圏の歴史に関する短期集中型の共同研究を実施する。

実施状況

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」と密接に連携・協力しながら、研究拠点の維持・運営を図った。具体的には、Dr. Sunil Sharma (ボストン大学教授) を2月中旬に招聘し、南アジア・ペルシャ語文化圏の歴史に関する短期集中型の共同研究を実施した。Sharma 氏は、国際ワークショップ Court, Literature and Power in the Early Modern Persianate World (共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」第6回研究会) で、“Representing Mughal Decline in Safavid Court Literature”と題した報告を行ったほか、本研究拠点が基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」との共催で開催した講演会でも“Amir Khusraw as a Persian, Indo-Persian, and Persianate Poet”というタイトルの報告を行って、本研究所の所員のみならず、広くわが国の研究者との間で、南アジア・ペルシャ語文化圏の歴史に関わる活発な共同研究を展開した。

I-2.6 所員の個人別研究活動

I-2.6.1 概要

全国共同利用研究所としての本研究所の設立理念は、アジア・アフリカ地域の言語文化に関して、現地調査に基づく総合的あるいは個別の研究を遂行してその成果を公開すること、および国内外のそれらの研究の連携と活性化を図り、基礎資料の構築と公開に努めることにあり、2010年度に新設の共同利用・共同研究拠点に移行した後も、この基本理念は変わらない。

そうした理念に立って共同利用・共同研究拠点の任務を遂行するための研究活動は本年度、4つの基幹研究、2つのセンター(情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画)、2つの既形成拠点およびそれらと密接に連携しつつ遂行される共同利用・共同研究課題(26件)を中心に実施された。所員がこれらの多様な共同研究活動に何らかの形で参画していることは言うまでもない。

本項目は、以上のような本研究所における共同研究活動が、所員個人のレベルにおける成果としてどのように反映されているのかを、本年度の所員ごとの研究業績を列挙する方式で示したものである。

I-2.6.2 所員の研究業績一覧

所員

荒川 慎太郎（あらかわ しんたろう）

准教授，情報資源戦略研究ユニット

研究主題：西夏語学，西夏語文献学

業績

1. 論文：「西夏語の名詞句構造について」『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1：名詞句の構造』（池田巧編），57-72, 2016.3, 京都大学人文科学研究所。
2. 論文：「2014 年における『文字鏡』西夏文字フォントの修正と追加について」『研究成果報告書（科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究代表者：荒川慎太郎）「ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究」』（荒川慎太郎編），45-52, 2016.3.
3. 論文：「西夏の「砲」設計図について」『研究成果報告書（科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究代表者：荒川慎太郎）「ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究」』（荒川慎太郎編），31-44, 2016.3.
4. 論文：「河西地域石窟の西夏文題記に関する覚書（4）」『研究成果報告書（科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究代表者：荒川慎太郎）「ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究」』（荒川慎太郎編），1-30, 2016.3.
5. 論文：「内蒙古博物院，考古所収蔵西夏文文献」『北方文化研究』Vol. 6, 191-197, 2015.12.（中国語訳：趙哈申高娃）
6. 論文：「西夏語の文法研究 —各種資料からみた文法語を例に—」『日本言語学会第 151 回大会予稿集』, 362-367, 2015.11.
7. 論文：「古代文字文献を資料とした死言語の文法研究 —中エジプト語・契丹語・シュメール語・西夏語の事例から—」『日本言語学会第 151 回大会予稿集』, 342-343, 2015.11.
8. 論文：「西夏語の 3 種の遠称指示代名詞の使い分けについて」『言語研究』148, 103-121, 2015.9.（査読有）
9. 論文：“On the design of a ‘Trebuchet’ in the Tangut Manuscript of IOM, RAS”, *Written Monuments of the Orient* 2, 21-30, 2015.
10. 総説・解説：「疑似漢字とその『書物』」『書物学』2, 84-86, 2015.5, 勉誠出版。
11. 口頭発表：「西夏文字草書体に関する近年の研究について」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「ユーラシア言語研究 最新の報告」2015 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2016.3.26, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター。
12. 口頭発表：「2015 年 12 月敦煌西夏文題記調査報告」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」2015 年度第 3 回研究会, 2016.3.22, 大阪大学文学部。
13. 口頭発表：“Studies on the Tangut version of the ‘Diamond Sutra’ in the IOM RAS collection”，ロシア科学アカデミー東洋文献研究所：Workshop “Serindica: New materials, new approaches”, 2016.1.29, ロシア，サンクト・ペテルブルグ，ロシア科学アカデミー東洋文献研究所。
14. 口頭発表：「関于『西夏文金剛經研究』」，寧夏大学西夏学研究院：朔方論壇 2015 年第 18 講（寧夏大学西夏学研究院主催），2015.12.14, 中国，銀川，寧夏大学西夏学研究院 202 会議室。
15. 口頭発表：「日本西夏学研究現状」，寧夏大学西夏学研究院：西夏語言与文化學術研討会, 2015.12.10, 中国，銀川，寧夏大学西夏学研究院 202 会議室。
16. 口頭発表：大会ワークショップ「古代文字文献を資料とした死言語の文法研究 —中エジプト語・契丹語・シュメール語・西夏語の事例から—」，日本言語学会第 151 回大会, 2015.11.29, 名古屋大学東山キャンパス全学教育棟本館 C13 号室。
17. 口頭発表：“On some uses of the Tangut affix 1kl.”，寧夏大学西夏学研究院・中国社科院西夏文化研究中心・河西学院歴史文化与旅遊学院：第四届西夏學術論壇暨河西歷史文化研討会, 2015.8.16, 中国，張掖，河西学院図書館二楼學術報告庁。
18. 口頭発表：「西夏語の 1kl: の 3 つの機能について」，チベット＝ビルマ言語学研究会第 36 回会合, 2015.7.5, 京都大学文学部校舎（新館）第 4 講義室。
19. 口頭発表：“2014 年 12 月敦煌西夏文題記調査報告”，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：AA 研共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」2015 年度第 1 回研究会, 2015.5.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

競争的研究資金

研究代表者：荒川 慎太郎

期間（年度）：2013-15

種目：挑戦的萌芽研究

課題名：ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的研究

所属学会（役職）

日本語学会，遼金西夏史研究会

その他研究成果

名称：エッセイ「『今昔文字鏡』西夏文字フォントのアップデート」

期間（年度）：2015

成果：西夏文字フォントの監修に関するエッセイ。『遼金西夏史研究会 NewsLetter 第8号』（遼金西夏史研究会，2016.3），pp. 46-49

名称：エッセイ「2015年度天理図書館展「悲劇の天才言語学者ネフスキー —自筆原稿に見る軌跡—」における西夏研究資料について」

期間（年度）：2015

成果：2015年に開催された展示会に関するエッセイ。『遼金西夏史研究会 NewsLetter 第8号』（遼金西夏史研究会，2016.3），pp. 42-45

飯塚 正人（いづか まさと）

教授，政治文化研究ユニット

研究主題：イスラーム学・中東地域研究

業績

1. 論文：「イスラム国」出現の背景—近現代イスラーム思想史から考える『世界平和研究』207, 2-14, 2015.11.
2. 総説・解説：「イスラムの女性観あるいは，男は弱いという「常識」『民事研修』704, 表紙裏, 2015.12, 日本加除出版.
3. 総説・解説：「定めめの礼拝～イスラムの支柱」『民事研修』703, 表紙裏, 2015.11, 日本加除出版.
4. 総説・解説：「喜捨の義務の放棄に見るイスラム教徒の理想と現実」『民事研修』702, 表紙裏, 2015.10, 日本加除出版.
5. 総説・解説：「信仰告白の義務とイスラムへの入信」『民事研修』701, 表紙裏, 2015.9, 日本加除出版.
6. 総説・解説：「六信その6～運命あるいは神の予定」『民事研修』700, 表紙裏, 2015.8, 日本加除出版.
7. 総説・解説：「六信その5～来世（その3 天国）」『民事研修』699, 表紙裏, 2015.7, 日本加除出版.
8. 総説・解説：「六信その5～来世（その2 地獄）」『民事研修』698, 表紙裏, 2015.6, 日本加除出版.
9. 総説・解説：「六信その5～来世（終末・復活・最後の審判）」『民事研修』697, 表紙裏, 2015.5, 日本加除出版.
10. 総説・解説：「六信その4～預言者たち」『民事研修』696, 表紙裏, 2015.4, 日本加除出版.
11. 口頭発表：「イスラム国」出現の背景—近現代イスラーム思想史から考える，平和政策研究所・世界平和教授アカデミー「平和政策研究所・世界平和教授アカデミー研究会」, 2015.7.4, アルカディア市ケ谷私学会館.
12. 学外の社会活動（サイエンスカフェ）：「日本学術会議サイエンスカフェ」（ISILはイスラームではないのか—近現代イスラーム思想史から考える）, 2015.7.
13. 学内の社会活動（セミナー・ワークショップ）：「中東☆イスラーム教育セミナー」（アラブ・ムスリムにとって，いまイスラームとは何か—近現代イスラーム思想史から考える）, 2015.9.
14. 学外の社会活動（セミナー・ワークショップ）：「ムスリム観光客のおもてなしセミナー」（ムスリム観光客受け入れのために～イスラームの基礎知識～）, 2015.9.
15. 学内の社会活動（セミナー・ワークショップ）：「高大連携事業『東京外国語大学夏期世界史セミナー—世界史の最前線VII』」（なぜいまISなのか—近現代イスラーム（思想）史から考える）, 2015.7.
16. 学外の社会活動（テレビ・ラジオ番組）：「荒川強啓デイ・キャッチ！」（於：TBSラジオ）, 2016.1.
17. 学外の社会活動（テレビ・ラジオ番組）：「池上彰のニュース そうだったのか!!」（於：テレビ朝日）, 2015.12.
18. 学外の社会活動（テレビ・ラジオ番組）：「荻上チキ session22」（於：TBSラジオ）, 2015.12.

19. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」 (於: テレビ朝日), 2015.11.
20. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「キャッチ! 世界の視点」 (於: NHKBS-1), 2015.11.
21. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「スーパーJチャンネル」 (於: テレビ朝日), 2015.11.
22. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「荻上チキ session22」 (於: TBS ラジオ), 2015.11.
23. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「ホウドウキョク あしたのコンパス」 (於: NOTTV), 2015.11.
24. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「みんなのニュース」 (於: フジテレビ), 2015.11.
25. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「ホウドウキョク あしたのコンパス」 (於: NOTTV), 2015.10.
26. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「スーパーJチャンネル」 (於: テレビ朝日), 2016.1.
27. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「ホウドウキョク あしたのコンパス」 (於: NOTTV), 2016.3.
28. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「みんなのニュース」 (於: フジテレビ), 2016.3.
29. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」 (於: テレビ朝日), 2016.1.
30. 学外の社会活動 (講演会) : 「警部任用科新課程第 45 期研修」 (イスラム情勢), 2016.1.
31. 学外の社会活動 (講演会) : 「第 12 回法務省入国管理局関係職員専攻科研修」 (イスラム世界を理解する), 2016.1.
32. 学外の社会活動 (講演会) : 「府中市立中央図書館講演会」 (2 時間でわかるイスラーム), 2015.12.
33. 学外の社会活動 (講演会) : 「第 48 回法務省入国管理局関係職員高等科研修」 (イスラム世界を理解する), 2015.11.
34. 学外の社会活動 (講演会) : 「国際テロリズム捜査研修」 (イスラーム情勢), 2015.10.
35. 学外の社会活動 (講演会) : 「警部任用科新課程第 44 期研修」 (イスラム情勢), 2015.9.
36. 学外の社会活動 (講演会) : 「東進ハイスクール「大学・学部研究会」」 (イスラム教徒の考え方と意思を知るために), 2015.8.
37. 学外の社会活動 (講演会) : 「第 52 回法務省入国管理局関係職員特別科 (難民調査官) 研修」 (イスラム世界を理解する), 2015.7.
38. 学外の社会活動 (講演会) : 「警部任用科新課程第 43 期研修」 (イスラム情勢), 2015.6.
39. 学外の社会活動 (講演会) : 「日本イスラム協会公開講演会」 (アラブ諸国におけるイスラム主義運動の動向), 2015.6.
40. 学外の社会活動 (講演会) : 「第 41 回栃木県オリエントセミナー」 (「イスラム国」を産み出したもの—イラク戦争とシリア内戦), 2015.5.
41. 学外の社会活動 (講演会) : 「千葉県人権啓発指導者養成講座」 (イスラームとは何か), 2015.10.
42. 学外の社会活動 (講演会) : 「調布市北部公民館国際理解講座」 (『なぜいま「イスラム国」なのか—中東情勢と近現代イスラーム (思想) 史から考える』), 2015.11.
43. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「「ベルギー同時テロ」 対策難しい交通機関テロ 生き残り懸けた揺さぶりか」 (於: 共同通信「識者評論」), 2016.3.
44. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「イラン総選挙 “改革派伸長”でもロウハニの綱渡り」 (於: 週刊新潮), 2016.3.
45. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「原油安にイラン断交 サウジ王家に迫る斜陽」 (於: 週刊新潮), 2016.1.
46. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「特集 内心無理とわかっていて「イスラム国」と話し合え」という綺麗事文化人」 (於: 週刊新潮), 2015.11.
47. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「「イスラム国」暴虐の犠牲となった美しき古代遺跡」 (於: 週刊新潮), 2015.9.
48. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「世界遺産の都市でも虐殺を続ける「イスラム国」」 (於: 週刊新潮), 2015.5.
49. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「首領バグダディ重傷「イスラム国」に“謎の後継者”」 (於: 週刊新潮), 2015.4.
50. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「テクリートは落ちてでも「イスラム国」の戦域拡大」 (於: 週刊新潮), 2015.4.
51. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「大国イランは“中東の警察”になれないのか」 (於: 週刊新潮), 2015.4.
52. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「「安田純平さん」を拘束する「イスラ戦線」指導者は医学部中退のカリスマ」 (於: 週刊新潮), 2016.3.

競争的研究資金

研究代表者: 飯塚正人

期間 (年度): 2012~2016

種目: 基盤研究 (B)

課題名: 「イスラーム民主主義」をめぐる思想展開と実現可能性に関する研究

外部団体委員

人間文化研究機構 現代インド地域研究評価部会 現代インド地域研究評価部会委員
人間文化研究機構 地域研究推進委員会 地域研究推進委員会委員
人間文化研究機構 地域研究推進委員会イスラーム地域部会 イスラーム地域部会委員
早稲田大学イスラーム地域研究機構 共同利用・共同研究拠点運営委員会委員
筑波大学北アフリカ研究センター共同研究会 客員共同研究員

所属学会（役職）

地中海学会（常任委員理事，学会誌編集委員）
日本イスラム協会
日本オリエント学会
日本中東学会（理事，評議員）

石川 博樹（いしかわ ひろき）

准教授，フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題：アフリカの歴史

業績

1. 石川博樹・小松かおり・藤本武編『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』，昭和堂，2016.3.31.ISBN 9784812215241
2. 書評：「石田憲著『ファシストの戦争：世界史的文脈から見たエチオピア戦争』『JANES ニュースレター』第22号，2015.4.15. 83–84頁.
3. その他：「それでも皇帝の名前は光り輝く：エチオピア」岩波書店辞典編集部編『世界の名前（岩波新書 新赤版 1598）』，2016.3.18. 194–196頁. ISBN 9784004315988. 岩波書店.

競争的研究資金

研究代表者：石川博樹
期間（年度）：2015–2017
研究種目：基盤研究（C）
研究課題名：植民地期 PALOP における主食用作物栽培とその社会的影響に関する研究

所属学会（役職）

史学会
日本アフリカ学会
日本ナイル・エチオピア学会（学会誌編集長）
日本オリエント学会
日本ポルトガル・ブラジル学会
キリシタン文化研究会

伊藤 智ゆき（いとう ちゆき）

准教授，コーパス研究ユニット
研究主題：音韻論，歴史言語学，朝鮮語

業績

1. 総説・解説：「朝鮮語祖語の音韻体系再建の試み」『日本語学』34-10, 2015.8. 明治書院.
2. 口頭発表：“Dependent vs. independent accentual changes: a case study of Yanbian Korean nouns”, The 10th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL-10), 2015.6.13–14. 東京外国語大学.

競争的研究資金

研究代表者：伊藤智ゆき
期間（年度）：2014–2016
種目：基盤研究（C）
課題名：韓国語慶尚道方言のアクセント研究

所属学会（役職）

日本語学会
朝鮮学会
日本音韻論学会（理事）
日本音声学会（編集委員）

太田 信宏（おおた のぶひろ）

准教授，フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題：インドの歴史

業績

1. 論文：「前近代Ⅱ：13～18世紀（南アジア）」『アジア経済史研究入門』（水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編），104-113, 2015.11, 名古屋大学出版会.
2. 論文：“Who built ‘the city of victory’? Representation of a ‘Hindu’ capital in an ‘Islamicate’ world”, *Cities in South Asia* (ed. by Crispin Bates and Minoru Mio), 27-44, 2015.4, Routledge, London.
3. 論文：「カースト制度と不可触民差別」『歴史評論』（歴史科学協議会編）782, 58-72, 2015.6.
4. 総説・解説：「辛島先生の研究について」『インド通信』449, 2016.3, インド文化交流センター.
5. 口頭発表：「インド史通史記述の諸問題」, 東京書籍「第9回世界史講演会」, 2015.12.6, 東京書籍関西支社.

所属学会（役職）

日本南アジア学会（事務局長）
史学会
歴史科学協議会（『歴史評論』編集委員）
日本印度学仏教学会
インド考古研究会
カルナータカ歴史アカデミー

小田 淳一（おだ じゅんいち）

教授，情報資源利用研究センター

研究主題：計量文献学

業績

1. 著書（共編著：町田和彦・小田淳一・杉本星子・Geerjanandsingh Bissessur (Arvind)）：『モーリシャスのボージプリー語民話』, 2016.3. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, xxiv+138p..
2. 論文（共著：小田淳一・石井満）：「音楽番組の映像表現におけるカット割りの規範と偏差についての予備的考察」『人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集』, SIG-LSE-B502, 2015.12. pp. 27-30.
3. 論文：「二言語併用者における語彙レベルの干渉現象 —フランス在住コモロ移民一世の事例—」『2015年度人工知能学会全国大会（第29回）論文集』（CD-ROM：3G3-OS-05a-2.pdf）, 2015.6.（査読有）
4. 総説・解説：『ムシノホシ』のつづれ織り（翻訳）『をどる』7, 2016.2. 大駱駝艦, pp. 8-9.
5. 総説・解説：「インド洋民話のデータベース化」『FIELDPLUS』13, 2015. 東京外国語大学出版会, p. 25.

競争的研究資金

研究代表者：小田淳一
期間（年度）：2015
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究課題名：映像表現と古典的修辞技法との対応関係の情報学的分析

研究代表者：小田淳一
期間（年度）：2011-2015
研究種目：基盤研究（A）
研究課題名：インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究

所属学会（役職）

情報処理学会
計量国語学会
人工知能学会

苅谷 康太（かりや こうた）

助教，情報資源利用研究センター

研究主題：西アフリカ・イスラーム地域研究

業績

1. 著書（共訳：Takuboku Ishikawa）：*al-A‘māl al-kāmila* (ed. and tr. by Muḥammad ‘Uḍayma and Kota Kariya), 2015, Dār al-Takwīn, Damascus.
2. 口頭発表：「背教者」の奴隷化を巡るウスマン・ダン・フォディオの思想，日本アフリカ学会第 52 回学術大会，2015.5.23–24. 犬山国際観光センター・フロイデ.
3. 口頭発表：「19 世紀初頭のハウサランドにおける不信仰者の分類」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「AA 研フォーラム」，2015.12.10. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

研究代表者：苅谷康太

期間（年度）：2015–2018

研究種目：若手研究（B）

研究課題名：18–19 世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

所属学会（役職）

日本アフリカ学会
日本イスラム協会（学会誌編集委員）
日本中東学会

河合 香吏（かわい かおり）

教授，文化動態研究ユニット

研究主題：人類学，東アフリカ牧畜民研究

業績

1. 著書（河合香吏編著）：『他者—人類社会の進化』，（河合香吏編）2016.3. 京都大学学術出版会. 454 頁.
2. 著書（共著：河合香吏，他）『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』（春日直樹編），2016.3. 東京大学出版会. 337 頁.
3. 論文：「敵を慮る」という事態の成り立ち—ドスにとって隣接集団とはいかなる他者か『他者—人類社会の進化』（河合香吏編），2016.3. 京都大学学術出版会. pp. 207–225.
4. 論文：「進化から他者を問う—人類社会の進化史的基盤を求めて」『他者—人類社会の進化』（河合香吏編），2016.3. 京都大学学術出版会. pp. 1–18.
5. 論文：「野（フィールド）から紙（ペーパー）へ—生態人類学のドキュメンテーション」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』（春日直樹編），2016.3. 東京大学出版会. pp. 194–211.
6. 総説・解説：「フィールドワークって何？テーマ：育てる（巻頭言）」『FIELDPLUS』15, 2015.12. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
7. 総説・解説：「ともに生きる—霊長類学と人類学からのアプローチ（巻頭特集・責任編集）」『FIELDPLUS』14, 2–11. 2015.7. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 総説・解説：「（自由集会要旨）サル屋とヒト屋の共同研究とは？『人類社会の進化史的基盤研究』の試み」『霊長類研究』Vol.31 No.2, 157–158. 2015.12.
9. 口頭発表：企画シンポジウム「広義の人類学から多角的にヒトの進化を考える—生態人類学」，人類学若手の会「人類学若手の会第 4 回総合研究集会」，2016.2.4–5. 九州大学.

10. 口頭発表：「ともに生きる—共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」の試みから」, 人類学関連学会協議会・日本民俗学会第 67 回年会併催第 10 回人類学関連学会協議会合同シンポジウム「群れる・集う —人類社会の原点を問う—」, 2015.10.11. 関西学院大学.
11. 口頭発表：「サル屋とヒト屋の共同研究とは? 『人類社会の進化史的基盤研究』の試み」, 第 31 回日本霊長類学会大会・自由集会, 2015.7.18. 京都大学.

競争的研究資金

研究代表者：河合香吏
 期間（年度）：2015–2016
 研究種目：研究成果公開促進費・学術図書
 研究課題名：Institutions: The Evolution of Human Sociality（『制度：人類社会の進化』）

研究代表者：河合香吏
 期間（年度）：2015–2018
 研究種目：基盤研究（C）
 研究課題名：共鳴する「五感」：東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究

研究代表者：河合 香吏
 期間（年度）：2011–2015
 研究種目：基盤研究（C）
 研究課題名：東アフリカ牧畜民の「五感」に基づく世界知覚に関する人類学的研究

所属学会（役職）

日本文化人類学会
 日本アフリカ学会（評議員）
 生態人類学会
 日本ナイル・エチオピア学会（評議員）
 日本霊長類学会

栗原 浩英（くりはら ひろひで）

教授，政治文化研究ユニット
 研究主題：ベトナム現代史

業績

1. 書評：「鬼丸武士『上海「ヌーラン事件の闇」—戦間期アジアにおける地下活動のネットワークとイギリス政治情報警察』書籍工房早山」, 2014. 257p. 『東南アジア研究』53-1, 2015.7. 京都大学東南アジア研究所.
2. 学外の社会活動（取材協力）：「対日関係は引き続き重要」『The Daily NNA ベトナム版』, 2016.1.29.
3. 学外の社会活動（インタビュー）：“Hoc gia Nhat Ban: Trung Quoc van se ‘quan su hoa’ Bien Dong”, 2016.2.5.
 URL: www.vietnamplus.vn/hoc-gia-nhat-ban-trung-quoc-van-se-quan-su-hoa-bien-dong/370264.vnp
4. 学外の社会活動（取材協力）：「国際情勢入門 第 3 回東南アジア編」『ニューズウィーク日本版』, 2016.3.22.

外部団体委員

公益財団法人岡崎嘉平太国際奨学財団奨学生選考委員

所属学会（役職）

日本ベトナム研究者会議
 東方学会
 歴史科学協議会
 東南アジア学会
 アジア政経学会
 歴史学研究会

呉人 徳司（くれびと とくす）

准教授，言語動態研究ユニット
研究主題：言語学，チュクチ語

業績

1. 著書（編著）：Linguistic Typology of the North (ed. by Tokusu Kurebito), 2016.3, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, ILCAA, Tokyo University of the Foreign Studies.
2. 論文：“Chukchi as a polysynthetic language”, Linguistic Typology of the North (ed. by Tokusu Kurebito) Vol.3, 59–71, 2016.3.
3. 論文：「作为一个跨境语言的命运和困境——卫拉特蒙古语过去和现在——」『跨境语言与社会生活』（苏金智，卞成林編），221–234, 2015.10, 商务印书馆，中国・北京。
4. 論文：「ダグル民族における満洲の影響及び言語使用の実態」『現代中国における言語政策と言語継承』（包聯群編）第二卷, 2015.8, 三元社。
5. 総説・解説：「極北のトナカイ遊牧民のことばを追って」『FIELDPLUS』14, 2015.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
6. 口頭発表：「フィールド言語学の楽しみと苦しみ」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化所「AA 研フォーラム」，2015.12.10, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
7. 口頭発表：“Sun: Chukchi-Kamchatkan languages”，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化所:AA 研共同利用・共同研究課題『アジア』地理言語学研究，2016.3.2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
8. 口頭発表：“On the Chulchi riddle”, Dongguk University: 4th 3E International Conference: Enjoyment, Elderly, Edutainment, 2015.11.12–14, Gyeongju, Korea.
9. 講演：「チュクチの子どもたちのために」，言語ダイナミクス科学研究プロジェクト「フィールド言語学カフェー世界の言語で読む le petit prince—」，2015.11.19–20, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
10. 口頭発表：「東郷語的语言接触与使用情况」，Shaanxi Normal University, China 「The 13th Urban Language Seminar」，2015.8.10–13, 中国・西安市。
11. 口頭発表：「作为一个跨境语言的变异现象——以中国和蒙古国的蒙古语个案为例——」，中国教育部语言文字应用研究所，中国民族语言研究会，玉溪学院「第二届跨境语言研究论坛」，2015.10.23–25, 中国・玉溪市。

競争的研究資金

研究代表者：呉人徳司
期間（年度）：2015–2018
研究種目：基盤研究(B)
研究課題名：北東ユーラシア諸言語の語形成に関する類型論的地域研究

外部団体委員

北海道立北方民族博物館 研究協力員

所属学会（役職）

日本言語学会
日本モンゴル学会
国際モンゴル学会
日本北方学会

黒木 英充（くろき ひでみつ）

教授，フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題：中東地域研究，東アラブ近代史

業績

1. 総説・解説：「対談 シリア・難民問題を考える」『経済』245, 2016.2, 新日本出版社。
2. 総説・解説：「座談会 激動する中東と日本のゆくえ」『世界』870, 2015.6, 岩波書店。
3. 総説・解説：「シリア内戦の力学—出口はどこにあるのか」『世界』876, 2015.12, 岩波書店。

4. 総説・解説：「ニュースの本棚 『テロ』とは何か」『朝日新聞』, 2015.12, 朝日新聞社.
5. 口頭発表：“Population of Mid-19th Century Aleppo Reconsidered (3)”, アジア・アフリカ言語文化研究所: 中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(2), 2016.2.16-17, アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表：“An inevitable wave?: Syrian (and Lebanese) migrants to Europe in historical context”, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター: ユーラシアから見た中東難民と欧州統合, 2015.12.9, 北海道大学.
7. 口頭発表：“Syrian civil war and the role of East Asian countries”, 上海外国語大学: 中日韓与中东关系国际研讨会, 2015.11.7, 上海外国語大学.
8. 口頭発表：“China-Japan-Korea Cooperation for Middle Eastern Studies”, 上海外国語大学: 中日韓与中东关系国际研讨会, 2015.11.7, 上海外国語大学.
9. 口頭発表：“Population of Mid-19th Century Aleppo Reconsidered (2)”, アジア・アフリカ言語文化研究所: 中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(2), 2015.9.3-4, Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, Crowne Plaza, Beirut.
10. 口頭発表：“Armenians in Mid-19th Century Aleppo”, Haigazian University: シリアのアルメニア人, 2015.5.24-27, Haigazian University.
11. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : NHK 教育「視点・論点」 「内戦長期化 シリアのいま」, 2015.7.
12. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : NHK ラジオ第1「先読み! 夕方ニュース 夕方ホットトーク 内戦激化 シリアを崩壊から救うことはできるか? 中東の最重要課題を展望する?」, 2015.6.
13. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 「An-Nahar "Kuroki li-n-Nahar: Hilal al-Hadarat tahawwala Hilalan li-l-Hurub, li-Hiwar bayna al-Sunna wa al-Shi'a wa al-'Awda ila 2010 Mustahila」 (於: ナハール (レバノンの新聞)), 2015.11.
14. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 西日本新聞「読書館 津村一史著『中東特派員はシリアで何を見たか』」, 2016.3.
15. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 朝日新聞「ニュースの本棚 『テロ』とは何か」, 2015.12.
16. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 東京新聞「研究者 105 人『廃案』声明 黒木英充教授に聞く 中東で対米追従は危険」, 2015.8.

競争的研究資金

研究代表者：大沼保昭
 期間 (年度) : 2013-2016
 研究種目：基盤研究 (A)
 研究課題名：多極化する世界への文際的歴史像の探求

研究代表者：黒木英充
 期間 (年度) : 2013-2016
 研究種目：基盤研究 (A)
 研究課題名：レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク—自己多面化と空間想像力

外部団体委員

北海道大学スラブ研究センター 運営委員
 筑波大学北アフリカ研究センター 客員共同研究員

所属学会 (役職)

日本オリエント学会
 歴史学研究会
 史学会
 北米中東学会
 日本中東学会

児倉 徳和 (こぐら のりかず)

助教, 情報資源利用研究センター
 研究主題：記述言語学, シベ語 (満洲語口語)

業績

1. 論文：“On the form and function of verbal suffix -mi (-mbi) in Sibe: Is it a vestige of subject agreement?”, *Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference* (ed. by The Altaic Society of Korea), 23–34, 2015.7.
2. 論文：「シベ語の補助動詞 biXe と「思い出し」」『九州大学言語学論集』（九州大学 大学院人文科学研究院言語学研究室編） 36, 129–146, 2016.3.
3. 口頭発表：“The use of auxiliaries in engagement in Sibe (Xibe)”, *Stockholm University: Symposium on evidentiality, egophoricity, and engagement: descriptive and typological perspectives*, 2016.3.17–18, Stockholm University.
4. 講演：「シベ語会話フォローアップ」, シベ語研究会・「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」（共催）「シベ語言語研修フォローアップミーティング／第5回シベ語研究会」, 2016.3.21, アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 講演：「おもしろいぞ, 世界のことば —天性の翻訳家, シベ人の言語生活—」, 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開, 大学院総合国際学研究所風間伸次郎ゼミ（共催）「フィールド言語学カフェー世界の言語で読む Le Petit Prince—」, 2015.11.19–23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表：「シベ語における動作主性と知識管理：試論」, 2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2016.3.26, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）.
7. 講演：「シベ語会話の復習：「動詞完了アスペクト三形式の機能とイントネーション」」, シベ語研究会・「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」（共催）「シベ語言語研修フォローアップミーティング／第4回シベ語研究会」, 2015.5.31, .
8. 講演：“Metadata”, 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開（略称：LingDy2）: *The Documentary Linguistics Seminar —Introduction to Documentary Linguistics—*, 2015.5.18–21, アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 口頭発表：「AA 研フィールド言語学ワークショップ活動紹介」, 東京外国語大学語学研究所「Luncheon Linguistics」, 2015.11.4, 東京外国語大学語学研究所.
10. 口頭発表：「シベ語の o- 「なる」の表すモダリティと知識管理」, 成蹊大学アジア太平洋研究センター研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として」研究会, 2015.10.11, 成蹊大学アジア太平洋研究センター会議室.
11. 口頭発表：「シベ語における Evidentiality と Reality —補助動詞 bi- 「ある」と o- 「なる」の分析から—」, 「言語の対照および類型論的研究の会」研究会, 2015.5.15, .
12. 口頭発表：「各言語におけるノダ文相当表現「シベ語」」, 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」第9回研究会, 2016.1.23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
13. 口頭発表：「シベ語と「思考プロセス」」, 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」第8回研究会, 2015.12.9–10, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
14. 口頭発表：「シベ語と思考プロセス」, 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」第7回研究会, 2015.5.9–10, .
15. 口頭発表：「趣旨説明」, 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第1回研究会, 2015.5.24, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
16. 口頭発表：『『蒙古語族語言方言研究叢書』データベース化の進捗報告』, 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第2回研究会, 2015.10.4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
17. 口頭発表：『『蒙古語族語言方言研究叢書』データベース化の進捗報告』, 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第3回研究会, 2016.3.11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
18. 口頭発表：「锡伯语动词后缀-Xeje 的语法功能及其时态、人称指称上的表现」, *Institute of Ethnic Literature, Chinese Academy of Social Sciences, THE THIRD INTERNATIONAL CONFERENCE ON TUNGUS LANGUAGES AND CULTURE*, 2015.8.10–11, Hailaer, China.

競争的研究資金

研究代表者：風間伸次郎

期間（年度）：2015–2019

研究種目：基盤研究(B)
研究課題名：アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究代表者：久保智之
期間（年度）：2012-2016
研究種目：基盤研究(B)
研究課題名：シベ語の体系的文法と辞書の作成

研究代表者：児倉 徳和
期間（年度）：2014-2016
研究種目：若手研究(B)
研究課題名：記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究

所属学会（役職）

満族史研究会
日本言語学会
日本中国語学会

その他研究成果

名称：情報資源利用研究センター（IRC）プロジェクト成果物「チュルク諸語対照基礎語彙（第2期）」
期間（年度）：2015

近藤 信彰（こんどう のぶあき）

教授，文化動態研究ユニット
研究主題：イラン近代史

業績

1. 著書（編著）：*Mapping Safavid Iran*, 2015.12, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Fuchu.
2. 著書（編著）：『近世イスラーム国家史研究の現在』, 2015.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 論文：“The Shah 'Abd al-'Azim Shrine and its Waqf under the Safavids”, *Mapping Safavid Iran* (ed. by Nobuaki Kondo), 41-65, 2015.12, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Fuchu.
4. 論文：“「近世イスラーム国家」の概念をめぐる」『近世イスラーム国家史研究の現在』（近藤 信彰編）, 1-14, 2015.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表：“State and Shrine in Iran: Waqf Administration of the Shah 'Abd al-'Azim Shrine under the Qajars”, : The Fourth International Symposium of Inter-Asia Research Networks “Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations.”, 2015.12.5-6, Toyo Bunko.
6. 口頭発表：“Multiconfessionalism in 19th Century Iran: Jews in Qajar Tehran, a Reappraisal”, : Seminar für Arabistik/ Islamwissenschaft am Orientalischen Institut, 2015.11.23, Orientalischen Institut, Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg.
7. 口頭発表：“Irano-Japanese Economic Relations”, : First Trilateral Cooperation Area Studies Forum, “China, Korea and Japan's Relations with the Middle East”, 2015.11.7, Shanghai International Studies University.
8. 口頭発表：“明治・大正期における日本・イラン関係”, 在日本イラン・イスラーム共和国大使館国際シンポジウム「日本-イラン関係史」, 2015.7.22, 在日本イラン・イスラーム共和国大使館.
9. 口頭発表：“Ravabet-e Iran va Zhapon dar Dowre-e Qajar”, Academic Society of Iranians in Japan: 9th seminar, Academic Society of Iranians in Japan, 2015.4.15-16, 町田市大地沢青少年センター.

所属学会（役職）

日本中東学会（理事，編集副委員長）
西南アジア研究会
International Society for Iranian Studies
International Qajar Studies Association
日本オリエント学会

メトロポリタン史学会
史学会

佐久間 寛 (さくま ゆたか)

助教, フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題: 人類学, アフリカ地域研究

業績

1. 著書 (共訳: カール・ポランニー, 福田邦夫, 池田昭光, 東風谷太一, 佐久間寛): 『経済と自由: 文明の転換』, 2015.7, 筑摩書房.
2. 論文: 「セゼールとモース—脱植民地期の黒人知識人と人類学の対話」『立命館言語文化研究』(西成彦編) 27-2・3, 233-245, 2016.2. (査読有)
3. 書評: 「書評へのリプライ—人と土地, 国家と社会」『コンタクト・ゾーン』 7, 2016.3, 京都大学大学院人間・環境学研究科 文化人類学分野.
4. 口頭発表: 「首長, 組合, モラル: 西アフリカ農村社会におけるアントレプレナーシップ」, 科研費基盤研究 (C) 「ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究」 「アントレプレナーシップ研究会」, 2016.2.27, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター小会議室 (401) .
5. 口頭発表: 「明かされる場, 隠される者, 映される事—西アフリカ農村の命名式をめぐる映像=人類学」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 「AA フォーラム」, 2015.12.10, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表: 「プレザンス・アフリケーヌ誌目録の構想と初期の概容 (1955-1960年)」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題 (代表 中村隆之) 『『プレザンス・アフリケーヌ』研究—新たな政治=文化学のために』 2015年度第2回研究会, 2015.10.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
7. 口頭発表: 「『狩り狩られる経験の現象学』および口頭発表へのコメント」, 基幹研究「人類学におけるミクロマクロ系の連関」公開セミナー『『狩り狩られる経験の現象学』の著者菅原和孝氏を囲んで』, 2015.6.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 口頭発表: 「何が自然で誰が人か: ニジェール西部におけるカバと漁業民の関係から」, アフリカ学会第52回学術大会公開講演会「アフリカの自然と人の共生をめざして」, 2015.5.24, 犬山国際観光センター“フロイデ”.
9. 学外の社会活動 (セミナー・ワークショップ): 飛内悠子「帰還民の生活誌 : 南スーダン共和国カジョケジ郡におけるククの人々と聖公会」へのコメント (於: 2015年度次世代育成セミナー/文化/社会人類学研究セミナー) , 2015.11.
10. 学外の社会活動 (講演会): 成田市成田社会人大学「アフリカの社会と経済: ニジェールのほitoriから省みる?」, 2015.10.
11. 学外の社会活動 (講演会): NPO 法人地球ことば村・世界言語博物館9月のことばのサロン, 「冗談とウソ: サハラのほitoriのことばの世界」, 2015.9.
12. 学外の社会活動 (出前授業): 東京理科大学, 教養概論2, 2015.11.
13. 学外の社会活動 (出前授業): 「社会が保障する命: ニジェール西部の命名式」, 大東文化大学, アフリカ地域研究, 2015.10.

競争的研究資金

研究代表者: 佐久間寛

期間 (年度): 2015-2018

研究種目: 若手研究 (A)

研究課題名: サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

所属学会 (役職)

日本アフリカ学会

日本文化人類学会 (関東地区研究懇談会運営委員, 次世代育成セミナー実施運営委員)

生態人類学会

澤田 英夫（さわだ ひでお）

教授，情報資源利用研究センター

研究主題：ビルマ系少数言語の記述，東南アジア大陸部インド系文字の体系

業績

1. 口頭発表：「ロンウオー語複動詞構造の構成素性テスト」，2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会，2016.3.26，京都大学ユーラシア文化研究センター。
2. 口頭発表：“Photography in language documentation”，Linguistics Dynamics Science Project 2, ILCAA: Documentary Linguistics Workshop 2016, 2016.2.8–13, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
3. 口頭発表：“A preliminary report of Lhangsu patois of Lhaovo in central Kachin State”，University of California, Santa Barbara: 第48回国際シナ=チベット言語学会議，2015.8.21–23, University of California, Santa Barbara, California, USA.
4. 口頭発表：“On the simplex-causative verb pairs in Lhaovo”，Payap University: 第25回東南アジア言語学会，2015.5.29–31, Payap University, Chiang Mai, Thailand.

外部団体委員

慶應義塾大学言語文化研究所東南アジア諸言語研究会（兼任所員）

所属学会（役職）

日本語学会（評議員）

椎野 若菜（しいの わかな）

准教授，文化動態研究ユニット

研究主題：社会人類学，東アフリカ民族誌

業績

1. 著書（共編著）：*Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity.* (eds. by Wakana Shiino, Soichiro Shiraishi and Tom Ondicho), 2016.3, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
2. 著書（分担執筆）：『アフリカから＜老いの力＞を学ぶ』（田川玄・慶田勝彦・花渕馨也編），全214頁，2016.3，九州大学出版会，博多。
3. 著書（分担執筆）：『多配列思考の人類学—差異と類似を読み解く』（白川千尋・石森大知・久保忠行編），全376頁，2016.3，風響社，東京。（査読有）
4. 著書（分担執筆）：『アフリカの女性とリプロダクション—国際社会の開発言説をたおやかに超えて—』（落合雅彦編），全308頁，2016.2，晃洋書房，京都。（査読有）
5. 著書（共編著）：『フィールドの見方』（増田研，梶丸岳，椎野若菜編），全214頁，2015.6，古今書院，東京。
6. 著書（共編著）：『現代家族ペディア』（比較家族史学会編），全376頁，2015.11，弘文堂，東京。（査読有）
7. 論文：「社会人類学のフィールドワークから」『月刊 地理』9月，pp.635–642，2015.8，古今書院，東京。
8. 論文：“A Mutually Complementary Relationship? The Condition of Single Women in Both Village and City in Kenya”，*Global and the Local: New Concepts and Approaches* (ed. by Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 6th International Conference Hankuk University of Foreign Studies, 27–28 October 2015), 37–43, 2016.3. (査読有)
9. 論文：Movements of the Luo and changes in residential patterns from the second half of the 19th century to the British colonial period and the present age in Kenya’s South Nyanza region, SHIINO, Wakana, Tom Ondicho and Soichiro Shiraishi eds., *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. pp. 255–286, 2016.3, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
10. 論文：「民族誌の表現，共有，還元？—アフリカの事例からの素描」白川千尋・石森大知・久保忠行編『多配列思考の人類学—差異と類似を読み解く』，pp.291–314，2016.3，風響社。（査読有）
11. 論文：「一夫多妻社会の老人事情—ルオの男女が老いたとき」田川玄・花渕馨也・慶田勝彦編『アフリカから＜老いの力＞を学ぶ』pp.187–209，2016，九州大学出版会。
12. 論文：「性と出産，産婆の呪術的役割—ケニア・ルオ社会の事例から—」落合雅彦編『龍谷大学社会科学研究所叢書 アフリカの女性とリプロダクション』pp.107–130，2016.2，晃洋書房。（査読有）

13. 論文:「ケニアのカリスマ老人アククとその周辺—彼の生きた時代とこれから—」『JANE ニューズレター(日本ナイル・エチオピア学会)』(日本ナイル・エチオピア学会編) 22:11-13, 2015.4. (査読有)
14. 総説・解説:“Intoroduction2: Co-Researching by African and Japanese: The Way We Started and the Way Forward”, SHIINO, Wakana, Tom Ondicho and Soichiro Shiraishi eds., *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity.*, xiii-xvii, 2016.3. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
15. 総説・解説:「NPO 法人化した FENICS の挑戦—フィールドワーカーである市民を中心に, 大学の外で学問を基に知的活動をする」『文化人類学』 80-4, 2016.3, 日本文化人類学会. (査読有)
16. 総説・解説:「【世界のシングル】都市と村の女性, 二人三脚 ウガンダ」『読売新聞夕刊(大阪)』, 2016.3, 読売新聞.
17. 総説・解説:「コロニアリズム(植民地主義)」pp.68-69, 「一夫多妻」p. 70, 「女性ノーベル賞受賞者」pp.70-71, 「性器切除」pp.84-85, 「ジェンダーからみたアフリカの家・家族」pp. 93-95, 「シングルと家族」p. 95, 「ジェンダーと学校教育」pp. 95-96, 「ジェンダーと空間利用」p. 96, 「女性婚」p. 97, 「レヴィレート」pp. 97, 「子どもの労働」p. 98, 「子ども兵士」p.98, 「幼年結婚」p.99, 「産婆(アフリカ)」p. 99, 「離婚(アフリカ)」pp. 99-100, 「難民と家族」pp. 217-218. 比較家族史学会編『現代家族ペディア』(4章 ジェンダーと家族 担当編集 三成美保・椎野若菜), 2015.11, 弘文堂. (査読有)
18. 総説・解説:「【世界のシングル】パートナー 2度目は自由に ケニア」『読売新聞夕刊(大阪)』, 2015.8, 読売新聞.
19. 口頭発表:“The role of a midwife in maternal care among rural Kenya Luo”, International Union of Anthropology and Ethnological Sciences: International Union of Anthropology and Ethnological Sciences Inter-congress 2014, 2015.5.15-17, 千葉・幕張メッセ. (査読有)
20. 口頭発表:“‘Single’ people’s life and Strategy in Both Village and City in Kenya: A Mutually Complementary Relationship?”, ILCAA: International Symposium “Diversity of the Meaning of Being ‘Single’ in the Global Societies: Drastic Changes of the Way of Life, Human Relations, and Kinship”, 2015.12.12-13, Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. (査読無)
21. 口頭発表:“A Mutually Complementary Relationship? The Condition of Single Women in Both Village and City in Kenya.”, The Consortium for Asian and African Studies:CAAS: The 6th CAAS (The Consortium for Asian and African Studies:CAAS) Symposium, 2015.10.27-28, Hankuk University of Foreign Studies, Korea. (査読有)
22. 学外の社会活動(講演会): 読売新聞「世界のシングル 座談会〜フィールドワーカーと語ろう〜」読売新聞大阪本社ビル地下「ギャラリーよみうり」2015.10.10 (招待講演) .
23. 学外の社会活動(講演会):「東アフリカ・都市と村に及ぶ変化と女性の暮らし」2015(平成 27)年度 東京外国語大学連続講座「暮らしの空間と女性」, 2016.3. (招待講演)

所属学会(役職)

日本文化人類学会(倫理委員)
 日本アフリカ学会
 比較家族史学会(理事)
 ナイル=エチオピア学会(理事)
 日本生態人類学会(理事)
 東京都立大学社会人類学会

塩原 朝子(しおはら あさこ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター
 研究主題: 言語学, インドネシア諸言語の記述研究

業績

1. 論文(共著: Asako Shiohara, Ketut Artawa): “The definite marker in Balinese”, *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages* (ed. by LingDy2 Project), 141-159, 2015.12.
2. 論文:「対照研究で読み解く日本語の世界: 日本語とスンバワ語の焦点・主題標示」『日本語学』, 2016.3.
3. 口頭発表: “Constituent order in Sumbawa”, : 第3回オーストロネシアの言語の情報構造に関するワークショップ, 2016.2.18-20, ILCAA, TUFS.
4. 口頭発表: “Constructing a Network for Documenting Minority Languages in Indonesia”, *Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia: International Conference on Language, Culture and Society*, 2015.11.25-26, Indonesian Institute of Sciences.

5. 口頭発表：“Voice in “eventive” coordinate clauses in Standard Indonesian”, UMS, ILCAA TUFUS: 国際ワークショップ：ボルネオの言語研究とマレー語研究の過去と現在, 2015.9.7, UMS (Faculty of Humanities, Arts and Heritage Unibersiti Malaysia Sabah).
6. 口頭発表：“The definite marker of Balinese”, ウダヤナ大学, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, インドネシア地方語調査・研究協会: 第7回 Austronesia/ non-Austronesia の言語と文学セミナー, 2015.8.28–29, Universitas Udayana, Denpasar, Indonesia.
7. 口頭発表：“The spread of Bugis script in the Lesser Sunda Islands: Traditions in Sumbawa and Sapekan”, : ICAL13: 第13回国際オーストロネシア言語学会, 2015.7.18–23, Academia Sinica, Taipei.
8. 口頭発表：“The definite marker of Balinese”, ICAL13: 第13回国際オーストロネシア言語学会, 2015.7.18–23, Academia Sinica, Taipei.
9. 口頭発表：“The definite marker of Balinese”, ISLOJ5: 第5回ジャワ島の言語学会, 2015.6.6–7, Bandung, Indonesia.
10. 口頭発表：“Coding of ‘Active’ Entities in Standard Indonesian”, : ISMIL19: 第19回国際インドネシア語・マレー語学会, 2015.6.12–14, Jambi, Indonesia.
11. 口頭発表：“Documenting Sumbawa Language with the Sumbawa ‘Bungaku’ Association”, 基盤研究A「コーパスに基づく談話の主題と結束性の研究」, 基盤研究B「多言語コーパスの構築と言語教育への応用可能性」(代表 川口裕司):国際ワークショップ:Endangered Languages: dialect variation and linguistic Identity, 2016.3.16, 東京外国語大学

所属学会（役職）
日本言語学会

芝野 耕司（しばの こうじ）

教授, コーパス研究ユニット
研究主題：マルチメディア・データベース, 多言語処理論, CALL

業績

論文(共著:Hajime Mochizuki, Kohji Shibano):“Re-Mining Topics Popular in the Recent Past from a Large-Scale Closed Caption TV Corpus”, International Journal of Future Computer and Communication 4-2, 98–103, 2015.4. (査読有)

競争的研究資金

研究代表者：芝野 耕司
期間（年度）：2014–2017
種目：基盤研究（A）
課題名：大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテラーメイド日本語教育

外部団体委員

日本規格協会 情報分野規格の利用促進標準化調査研究委員会（本委員会・WG2）

所属学会（役職）

情報処理学会
計量国語学会
Linguistic Society of America (LSA)
American Association for Applied Linguistics (AAAL)
Association for Advancement of Computing in Education (AACE)

陶安 あんど（すえやす あんど）

准教授, 情報資源戦略研究ユニット
研究主題：中国法制史と法社会学

業績

1. 著書：『嶽麓秦簡復原研究』, 2016.1, 上海古籍出版社, 上海.

- 論文：「試談里耶秦簡所見文書簡牘的再利用情況」『“出土文獻與學術新知” 國際學術研討會暨第四屆出土文獻青年學者論壇論文集』（吉林大学古籍研究所編），132-150, 2015.8.
- 論文：「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀四種』譯注稿—事案三」『法史学研究会会報』19, 124-137, 2016.3.
- 口頭発表：“Ist Holz gleich Bambus? – Einige Reflexionen im Spiegel neuerer Tendenzen in der chinesischen und japanischen Forschung antiker chinesischer Holz- und Bambusleisten”, Universität Heidelberg, Institut für Sinologie: Institut für Sinologie, 2015.8.4, Universität Heidelberg, ドイツ.
- 口頭発表：「行事と故事—後漢時代の認識枠組みを超えて—」, 東洋法制史研究会「平成27年度東洋法制史研究合宿」, 2015.8.26-28, 石川県青少年総合研修センター.
- 口頭発表：「試談里耶秦簡所見文書簡牘的再利用情況」, 吉林大学古籍研究所「“出土文獻與學術新知” 國際學術研討會暨第四屆出土文獻青年學者論壇」, 2015.8.21-22, 吉林大学古籍研究所.
- 学外の社会活動（セミナー・ワークショップ）：明大アジア史講座 No.21 「秦・漢帝国の実像に迫る?中国古史研究の最新成果」第4回（於：秦・漢帝国の法制）, 2015.6.

所属学会（役職）

日本法制史学会
日本法社会学会
法史学研究会
東洋法制史研究会
中国史学会
東方学会

高島 淳（たかしま じゅん）

教授, 情報資源戦略研究ユニット

研究主題：宗教学・インド宗教史（ヒンドゥー教）、言語情報処理

業績

- 著書（共著：Masamichi SAKAI, Jun TAKASHIMA）：*Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramānaviśāyā*, 2015, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo.
- 口頭発表：「南インドにおける終末期仏教」, アジア・アフリカ言語文化研究所「AA 研フォーラム」, 2015.12.10, アジア・アフリカ言語文化研究所 304 号室.

所属学会（役職）

日本宗教学会（評議員）
日本南アジア学会
「宗教と社会」学会

高松 洋一（たかまつ よういち）

准教授, 情報資源利用研究センター

研究主題：オスマン朝史, 古文書学, アーカイブズ学

業績

- 論文：「勅令の「裏側」を読む—大宰相府伝来の勅令正文に関する一考察」『近世イスラーム国家史研究の現在』（近藤信彰編）, 299-328, 2015.7, 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 論文：“Evlīya Çelebi Seyahatnâmesi”ne Göre Bitlis’te ‘Abdal Han’ın Kütüphanesi”’, *Journal of Turkish Studies/ Türklük Bilgisi Araştırmaları* 44, 419-436, 2015.12, Harvard University.
- 書評：「定説をフィールドから問い直す：大村幸弘 著『トロイアの真実 —アナトリアの発掘現場から』 シュリーマンの実像を踏査する」『FIELDPLUS』15, 27, 2016.1, 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 口頭発表：“I. Mahmûd’un İstanbul’da Kurduğu Üç Kütüphane: Ayasofya, Fatih ve Galatasaray Kütüphaneleri”, Koç Üniversitesi Anadolu Medeniyetleri Araştırma Merkezi, Sempozyum “XVIII. Yüzyıl Osmanlı Kitap Koleksiyonları:

- Bilgi Üretimi ve Dağılımı” 国際シンポジウム「18 世紀オスマン朝の蔵書家たち：情報の生産と伝播」, 2015.12.25, Koç Üniversitesi Anadolu Medeniyetleri Araştırma Merkezi, İstanbul.
5. 口頭発表：「オスマン朝の勅令起草過程で作成される文書類型について—大宰相府と財務長官府の協働の観点から—」, 東洋史研究会「2015 年度東洋史研究会大会」, 2015.11.3, 京都大学文学部新館第三講義室（要旨）『東洋史研究』74-3, 251, 2015.12.
 6. 口頭発表：「マフムト 1 世による Ayasofya 図書館の蔵書形成 — 歴史書を中心として」, 日本オリエント学会第 57 回大会, 2015.10.18, 北海道大学. (要旨)『オリエント』58-2, 264, 2016.3.
 7. 口頭発表：“Turkish printed books with the Greek handwritten titles in the Ayasofya Library”, 共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第 2 期)」第 4 回研究会, 2015.9.4, Crown Plaza, Beirut.
 8. 口頭発表：「オスマン朝君主の呼称と称号 — パーディシャー, カリフ, スルタン」, 共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」2015 年度第 1 回研究会, 2015.7.12, アジア・アフリカ言語文化研究所.
 9. 口頭発表：“Greek Orthodox (Rum) population of late 18th and 19th- Centuries Istanbul: a study of the population registers(nüfus defterleri)”, 共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第 2 期)」第 5 回研究会, 2016.2.17, アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

研究代表者：高松 洋一

期間(年度)：2013–2016

種目：基盤研究(B)

課題名：イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開

所属学会(役職)

日本オリエント学会

日本アーカイブズ学会

床呂 郁哉(ところ いくや)

教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題：東南アジア島嶼部の人類学

業績

1. 著書：『顔と身体表現に基づく異文化理解—公開シンポジウム報告書』(床呂郁哉編), 2016.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」」, 114pp.
2. 論文：「日比国際結婚移住をめぐる諸問題に関する一考察」, 『多文化共生研究年報』(ed. by 名古屋多文化共生研究会), 13, 25–34, 2016.3.
3. 論文：“‘Center/Periphery’ Flow Reversed?: Twenty Years of Cross-border Marriages between Philippine Women and Japanese Men”, *Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation-States* (ed. by Sari K. Ishii), 2016.3, pp.105–117, NUS Press & Kyoto University Press., Singapore & Kyoto.
4. 論文：「野性のチューリングテスト」『他者』(河合香史編), 2016.3, pp.399-418, 京都大学学術出版会.
5. 口頭発表：「東南アジアの文化の多様性を知る—島嶼部の事例を中心に」, 2015.6.6, 東京外国語大学・読売新聞立川支局共催連続市民講座, アゴラグローバル.
6. 口頭発表：「フィリピン南部のイスラーム分離主義運動におけるイスラームと(エスノ)ナショナリズム—モロ・イスラーム解放戦線(MILF)の活動を中心に」, 2015.7.5, 東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)
7. 口頭発表：「日比国際結婚移住をめぐる諸問題に関する事例報告」, 2015.7.25, 名古屋多文化共生研究会(NAMS), 名城大学名駅サテライト多目的ホール.
8. 口頭発表：「東南アジアと中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態：概説とイントロダクション」, 2015.10.3, 科学研究費基盤(A)「東南アジアと中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究」(代表：床呂郁哉)成果公開研究会, 鹿児島大学法文学部2号棟201号室.

9. 口頭発表：「地域研究コンソーシアム年次集会シンポジウム」，地域研究コンソーシアム「ボーダーの形成と越境のダイナミクス—東南アジア海域世界の事例から」，2015.11.1，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）
10. 口頭発表：「日仏会館主催講演会」，日仏会館「「もの」の人類学の可能性—日本における物質文化研究の展開からの応答」，2015.11.24，日仏会館。
11. 口頭発表：「マレーシア・フィリピンから世界を見る—東南アジアの文化多様性のなかのイスラム」，長野イスラム勉強会（板垣雄三東京大学名誉教授代表）「マレーシア・フィリピンから世界を見る—東南アジアの文化多様性のなかのイスラム」，2015.12.5，松本商工会館。
12. 口頭発表：「顔と身体表現に基づく異文化理解」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）基幹研究人類学班「顔と身体表現に基づく異文化理解—シンポジウム趣旨説明」，2015.12.13,AA 研。

競争的研究資金

研究代表者：床呂 郁哉

期間（年度）：2013–2017

種目：基盤研究（C）

課題名：スルー海域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究

研究代表者：床呂郁哉

期間（年度）：2013–2016

種目：基盤研究（A）

課題名：東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究

所属学会（役職）

日本文化人類学会

中見 立夫（なかみ たつお）

教授，情報資源戦略研究ユニット

研究主題：東アジア・内陸アジアの国際関係史

業績

1. 論文：「内藤湖南対盛京故宮清朝史料の探尋」，『清前历史与盛京文化：清前史研究中心成立暨纪念盛京定名380周年学术研讨会』（白文煜主編）下卷（沈阳：遼寧民族出版社，2015年7月），704–712頁。
2. 論文：“Пересмотр Кяхтинского соглашения с точки зрения истории международных отношений в Восточной Азии”，Труды Кяхтинского краеведческого музея имени академика В.А. Обручева, Бурятского республиканского и Кяхтинского отделений русского географического общества XX том (2015), [Материалы международной научно-практической конференции «На границе народов, культур и миров» посвященной 125-летию Кяхтинского краеведческого музея им. академика В.А. Обручева, Кяхта, 9-10 сентября 2015 г.], стр.141–144.
3. 論文：“‘実録 /Shilu, Sillok, Thục lục, Jitsuroku/’ in Modern East Asia”，Transactions of the International Conference of Eastern Studies, No.LX 2015／『國際東方學者會議紀要』第六十冊／(The Tōhō Gakkai, 2015), pp.120–125. (査読有)
4. 論文：「「帝国」という空間における博物館を考える」，『博物館という装置—帝国・植民地・アイデンティティ』（石井正巳編）（勉誠出版，2016年3月31日），2–18頁。
5. エッセイ：「モンゴル人の名前に関する生態学—モンゴル語」，岩波新書『世界の名前』（2016年3月18日）（岩波書店辞典編集部編），56–58頁。
6. 論文：「구경과 한국의 만주어 문헌 연구의 요람」『알타이학보 【Altai Hakpo/Journal of the Altaic Society of Korea】』no.26 (June2016) pp.2–12. (査読有)
7. 口頭発表：“Пересмотр Кяхтинского соглашения с точки зрения истории международных отношений в Восточной Азии”，Международной конференции «НА ГРАНИЦЕ НАРОДОВ, КУЛЬТУР И МИРОВ»», посвященной 125-летию Кяхтинского краеведческого музея им. академика В.А. Обручева/ The International

Conference «On The Border of Peoples, Cultures, and World» dedicated to the 125th anniversary of the V. A. Obruchev Regional Studies Museum in Kyakhta», 9-10 сентября 2015, Кяхта: Актовый зал МБОУ «КСОШ № 2» г. Кяхта, 9 сентября 2015.

8. 口頭発表：「内陸アジアからみた近代中国」，「書き直される中国近現代史Ⅷ」第3回講義，2015年10月8日，東京大学駒場キャンパス8号館210教室。
9. 口頭発表：「关于近代内蒙古研究之诸问题及史料」，《海外知名学者民大讲坛》，2015年10月29日，北京中国民族大学文华楼。
10. 口頭発表：“Between Outer Mongolia and Japan in the First Half of the 1910s”, the International Conference “Mongolia and the Mongols: Past and Present” (Warsaw. 23–24 of November 2015), 23rd of November 2015, Hall of Brudziński, Kazimierzowski Palace, University of Warsaw, Krakowskie Przedmieście 26/28, Warsaw.
11. 口頭発表「“境界”を跨ぐ—大谷大学朝鮮人卒業生・金九経の数奇な軌跡—」，大谷大学真宗総合研究所・大学史資料室主催研究会，2016年1月22日，大谷大学響流館。

外部団体委員

広島大学文書館 客員研究員
公益財団法人アジア研究協会 評議員
一般財団法人東方学会 常務理事
公益財団法人東洋文庫 兼任研究員
公益財団法人三島海雲記念財団 学術委員
中国人民大学清史研究所 兼職教授

所属学会（役職）

日本国際政治学会
東方学会（常務理事）
内陸アジア史学会（常務理事）
日本モンゴル学会（理事）
東アジア近代史学会（常務理事）
International Association for the Mongol Studies (Member of Board)
近現代東北アジア地域史研究会（世話人）
東アジア文化交渉学会理事（理事）
日本植民地研究会理事

中山 俊秀（なかやま としひで）

教授，情報資源利用研究センター

研究主題：ワカシュ語諸言語（北米北西海岸），運用基盤言語学，言語類型論

業績

1. 口頭発表：「データと理論：データあつての理論か，理論あつてのデータか」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター「フィールドサイエンスコロキウム」，2015.12.26. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
2. 口頭発表：“Fixedness and unithood in Miyako and Japanese conversation: An exploration into the emergence of structure and interaction”，International Pragmatics Association: 第14回国際語用論学会，2015.7.26–31. Antwerp, Belgium.
3. 口頭発表：「話しことばが新たに拓く文法研究を考える」，科研費基盤研究「発話連鎖アノテーションに基づく対話過程のモデル化」：ことば・認知・インタラクション4，2016.3.25, 東京工科大学。
4. 口頭発表：“Noun Phrases in Nuuchahnulth: Their place in grammar and discourse”，JSPS-Academy of Finland Bilateral Joint Research Project: International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction, 2016.3.12. Keio University.

5. 口頭発表：「Noun Phrases in Discourse: Why and how might they be interesting”, JSPS-Academy of Finland Bilateral Joint Research Project: International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction, 2016.3.12. Keio University.
6. 口頭発表：「複雑系としての言語の特性」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センターワークショップ「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える」, 2016.3.4. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

外部団体委員

国立民族学博物館 共同研究員

所属学会（役職）

日本語学会
日本認知言語学会
Linguistic Society of America
Association for Linguistic Typology
International Pragmatics Association
Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas

西井 涼子（にしい りょうこ）

教授, フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題：東南アジア大陸部の人類学

業績

1. 論文：「人が家で死ぬということ—死のプロセスについての南タイのフィールドからの人類学的実践」『科学と文化をつなぐ アナロジーという思考様式』（春日直樹編）, 158–176, 2016.3, 東京大学出版会.
2. 論文：“The Muslim community in Mae Sot: The transformation of the Da’wa Movement”, *Communities of Potential Social Assemblages in Thailand and Beyond* (ed. by Shigeharu Tanabe), 107–127, 2016.3, Silkworm Books, Chiang Mai.
3. 論文：「『顔』と他者—顔を覆うヴェールの下の子スリム女性たち」『他者 人類社会の進化』（河合香史編）, 2016.3, 京都大学学術出版会.
4. 口頭発表：「顔の不在もたらすこと—ムスリム女性のヴェール着用をめぐる」, アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究人類学シンポジウム『顔と身体表現に基づく異文化理解』, 2015.12.13, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表：「ムスリム女性とヴェール：タイのダッワ運動の事例から」東南アジア・中東に跨がるイスラーム・ネットワークの動態に関する学術的研究 研究会, 2015.10.3, 鹿児島大学法文学部.
6. 口頭発表：「人が家で死ぬということ—死のプロセスの共有について」, 複雑系高等学術研究所・早稲田大学「複雑系研究会：世界に遍在する意識」, 2015.4.26, 早稲田大学.

外部団体委員

公益信託渋澤民族学振興基金「渋澤賞」選考委員会委員

所属学会（役職）

日本文化人類学会
東南アジア学会（総務委員）

錦田 愛子（にしきだ あいこ）

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題：中東地域研究

業績

1. 著書（編著）：『移民／難民のシティズンシップ』（錦田愛子編）, 2016.3, 有信堂高文社.
2. 書評：「書評 『グローバル時代の難民』」『図書新聞』, 2016.2.

3. 口頭発表：“Restricted Coexistence among Palestinians and Israelis of different Citizenship”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存」共同研究会, 2015.9.4, Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES), Beirut, Lebanon.
4. 口頭発表：“Stability of Jordanian Monarchy — Factors for King’s Authority.”, IDE-JETRO and CRES (Centre de recherches sur les questions economiques et sociales): International workshop, “Basis of the Survival of Arab Monarchies”, 2015.11.19, the Heinrich BöllStiftung, Rabat, Morocco.
5. 口頭発表：「再難民化する難民たち—中東から北欧を目指すアラブ系住民の移動」, 日本政治学会 2015 年度研究大会, 2015.10.11, 千葉大学.
6. 口頭発表：“Arab migrants-refugees from Swedish foreign policy’s perspective.”, the Institute of Arab and Islamic Studies, Exeter University: A two-day symposium sponsored by the Institute of Arab and Islamic Studies, “Researching the Middle East: Fieldwork, Archives, Issues, and Ethics.”, 2015.6.7–9, Exeter University.
7. 口頭発表：“Division and Connection by Islamic Insurgent groups- from cases of Hamas and Islamic State”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究 (第二期)」共同研究会, 2015.9.27, Hotel Meridien Kota Kinabalu, Malaysia.
8. 口頭発表：「激動する中東—パレスチナ駐在員とアラビストが語るアラブのいま」, 日本国際ボランティアセンター (JVC) ・アユス共催イベント「激動する中東—パレスチナ駐在員とアラビストが語るアラブのいま」, 2015.5.14, 常圓寺 祖師堂地下ホール.
9. 口頭発表：「パレスチナ建国をめぐる闘い—今なぜ「国家」なのか」, 科研費基盤B (研究代表者：錦田愛子) ・科研費基盤B (研究代表者：濱中新吾) 合同研究会「アラブ系移民／難民の越境移動に関する経験と意識の計量分析」, 2015.6.22, 山形大学基盤教育 1 号館.
10. 口頭発表：「ガザ戦争 1 周年—その後のイスラエル」, 土井敏邦 パレスチナ・記録の会, 「ガザは今, どうなっているのか—ガザ攻撃 1 周年・映画とシンポジウムの集い」, 2015.7.20, 東京大学経済学研究科棟第一教室
11. 講演：「紛争下での安全保障と政治—ガザ戦争後のパレスチナ／イスラエルの攻防」, 第 10 回四大学連合文化講演会『環境・社会・人間における「安全・安心」を探る—安全で安心の出来る社会 ～学術研究の最前線をやさしく解説する～』, 2015.10.2, 東京医科歯科大学.
12. 口頭発表：「見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防—国家承認, エルサレム, 和平分割案—」, 地域研究コンソーシアム年次集会 一般公開シンポジウム「境界境域への挑戦と『地域』」, 2015.11.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
13. 口頭発表：“Japanese foreign policy to the Middle East: The current policy toward Palestinian-Israeli conflict.”, Shanghai International Studies University: International Symposium “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7, SISU International Conference Center, Shanghai International Studies University.
14. 口頭発表：“The Choice to Move: Palestinian refugees' migration to European countries.”, SRC, Hokkaido University: International Symposium “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian viewpoint”, 2015.12.8, 北海道大学.
15. 講演：「中東世界の現状と課題—イスラム地域の実態とシリア紛争・難民危機—」, 銀青会 (亜細亜大学) 2015 年度公開講座, 2016.3.17, 亜細亜大学 講義室.
16. 講演：「パレスチナ・ガザ地区の女性が担う NGO 活動」, 府中市生涯学習センター 東京外国語大学連携講座『暮らしの空間と女性』, 2016.3.15, 府中市生涯学習センター 研修室.
17. 口頭発表：「スウェーデンの難民受け入れ政策とアラブ系移民／難民」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加」2015 年度第 1 回研究会, 2015.7.26, 名城大学名駅サテライト.
18. 講演：「ガザ戦争後のパレスチナ—長びく紛争に翻弄される人々」, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「動乱のユーラシア：燃え上がる紛争, 揺れ動く政治経済」, 2015.5.11, 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟.

競争的研究資金

研究代表者：錦田 愛子

期間 (年度)：2014～2016

種目：基盤研究 (B)

課題名：アラブ移民／難民の越境移動をめぐる動態と意識：中東と欧州における比較研究

外部団体委員

深澤 秀夫 (ふかざわ ひでお)

教授

研究主題：マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学

業績

1. 著書 (共著：深澤秀夫, 飯田卓, 西本希呼, ラザフィアリ ヴニ・ミシエル)：『マダガスカルの民話 II ヴェズ・マシクル・タンドゥルイ・ベツィミサラカ・ツィミヘティ』(編著編), 2016.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 論文：「マダガスカルにおける老いと力 祝福・呪詛・勘当」田川玄, 慶田勝彦, 花渕馨也 共編著『アフリカの老人 老いの制度と力をめぐる民族誌』, 6-93, 2016.3, 九州大学出版会.
3. 口頭発表：「ANDEVO・ZOMAKA・4mi—アンタナナリヴにおける貧困層をめぐる歴史的・社会的背景—」, 在マダガスカル邦人会文化講演会, 2015.9.19, 駐マダガスカル日本大使館.
4. 口頭発表：「2009年政争の近景と遠景を言説に読み解く —ラヴァルマナナ政権7年の光と影—」, 在マダガスカル邦人会文化講演会, 2016.2.20, 駐マダガスカル日本大使館.

所属学会 (役職)

日本文化人類学会

星 泉 (ほし いずみ)

教授, 言語動態研究ユニット

研究主題：チベット文化圏の言語学

業績

1. 著書 (分担執筆)：『世界の名前 (岩波新書)』, 2016.3, 岩波書店.
2. 著書 (共編著：星泉)：『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA vol. 3』, 2016.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 著書：『古典チベット語文法：『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて』, 2016.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 著書 (共訳：ソナム・ギェルツェン, 今枝由郎, 浅井万友美, 海老原志穂, 星泉, 三浦順子)：『チベット仏教王伝—ソンツェン・ガンポ物語』, 2015.4, 岩波書店.
5. 論文：「中国青海省のアムド系チベット牧畜民の乳加工体系～青海省東部の定住化遊牧世帯と農牧複合世帯の事例から～」『Milk Science』, 2015. (査読有)
6. 総説・解説：「糞利用の達人」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
7. 総説・解説：「火を囲む暮らし：かまどからストーブへ」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
8. 総説・解説：「小説「復讐」」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
9. 総説・解説：「『さよならテルロン谷』失われゆく牧畜の暮らしへの鎮魂歌」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
10. 総説・解説：「新刊紹介『チベット仏教王伝—ソンツェン・ガンポ物語』」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
11. 総説・解説：「活躍中の学生監督アガン・ヤルジ」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
12. 総説・解説：「【チベットから見た日本】黒澤作品を通して見た日本の映画」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
13. 総説・解説：「ツォンカパを探す道：新たな巡礼ルート開発に挑む民間企業家」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 3, 2016.1.
14. 口頭発表：「文献に刻まれるチベット語の歴史変化の足跡」, 京都大学人文科学研究所研究班 A「ヒマラヤ・チベット文明の発展と展開の学際的研究」「ヒマラヤ・チベット文明の発展と展開の学際的研究」, 2015.7.18, 京都大学人文科学研究所.

15. 口頭発表：「カム・チベット語におけるノダ文相当表現」, AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」公開ワークショップ「ノダ文相当表現の通言語的研究」, 2016.1.23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
16. 口頭発表：「チベット文学と映画制作の現在」, 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開：2016.1.30-31, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
17. 講演：「チベット牧畜民の言語と文化を追いかけて」, 「フィールド言語学カフェ」, 2015.11.23.
18. 講演：「チベット牧畜民の女の仕事—乳と糞のある暮らし」, 東京外国語大学×府中市 連続講座『暮らしの空間と女性』, 2016.3.22.
19. 学外の社会活動（その他）：映画『ルンタ』公開記念トークイベント「今、チベットを知るために」, 2015.7.
20. 学外の社会活動（講演会）：東京外国語大学×府中市 連続講座『暮らしの空間と女性』, 2016.3.

競争的研究資金

研究代表者：星 泉

期間（年度）：2015～2017

種目：基盤研究（B）

課題名：チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂

所属学会（役職）

日本チベット学会（編集委員）

その他研究成果

名称：古代チベット語文献オンライン

期間（年度）：2006

成果：古チベット語のテキストデータベース。 <http://otdo.aa.tufs.ac.jp> (旧版) <http://otdo.aa-ken.jp> (新版)

名称：チベット牧畜データベース

期間（年度）：2014

成果：青海チベットの牧畜語彙の調査記録を公開する。共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」（2014-16年度）終了時に電子辞典を公開予定。 <http://nomadic.aa-ken.jp/>

名称：現代チベット語動詞辞典オンライン版

期間（年度）：2003

成果：AA 研から2003年に刊行された『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』のオンライン版。
<http://star.aacore.jp/vdic>

町田 和彦（まちだ かずひこ）

教授，情報資源戦略研究ユニット

研究主題：南アジアの言語学

業績

著書（共編著：町田和彦，他3名）：『モーリシャスのボージプリー語民話』, 2016.3, 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.

所属学会（役職）

日本言語学会

日本印度学仏教学会

日本南アジア学会

峰岸 真琴（みねぎし まこと）

教授，コーパス研究ユニット

研究主題：オーストロアジア諸語，タイ語学

業績

1. 論文:「アジアの辞書作り:言語研究との関連から」. 佐久間淳一編『名古屋大学大学院文学研究科公開シンポジウム報告書 辞書の世界』pp. 25-47, 2016.3, 名古屋大学大学院文学研究科.
2. 総説・解説:「英語から見たタイ語(1)」『Teaching English Now』31号, 表紙裏, 2015.10, 三省堂.
3. 口頭発表:「タイ語の3語文の音響音声学的分析」, 日本音声学会第29回全国大会, 2015.10.3-4, 神戸大学.
4. 口頭発表:「A Preliminary Survey of Austroasiatic ‘milk’」, アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題『アジア地理言語学研究』第3回研究会, 2016.2.29-3.1, アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表:「A Survey of Recent Austroasiatic Studies」, アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題『アジア地理言語学研究』, 2015.10.3-4, アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 学外の社会活動(その他):「NPO 地球ことば村」, 2003.4~現在.

競争的研究資金

研究代表者: 峰岸 真琴

期間(年度): 2013

種目: 基盤研究(A)

課題名: コーパスに基づく談話の結束性の研究

所属学会(役職)

日本言語学会(評議員)

東南アジア史学会

インド言語学会

宮崎 恒二(みやざき こうじ)

教授, コーパス研究ユニット

研究主題: オーストロネシア社会

業績

学外の社会活動(その他): セッション1座長「多様な文化遺産, その魅力を活かす工夫と方策」, 「アセアン+3文化遺産フォーラム2015: 東南アジア諸国と共に歩む~多様な文化遺産の継承と活用~」, 2015.12.13, 東京国立博物館平成館大講堂.

外部団体委員

人間文化研究機構 経営協議会委員

人間文化研究機構 総合研究推進委員会委員

人間文化研究機構 評価委員

人間文化研究機構 機構長選考会議委員

人間文化研究機構 人間文化研究総合推進検討委員会委員

国立民族学博物館 共同研究員

文化庁文化財部 アジア太平洋地域世界遺産等文化財保護協力推進事業に係る選定委員会委員

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力コンソーシアム 東南アジア分科会委員

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力コンソーシアム 運営委員会委員

財団法人坂口国際育英奨学財団 奨学生の選考・審査委員会委員

所属学会(役職)

Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde

日本文化人類学会

東南アジア史学会(理事)

日本オセアニア学会

日本マレーシア学会(会長)

日蘭学会

山越 康裕(やまこし やすひろ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題: モンゴル諸語

業績

1. 論文: 「シネヘン・ブリヤート語テキスト(5): 王様と役人になる二人の男の子」『北方言語ネットワーク編』6, 111-129, 2016.1. (査読有)
2. 口頭発表: 「おもしろいぞ世界のことば: 国境越えたらしくみも変わる〜中国東北部のモンゴル系言語」, フィールド言語学カフェ: 世界の言語で読む *Le Petit Prince*, 2015.11.23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 口頭発表: 「AA 研フィールド言語学ワークショップ活動紹介」, 東京外国語大学語学研究所 Luncheon Linguistics, 2015.11.4, 東京外国語大学.
4. 口頭発表: 「中国領内のブリヤート」, フィールド言語学カフェ・特別編「ブリヤートの言語と文化」, 2016.1.14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表: 「モンゴル語族における名詞の格体系と数標示」, AA 研共同利用・共同研究課題「公開資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」2015年度第3回研究会, 2016.3.11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表: “The use of verbal nouns in The Secret History of the Mongols.”, The Altaic Society of Korea: The 12th Seoul International Altaic Conference, 2015.7.16-19, Seoul National University.
7. 学外の社会活動 (サイエンスカフェ): 「中国北方の少数言語: シネヘン・ブリヤート語について語ろう」, 2016.2.27, 本屋 B&B.

競争的研究資金

研究代表者: 風間伸次郎
期間 (年度): 2015-2019
研究種目: 基盤研究 (B)
研究課題名: アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究代表者: 山越康裕
期間 (年度): 2014-2016
研究種目: 若手研究 (B)
研究課題名: 中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション

所属学会 (役職)

日本言語学会
日本モンゴル学会

渡辺 己 (わたなべ おのれ)

教授, 言語動態研究ユニット
研究主題: セイリッシュ語

業績

1. 論文: 「対照研究で読み解く日本語の世界—スライアモン語の他動詞化接尾辞」『日本語学』35(1), 70-80, 2016.1.
2. 論文: “Valency Classes in Sliammon Salish”, *Valency Classes: A comparative handbook. Volume 2 Case Studies from Austronesia, the Pacific, the Americas, and Theoretical Outlook* (ed. by Bernard Comrie and Andrej Malchukov), 1313-1358, 2015, De Gruyter Mouton, Berlin.
3. 口頭発表: “Focus Constructions in Sliammon”, National Institute for Japanese Language and Linguistics: International Workshop: Kakarimusubi from a Comparative Perspective, 2015.9.6, Tokyo.
4. 口頭発表: “North American Case of Language Endangerment — What is endangered in an endangered language”, Tokyo University of Foreign Studies: A International Workshop: Endangered Languages: Dialect variation and linguistic Identity, 2016.3.16, Tokyo.

5. 口頭発表：“On identifying an aspectual suffix in Sliammon”, Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas (SSILA): 2016 Meetings of the Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas (SSILA), 2016.1.7–10, Washington, D.C., U.S.A.

所属学会（役職）

日本語学会（評議員；大会運営委員；夏期講座実行委員会委員）
The Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas
Linguistic Society of America

外国人研究員

ADELAAR, K. Alexander カール アレクサンダー アデラール

オーストラリア連邦 Australia

滞在期間：2014.9.1～2015.7.31

研究主題：インドネシアとマダガスカルの南東バリトー語のドキュメンテーション，文法記述，歴史的研究

研究成果

1. 論文：“From Borneo to Bantu: how the Malagasy third person genitive pronoun *-ni may have become a locative suffix in Swahili”, *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages* (ed. by LingDy2 Project), 2015.12, 161–177.
2. 論文：“Talen, culturen en genen in het Austronesische taalgebied” (Languages, cultures and genes in the in Austronesian speaking region), *Karakter: Tijdschrift van Wetenschap*, 53, 2016, 43–46. (査読有)
3. 書評：“Review: Bibliography of the languages of Borneo (and Madagascar)”, by Robert Blust and Alexander D. Smith. Phillips (Maine), Borneo Research Council [Borneo Research Council Reference Series Volume 2]. 2014, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 171, 2015, 566–570.
4. 書評：“Review: A grammar of Balantak, A language of Eastern Sulawesi”, by René van den Berg and Robert L. Busenitz. SIL eBook 40. Digital Resources SIL International. 2012, *Oceanic Linguistics*, 第53巻第2号, 2014, 528–535.
5. 口頭発表：“From Borneo to Bantu: How the PMP 3s GEN pronoun *-ni=a may have become a locative suffix in Kiswahili”, LingDy2 Project, ILCAA, TUFS: The second international workshop on information structure in Austronesian languages, 2015.02.17, ILCAA, TUFS.
6. 口頭発表：“The landscape, languages and history of South Borneo”, ILCAA, TUFS: AA 研フォーラム, 2015.04.16, ILCAA, TUFS.
7. 口頭発表：“The landscape, languages and history of South Borneo”, Academia Sinica, Taipei: 13th International Conference of Austronesian Linguistics, 2015.07.20, Academia Sinica, Taipei.
8. 口頭発表：“Some problems involving the revival of Siraya”, ILCAA, TUFS ILCAA プロジェクト「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」2014年度第3回研究会, 2015.03.17, ILCAA, TUFS.
9. 講演：“Contact between Austronesian and African languages: a short overview”, CSEAS, Kyoto University: CSEAS Special Seminar, 2015.06.12, CSEAS, Kyoto University.
10. 講演：“Current debates involving Austronesian culture history”, CSEAS, Kyoto University: CSEAS Special Seminar, 2015.06.10, CSEAS, Kyoto University.
11. 講演：“Contact between Austronesian and African languages: a short overview”, McGill University, Montreal: Conference of the Austronesian Formal Linguistics Association, 2015.05.21–24, McGill University, Montreal.
12. 講演：“Early Malagasy history: an update”, Academia Sinica, Taipei: 13th International Conference of Austronesian Linguistics, 2015.07.18–23, Academia Sinica, Taipei.

BADAGAROV, Zhargal Bayandalaevich バダガロフ，ジャルガル バヤンダライエビチ

ロシア連邦 Russian Federation

滞在期間：2015.9.1～2016.3.31

研究主題：Typological Features and Typological Change in Mongolic Languages of the North Eastern Area

研究成果

1. 口頭発表：“Буриад-монголоос олдсон нэгэн газрын зургийн тухай”，日本モンゴル学会：日本モンゴル学会秋季大会，2015.10.22，国立民族学博物館。
2. 口頭発表：“Romanization proposal for Mongolian Galig (Ali-Kali)”，Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University: Towards a New Paradigm of Areal Studies, 2015.12.5–6, Center for Northeast Asian Studies.
3. 口頭発表：“Two Future Tenses in Buryat”，ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies: AA-kenForum Talk, 2015.12.17, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

BOWDEN, Frederick John ボーデン, フレデリック ジョン

オーストラリア連邦 Australia

滞在期間：2015.9.1～2016.3.31

研究主題：An Information Structure Account of Basic Colloquial Jakarta Indonesian Clause Structure Patterns

研究成果

論文：“Towards a history, and an understanding of Indonesian slangar”, *NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*, vol.58, 2015.3, 9-24. (査読有)

CHANROCHANAKIT, Pandit チャンロッチャナキット, パンディット

タイ王国 Kingdom of Thailand

滞在期間：2015.9.1～2015.12.31

研究主題：The Politics of Aesthetics and Modernity in Thai Contemporary Arts

研究成果

1. 著書：*Constitutions of Thailand: Contents and Essence*, 2015, King Prajadhipok's Institute, King Prajadhipok's Institute, 159 pp.
2. 論文：การเมืองของสุนทรียศาสตร์และสภาวะสมัยใหม่ของศิลปะร่วมสมัยของไทย, *รัฐศาสตร์สาร* (Ratthasartsarn, Journal of Political Science), 2016. (査読有)
3. 口頭発表：“Thai Style Judicialization and the Problem of Parliamentary Supremacy”, ILCAA, TUFS, 2015.11.12.
4. 口頭発表：“The Politics of Aesthetics and Modernity in Thai Contemporary Arts”, ILCAA, TUFS, 2015.12.2.
5. 口頭発表：“Thai Style Judicialization and the Problem of Parliamentary Supremacy”, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University, 2015.11.11.
6. 口頭発表：“Thai Style Judicialization and the Problem of Parliamentary Supremacy”, Kyoto University: Democratization and Judicialization of Politics in Thailand, 2015.12.14–15.

JUKES, Anthony Robert ジュークス, アンソニー ロバート

オーストラリア連邦 Australia

滞在期間：2016.2.1～2016.7.31

研究主題：Training Materials for Documenting Minority Languages in and around Indonesia

研究成果

論文：“Makasar”, *Journal of the International Phonetic Association*, vol. 46-01, 2016, 99–111. (査読有)

OLMEZ, Mehmet オルメズ, メフメト

トルコ共和国 Republic of Turkey

滞在期間：2015.4.1～2015.7.31

研究主題：Old Uighur Buddhist Texts from Turfan, Dunhuang (Xinjiang and Gansu, China)

研究成果

1. 著書：*Die alttürkische Xuanzang-Biographie V.*, 2015, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 382 pp.
2. 論文：“Some Specific Features of the Language of Siberian Runic Inscriptions”, *Interpreting the Turkic Runiform Sources and the Position of the Altai Corpus* (ed. by Irina Nevskaya / Marcel Erdal), 2015, 122-130.
3. 論文：“İpek Yolu Türk Dilleri”, *İpek Yolu* (ed. by Ahmet TAŞAĞIL), 2015, 435-447.
4. 論文：“What Should a New Edition of the Old Turkic Inscriptions Look Like”, *International Journal of Eurasian Studies*, Vol. II, 2015, 80–93.

5. 論文：“İlk Türk Kağanlığından Günümüze Ne Kaldı?”, XI. Milli Türkoloji Kongresi Bildirileri 11-13 Kasım 2014 (ed. by Azmi BİLGİN), Vol I, 2015, 477–484.
6. 論文：“Kıpçakça ve Osmanlıca şaltak Hakkında”, *Alkaş Bitigi. Kemal Eraslan Armağanı* (ed. by Bülent GÜL), 2015, 147–151.
7. 論文：“Türkçede ama ‘hala’ ve hala ‘teyze’ Hakkında”, *Türk Dilleri Araştırmaları*, Vol. 25, Nr. 2, 2015, 177–182.
8. 口頭発表：“Discussions on Old Uighur Runic Inscription from Chang’an”, 12th Seoul International Altaistic Conference, 2015/07/16-19, South Korea (Seoul).
9. 口頭発表：“Old Turkic Studies in Turkey: Current Situation of Old Turkic Researches in Turkey”, 中央アジア学フォーラム(第54回), 2015/07/25, 大阪大学.
10. 口頭発表：“About quy and qunī sājnūg from Old Turkic Inscriptions”, 58th Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, 2015/09/6–11, Slovakia (Dunajská Streda).
11. 口頭発表：“Lexical Situation of Old Turkic (from 8th till 13th Century)”, Conference «Languages and literatures of the Turkic peoples» dedicated to the 180th anniversary of the Department of Turkic Philology, 2015/10/26-27, St. Petersburg State University, RAS (St. Petersburg).
12. 口頭発表：“Sufi Mawlana’s Turkish-Persian mulamma‘ and his Son Valad Chalabi’s Turkish Poems”, Conference “Persian mystical literature”, 2015/12/2–3, Shanghai International Studies University, PRC (Shanghai).
13. 口頭発表：“Talat Tekin ve Türkiye’de Türkolojiye Katkıları”, Seminar at Kyiv National Taras Shevchenko University, 2016/03/18, Ukraine (Kiev).

宋華強 SONG, Huaqiang ソウ カキョウ

中華人民共和國 People's Republic of China

滞在期間：2015.9.14～2016.7.31

研究主題：Philological Study on Bamboo-Strip Texts of the Qin State

研究成果

1. 論文：「释上博简中读为“日”的一个字」, 『出土文献』6, 2015.4, 142–148. (査読有)
2. 論文：「西周金文札记二则」, 『简帛』10, 2015.5, 1–4. (査読有)
3. 論文：「曾侯乙墓竹简考释一则」, 『中国文字』41, 2015.7, 137–142. (査読有)
4. 口頭発表：「读〈长沙马王堆汉墓简帛集成〉小札」, 湖南省博物館, 復旦大學出土文獻與古文字研究中心「《长沙马王堆汉墓简帛集成》修订国际研讨会」, 2015.6.27, 復旦大學出土文獻與古文字研究中心.
5. 口頭発表：「随州文峰塔铭小考」, 吉林大学古籍研究所「‘出土文献与学术新知’学术研讨会暨出土文献青年学者论坛」, 2015.8.22, 吉林大学古籍研究所.
6. 口頭発表：「秦漢簡牘の言語学的研究—北大簡を例に」, AA 研フォーラム/共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究(2)」2015年度第10回研究会, 2016.3.11, AA 研.

THUFAIL, Fadjar Ibnu トウファイル, ファジャール・イブヌ

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間：2014.10.1～2015.7.31

研究主題：アダット集団と言語集団の間：インドネシアにおける言語ドキュメンテーションにおける困難さと可能性

WIERINGA, Edwin Paul ウィーリンハ, エドウィン ポール

オランダ王国 Kingdom of the Netherlands

滞在期間：2015.10.15～2016.3.31

研究主題：Satan's Sermon: A late-19th-century Javanese Elite Objections to the Spirit of the Age

研究成果

論文：“Haji Adam's 1926 Malay Poem about the Prophet's Ascension: A Polemical Anti-Wahhābī Defense of Traditionalist Islam”, *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (4): Local and Global Dynamism in Transformation of Islamic Tales* (SIAS Working Paper Series 27) (ed. by SUGAHARA, Yumi), 2016.3, 27–56.

WORSLEY, Peter Jonh ワーズリー, ピーター ジョン

オーストラリア連邦 Australia

滞在期間：2015.4.1～2015.7.31

研究主題：Palaces, Landscapes, and the Heavenly World in the ancient Javanese Imaginary

朱東芹 ZHU, Dongqin シュ, トウキン

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間：2015.4.1～2015.7.31

研究主題：Migration, Settlement and Assimilation: A Study on Changes of Chinese Women in the Philippines

研究成果

1. 論文：“The Changes and Characteristics of Overseas Chinese Situation of Fujian Province in Recent Years”, *Overseas Chinese Journal of Bagui* (the overseas Chinese history society of Guangxi province), Vol.1, 2015.4, 46–52. (査読有)
2. 論文：“A Preliminary Study on the New Immigrants from Overseas Chinese Hometown in South Fujian : Formation, Periodization and Characteristics”, *Southeast Asian Affairs* (Xiamen University, China), Vol.1, 2016.4, 98–110. (査読有)
3. 口頭発表：菲律宾华侨华人社团现状, 问题与前景 (中国語), AA 研: 共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」第4回研究会, 2015.6.28, 東京外国語大学.
4. 口頭発表：“The Status quo, Problems and Perspective of the Filipino-Chinese Associations” (英語), AA 研: AA 研フォーラム, 2015.7.9, 東京外国語大学.

特任研究員

阿部 優子 (あべ ゆうこ)

特任研究員

研究主題：バントゥ諸語, 記述言語学

業績

1. 論文：“Event integration Patterns in Bende (Bantu, F12)”, 『アジア・アフリカの言語と言語学』 (*Asian and African languages and linguistics*), no.10, 2016.3, 157–178. (査読有)
2. 口頭発表：“How African languages fit in Talmy's typology of event integration”, International Conference of Cognitive Linguistics: 13th International Conference of Cognitive Linguistics, 2015.7.22, Northumbria University, UK.
3. 口頭発表：“Event integration patterns in Bende (Bantu, F12), with a special focus on motion”, World Congress of African Languages: 8th World Congress of African Languages, 2015.8.23, 京都大学.

競争的研究資金

研究代表者：阿部優子

期間 (年度)：2014～2017

種目：基盤研究 (C)

課題名：タンガニカ湖周辺の人々の移動と言語接触に関する研究

梅川 通久 (うめかわ みちひさ)

特任研究員

研究主題：地域情報学, 地理情報分析

業績

1. 論文：「フィールドワークにもとづいた地域人口等に関する定量的比較の手法」, 『情報処理学会 IPSJ Symposium Series』 Vol. 2015, No. 2, 2015.12, 77-84. (査読有)
2. 口頭発表：「フィールドワークにもとづいた地域人口等に関する定量的比較の手法」, 情報処理学会, 人文科学とコンピュータ研究会「人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2015」」, 2015.12.19–20, 同志社大学京田辺校地.

競争的研究資金

研究代表者：梅川通久

期間（年度）：2011～2015

種目： 基盤研究（C）

課題名： 人口密度分布のポテンシャル分析による東南アジア大陸部人口動向の解明

研究代表者：梅川通久

期間（年度）：2015～2019

研究種目： 基盤研究（C）

研究課題名： 人口密度のポテンシャル分布に着目した東南アジア大陸部における地理的諸現象 の分析

研究代表者：相田満

分担者： 梅川通久

期間（年度）：2011～2015

研究種目： 基盤研究（A）

研究課題名： 和漢古典学のオントロジモデルの高次・具現化

梅谷 博之（うめたに ひろゆき）

特任研究員

研究主題：モンゴル語

業績

1. 論文：「モンゴル語の他動詞派生接辞 -AA と -GA : Grep を利用した形態素分析の試み」, 『東京大学言語学論集』 36, 2015.9, e67-e90. (査読有)
2. 論文：“Description of the verb-deriving suffix -s ‘to speak of’ in colloquial Khalkha Mongolian”, *Acta Linguistica Petropolitana*, 11(3), 2015.12, 501-518.
3. 論文：「モンゴル語の身体部位運動を表す文に見られる動詞の形態」, 『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』(パルデシ・プラシヤント, 桐生和幸, ナロック・ハイコ編), 2015.12, 127-139. (査読有)
4. 口頭発表：「モンゴル語ハルハ方言の人称所属小辞の音韻的特徴」, ユーラシア言語研究コンソーシアム「2015 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」」, 2016.3.26, 京都大学ユーラシア文化研究センター

競争的研究資金

研究代表者：梅谷博之

期間（年度）：2013～2016

研究種目： 基盤研究（C）

研究課題名： モンゴル語の付属語の自立性に関する研究

岡田 一祐（おかだ かずひろ）

特任研究員

研究主題：日本語史, 文字史

業績

1. 論文（共著）：Li, Yuan, Shin Woongchul, Kazuhiro Okada “Japanese rendition of Tenrei banshō meigi’s definition in early Japanese lexicography: An essay”, *Journal of the Graduate School of Letters*, Hokkaido University, 11, 2016.3, 83-96.
2. 論文（共著）：「大学初年次の文章表現教育における「レビュー論文」作成の試行」（松浦年男・田村早苗・石垣佳奈子・岡田一祐・高木維・吉村悠介（共著））, 『北星学園大学文学部北星論集』 53 の 2, 2016.3, 47-55.
3. 口頭発表：「平仮名」が指すものとその遷ろい」, 表記研究会「第 33 回表記研究会」, 2015.09.27, 関西大学.

4. 口頭発表：「平仮名の楷書化とはどういう現象か」, 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター「東洋学へのコンピュータ利用第27回研究セミナー」, 2016.03.18, 京都大学.

近藤 洋平 (こんどう ようへい)

特任研究員

研究主題：宗教学, イスラム学, イバード派

業績

1. 論文：“The Development of Ibāḍī Jurisprudence in Oman in the 3rd / 9th and 4th / 10th Centuries: A Preliminary Study of Some Marriage Issues”, *Ibadi Jurisprudence: Origins, Developments and Cases* (ed. by Barbara Michalak-Pikulska and Reinhard Eisener), 2015.11, 81–92.
2. 論文：“The Concepts of walāya, barāʿa, and wuqūf among 2nd/8th-3rd/9th Centuries Ibāḍīs”, *Ibadi Theology: Rereading Sources and Scholarly Works* (ed. by E. Francesca), 2015.5, 185–197. (査読有)
3. 口頭発表：“From Dissociation to Coordination: A Case of the Modern Ibāḍīs”, The University of Tokyo Centre for Middle Eastern Studies, Japan Center for Middle Eastern Studies: International Workshop “Vulnerability and Resilience”, 2016.3.10, Japan Center for Middle Eastern Studies.
4. 口頭発表：「初期イスラーム時代における人の移動と教義の伝播：イバード派の場合」, 東京大学中東地域研究センター「シンポジウム：移動・移民と中東」, 2016.1.30, 東京大学.

競争的研究資金

研究代表者：近藤洋平

期間（年度）：2014～2016

研究種目：若手研究（B）

研究課題名：婚姻法の法制史的考察によるイバード派イスラーム法学派の形成と展開の研究

中村 恭子 (なかむら きょうこ)

特任研究員

研究主題：美術（日本画）

業績

1. 著書（共編）：『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』（春日直樹（編））, 2016.3, 東京大学出版会, 364pp.
2. 口頭発表：“SAWACHI DE MOBY DICK”, 計測自動制御学会 SI 部門共創システム部会研究会, 内部観測研究会「第10回 内部観測研究会」, 2016.2.27–2.28, 東北大学電気通信研究所.
3. 講演：「空虚な垣塙：異質なものの普遍性」, AA 研「[もの]の人類学的研究(2)人間／非人間のダイナミクス」, 2015.5.16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
4. 講演：「頭を擡げたアルシブラ」, 複雑系研究会, 2015.4.26, 早稲田大学.
5. 個展：中村恭子展「首を擡げたアルシブラ」 2016.2.15–2.27, Art Space Kimura ASK?

平田 秀 (ひらた しゅう)

特任研究員

研究主題：日本語の音声・音韻, 日本語アクセント論

松田 訓典 (まつだ くにのり)

特任研究員

研究主題：インド大乘仏教

業績

口頭発表：「Mahāyānasūtrālamkāra の構成に関する注釈態度—Blo ldan shes rab と Sthiramati—」, 仏教思想学会「仏教思想学会第31回学術大会」, 2015.7.11, 筑波大学.

研究機関研究員

海老原 志穂 (えびはら しほ)

研究機関研究員

研究主題：記述言語学, チベット語方言学

業績

1. 著書 (共編)：『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 3, チベット文学研究会 (星泉・海老原志穂 他 (編)), 2016, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京, 174 pp.
2. 論文：「アムド・チベット語の名詞句構造」『シナ=チベット系諸言語の文法現象 1 名詞句の構造』(池田巧 (編)), 2016, 3-13.
3. 論文：「チベット人はヤクをどのように認識しているのか?」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編) チベット文学研究会.
4. 論文：「家畜の毛にささえられた牧畜民の暮らし」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編) チベット文学研究会.
5. 論文：「牧畜民の「家」—テント」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編) チベット文学研究会.
6. 論文：「去る者」と「戻る者」—「夏の草原」と「牧畜民の子」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編) チベット文学研究会.
7. 論文：「牧畜とことわざ」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編) チベット文学研究会.
8. 論文：『「チュラ」チベット人女性たちの愛情の物語』『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編) チベット文学研究会.
9. 口頭発表：“How Tibetan People Cognize Yaks—A Study on Lexicons for cognizing Yaks in Amdo Tibet”, the 4th International Seminar of Young Tibetologists, 2015.9.9: University of Leipzig.
10. 口頭発表：「チベット牧畜地域でのフィールドワーク」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド言語学ワークショップ, 2016.3.24, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

研究代表者：海老原志穂

期間 (年度)：2014~2017

研究種目：若手研究 (B)

研究課題名：東西方言から見たチベット語の基層の研究

小副川 琢 (おそえがわ たく)

研究機関研究員

研究主題：シリア・レバノン政治

業績

1. 論文：「最近のシリア, レバノン情勢と『イスラーム国』」, 『海外事情』63・9, 2015.9, 16-28. (査読有)
2. 口頭発表：「最近のレバノン・シリア関係の展開」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員発表会, 2016.3.30, 東京外国語大学.

古谷 伸子 (こや のぶこ)

研究機関研究員

研究主題：文化人類学, タイ研究

業績

論文：“The Folk Medicine Revival Movement in Northern Thailand: The Exercise of Healers’ Capacities and Legitimization of Healing Practices”, *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond* (ed. by TANABE, Shigeharu), 2016.3, 63–83.

競争的研究資金

研究代表者：古谷伸子

期間（年度）：2013～2016

研究種目：若手研究（B）

研究課題名：タイにおける医療システムの再編と民間治療師実践の変容に関する人類治療師実践の変容に関する人類学的研究

坪井 祐司（つばい ゆうじ）

研究機関研究員

研究主題：マレーシアにおけるエスニシティ形成に関する近代史

業績

1. 著書（共編）：『『カラム』の時代VII：コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』（坪井祐司・山本博之（編）），2016.3，京都大学地域研究情報統合センター，95pp.
2. 論文：「コラム「千一問」について」『『カラム』の時代VII：コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』（坪井祐司・山本博之（編）編），2016.3，9–14，京都大学地域研究情報統合センター。
3. 口頭発表：「1930年代の英領マラヤにおけるマレー人の地位をめぐる論争—ジャウィ新聞『マジュリス』の分析から」，第93回東南アジア学会研究大会，2015.5.30，愛媛大学。
4. 口頭発表：“Malayness under multilingual controversies in British Malaya during the 1930s”，International Institute for Asian Studies: The 9th International Convention of Asia Scholars (ICAS9), 2015.7.7, Adelaide, Australia.
5. 講演：「ブミプトラとは誰か？—マレーシアにおける民族と政治」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所コタキナバル・リエゾンオフィス「コタキナバル日本人会邦人向け講演会」，2016.1.7，コタキナバル日本人学校（マレーシア）。
6. 口頭発表：“Everyday Forms of Islamic Practices in Multi-ethnic Malaya”，Dewan Bahasa dan Pustaka: Diskusi Ilmiah “Toward social history of Malay Muslims: Islamic principles and local practices from the perspective of Majalah Qalam (1951–1969)”，2016.2.22，Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur, Malaysia.

藤野 陽平（ふじの ようへい）

研究機関研究員

研究主題：宗教人類学，東アジアのキリスト教研究

業績

1. 著書（共編）：『<オウム真理教>を検証する そのウチとソトの境界線』（井上順孝（責任編集），宗教情報リサーチセンター（編）），2015.8，春秋社，350pp.
2. 口頭：「戦後台湾社会における台湾語教会と政治との関係性—二二八事件から太陽花学生運動まで」，第27回日中社会学会大会，2015.6.7，北海道大学。
3. 口頭：「著者による概要説明」，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」公開合評会「藤野陽平著『台湾における民衆キリスト教の人類学』（2013年，風響社）」，2015.7.4，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

目黒 紀夫（めぐろ のりお）

研究機関研究員

研究主題：環境社会学，アフリカ地域研究

業績

1. 著書（共編）：『アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか—住民参加型保全の逆説を乗り越える』（山越言・目黒紀夫・佐藤哲（編）, 2016.3, 京都大学学術出版会, 311pp.
2. 論文：“Maasai Pastoralism Today: Reality after Group Ranch Subdivision in Southern Kenya”, *Re-finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity* (ed. by Wakana SHIINO, Soichiro SHIRAIISHI and Tom ONDICHIO), 2016.3, 127–141. (査読有)
3. ポスター発表：「第 2 回マサイ・オリンピック—暇な戦士を忙しいアスリートに変える試み?」, 日本アフリカ学会第 52 回学術大会, 2015.5.23, 犬山市国際観光センター「フロイデ」.
4. 口頭発表：『『コミュニティ主体の保全』の現場で語られる『伝統』の是非—アフリカの環境保全=開発援助をめぐる科学と倫理の役割について』, 日本国際開発学会第 16 回春季大会, 2015.6.7, 法政大学.
5. 口頭発表：「マサイにとっての野生動物の問題とは?—『緑の失樂園』にはじまる名づけの問題」, フィールドサイエンス研究企画センター2015 年度第 1 回ワークショップ「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」, 2015.7.10, 東京外国語大学.
6. 口頭発表：“Oversights on human-wildlife relations in Republic of Kenya: From the perspective of environmental sociology”, International Wildlife Management Congress: Vth International Wildlife Management Congress, 2015.7.29, 札幌コンベンション・センター.
7. 口頭発表：「伝統の『便宜的』な使い方?—ケニア南部アンボセリ地域のマサイの場合」, 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター第 175 回学振セミナー, 2015.9.9, 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター.

競争的研究資金

研究代表者：目黒紀夫

期間（年度）：2014～2015

研究種目：研究活動スタート支援

研究課題名：アフリカの野生動物保全に潜む動物愛護の環境統治性の検討

日本学術振興会特別研究員

岩本 佳子（いわもと けいこ）

研究課題名：オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

受入期間：2015.4.1～2018.3.31

受入教員：高松洋一

業績

1. 論文（井谷鋼造, 岩本佳子共著）：「トルコ共和国イスタンブール西郊ブユク・チェクメジェ石造橋についての覚書」『西南アジア研究』82 号, 2015.3, 56–69.
2. 口頭発表：「オスマン帝国における免税特権と奉公集団—ルメリのユリユクとヤヤ・ミュセッレムの類似と相違—」, オスマン史研究会第 4 回定例研究会, 2015.7.4, 東洋文庫
3. 口頭発表：「オスマン帝国における奉公集団研究序説—バルカン半島のミュセッレムを中心に—」, 日本オリエント学会第 57 回大会, 2015.10.18, 北海道大学
4. 口頭発表：“A Study on Turning Point for the Ottoman Policy Applied to Nomads: The Settlement Policy on Turkish and Kurdish Nomads in the 17th-18th Centuries.”, Middle East Studies Association: 49th MESA Annual Meeting, 2015.11.23, Sheraton Denver Downtown Hotel

競争的研究資金

研究代表者：岩本佳子

期間（年度）：2015～2017

研究種目：特別研究員奨励費

研究課題名：オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

倉部 慶太（くらべ けいた）

研究課題名：北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション

受入期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：澤田英夫

業績

1. 論文：“Issues in the historical phonology of Gauri Jingpho”, *Himalayan Linguistics*, Vol.14-No.1, 2015.6, 1–19. (査読有)
2. 論文：“A grammar of Jinghpaw, from northern Burma”, Ph.D. dissertation, Kyoto University, 2016.3. (査読有)
3. 論文：「ジンポー語の2つの民話資料と文法注釈」『言語記述論集』Vol.8, 2016.3, 1–20.
4. 口頭発表：“The loss of the proto-velar finals in Standard Jingpho”, Southeast Asian Linguistics Society: 25th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2015.5.27, Payap University, Chiang Mai, Thailand.
5. 口頭発表：“The phonological adaptation of Shan loanwords in Jingpho”, 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2015.8.22, University of California, Santa Barbara, California, USA.
6. 口頭発表：“Politics of Kachin orthography: Large versus small group ethnic identification in highland Myanmar”, Language, Power and Identity in Asia: Creating and Crossing Language Boundaries, 2016.3.15, International Institute for Asian Studies, Leiden, the Netherlands.
7. 口頭発表：「ジンポー語の人称階層に基づく人称標示」, フィールド言語学ワークショップ (特別篇), 2016.3.24, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 口頭発表：“Ethnicity, Vernacular, and Protestantism: A study of the Kachin in Northern Myanmar”, Zomia Study Group, Zomia Study Group 12th meeting, 2016.3.28, Kyoto University.

競争的研究資金

研究代表者：倉部慶太

期間 (年度)：2014～2016

研究種目：特別研究員奨励費

研究課題名：北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション

所(柘堀) 木綿子 (ところ(とちほり) ゆうこ)

研究課題名：近代イスラームにおける国際法理解—アブドゥルカーディルと19世紀世界—

受入期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：飯塚正人

競争的研究資金

研究代表者：所(柘堀) 木綿子

期間 (年度)：2013～2015

研究種目：特別研究員奨励費

研究課題名：近代イスラームにおける国際法理解—アブドゥルカーディルと19世紀世界—

南波 聖太郎 (なんば せいたろう)

研究課題名：1970・80年代におけるベトナムとの「特別な関係」の下でのラオスの政治的主体性

受入期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：栗原浩英

業績

口頭発表：「社会主義国家建設の準備過程におけるラオス人民党の政治的主体性：1960年代半ばの『解放区国家化政策』とベトナムとの『特別な関係』」, 2015年度第5回東南アジア学会関東例会, 2015.11.28, 東京外国語大学本郷サテライト.

競争的研究資金

研究代表者：南波 聖太郎

期間 (年度)：2014～2015

研究種目：特別研究員奨励費

研究課題名：1970・80年代におけるベトナムとの「特別な関係」の下でのラオスの政治的主体性

I-2.6.3 受賞

2015年度は、該当事項なし。

I-2.6.4 人事評価

国立大学法人東京外国語大学では、2006年度から(1)教員の教育研究活動の実態を把握し、本学における教育研究の質の向上を図る、(2)教員の潜在的可能性を掘り起こし、大学の価値と競争力を高める、(3)年功序列型の給与制度の弊害を正し、教育・研究・大学運営への参画など広い意味での大学業務への貢献を給与に適正に反映させる、といった目的で、年に一度「人事評価」を実施することになった。評価項目や方法などは部局の事情を考慮し、部局ごとに独自に作成することになった。

これを受けて本研究所では、人事評価の方針および評価項目案を決定した。基本方針の概略は以下の通りである。

- ・ 教育実績、研究業績、組織運営への参画と貢献、社会貢献・国際貢献、その他、の5つの大項目を設定する。
- ・ 大項目それぞれに対し、研究所の活動を可能な限り網羅した小項目を定め、それにチェックボックスをつける。
- ・ このように設計されたチェックリストを電子情報化して所内からチェックを書き込むことができるようにし、所員は一定の期間内にチェックリストにアクセスし、当該年度の活動を自己申告する。
- ・ 「基本要件」を満たしたか否かの判断は「研究業績」と「組織運営への参画と貢献」の2つの大項目に含まれる小項目のみを対象とし、10以上のチェックがつけられれば満たしたものと考える。
- ・ それ以外の3つの大項目に含まれた小項目へのチェックは、参考資料として活用する。

また、病気等による休職、長期研修、在外研究、長期にわたる海外での調査・研究などの特殊事情を抱える所員は、例外として個別に評価することも確認された。

2008年度には大学執行部から全学的に人事評価方式の再検討が求められたが、本研究所では自己評価委員会(当時)における審議の結果、従来の人事評価システムの内容ならびに運用には問題がなかったと判断した。その結果、2008年度以降2013年度まで、従来通りの方法で人事評価を行ってきた。しかしながら、2012年度に大学執行部が新たに全学的な人事評価実施規程案等の検討結果を示し、各部局においてそれぞれの特性を踏まえた評価方法の検討を行うように要請された。これを受けて、本研究所でも全学における枠組みを踏まえ、上記評価項目、評価システムの見直しを行うこととなった。

2013年度に入ると、新しい人事評価システムの導入に関する検討が全学的に本格化した。しかしながら、本研究所における人事評価の方針や、自己申告方式で評価を行う評価項目については、基本的に従前のそれらを基礎とすることで問題がないと判断されたため、大きな変更は加えられていない。とはいえ全学的には、自己申告以外に、部局長による総合評価についての基準がより明確化される方針が打ち出された。すなわち、教育実績、研究業績、組織運営への参画と貢献、社会貢献・国際貢献、その他、の5つの大項目について特に顕著な貢献があるかどうか、また、所員として、あるいは本学の教員として不適切な行為がなかったかどうか、所長が評価する案が作成された。このような新しい評価システム案は、全学的な協議の中で位置づけられ、2014年度に細部の詰めを行った上で、運用が始められている。

I-2.7 外部資金による研究活動

I-2.7.1 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2

【事業の概要】

本事業は、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学学院(以下 SOAS)危機言語プロジェクトとドイツのマックス・プランク進化人類学研究所(以下 MPI-EVA)言語学科との連携を軸にして、危機(消滅危惧)言語や言語多様性に関する研究を促進するための国際的学術ネットワークの構築を主たる目的として企画推進されてきた。

事業活動の第1フェーズは、2008(平成20)年度より文部科学省特別教育研究経費「急速に失われつつあ

る言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」を受けスタートし、特に、研究未開発言語のドキュメンテーション研究（語彙、文法、テキスト資料、及び文化・社会的情報の収集を通じた多面的な記録と研究）の活性化・体系化と、構造的多様性と歴史的变化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の構築に主眼を置いて進めた。

第1フェーズにおける本事業の活動に関して行った国際外部評価では、この事業が支援してきた研究者コミュニティのメンバーは言うに及ばず、事業活動の拡大のために協力を仰いできた国内外の研究拠点機関・大学や公的機関からも、本事業活動のもたらしてきた共同研究・研究連携の創出、研究の活性化、若手研究者への支援、研究の質の向上について高い評価を得た。さらに、その取り組みを新たな事業に発展させていくことへの期待も数多くのサポートレターという形で明確に示された。

事業第1フェーズで築かれた危機言語の記録と言語多様性に関する共同研究体制は、2013年度からの文部科学省特別教育研究経費による新プロジェクト「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」に引き継がれた。事業第2フェーズとなるこの新プロジェクトでは、これまでAA研で行ってきた共同研究事業、共同利用拠点としてのノウハウ、言語研修や様々なワークショップ・セミナーの実績に加え、第1フェーズでの連携事業を通して形成した国際連携基盤を最大限に活用し、危機言語・言語多様性研究に今新たに求められている以下のような研究・社会還元活動を推進した：

- ・ 社会的応用・還元の方法と技術の開発、およびそれを支えるインフラの構築までを含む研究活動
- ・ 能力育成型還元を通じた現地コミュニティ支援：言語の記録・保存のための技術や方法論・再活性化のノウハウなどのトレーニングを軸とした支援活動を通してコミュニティ自らが問題に取り組む能力の育成
- ・ 相互支援ネットワークであるコンソーシアム (CTLDC)を基盤とした効率的で持続可能な国際連携体制の構築

【研究成果の概要】

人間言語の多様性に関する研究は、近年非常に重要視されてきているが、時間・労力・資金のすべての面において非常に多くのリソースを必要とし、さらに、研究者間連携・協力、データの共同利用、研究方法論・技術の体系的トレーニングなども少なく、研究活動を持続的に発達させていく上での課題が多かった。そこで、本事業では、研究の先導と共に、研究活動・研究交流・共同研究・若手養成を支援する学術インフラを整備することに注力し、危機言語のドキュメンテーション研究と構造的多様性を踏まえた理論的言語研究の両面において、言語多様性に関する研究の継続的発展基盤の構築を目指した。

その結果、以下のような成果をあげることができた：

- ・ 危機言語の記述研究、類型論研究に関する継続的国際的連携体制の構築
- ・ 言語の構造的多様性と類型に関する理論的研究の推進
- ・ 言語ドキュメンテーション研究に関する方法論、技術の開発と確立
- ・ 言語ドキュメンテーション研究手法に関するトレーニング提供による研究の効率化と質の向上
- ・ 言語データの共同利用基盤の構築
- ・ 若手研究者コミュニティの組織を通じた研究交流・相互支援ネットワークの形成
- ・ 若手研究者に対する共同研究の企画運営参画の機会の提供

また、本事業の活動は、上記の中核的研究成果に加え、以下のような側面でAA研の共同研究事業基盤の強化に貢献してきた：

- ・ 新型言語関連研修の企画運営による研修事業の拡大
- ・ 研究未開発言語調査派遣を通じた記述研究・ドキュメンテーション研究分野におけるプレゼンスの強化
- ・ 若手共同研究プロジェクト支援をとおした共同研究支援活動の拡大
- ・ 国際共同研究ネットワークの組織を先導することによるAA研の求心力強化

【本年度の成果】

本事業に関連した共同研究プロジェクト（共同利用・共同研究課題）を新たに3件発足させ、危機言語及び言語多様性に関する学術研究ネットワークを拡充させた。研究理論、研究手法に焦点を当てたワークショップ提供や共同研究企画運営インターンシップを通じた若手養成事業も計画通り進行した。研究還元面でも、インドネシアやロシアの現地コミュニティなどを対象としたアウトリーチ活動を行い、国際的事業を活発化させるとともに、国内向けにも公開映画上映会・講演会などを開催した。また、アーカイブ構築に向けた研究、技術インフラの整備などにより研究成果共有・研究交流ネットワークの形成を進めた。また、インドネシア、中国、

アメリカ、ロシア、ドイツ、イギリス、オーストラリア、カナダ、マレーシア、ミャンマーなどの研究機関を訪問し、連携事業をより活発化すべく研究交流関係の構築を行った。また、アーカイブ構築に向けた研究、技術インフラの整備などにより研究成果共有・研究交流ネットワークの形成を進めた。これらの活動を通してこれまで構築した事業基盤を効果的に拡充することができたことから、本事業の活動は当初の目的を十分に達成したと考えられる。

1-2.7.2 科学研究費などによるその他の研究活動

本年度は、次の36件の科学研究費補助金による研究活動を実施した。

研究種目	金額（単位：千円）／件数
基盤研究A（海外，一般含む）	46,000／4件
基盤研究B（海外，一般含む）	28,400／8件
基盤研究C	11,856／14件
挑戦的萌芽研究	1,800／2件
若手研究A	2,700／1件
若手研究B	8,900／10件
研究活動スタート支援	1,000／1件
研究成果公開促進費	10,200／1件
特別研究員奨励費	3,000／3件
計	113,856／46件

1-2.7.3 寄付金

2015年度は、該当事項なし。

1-2.7.4 受託研究・受託事業

2015年度は、該当事項なし。

I-3 組織運営

I-3.1 センター

I-3.1.1 情報資源利用研究センター

情報資源利用に関する研究を推進するために、IRC プロジェクトを組織し、本研究所が所蔵・収集しているアジア・アフリカの言語データ、言語文化に関する多様な研究資料の電子化と公開や、アジア・アフリカの言語文化に関する研究用データベース、電子辞書、映像資料体などの構築・公開・共同利用を進めるための連携の構築などを進めた。

IRC 内の運営については、原則として毎月定例会議を開催し、予算執行状況の点検、IRC プロジェクトの進行状況の点検、事業改革、IRC ワークショップの開催計画などを主たる議題として討議を行った。また、所内の情報体制の円滑化・充実のため、センターの管理するサーバーの管理運営を行った。

所内の情報システムの安定的な運用及びIRC 関連研究事業の推進のために、情報処理に関する専門知識を有した2名の特任研究員を、事務管理関係業務のために1名の業務補佐を雇用する体制を継続した。特任研究員については、前任者2名の離職を受けて、2015年9月と2016年2月に後任者を採用した。

I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

2014年度に引き続き、センター担当所員をフィールド研究班と連携地域研究班に分け、前者を海外学術調査総括班の事業担当とし、後者には臨地調査手法の洗練とフィールドサイエンスの構築、海外研究拠点の維持・運営および地域研究コンソーシアムの窓口機能を持たせて、多岐にわたるセンター業務を効率よく遂行した。

2015年度は、海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」（2010年度設置）、「フィールドネット運営委員会」（2011年度設置）に、学内外の委員を委嘱して、コロキウムの企画・運営の円滑な遂行と、相互に研究情報を交換するフィールドネットの機能を強化するための企画・運営上の刷新を図った。

I-3.2 外部委員会

I-3.2.1 運営委員会

本研究所には2009年度まで、所外の経験豊かな学識者による運営諮問委員会が設置されていた。運営諮問委員会は、所長からの諮問に答えることで、全国共同利用研究所としてのAA研の研究や運営のあり方に関する基本的・長期的な方向性を示してきた。しかしながら、共同利用・共同研究拠点への移行にともない、2010年度からは学外委員が過半数を占める運営委員会を設置することとなり、運営諮問委員会は2009年度をもって活動を終了した。

2015年度の運営委員会は学外委員9名を含んでおり、その多くは言語学、民族学、地域研究、歴史学の研究者で、本研究所が共同利用・共同研究拠点として認定されている学問分野の研究者コミュニティを代表する形で、さまざまなご意見を頂戴している。さらに社会的に開かれた研究所のあり方を検討するため、研究機構、研究所、センターなどの運営に携わっている研究者にもご参加いただいている。委員長は渡邊興亜名誉教授（総合研究大学院大学）、副委員長は栗林均教授（東北大学東北アジア研究センター）である。

2015年度の運営委員会は2回開催された。第1回運営委員会（2015年11月20日開催）では、委員長・副委員長を選出した後、AA研の「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」としての共同利用・共同研究拠点認定の更新、ならびに期末評価結果（総合評価A）が報告されるとともに、法人第三中期の活動計画につき、2016（平成28）年度概算要求の過程で明らかになった予算の大幅な縮減にどのように対応すべきかにつき諮問し、成果の出し方と評価のなされ方をめぐる一般状況と、近年の国の文系研究界に対する政策の変化に関する意見を得た。

第2回運営委員会（2016年3月1日開催）においては、主に期末評価結果の「評価コメント」において指摘されたところの「研究成果を増加させるための取組」に関して諮問がなされ、基幹研究とセンターとの組織的な問題について、一定期間研究を継続した後の発展的な新たなテーマの立て方、全体と個のバランスの問題、さらに「競合他社」との差異化をいかに追求するか、などについて議論がなされた。

【2015年度の委員氏名等は、資料編 II-2.2.1 運営委員会の項を参照】

I-3.2.2 共同研究専門委員会

本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたことにもない、2010年度以降に発足した共同利用・共同研究課題はすべて、公募を経て新設の共同研究専門委員会が採否の審査を行うことになった。共同研究専門委員会の委員は、AA研が共同利用・共同研究拠点として認定されている三分野（言語学・文化人類学・地域研究）の研究者コミュニティを代表する学外委員が過半数を占めている。2015年度の共同利用・共同研究課題審査会は10月24日（土）に開催され、2016年度発足分に応募のあった10件の共同利用・共同研究課題に関する審査が行われた。審査会には井上、倉沢、杉山、速水、藤代、吉澤、米田（以上学外）、栗原、深澤、渡辺（以上所内）の各委員が出席し、各共同利用・共同研究課題の応募書類と代表者によるプレゼンテーションをもとに審査にあたった。審査会終了後は所長、副所長、情報資源利用研究センター長、フィールドサイエンス研究企画センター長も加わって共同研究専門委員会を開催し、応募のあった共同利用・共同研究課題に対する順位付けを行う一方、最終評価点を附して各課題代表者への審査結果通知を行うことを承認した。なお、共同利用・共同研究課題の最終的な採否は、共同研究専門委員会の付した順位に従って、企画運営委員会が決定するが、来年度予算の如何にかかわらず11月下旬には各課題代表者に審査結果を通知することが認められた。最終的には応募のあった10件のすべてが採択された（うち4件が所外代表）。

ほかにも共同研究専門委員会は、年度末に提出された実績報告書をもとに、本年度実施された共同研究課題26件の書面審査・評価を行い、共同研究の質の向上に寄与している。【委員氏名等は、資料編 II-2.2.2 共同研究専門委員会の項を参照】

I-3.2.3 研修専門委員会

ハンガリー語（東京会場）を2016年度研修予定言語として決定した。

また、教材を原則として電子出版とすること、研修時間を従来は100時間から150時間の範囲としていたところを、多様な形での研修を可能とするため50時間から150時間へと申し合わせを変更した。

I-3.2.4 海外調査専門委員会

1. 海外学術調査フォーラム（旧称：～2004年度「海外学術調査総括班研究連絡会」、～2010年度「海外学術調査総括班フォーラム」）の企画・開催準備を案件として、海外調査専門委員会を2015年度中に2回（7月8日（水）および12月4日（金））開催した。
2. 全体会議、地域別分科会および情報交換会からなる海外学術調査フォーラムを、6月27日（土）に開催した。フォーラムでは、全国の科学研究代表者（新規・継続分）をまじえ、海外学術調査の研究ネットワークをめぐる活発な議論の場を提供した。また海外学術調査フェスタと称する文理融合型の共同研究についてのポスター発表の場を設けた。
3. 上記総括班フォーラムと同日開催で、下記海外学術調査ワークショップを開催した。
4. 1) 「科学研究と不正—STAP事件をめぐって」難波紘二（鹿鳴荘病理研究所・広島大学／病理学）
2) 「破壊されゆく都市の記録と記憶—19世紀アレポの人口と空間」黒木英充（AA研／歴史学）
5. 海外学術調査総括班データベースによる海外学術調査関連の科研費情報公開を継続した。
6. 2015年度後半以降は、次年度海外学術調査フォーラムの企画・開催に向けた準備作業に着手した。
7. 2015年度及び2016年度におけるフィールドネット事業の活動方針・計画を策定した。
8. 2015年度及び2016年度におけるフィールドサイエンス・コロキウム事業の活動方針・計画を策定した。
9. 2015年度については年度当初の予定をほぼ達成した。今後の展望としては昨年度に引き続き、地域と学問分野の境界をこえた文理共存型の研究ネットワークを介したフィールドサイエンスと理論構築の架橋の試みを継続・拡充する。

海外学術調査フォーラム

平成27年度フォーラムプログラム（敬称略）

日時：2015年6月27日（土）10:30～19:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

- 10:30～12:30 海外学術調査ワークショップ
 会場：アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）
 「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション—あつめる・はかる・かぞえる—」
 司会 深澤 秀夫（AA研 海外学術調査フォーラム担当長）
 挨拶 飯塚 正人（AA研 所長）
 1 難波 紘二（鹿鳴荘病理研究所・広島大学／病理学）
 「科学研究と不正—STAP事件をめぐって」
 2 黒木 英充（AA研／歴史学）
 「破壊されゆく都市の記録と記憶—19世紀アレポの人口と空間」
- 12:30～12:35 海外学術調査フェスタ展示内容の案内
 深澤 秀夫（AA研 海外学術調査フォーラム担当長）
- 12:35～14:00 ————— 昼食・休憩 —————
- 12:35～17:30 1階資料展示室にて海外学術調査フェスタ 開催
- 14:00～14:30 全体会議（事前申込制） 会場：アジア・アフリカ言語文化研究所 大会議室（303）
 司会 深澤 秀夫（AA研 海外学術調査フォーラム担当長）
 挨拶 床呂 郁哉（AA研 フィールドサイエンス研究企画センター長）
 大鷲 正和（独）日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長）
 「科学研究費の執行について」
- 14:30～15:00 会場別質疑（事前申込制） 会場：AA研 各会議室
 大鷲 正和（独）日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長）
 3会場において質疑応答
- 15:10～17:10 地域別分科会 会場：AA研 各会議室
- I 大陸部東南アジア 会場：3階セミナー室（301）
 座長：伊藤 元己（東京大学大学院総合文化研究科）
 梅崎 昌裕（東京大学大学院医学系研究科）
 情報提供講師：仲上 健一（立命館大学／東京大学）
 タイトル「メコン河の流域開発とベトナムの持続的発展」
 書記：西井 涼子（AA研）
- II 島嶼部東南アジア・太平洋
 会場：4階研修室（405）
 座長：岡本 正明（京都大学東南アジア研究所）
 高樋 さち子（秋田大学教育文化学部）
 情報提供講師：甲山 治（京都大学東南アジア研究所）
 タイトル「インドネシア熱帯泥炭湿地における水文気象観測」
 書記：塩原 朝子（AA研）
- III 東アジア
 会場：8階企画作業室（805）
 座長：窪田 順平（総合地球環境学研究所）
 蓮井 和久（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）
 情報提供講師：福土 由紀（首都大学東京 都市教養学部）
 タイトル「近現代中国における感染症の歴史研究」
 書記：石川 博樹（AA研）
- IV 南アジア・西アジア・中央アジア・北アフリカ
 会場：3階マルチメディア会議室（304）
 座長：近藤 信彰（AA研）
 錦田 愛子（AA研）

情報提供講師：長野 宇規（神戸大学大学院農学研究科）
タイトル「トルコ共和国東部の水資源開発と農業」
書記：太田 信宏（AA 研）

V 北米・中南米

会場：3階小会議室（302）
座長：木村 秀雄（東京大学大学院総合文化研究科）
渡辺 己（AA 研）
情報提供講師：鶴見 英成（東京大学総合研究博物館）
タイトル「ペルーにおける日本人の考古学プロジェクト」
書記：荒川 慎太郎（AA 研）

VI 極地・北ユーラシア・ヨーロッパ

会場：2階コモンルーム（203）
座長：藤田 耕史（名古屋大学大学院環境学研究科）
本山 秀明（国立極地研究所）
情報提供講師：檜山 哲哉（名古屋大学地球水循環研究センター）
タイトル「温暖化にともなう東シベリアの水環境変化と社会の適応」
書記：山越 康裕（AA 研）

VII サハラ以南アフリカ 【報告】

会場：3階マルチメディアセミナー室（306）
座長：曾我 亨（弘前大学人文学部）
河合 香吏（AA 研）
情報提供講師：浜田 明範（国立民族学博物館）
タイトル「西アフリカのカカオ農村地帯における生物医療と感染症」
書記：佐久間 寛（AA 研）

17:30～19:30 情報交換会（事前申込制） 於 生協1階ホールダイニング

I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会

1. フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を2015年度中に2回（7月10日（金）、12月26日（土））実施し、2015年度及び2016年度のフィールドサイエンス・コロキウム事業の運営に関わる企画・策定作業等を実施した。
2. 同運営委員会と同日開催でフィールドサイエンス・コロキウムの連続ワークショップをAA研基幹研究人類学班「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」との共催により下記のように2回実施した。
 - 1) 連続ワークショップ第1回「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」
日時：2015年7月10日（金）14:30～18:30
 - 2) 連続ワークショップ第2回「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」
日時：2015年12月26日（土）15:00～18:30

I-3.2.6 フィールドネット運営委員会

1. フィールドネット運営委員会を1回（2016年3月29日（火））開催し、フィールドネット事業の2015年度の活動を総括し、2016年度以降の活動方針を策定した。
2. 公募企画「フィールドネット・ラウンジ」2件を下記の通り開催した。
 - 1) ワークショップ「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家：20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」 日時：2016年1月9日（土）開催
 - 2) ワークショップ「装い／社会／身体：フィールドワーカーによる通文化比較研究」
日時：2016年1月10日（日）開催

I-3.2.7 編集専門委員会

2016年3月9日（水曜日）に編集専門委員会を開催した。『アジア・アフリカ言語文化研究』の原稿募集を完全電子化することが承認され、それに伴う執筆要項などの改正が認められた。『アジア・アフリカ言語文化

研究』自体の電子出版化については、将来の検討課題とされた。なお 2015 年度においては予定どおり 90、91 号の 2 冊を発行した。

3. 2015 年 9 月 30 日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』90 号では、国内外より総数 17 件（うち論文 15 件、資料 2 件、国内 9 件、海外 8 件）の投稿があり、うち審査の結果、論文 4 件、資料 0 件を掲載した。
4. 2016 年 3 月 31 日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』91 号では、国内外より総数 12 件（うち論文 10 件、資料 2 件、国内 5 件、海外 7 件）の投稿があり、審査の結果、論文 0 件、資料 2 件を掲載した。

I-3.2.8 国際諮問委員会

国際諮問委員会は、国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について所長の諮問に応じることを目的に、共同利用・共同研究拠点への移行に伴い 2010 年度より設置された。本委員会は本研究所の外国人研究員と所長・所員（国際交流担当）とで構成される。2015 年度は、必要に応じて所長が委員との個別懇談を行い、研究所の研究等について意見交換を行ったものの、緊急に諮問を必要とするような案件はなかったことから、本委員会は開催されなかった。

I-3.2.9 海外拠点専門委員会

2016 年 3 月 30 日（水）に第 1 回専門委員会を開催した。両拠点の 2015 年度の活動報告、2016 年度活動計画を報告するとともに、現地情勢の変化と拠点の役割・機能の位置づけなどについて専門委員から助言・意見を受けた。

I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会

2016 年 3 月 21 日（月）に第 1 回中東研究日本センター（JaCMES）国際諮問委員会を JaCMES にて在レバノン 3 委員と黒木センター長、錦田准教授との計 5 人で開催した。予算減の状況にあっても日本とレバノンの間で研究者間の交流をより活発化されることが強く要望された。

I-3.3 内部委員会等

I-3.3.1 企画運営委員会

企画運営委員会は原則として月に一度、教授会に先立つ 1 週間前に開催され、教授会に提出される諸々の案件に関し、所内規程に基づき原案を審議するほか、必要に応じて原案作成を行なう。委員会の構成メンバーは言語学、歴史学、民族学の 3 分野からの選出委員各 1 名、情報資源利用研究センター長、フィールドサイエンス研究企画センター長、研究戦略策定委員会委員長、副所長および所長である。委員会の議長は所長が務める。

2015 年度も従来と同様、適宜委員会のメーリングリストを通じた審議を行ったが、企画運営委員会のこうした審議は、教授会における論点の明確化と整理、さらには会議時間の短縮に大いに貢献している。また、2009 年度からは 3 分野からの選出委員 3 名を共同利用委員会・共同研究専門委員会（2010 年度以降は共同研究専門委員会）の所内委員としている。さらに 2010 年度からは同じく選出委員 3 名を運営委員会の所内委員に充て、企画運営委員会による研究所の重要事業への関与を強化している。こうした体制のもと、2015 年度の企画運営委員会も本研究所の共同利用・共同研究拠点としての機能強化に向けて積極的に取り組んだ。

I-3.3.2 研究戦略策定委員会

自己評価委員会と将来計画検討委員会が改組され、2015 年度より新たに研究戦略策定委員会が発足した。

研究戦略の策定

次年度からの研究所予算の減少が確定したため、所員からの提案を受け付け、研究所事業全般の見直しを行った。特に、共同利用・共同研究課題については、2016 年度から研究会の開催回数、予算等について上限をつけることを決定し、綿密な試算の上、妥当な上限を定めた。

年次報告書の作成

年度初めに、2 センター、各共同研究課題などが過年度の実績報告を提出し、共同研究については外部委員会の評価を受け、所内業務等については担当責任者が達成度を自己申告し、それらに基づいて過年度の年次報告書を作成した。

経年教授業績の外部評価

2015年度は、経年教授業績の外部評価に該当する教授がいなかったため、これを実施しなかった。

東京外国語大学点検・評価室への所員の研究・教育業績の報告

所員に大学情報データベースへの個人研究事業等の入力を要請し、年次報告書作成のためのデータを収集するとともに、全学の教育研究活動に関するデータ収集に協力した。また全学点検・評価室の活動には澤田英夫所員が室員として参加した。

I-3.3.3 文献資料（図書）担当

2015年度の事業計画は以下のとおりだった。

1. 雑誌類の購入・整備（継続・新規）を行う。
2. 研究所として揃えるべき基本資料の充実をはかる。
3. 雑誌の整理作業を継続する。
4. カビ対策を含む、図書の適正な維持・管理を行う。
5. 修理製本対象文献の修理を行う。
6. マイクロフィルムの劣化対策を行う。

2015年度に下記の事業を行った。

1. 雑誌類について、従来からの継続分の購入・整備を行った。
2. レファレンス類（『中国方志大辞典』等）、史料集（『大清全書』等）を中心に基本資料を拡充した。
3. 雑誌の配架整理（製本を含む）を行った。
4. 除湿器の稼働等により図書を適正に維持・管理した。
5. 修理製本対象文献の修理を行った。
6. マイクロ室所蔵マイクロフィルムを適宜チェックした。

I-3.3.4 国際交流担当

1. 2015年度着任の外国人研究員の受入れにあたりガイダンス等を行った。
2. 2016年度（2016年9月以降）着任予定の外国人研究員の募集を行い、4名を候補者として選考した。この候補者4名は2016年2月18日開催の教授会において承認された。
3. AA研フォーラムを企画・開催した。詳細はI-4.4.1 AA研フォーラムの実施の項を参照。

I-3.3.5 出版担当

2015年度の活動計画

1. 下記のように、年3回、共同研究プロジェクト、ユニット研究、外国人研究員招請に基づく研究成果を募集し、紙媒体として印刷・刊行すると共に、電子的に複製・翻刻し保存する。
 - ・ 2015年4月30日：第1回原稿募集締め切り
 - ・ 2015年7月31日：第2回原稿募集締め切り
 - ・ 2015年10月31日：第3回原稿募集締め切り
2. 下記の出版物について電子的に公開する作業を進める。
 - ・ AA研の出版物リストの更新と電子的公開。
 - ・ 既に紙媒体として出版された基礎語彙集の電子的公開。
 - ・ 既に紙媒体として出版された共同研究プロジェクト成果物の中で、特に学術的意義が高いと認められる著作の電子的公開。

2015年度の活動実績

1. 刊行物一覧については、資料編 II-4.4.1 出版の項を参照のこと。
資料編 II-4.4.1にあるように、共同研究プロジェクト、外国人研究員招請に基づく研究成果等、32点を刊行した。また既刊行物を電子的に複製し、保存・公開を進めた。
「AA研 出版物目録2015」の刊行にあたって
「AA研 出版物目録」の紙媒体は「AA研 和文要覧2015」「AA研 英文要覧2015」に挿入刊行する

とともに、下記 URL にて公開した。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/pub/ILCAApubl2015.pdf>

2. 既刊行物の電子的公開について

既に刊行された共同研究成果物等について、著作権者の許諾を得て、新たに 89 点を以下の URL にて公開した。<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/4>

3. 2015 年度出版刊行ルールについて

AA 研の予算による出版物に関する「2015 年度出版刊行ルール」の主な内容は以下の通りである。

- ・ 基礎語彙集は電子出版を原則とする。
- ・ 基礎語彙集は一般公募とし、応募にあたっては、在職中の任期つきでない所員を通じて行う。
- ・ 応募された原稿は二名以上の査読者によって査読し、出版の可否を判断する。
- ・ 原稿は、東京外国語大学図書館成果公開コレクション（リポジトリ）を通して電子的に公開する。同時に紙媒体による出版を希望する場合、装丁は原則としてペーパーバックとする。
- ・ 共同利用・共同研究課題出版物の刊行については、応募資格者を原則として常勤所員および任期つき所員としたが、離任した者も可能とした。

4. 電子出版について

既に本学リポジトリを通じて、新規刊行物および一部の既刊行物の電子的公開を行っているが、本年度から新たに新規刊行物としての電子書籍の出版プロセスの検討を行い、12 月から以下の URL にて電子書籍 2 点の試験的公開を開始した。<https://publication.aa-ken.jp/>

電子書籍は、従来の出版と同様の水準の書籍としての品質を維持し、独自の ISBN の付与を行う。学術的な引用についての標準が書籍と同様の形態のものについてしか存在しないという事情から、当面は PDF 形式に限り、改変不能にプロテクトをかけた上で、検索やテキストのコピーは自由な形式で公開していくこととなった。

I-3.3.6 基礎データ担当

2015 年度の基礎データ担当の活動は下記の通りである。

要覧

1. 2015 年度の要覧（和英対訳版）を編集、刊行した。
2. 要覧付録の関連資料について、日本語版及び英語版を編集、刊行した
3. 要覧付属の出版物目録について、2014 年度刊行分を中心に校正を行った。

ウェブサイト

1. 2015 年度要覧（和文及び英文）の内容をウェブサイトにフィードバックする作業を行った。
2. ウェブサイトの大幅な更新に際して、テストページを利用したチェック機能を整えた。

年次報告書の編集

2015 年度年次報告書の作成に際して協力を行った。

I-3.3.7 広報企画担当

2015 年度も昨年度同様、広報活動のうち、『FIELDPLUS』の企画・編集および企画展実施を広報企画担当が行った。

2015 年度の事業の詳細は下記の通りである。

・『FIELDPLUS』

AA 研の雑誌『FIELDPLUS』の企画・編集を行った。この雑誌は、言語学、人類学、歴史学・地域研究を専門とする AA 研の所員や特任研究員、研究機関研究員、共同利用・共同研究課題をともに運営する共同研究員をはじめ、各アカデミズムで活躍する新しい発想をもった研究者などを執筆陣に迎え、研究の最前線を一般向けにわかりやすく伝えていこうという趣旨の雑誌である。所員 9 名を中心に構成される編集部が企画・編集を担当し、プロの編集者とグラフィックデザイナーと協力して誌面作りを行っている。2015 年度は第 14 号（巻頭特集「ともに生きる 霊長類学と人類学からのアプローチ」）、第 15 号（巻頭特集「ひとと「もの」の関係性を探る 人間と非人間の境界の揺らぎと越境をめぐって」）を制作した。

また、第13号(2015年1月発行)の特別企画に関連して、カフェで執筆者のひとりを中心とするトークイベントを実施した。

「アラビア文字に隠された年代を読み解く」

ゲスト：高松洋一(AA 研所員)

司会：石川博樹(AA 研所員)

日時：2015年7月16日(木) 午後7時～8時30分(開場午後6時30分)

会場：カフェ6次元 東京都杉並区上荻1-10-3

・企画展

AA 研において行われているアジア・アフリカの言語と文化に関する研究の成果を広く一般に公開するために、以下の企画展を、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 既形成拠点「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」の協力により実施した。

企画展「アジア諸文字のタイプライター展」

会期：2015年10月26日(月)～11月27日(金)(午前10時より午後5時まで、土・日・祝日は休場。但し、10月31日、11月1日、11月21日～23日は開場)

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1階資料展示室

協力：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
既形成拠点「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」

I-4 研究者コミュニティと一般社会とに関わられた研究プラットフォームの構築

I-4.1 若手研究者養成プログラム

I-4.1.1 言語研修の実施

言語研修は1962年から実施されてきた短期集中プログラムである。これまで実施した言語はのべ133言語、修了者数は述べ1,215人である。当研究所以外では扱うことのできない希少言語の運用能力・知識を身につける機会を提供することは、国内外に関わられた共同利用・共同研究拠点として行う研究者養成事業として意義あるものといえる。2015年度は、アラビア語パレスチナ方言、古ジャワ語（東京会場）、モンゴル語（大阪会場）の講座を開講した。【派遣実施の詳細については、資料編 II-4.1.1 言語研修の実施状況の項を参照】

研修担当では、過去の研修教材のウェブ上での公開も進めている。

I-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ

フィールド言語学ワークショップは、研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に必要なスキルを主として実習形式で学ぶ機会を提供するものである。次世代研究者育成の一環として、主に大学院生・ポスドクなどの若手研究者を対象に開催しており、日本の大学では、通常教えられていない内容を扱っているという点で、AA研の重要な事業の一つであるといえる。

次の3種類のワークショップを提供している。

1. Documental Linguistics Workshop
年一回海外からの講師を招聘し開催している1週間のワークショップである。言語ドキュメンテーションに関するさまざまなテーマを扱っている。
2. 文法研究ワークショップ
フィールド調査で得る言語データに現れる、さまざまな文法事象に関して若手研究者が研究発表を行い議論を行うワークショップである。
3. テクニカル・ワークショップ
若手研究者が、フィールドで得た言語データの管理や加工に関するスキルを実習形式で学ぶワークショップである。

I-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー

2005年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進してきた事業を、2010年度より基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」が担うに当たり、「中東」と「イスラーム」とをより明確に区別すべく、「中東☆イスラーム研究セミナー」「同教育セミナー」と改称した。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めようとしている若手研究者（大学院生以上）を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションのスキルを向上させることを目的としている。人文・社会科学分野が中心になるが、受講者の専門分野は特に限定していない。

中東☆イスラーム教育セミナーは大学院生を対象に、AA研スタッフと招聘講師による講義、そして希望者による研究発表から構成されている。学部段階からこの研究領域に関心を持ち続けてきた院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームにそれほど深い知識を持たない院生も受け入れ、中東・イスラーム世界とさまざまな専門分野の基礎的な知識の提供、そして受講者の間の討論を通じた意見・知識の交換の場を作ることを目指している。年に1回の開催は従来通りである。

中東☆イスラーム研究セミナーは、それよりも一段高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期（博士課程）および博士論文の準備をしている若手研究者を対象にしている。ここでは講義は行わず、共同研究プロジェクト型の研究会形式を採用し、研究発表とそれに基づく質疑応答・討論に十分な時間を確保した機会を提供する。これを通して博士論文執筆のヒントを得たり、異なる研究分野や地域の研究者との意見交換から知識の幅を拡充したりすることが期待される。教育セミナーと同様、年に1回の開催である。

2015年度においては、研究セミナーが12月19～21日に実施され、5名の受講生が参加した。教育セミナーは9月20～23日に実施され、6名の教員の報告と、19名の受講者中6名の発表がなされた。詳細に関しては基幹研究「中東・イスラーム圏」のウェブサイトを参照していただきたい。そこには、受講生の感想・評価も掲載されている。なお、2006年度より東京外国語大学大学院在学中の院生を対象に両セミナーを単位認定可能な科目として開放しているが、本年度は教育セミナー受講生の1名がこれに該当した。

また、これら「研究セミナー」「教育セミナー」とは別に、オスマン帝国史研究を専門とする若手研究者を中心とした研究者コミュニティに対する還元事業の一環として、2008年度以来毎年1回2日間にわたってオスマン文書の解説・解説を行う実習型の「オスマン文書セミナー」を開催している。毎回高松洋一准教授が中心となって組織しているが、2015年度も2013年度以来引き続き秋葉淳・共同研究員の協力も得て、1月10・11日に開催し、のべ46名の参加を得た。【日程や詳細については資料編 II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況の項を参照】

I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー

2010年度から始まった基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」における若手研究者育成事業として新たに文化／社会人類学研究セミナーを企画し、2011年度から実施した。文化人類学／社会人類学／生態人類学を専門とする博士後期課程大学院生を主たる対象とし、博士論文を執筆するために必要な本研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げると共に、所属大学院とは異なる発表の場を提供することにより論文構想を具体化させることを目的としている。また、本研究セミナーは、受講生が同じレベルの若手研究者の発表を聴き、第三のコメンテーターの役割を果たすことによる自らの論文執筆および研究の活性化、さらには所属大学院をこえた若手研究者同士の交流の機会の提供をも目指している。

2015年度からは、日本文化人類学会と共催で行うこととなり、11月7日に開催された。東京大学の森山工氏の講演の後、発表者5名、コメンテーター10名、合計48名（うち外国人4名）が参加した。発表者の内訳は、他校の大学院生など5名であった。2015年度受講者による評価および感想に関しては、基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」のホームページ上の下記の項に掲載した。

(<http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/2014/06/post-26/index.html>)

【日程や詳細については資料編 II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナーの項を参照】

I-4.1.5 短期共同研究員（公募）の受け入れ

短期共同研究員制度は、若手研究者を公募して本研究所に一定期間滞在させ、所員と共同で、あるいは所員の指導のもとに研究を遂行させるもので、共同利用のひとつの有効なあり方として、全国共同利用研究所時代から長く維持されてきた。しかし、本研究所が共同利用・共同研究拠点に移行した2010年度以降は2011年度に1名を受け入れたに過ぎず、2013年度には短期共同研究員への応募はなかった。2014年度は4名の応募があったものの、2015年度にはまた1名となった。応募が少ないこと背景には、COE制度など、各大学・大学院における研究者受け入れ制度が拡充されてきたことに加えて、AA研のジュニア・フェロー制度、若手研究者研修制度など、他の関連制度との差異が見えにくいことも考えられる。2015年度に応募状況が低調であったことと、共同利用・共同研究拠点として課題への応募件数の増加が求められていることから、制度自体のあり方を見直すことが必要となろう。

I-4.1.6 大学院教育の現在

従来、AA研は東京外国語大学博士後期課程のみに原則として関与し、1研究科1専攻体制のもと、AA研コースが学内措置として認められていた。2009年度の東京外国語大学大学院の重点化により、総合国際学研究科が発足し、2専攻（言語文化専攻、国際社会専攻）体制へと移行すると同時に、大学院博士後期課程を兼任するAA研教員はどちらかの専攻に所属することとなった。

この改組ともない、大学院博士後期課程を兼任するAA研教員は、院生を指導するほか、総合国際学研究科教授会に出席し、教務の一部のみに参与することとなった。博士後期課程の在学者あるいは志願者で、AA研教員を主指導教員に希望する者はきわめて少ないのが現状である。AA研所員の大学院教育に対する関与のあり方としては、個別の院生指導を行うだけでなく、本学大学院の教育の在り方と併せて、AA研がこれまで実施してきた下記の若手研究者育成事業の総体として考えてきた。

- ・ 言語研修
- ・ フィールド言語学ワークショップ: 研修事業の一環として「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2」が主催する Documentary Linguistics Workshop, 文法研究ワークショップ, テクニカル・ワークショップ

- ・ 中東・イスラーム関連セミナー：中東☆イスラーム研究セミナー，中東☆イスラーム教育セミナー，ベイルート若手研究者報告会，オスマン文書セミナーなど
- ・ 文化／社会人類学研究セミナー

学内外の要請を受けて，AA 研は5年一貫制の大学院教育を行うことを決定し，その前段階として，平成28年度より本学大学院の博士前期課程にアジア・アフリカフィールドサイエンスプログラムを設けることとなった。なお，本プログラムの開始に先立って，本プログラムの内容を紹介するための学部生向けリレー講義「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」を行うこととし，平成27年度は秋学期にこれを開講した。

I-4.1.7 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

研究機関研究員（旧称：非常勤研究員）および特任研究員は，各自の研究テーマに沿った個人研究を行うとともに，その専門分野に応じて，異なる所内組織の共同研究活動に配属され参加している。これらはAA 研の若手研究者養成事業の重要な一部であり，両センターと文部科学省特別経費による「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」，4つの基幹研究のほか，広報担当にも配置されてきた。2015年度は特任研究員8名，研究機関研究員6名の体制により，所内組織の多様な共同研究活動に参画させた。

また，2015年度には日本学術振興会特別研究員4名を受け入れた。【研究機関研究員，特任研究員，日本学術振興会特別研究員の業績についてはI-2.6.2 所員の研究業績一覧の研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員の項を参照】

I-4.2 国内連携研究活動

I-4.2.1 国内研究者受け入れ（フェロー等）

共同利用・共同研究拠点としてのAA 研は，フェロー制度をいっそう充実させて国内外の研究者に開かれた研究の場を提供すると共に，研究プロジェクトの推進を図る方針である。

2015年度は，下記の国内研究者をフェローとして14名，ジュニア・フェローとして11名受け入れた。【詳細・業績は資料編II-4.2.1 国内研究者の受け入れ（フェロー等）の項を参照】

フェロー

梅川 通久（うめかわ みちひさ）

研究主題：定量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間：2015.9.1～2018.8.31

受入教員：中山 俊秀

岡崎 彰（おかざき あきら）

研究主題：アフリカを中心とするポピュラー・アートの社会人類学的研究

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：深澤 秀夫

押川 文子（おしかわ ふみこ）

研究主題：現代インドの社会変化

研究期間：2015.4.1～2018.3.31

受入教員：太田 信宏

加藤 博（かとう ひろし）

研究主題：近現代におけるエジプト社会経済変容

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：黒木 英充

川上 泰徳（かわかみ やすのり）

研究主題：ペイルートのパレスチナ難民の政治社会意識の変遷

研究期間：2015.1.1～2017.12.31

受入教員：飯塚 正人

木俣 美樹男（きまた みきお）

研究主題：インド亜大陸の雑穀農耕文化の起源と展開過程

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：太田 信宏

栗林 均（くりばやし ひとし）

研究主題：伝統的モンゴル語文献資料の電子化利用に関する研究

研究期間：2014.4.1～2015.3.31

受入教員：町田 和彦

古谷 伸子（こや のぶこ）

研究主題：タイにおける民間治療師実践の変容と医療システムの再編に関する研究

研究期間：2014.5.1～2017.4.30

受入教員：西井 涼子

佐藤 大和（さとう ひろかず）

研究主題：日本語と東南アジア諸言語における超分節的特性とその動態に関する研究

研究期間：2012.4.1～2017.3.31

受入教員：峰岸 真琴

清水 昭俊（しみず あきとし）

研究主題：戦時期・戦後期の日本の人類学（民族学・文化人類学）

研究期間：2009.7.1～2015.6.30

受入教員：宮崎 恒二

新谷 忠彦（しんたに ただひこ）

研究主題：言語資料による大陸部東南アジアの歴史の解明

研究期間：2010.4.1～2016.3.31

受入教員：クリスチャン・ダニエルス／澤田英夫

高城 玲（たかぎ りょう）

研究主題：タイにおける相互行為の人類学的研究

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：西井 涼子

田村 すゞ子（たむら すずこ）

研究主題：アイヌ語をはじめとする危機に瀕した言語の現地調査で起こる問題と記述的研究の課題

研究期間：2014.10.1～2017.9.30

受入教員：山越 康裕

福島 康博（ふくしま やすひろ）

研究主題：マレーシアにおけるイスラーム金融のイスラーム性に関する研究

研究期間：2014.5.1～2017.4.30

受入教員：床呂 郁哉

ジュニア・フェロー

新谷 崇 (あらや たかし)

研究主題：イタリア領東アフリカにおける植民地統治と宗教の問題(1935～1941年)

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：石川 博樹

池田 昭光 (いけだ あきみつ)

研究主題：「移動」への視点——レバノン人に学ぶ

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：黒木 英充

稲山 円 (いなやま まどか)

研究主題：イランにおける女性の宗教実践に関する人類学的研究

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：宮崎 恒二

大島 一 (おおしま はじめ)

研究主題：ハンガリー周辺地域のハンガリー語方言における言語接触

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：塩原 朝子

大塚 行誠 (おおつか こうせい)

研究主題：ミャンマーおよびインド北東部におけるクキ・チン諸語の研究

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：澤田 英夫

勝畑 冬実 (かつはた ふゆみ)

研究主題：エジプトにおける近現代イスラーム改革思想の展開「シャリーアの意図」概念を中心に～

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：飯塚 正人

菅野 美佐子 (かんの みさこ)

研究主題：インド北部におけるジェンダー規範の変容—創造と辞たちのはざまの生活世界—

研究期間：2014.5.1～2016.3.31

受入教員：椎野 若菜

栗田 知宏 (くりた ともひろ)

研究主題：東アフリカ系ブリティッシュ・エイジアンのエスニック・アイデンティティに関する調査研究

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：椎野 若菜

小林 貴之 (こばやし たかゆき)

研究主題：東アジアにおける社会集団の構造と対人関係に関する比較

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：深澤 秀夫

西村 (西野) 範子 (にしむら (にしの) のりこ)

研究主題：ベトナムの国際社会参画時代における内政と対中国関係の変動

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：栗原 浩英

宮本 隆史 (みやもと たかし)

研究主題：近代インド社会における犯罪と刑罰の認識

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：太田 信宏

I-4.2.2 海外調査専門委員会の活動

I-3.2.4 海外調査専門委員会の項を参照

I-4.2.3 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動

I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の項を参照

I-4.2.4 フィールドネット運営委員会の活動

I-3.2.6 フィールドネット運営委員会の項を参照

I-4.2.5 四大学連合文化講演会

2015年10月2日(金)、第10回四大学連合文化講演会が「環境・社会・人間における『安全・安心』を探る」をテーマに、東京医科歯科大学鈴木章夫記念講堂にて開催された。今回世話役として同講演会の組織にあたったのは東京医科歯科大学難治疾患研究所である。

AA研からは「紛争下での安全保障と政治～ガザ戦争後のパレスチナ/イスラエルの攻防～」と題して錦田愛子所員が講演を行った。本年度も昨年同様、日本経済新聞を通して広報を行い、140名の聴衆を集め、好評のうちに幕を閉じた。2016年度は東京工業大学未来産業技術研究所が世話役となって、引き続き「安全・安心」をテーマに文化講演会を行う予定である。

四大学連合文化講演会ウェブサイト：<http://www.aa.tufs.ac.jp/~yondai/>

I-4.3 国際連携研究活動

I-4.3.1 国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等

AA研は、国際的高水準にある所内共同研究の成果を国内外に発信し、海外の研究成果を迅速に取り入れ、あるいは重要な学術的課題や社会的要請の強いテーマに関する国際共同研究の場を創出することを目的として、海外の研究者を招聘する国際シンポジウム、ワークショップ、公開講演会等を積極的に開催している。2015年度においても、国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開講演会のいずれも、著名な研究者の講演に多数の参加者を得て活発な討論を行った。【詳細は資料編 II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧の項を参照】

これら国際研究連携を目指す研究・教育活動の成果は、AA研の刊行している『アジア・アフリカ言語文化研究』や、プロジェクト出版物等の形で順次公刊している。

I-4.3.2 海外研究拠点

I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センターを参照

I-4.3.3 外国人研究員招聘

2015年4月から2016年3月までの期間、以下の6名を招聘した。【業績はI-2.6.2 所員の研究業績一覧の項を参照】

宋華強 SONG, Huaqiang ソウ カキョウ

中華人民共和国 People's Republic of CHINA

滞在期間：2015.9.1～2016.7.31

研究主題：秦簡の言語学的研究

JUKES, Anthony Robert ジュークス, アンソニー ロバート

オーストラリア連邦 Commonwealth of AUSTRALIA

滞在期間：2016.2.1～2016.7.31

研究主題：Training Materials for Documenting Minority Languages in and around Indonesia

CHANROCHANAKIT, Pandit チャンロッチャナキット, パンディット

タイ王国 Kingdom of THAILAND

滞在期間：2015.9.1～2015.12.31

研究主題：The Politics of Aesthetics and Modernity in Thai Contemporary Arts

BADAGAROV, Zhargal Bayandalaevich バダガロフ, ジャルガル バヤンダライエビチ

ロシア連邦 Russian Federation

滞在期間：2015.9.1～2016.3.31

研究主題：北東地域のモンゴル諸語における類型的特点と変化

BOWDEN, Frederick John ボーデン, フレデリック ジョン

オーストラリア連邦 Commonwealth of AUSTRALIA

滞在期間：2015.9.1～2016.3.31

研究主題：ジャカルタで話されている口語インドネシア語の基本的な節の構造のパターンの情報構造の視点による解明

WIERINGA, Edwin Paul ウィーリンハ, エドウィン ポール

オランダ王国 Kingdom of the NETHERLANDS

滞在期間：2015.9.1～2016.3.31

研究主題：Satan's Sermon: A late-19th-century Javanese Elite Objections to the Spirit of the Age

I-4.3.4 外国研究者受け入れ（フェロー等）

2015年度は次の外国研究者の内、7名をフェローとして、また2名をジュニア・フェローとして受け入れた。

【詳細は、資料編 II-4.3.3 外国研究者受け入れ（フェロー等）を参照】

フェロー

研究者氏名：包 聯群 BAO, Lianqun

所属：東京大学大学院 学術研究員, 首都大学東京 非常勤講師

研究主題：言語接触によるモンゴル語の変容：モンゴル語東部方言を中心に

研究期間：2012.4.1～2016.3.31

受入教員：呉人 徳司

研究者氏名：呉 天泰 Wu, Tien-Tai

所属：国立東華大學族群關係與文化系・教授

研究主題：Studies on Indigenous Peoples of Taiwan in the Contemporary Japan

研究期間：2014.8.1～2015.7.30

受入教員：西井 涼子

研究者氏名：BOWDEN, John

所属：Director, マックス・プランク進化人類学研究所, ジャカルタフィールドステーション

研究主題：アトマジヤインドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：塩原 朝子

研究者氏名：JUKES, Anthony

所属：Australian Postdoctoral Fellow, Research Centre for Language Diversity, La Trobe University

研究主題： アトマジャヤインドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集
研究期間： 2013.4.1～2016.3.31
受入教員： 塩原 朝子

研究者氏名： SORIENTE, Antonia
所属： ナポリ東洋大学 講師
研究主題： アトマジャヤインドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集
研究期間： 2013.4.1～2016.3.31
受入教員： 塩原 朝子

研究者氏名： YANTI
所属： アトマジャヤインドネシアカトリック大学 言語文化センター長
研究主題： アトマジャヤインドネシアカトリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集
研究期間： 2013.4.1～2016.3.31
受入教員： 塩原 朝子

研究者氏名： 鄧 応文 Deng Yingwen
所属： 暨南大学東南亜研究所 所長・副教授
研究主題： 冷戦期における日本と東南アジアの関係
研究期間： 2015.5.27～2015.7.24
受入教員： 栗原 浩英

ジュニア・フェロー

研究者氏名： アレズ ファクレジャハニ FAKHREJAHANI, Arezoo
研究主題： イランと中東他国との関係，そして，相違
研究期間： 2014.4.1～2016.3.31
受入教員： 飯塚 正人

研究者氏名： ジュクタルジャ 周 太加
研究主題： 青海近代史—アムドにおけるチベット人の文化活動を手掛かりとして
研究期間： 2015.4.4～2016.3.31
受入教員： 星 泉

共同利用・共同研究拠点としての AA 研は，国際的な共同研究拠点として更なる充実を目指しており，外国人フェロー，ジュニア・フェローや短期招聘研究者を通して，国際共同研究をいっそう発展させてゆく必要がある。その点において本年度は，おおむねその目的を達成したと考えられる。

I-4.3.5 海外学術機関との研究協力協定

オランダ王立言語・地理・民族学研究所 (KITLV)

2014年にAA研との間で学術協力に関する協定を締結し，ジャワ文書研究等を中心とするインドネシア研究の共同研究を進めている。2015年度には共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」においてKITLV所属のWillem van der Molen博士を共同研究員に迎え共同研究を行った。また，2015.10.15～2016.3.31の期間，KITLV所属のウィーリンハ，エドウィン ポール(WIERINGA, Edwin Paul)博士を招聘し，前記のプロジェクトに関する共同研究を行った。その成果の一部は，AA研から二点の出版物 *The Kakawin Ghaṭotkacāsraya by Mpu Panuluh* および *Shaṭṭārīyah silsilah in Aceh, Java, and the Lanao area of Mindanao* として公開されたが，Van der Molen博士はこの編集にも関わった。また，Willem van der Molen博士は2015年度言語研修「古ジャワ語」の主任講師も務めた。

ゾンカ語発展委員会 (DDC) the Dzongkha Development Commission

2013年8月にDDCとAA研との間で学術協力に関する申し合わせ覚書(MoU)を取り交わした。2015年

度には実質的な共同研究活動は実施されなかったが、ゾンカ語発展委員会が 2011 年に出版したゾンカ語・英語辞典をもとにした電子辞典を町田和彦所員が中心となって開発し、現在 IRC のサーバを利用して公開中である。<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学

共同編集による学術雑誌 NUSA の第 58 号を 2015 年 3 月付けで刊行した。編集委員会は東京外国語大学（AA 研所員も含む）3 名、AA 研共同研究員 4 名、アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学教員 4 名他からなる。また、インドネシアの 4 機関（ジャンビ・工科大学、マナド大学、バリ言語センター、ヌサ・チュンダナ大学（クーポン））で AA 研が主催した言語ドキュメンテーションに関する国際ワークショップにアトマ・ジャヤ大学の教員 Yanti 氏を招聘し講師を依頼するなどして研究交流を行った。

オーストリア科学アカデミー (AAS) Österreichische Akademie der Wissenschaften

ダルマキールティの『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第 1 章・第 2 章・第 3 章のサンスクリット校訂テキストの KWIC 索引を完成させ、*Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramā aviniścaya* として 2015 年度に AA 研から電子出版を行った。<http://www.oeaw.ac.at/>

高等コンピューティング開発センター (CDAC) Centre for Development of Advanced Computing

2005 年 6 月に AA 研とインド政府のコミュニケーション・情報技術省直轄の独立行政法人 CDAC: Centre for Development of Advanced Computing との間で正式に取り交わした学術協力に関する申し合わせ覚書 (MoU) に基づき、英語・ヒンディー語・日本語電子辞書開発共同研究プロジェクトを遂行中である。2015 年度は両組織による合同の活動はなかった。日本側の研究成果として、2015 年度暫定版が完成し現在修正・増補が進行中である。ヒンディー語の形態素解析および動詞句解析システムが IRC のサーバを利用して公開中である。http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_08.html

サバ開発研究所 (IDS) Institute For Development Studies (SABAH)

サバ開発研究所 (IDS) との MoU に基づき設置されたコタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO) の主催により日本人研究者による現地講演会 1 件、ならびに日本人とマレーシア人研究者らによる国際ワークショップ 1 件と交換講演会 1 件をコタキナバルで実施した。

<http://www.ids.org.my/current/index.htm>

インドネシア科学院社会文化研究センター (PMB-LIPI) Pusat Penelitian Kemasyarakatan dan Kebudayaan

共同研究等の活動は行っていない。<http://www.pmb.lipi.go.id/>

マックス・プランク進化人類学研究所 (MPI-EVA) Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology

2015 年 8 月にインドネシアの 2 機関（マナド大学とヌサ・チュンダナ大学）で言語ドキュメンテーションワークショップを開催した際、John Bowden 博士 (Jakarta Field Station, MPI-EVA) と Antonia Soriente 博士 (University of Naples "L'Orientale"/MPI-EVA) が参加し講義を行った。

2012 年 10 月に AA 研にて開催した Symposium "Dynamics of Insubordination" の成果論集の編集を引き続きおこなった。この成果論集には、シンポジウムで研究発表をおこなった Bernard Comrie 博士 (MPI-EVA/University of California Santa Barbara) の論考も含まれている。本書は 2016 年 10 月に John Benjamins 社から、Nichols Evans & Honoré Watanabe (eds.), *Insubordination* として刊行が決まっている。2011 年 4 月にマックス・プランク進化人類学研究所でおこなわれたワークショップ "Valency classes in the world's languages" (AA 研、国語研と MPI-EVA の共催、AA 研から 1 名参加) の成果論集が、Bernard Comrie and Andrej Malchukov (eds.), *Valency Classes: A comparative handbook*. 2 Volumes 2, De Gruyter Mouton として刊行された。

なお、マックス・プランク進化人類学研究所の言語学科は 2015 年 5 月をもって閉鎖された。

<http://www.eva.mpg.de/lingua/index.php>

レバノン大学人文科学部第 1 部 (FHS-I-LU)

同大学教授 Massoud Daher 博士からは、JaCMES 諮問委員の一人として JaCMES の活動全般についての助言を受け、他の同大学教授らと交えた非公式の懇談会の場でも研究活動全般に関して情報と助言を受けた。

ベイルート・アメリカン大学

同大学教授 Abdul-Rahim Abu-Husayn 教授には JaCMES 諮問委員を委嘱し、JaCMES の活動全般についての助言を受けた。また同大学元講師の Malek Sharif 博士は共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存 第2期」に共同研究員として参画した。

I-4.3.6 研究未開発言語文化の調査事業

アジア・アフリカを中心とした言語態、地域生成、文化の伝承と形成に関する基礎研究を推進する為に、研究者をアジア・アフリカの各地に派遣し、研究未開発言語文化の研究資源化を推進するとともに、現地研究機関との共同研究体制を整備することを目的とする事業であった「助手投入制度」を見直し、2005年度からそれを発展的に継承した事業である。派遣対象を助手（現助教）に限定せず、所員、研究機関研究員、共同研究員等へと拡大し、研究所の事業計画に基づき柔軟に対応できる態勢にして、2009年度には4名を海外調査に派遣した。2011年度からは「言語研修のための資料収集を目的とした派遣」と「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」の活動の一環としての共同利用・共同研究課題遂行を目的とした共同研究員の派遣の二者に特化して実施することになった。2015年度には「言語研修のための資料収集を目的とした派遣」に関して3名の派遣を実施した。【派遣実施の詳細については、資料編 II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業の項を参照】

I-4.3.7 その他外部資金による国際連携研究

2015年度は特記事項なし。

I-4.4 研究成果の国内外への公開

I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施

本研究所では設立以来、所員および外国人客員研究員がそれぞれの研究成果を口頭で発表する「所内研究会」を開催してきた。その目的は、所員・客員研究員の個人研究に関する所内での相互理解を深め、新たな共同研究の芽を育てていくこと、また質疑応答を通じて研究の一層の深化・発展を図ることにあった。2003年度には研究所改革の一環として、名称を所内研究会から AA 研フォーラムに変更した。発表者を非常勤研究員、内地留学者、フェロー、短期訪問者などにも広げる一方、フォーラム自体を所外に開放し、公開性を高めて今日に至っている。また、2011年度からの新しい試みとして、複数の所員が最新の自身の研究成果および知見を他分野の研究者にもわかりやすい形で紹介する企画も行っている。本年度は所員5名、外国人研究員7名、所外の研究者4名（言語研修の一環としてのフォーラムでの講演）で、計11回のフォーラムを開催した。【詳細は、資料編 II-4.2.4 シンポジウム等の項を参照】

I-4.4.2 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣

グローバル化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の深刻化など、社会環境や国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積の公開に対して一般社会から寄せられる期待は、年々高まっている。このような期待に応えるために、2015年度にも、学会、法務省や警察庁などの各種官公庁、府中市、調布市等の主催する公開セミナー、講演会、公開講座等に所員が出講し、さらに東京外国語大学連携講座、調布市内・近隣大学等公開講座にも所員が出講した。また、AA 研自ら主催したものとして、各種の基幹研究公開講演、フィールドネットラウンジ、FIELDPLUS café などを開催した一方、東京四大学連合文化講演会「環境・社会・人間における『安全・安心』を探る—安全で安心できる社会—」（東京医科歯科大学鈴木章夫記念講堂 2015年10月2日）を共催して、所員が講演を行った。【詳細は、I-4.2.5 四大学連合文化講演会および、資料編 II-4.4.3 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣の項を参照】

I-4.4.3 出版および広報

- ・ 出版については、I-3.3.5 出版担当を参照。
- ・ 広報については、I-3.3.7 広報企画担当を参照。

I-4.4.4 収集資料等の展示・公開

企画展「アジア諸文字のタイプライター展」については、I-3.3.7 広報企画担当を参照。

I-5 成果と課題

I-5.1 2015年度の成果

本研究所における本年度の主な成果は以下の通りである。

1. 本研究所の2つの海外研究拠点、中東研究日本センター（ペイルート）及びコタキナバル・リエゾンオフィスにおいて、臨地共同研究が順調に展開され、共同利用・共同研究機能が強化された。2014年6月にレバノンの隣国であるシリアからイラクにまたがる形でいわゆる「イスラム国」が建国を宣言するなど、中東情勢が極度に悪化したことから、2014年度は中東研究日本センターに常駐させる特任研究員のペイルート派遣を見送ったが、レバノンの治安に一定の安定が見られたため、2015年4月には特任研究員1名のペイルート常駐を再開し、中東研究日本センターの管理・研究・調査に当たらせた。
2. 2013年度より5年間の予定で採択されていた特別経費による国際共同事業「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」（通称：言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2）は、2016年度の第3期中期目標期間開始を前に、2013～2015年度を「改革加速期間」として、国立大学の機能強化の取組を進めるという国の方針により、2015年度末までの3年間に期間を短縮され、2014年度に1800万円強、2015年度も1250万円を超える大幅な予算減に直面したものの、予算の許す範囲で、海外の連携機関と連携しつつ、若手の記述言語研究者の養成に重点を置いた共同研究や研究成果のアウトリーチ（現地還元）活動などを推進した。
3. 共同利用・共同研究課題26件が総計308名（延べ数）の共同研究員の参画を得て、活発に展開された。
4. 2016年度から新規に開始する共同利用・共同研究課題の公募を行った。審査には共同研究専門委員会があたり、応募のあった共同利用・共同研究課題10件すべてを採択した。
5. 本研究所では、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を幾度か議論してきたが、共同利用・共同研究拠点として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という意見（2009年6月25日付）にも応えるべく、基幹研究を策定した（基幹研究の立ち上げに至る経緯の詳細については、I-2.2.1を参照されたい）。2010年度より活動を開始した「言語ダイナミクス科学研究」（言語学）、「人類学におけるミクロマクロ系の連関」（人類学）、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」（歴史・地域）「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」（歴史・地域）の4基幹研究は最終年度となる本年度も引き続き精力的な活動を行う一方、2016年度から始まる第三期中期目標期間に向けて、所内の研究戦略策定委員会とともに将来構想を練り直した結果、第三期中期目標期間にはプロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編のうえ、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明確にする形で、「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（言語学）「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロマクロ系の連関2」（人類学）「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」（歴史・地域）の3つで再出発することとした。
6. これまでに対外的に形成されてきた二つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点及び中東イスラーム研究拠点は既形成拠点として、それぞれの研究活動を継続している。アジア書字コーパス拠点は10月26日から11月27日まで研究所1階の資料展示室で企画展「アジア諸文字のタイプライター展」を開催し、好評を博したほか、研究の一環として構築してきた『パンジャービー語・日本語辞典』『シンハラ語・日本語辞典』を三省堂から出版した。また、中東イスラーム研究拠点は、例年どおり中東☆イスラーム教育セミナー、中東☆イスラーム研究セミナーを実施する一方、わが国の中東研究、イスラーム研究のさらなる振興・発展のため、2016年4月以降は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構（NIHU）のネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」の副中心拠点として活動することとした。
7. 言語研修事業など、運営費交付金に基づく研究・研修事業が順調に進められた。

I-5.2 課題と展望

1964年の創設以来、本研究所はアジア・アフリカの言語と文化を調査・研究する先端的な研究機関として、また人文・社会系では数少ない全国共同利用研究所として、揺らぐことのない一連の重要な研究活動を推進してきた。しかし、2009年度をもって全国共同利用制度が終わりを告げ、2010年度以降は本研究所も他の多数の共同

利用・共同研究拠点との競争にさらされている。そのうえ、2013年11月には文部科学省から「国立大学改革プラン」が提示され、2016年度の第3期中期目標期間開始を前に、2013～2015年度が「改革加速期間」と位置付けられるなか、共同利用・共同研究体制についても、科学技術・学術審議会研究環境基盤部会が今後のあるべき姿を探り、改革に向けた体制の見直しを再検討した審議の報告書「共同利用・共同研究体制の強化に向けて」が2014年度末に公表された。

そこでは、「最先端の研究動向を踏まえる観点から、時限を設けて組織・体制の全面的見直しを検討すること」「IR（インスティテューショナル・リサーチ）機能の強化」「広報体制（専門部署の設置、人員の適切な配置）の整備を進めるとともに、自ら研究機関が情報発信を行う意義や目的を、研究機関の基本方針として明確に定めること」「体制整備に当たっては、研究成果を魅力的に、かつ等身大に発信するマネジメントができる人材を配置することや、各機関等の長が主導し組織としての広報体制を整備すること」「国際公募を実施し、待遇面等について柔軟な人事制度を整えることにより、国内外から卓越した研究者を集め、国際的な研究環境を目指すこと」「特に、海外の研究者向けの国際広報（報道発表や研究所の成果の英語での時宜に適った発信、海外の有力な学術誌等に対し研究成果をアピールできる人材の確保など）を充実させ、国際共同研究の萌芽を着実に育てること」「共同利用・共同研究体制を構成する人事制度（具体的には、内部昇格の制限、シニアポストへの任期制の導入、若手研究者確保に向けたテニユアトラック制度の導入、女性研究者支援のための育児施設の確保、外国人研究者に対するソフト面での支援充実、クロスアポイントメント制度の活用、寄付講座の導入など）を、オープンかつ各機関等の実態に適合した形で、自らルール化し、導入すること」等々、極めて広範な「改革」が求められており、財源の制約はあるにしても、本研究所としても可能なかぎり、こうした提言に対応して行かなくてはならないだろう。

本研究所は、2015年度に実施された過去6年間の期末評価を経て、2016年度から始まる国立大学法人第3期も共同利用・共同研究拠点に認定されたが、その際に提出を求められた期末評価調書では、「第3期中期目標期間に向けた評価」として、「拠点を置く大学（法人）の機能強化・特色化への関わり」を記載することが義務づけられており、本研究所も国際化や大学院教育、人材の流動化などの側面で東京外国語大学の機能強化・特色化への貢献を明白に求められるようになってきている。これにより、大学の垣根を越えた共同利用・共同研究拠点としての本研究所の活動がいささかも揺らぐことはないものの、他方でそれもまた共同利用・共同研究拠点の条件とされ始めた以上、本研究所も東京外国語大学の機能強化・特色化のために一定の貢献をしなくてはならない。この点も、国立大学法人第3期における本研究所の大きな課題となっていくだろう。

とはいえ、こうした外部環境の劇的な変化を別にしても、今日、本研究所はさらなる発展のために、真剣に検討すべきいくつかの課題を抱えている。

1. 本研究所では、基幹研究を立ち上げてから、それまで以上に新規採用にあたって、必要とする人材のプロフィールについて所内での議論、合意を経て、慎重に優れた人材が確保されるように努力を積み重ねてきた。また、任期付きとなった助教職にはテニユア・トラック制度を導入し、2009年度から実施するとともに、制度改善にも努めている。しかし法人化以後、国立大学法人の人件費削減状況は年々厳しさを増していることから、人事採用が行われる機会は従前より減少しており、必要な人材の確保に関して所内合意を形成することも困難になりつつある。2013年度に大学執行部が人件費をポイントに換算して各部局に割り当てる制度を導入したことにより、他部局との人件費の切り分けはクリアになり、研究所として長期的な人事配置方針を策定することも可能になったものの、今後はますます人事採用をめぐる難しい判断を迫られるようになっていくだろう。もちろん、本研究所にとって、いかなる状況にあっても優れた研究者の確保と研究環境の改善が極めて重要な課題であることに変わりはない。少ない採用機会を有効に使うことで優秀な人材を確保するためには、目先の利益の追求に走ることなく、より大局的な視点に立って所内合意を形成していくことがますます重要になるだろう。
2. 国立大学法人の第1期中期目標期間および第2期中期目標期間における本研究所の財政基盤は、文部科学省の特別経費に依存するところが大きかった。第3期中期目標期間にあっても、この構図は基本的に変わりようがないことから、本研究所は2015年度に行った2016年度概算要求に全力で取り組み、拠点活動基盤経費（アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究）と拠点プロジェクト推進経費（アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築）を合わせて、2015年度と同額の特別経費を得ることができたものの、今後も予算の先細りが確実に予想される中で、より明確かつ具体的な研究の方向性と重点領域を設定して、競争的経費の獲得に挑むことがますます重要になっていくだろう。
3. 本研究所が2009年6月25日付で「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という、拠点認定の審議における意見を真摯に受

け止めなければならない。2010年2月に本研究所が基幹研究を策定したことは、この意見に対する一つの回答であったが、本研究所は2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果でも、「今後は、……研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」とのコメントを通達された。これを受けて本研究所では早速、所内の研究戦略策定委員会を中心に研究戦略を見直し、外から見て研究所の「顔」がわかるような研究体制を構築するための所内組織改編に取り組んだ結果、2016年度以降はプロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編し、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明らかにするような形で設定し直したが、研究所の組織・体制に関しては、今後も不断に見直す努力が不可欠と思われる。

4. 国立大学法人運営費交付金の削減等、極めて厳しい予算状況を踏まえ、外国人研究員のあり方についても再検討しなければならない。2010年に共同利用・共同研究拠点に移行したのを機に、2011年度以降は共同利用・共同研究課題を軸に外国人研究員を公募する方針を採ってきたが、その方針の有効性と合わせて、外国人研究員が本研究所に長期滞在する制度が本研究所の共同研究にいかに関与するかなどといった点についても、2016年度中には根本的なところから再検討する必要がある。
5. 2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果では、「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討する……ことが期待される」とのコメントも通達された。本研究所が「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として国際連携を推進するのは当然であり、二つの海外拠点（ペイルート、コタキナバル）の強化・発展はもとより、アジア・アフリカ地域の研究機関との交流、連携の模索や協力の可能性を常に追求してきてはいるものの、今後はそうした国際連携を国際共同研究の優れた研究成果につなげていくための取組をいっそう意識的に推進しなくてはならないだろう。
6. 同じく2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果において、本研究所は2013年度に行われた中間評価結果のフォローアップ状況について「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価を下された。本研究所では、この期末評価のコメントを踏まえ、共同研究課題の応募が増えるように、すでに制度の改編に取り組みつつあるが、今後も共同研究課題制度が研究者コミュニティのニーズをよりいっそう反映し得るような方策を検討し、共同研究が質量ともに充実していくように努める必要があるだろう。
7. 2013年度に研究所全体の活動を見直すべく実施した外部評価で指摘された「修士課程・博士課程を一貫した大学院教育の実施、研究所の特色を生かした、東京外国語大学の大学院教育への参加、あるいはAA研でしか教育できない特徴を打ち出し、独自の「学位プログラム」の構築等、主体的関与の方策」を検討すべし、という提言を真摯に受け止め、今後の大学院教育との関わりを深化させて行く必要もある。本研究所はこれまでも、言語研修や中東☆イスラーム関係セミナーを学部・大学院科目として開講することで東京外国語大学の人材育成に貢献してきたが、2016年度に予定されている大学院前期課程の改組にあたっては、これまで博士後期課程にのみ関わってきた本研究所が新たに「アジア・アフリカ・フィールドサイエンスプログラム」を提供して、東京外国語大学の人材育成に貢献することになる。とはいえ、東京外国語大学大学院の枠内でAA研が独自の修士課程・博士課程一貫コースや「学位プログラム」を持つことは事実上不可能なことも2015年度中には明らかになっており、研究所の特色を生かした大学院教育をいかに展開して行くべきか、あらためて検討しなくてはならないだろう。

II 資料編

II-1 年表

1961年(昭和36年)	日本学術会議が本研究所を設置するよう勧告
1964年(昭和39年)	4月東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足 言語文化第一, インドシナ第一, アフリカ第一部門設置
1965年(昭和40年)	インド第一部門設置
1966年(昭和41年)	東北アジア, アラビア部門設置
1967年(昭和42年)	4月『通信』第1号発刊 2号館竣工(西側半分) AA 研4, 5, 6階に入る 言語文化第二, インドネシア・オセアニア部門設置 共同研究プロジェクトを組織 研究未開発地域の言語文化修得のための助手等のアジア・アフリカへの派遣開始 この年から1973年まで「実験的言語研修」実施 『叢書』第1冊発行
1968年(昭和43年)	4月2号館増築完成 中国第一部門設置 『アジア・アフリカ言語文化研究』(通称『ジャーナル』) 発刊 AA 研教授会規程制定(教授会正式発足)
1969年(昭和44年)	インドシナ第二部門設置
1971年(昭和46年)	トルコ・ウラル部門設置
1972年(昭和47年)	イラン部門設置
1974年(昭和49年)	言語研修事業費が予算化, 東京会場で二言語開始 創立10周年記念式典, 講演会開催
1976年(昭和51年)	言語研修, 関西会場で1言語の研修開始
1978年(昭和53年)	1月メインフレーム・コンピュータ(HITAC M-150)を導入 インド第二部門設置
1979年(昭和54年)	言語文化第三, 中国第二部門設置 公募による短期共同研究員受け入れ開始
1981年(昭和56年)	言語研修, この年以降226時間から150時間に変更
1982年(昭和57年)	モンゴル・シベリア部門設置
1987年(昭和62年)	アフリカ第二部門設置
1991年(平成3年)	4月4大部門制への改組

1992年(平成4年)	4月大学院地域文化研究科博士後期課程設置, 所員15名が兼担
1993年(平成5年)	UNIXワークステーションのサブシステムをメインフレームに付加する形で導入 インターネットの利用開始
1994年(平成6年)	創立30周年記念式典, 講演会, シンポジウム, 公開セミナー開催
1995年(平成7年)	4月「中核的研究機関支援プログラム」による卓越した研究拠点(COE)に指定 創立30周年記念公開講座開催
1997年(平成9年)	4月情報資源利用研究センター, AA研に付属する形で設置(教官, 客員教官純増各 1名, 教官振替増4名)
1998年(平成10年)	4月情報資源利用研究センター運営費予算化
2000年(平成12年)	4月事務一元化により事務部が廃止され, 事務局研究協力課が事務を担当
2001年(平成13年)	6月中核的研究拠点形成(COE)プログラムとして「アジア書字コーパス拠点」が 認定(～2005年度)
2002年(平成14年)	2月西ヶ原から府中キャンパスへ移転 7月科学研究費特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」 (文化資源学)採択(～2006年度)
2004年(平成16年)	4月東京外国語大学, 国立大学法人になる
2005年(平成17年)	4月複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置 4月フィールドサイエンス研究企画センターを設置 4月中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始(～2009年度)
2006年(平成18年)	2月中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設 10月文部科学省委託研究・世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業「東南 アジアのイスラーム」を開始(～2010年度)
2007年(平成19年)	4月副所長職を設置
2008年(平成20年)	3月コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州のコタキナバルに開設 4月文部科学省特別経費によるプロジェクト「急速に失われつつある言語多様性に 関する国際研究連携体制の構築」を開始(～2012年度)
2009年(平成21年)	6月共同利用・共同研究拠点として認定される(2010年4月から6年間)。2009年 度をもってこれまで55年間続いた「全国共同利用」という制度が廃止される
2010年(平成22年)	4月文部科学省により認定された共同利用・共同研究拠点(拠点名:アジア・アフ リカの言語文化に関する国際的共同研究拠点)に移行
2012年(平成24年)	4月国立大学附置研究所・センター長会議会長機関を担当(～2013年3月)
2013年(平成25年)	文部科学省特別経費により「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの 新展開:プロジェクト(LingDy2)」を開始
2014年(平成26年)	10月創立50周年記念講演・シンポジウム・記念式典, 関連諸事業を実施

II-2 予算・組織・機構

II-2.1 研究所の予算

II-2.1.1 2015(平成27)年度予算

項目	金額 (単位：千円)	備考
運営費交付金	249,301	常勤職員人件費を除く
科学研究費補助金	113,856	間接経費除く
受託研究・受託事業等		該当なし
寄付金等		

II-2.1.2 運営費交付金（2015年度）

2015（平成27）年度 運営費交付金予算額（常勤職員人件費を除く）

区分	予算額 (千円)	
一般経費（研究費）	142,716	
特別経費	アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究	55,299
	言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開	29,266
学長裁量経費	22,020	
計	249,301	

2015（平成27）年度 運営費交付金予算額配分状況

経費名	配分額 (千円)	
個人研究費	8,817	
客員研究費	2,340	
基幹研究	言語ダイナミクス科学研究 同上（学長裁量経費）	* 20,512 4,980
	人類学におけるミクロ-マクロ系の連関 同上（学長裁量経費）	966 1,770
	中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成 同上（学長裁量経費）	* 8,904 3,270
	アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求	980
	既形成拠点	アジア書字コーパス拠点（GICAS） 中東イスラーム研究拠点
IRC経費	4,832	
FSC経費	* 11,230	
言語研修経費（学長裁量経費）	12,000	
研究未開発言語文化派遣	1,253	
成果等刊行経費	* 12,317	
広報企画経費	3,528	
基礎データ経費	1,744	
共同利用・共同研究課題経費	* 18,240	

文献資料経費	* 3,467
共通経費	2,572
国際研修集会	1,494
外部委員経費	* 3,400
会議等経費	486
所長裁量経費	1,959
研究機関研究員／特任研究員人件費	* 47,334
外国人研究員人件費（招へい・帰国旅費含む）	37,464
派遣職員／非常勤職員経費	22,910
予備費	9,367
計	249,301

補足：「*」を付した項目は、その一部あるいはすべてを特別経費により実施する。

II-2.1.3 科学研究費補助金

以下の金額は、直接経費のみ（間接経費除く）。

	研究種目	予算額 (千円)
科学研究費補助金	基盤研究 (A) (海外, 一般含む) (6件)	46,000
	基盤研究 (B) (海外, 一般含む) (8件)	28,400
	基盤研究 (C) (14件)	11,856
	挑戦的萌芽研究 (2件)	1,800
	若手研究 (A) (1件)	2,700
	若手研究 (B) (10件)	8,900
	研究活動スタート支援 (1件)	1,000
	研究成果公開促進費 (1件)	10,200
	特別研究員奨励費 (3件)	3,000
	計 46件	113,856

II-2.1.4 受託研究・受託事業等

2015(平成27)年度は該当事項なし。

II-2.1.5 寄付金等

2015(平成27)年度は該当事項なし。

II-2.2 外部委員リスト

II-2.2.1 運営委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
井野瀬久美恵	甲南大学文学部	教授
宇山 智彦	北海道大学スラブ研究センター	教授
栗林 均	東北大学東北アジア研究センター	教授
小林 正人	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
佐藤 洋一郎	京都産業大学	教授
清水 展	京都大学東南アジア研究所	教授
棚橋 訓	お茶の水女子大学教育学部	教授

西尾 哲夫	国立民族学博物館	教授
渡邊 興亜	総合研究大学院大学	名誉教授
飯塚 正人	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・所長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・副所長
中山 俊秀	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・情報資源利用研究センター長
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・フィールドサイエンス研究企画センター長
栗原 浩英	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.2 共同研究専門委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
井上 優	麗澤大学外国語学部	教授
倉沢 愛子	慶應義塾大学	名誉教授
杉山 祐子	弘前大学人文学部	教授
速水 洋子	京都大学東南アジア研究所	教授
藤代 節	神戸市看護大学看護学部	准教授
横山 伊徳	東京大学史料編纂所	教授
吉澤誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
米田 信子	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
飯塚 正人	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・所長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・副所長
中山 俊秀	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・情報資源利用研究センター長
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・フィールドサイエンス研究企画センター長
栗原 浩英	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.3 研修専門委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
岸田 文隆	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
久保 智之	九州大学大学院人文科学府	教授
南田 みどり	大阪大学大学院言語文化研究科	名誉教授
吉田 和彦	京都大学大学院文学研究科	教授
呉人 徳司	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
塩原 朝子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

芝野 耕司	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
中見 立夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
山越 康裕	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.4 海外調査専門委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
伊藤 元己	東京大学大学院総合文化研究科	教授
梅崎 昌裕	東京大学大学院医学系研究科	准教授
岡本 正明	京都大学東南アジア研究所	教授
木村 秀雄	東京大学大学院総合文化研究科	教授
窪田 順平	総合地球環境学研究所研究部	教授
曾我 亨	弘前大学人文学部	教授
高樋 さち子	秋田大学教育文化学部	准教授
藤田 耕史	名古屋大学環境学研究所	准教授
本山 秀明	国立極地研究所	教授
蓮井 和久	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科	講師
石川 博樹	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
太田 信宏	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
佐久間 寛	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
西井 涼子	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
錦田 愛子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
山越 康裕	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会（任期：2015年4月1日～2017年3月31日）

区分	所属	職名
飯田 卓	国立民族学博物館	准教授
大村 敬一	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授
川田 牧人	成城大学文芸学部	教授
木村 大治	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	教授
黒田 末寿	滋賀県立大学	名誉教授
湖中 真哉	静岡県立大学国際関係学部	教授
小松 かおり	静岡大学大学院人文社会科学領域	教授
高倉 浩樹	東北大学東北アジア研究センター	教授
長沼 毅	広島大学大学院生物圏科学研究科	教授
野林 厚志	国立民族学博物館	教授
塩原 朝子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
西井 涼子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.6 フィールドネット運営委員会（任期：2015年4月1日～2017年3月31日）

区分	所属	職名
海老原 淳	国立科学博物館植物研究部	研究主幹
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系	准教授
竹ノ下 祐二	中部学院大学教育学部	准教授
田邊 優貴子	国立極地研究所	助教
津田 浩司	東京大学大学院総合文化研究科	准教授
長野 宇規	神戸大学大学院農学研究科	准教授
太田 信宏	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
山越 康裕	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.7 編集専門委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

区分	氏名	所属	職名
人類学	石川 登	京都大学東南アジア研究所	准教授
言語学	岩田 礼	金沢大学大学院人間社会環境研究科	教授
歴史学	濱田 正美	京都大学／龍谷大学	名誉教授／教授
言語学	森口 恒一	静岡大学人文学部	教授
歴史学	吉澤 誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
人類学	和崎 春日	中部大学国際関係学部	教授
言語学	伊藤 智ゆき	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
言語学	呉人 徳司	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
歴史学	近藤 信彰	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
歴史学	陶安 あんど	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
人類学	椎野 若菜	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
人類学	深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.8 国際諮問委員会（任期：2015年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
ADELAAR, K. Alexander	Asia Institute, University of Melbourne	Principal Fellow
BADAGAROV, Zhargal Bayandalaevich	Department of Philosophy of Central Asia, Buryat State University	Assoc. Prof.
BOWDEN, Frederic John	Jakarta Field Station, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology	Indonesia Director
CHANROCHANAKIT, Pandit	Faculty of Political Science, Ramkhamhaeng University	Assis.Prof.
JUKES, Anthony Robert	Australian Research Council	Postdoctoral Fellow
OLMEZ, Mehmet	Yildiz Technical University	Professor
SONG, Huaqiang	The School of History, Wuhan University	Assoc. Prof.

THUFAIL, Fadjar Ibnu	Indonesian Institute of Sciences	Senior Researcher
WIERINGA, Edwin Paul	Department of Oriental Studies, University of Cologne	Professor
WORSLEY, Peter John	Sydney University	Prof. Emeritus
ZHU, Dongqin	Huaqiao University	Researcher
伊藤 智ゆき	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
河合 香吏	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
近藤 信彰	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.9 海外拠点専門委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
内堀 基光	放送大学教養学部	教授
奥田 敦	慶應義塾大学総合政策学部	教授
酒井 啓子	千葉大学法経学部	教授
私市 正年	上智大学アジア文化研究所	教授
長沢 栄治	東京大学東洋文化研究所	教授
保坂 修司	財団法人日本エネルギー経済研究所 中東研究センター	研究理事／中東研究センター 副センター長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
塩原 朝子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・FSC 長

II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会（任期：2014年4月1日～2016年3月31日）

氏名	所属	職名
ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim	Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut	Professor
AZAR, Pierre	Japan Academic Center, Universite Saint-Joseph de Beyrouth	Director
DAHER, Massoud	Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University	Professor
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.3 内部委員会・業務担当

II-2.3.1 内部委員一覧

企画運営委員会 2015.4.1～2017.3.31（2カ年）

（選出） 渡辺己, 栗原浩英, 深澤秀夫

（指定） 飯塚正人（所長）, 黒木英充（副所長）, 中山俊秀（IRC 長）, 床呂郁哉（IRC 長）,
近藤信彰（研究戦略策定委員長）

研究戦略策定委員会 2015.4.1～2017.3.31（2カ年）

（選出） 近藤信彰（委員長）, 澤田英夫, 星泉, 太田信宏, 西井涼子, 河合香吏

(指定) 飯塚正人 (所長), 黒木英充 (副所長), 中山俊秀 (IRC 長), 床呂郁哉 (IRC 長)

共同研究専門委員会 2015.4.1-2017.3.31 (2 カ年)

飯塚正人 (所長), 黒木英充 (副所長), 中山俊秀 (IRC 長), 床呂郁哉 (IRC 長)

II-2.3.2 各種業務分担 任期: 2015.4.1~2016.3.31 (1 カ年)

文献資料 (図書) 担当

荒川慎太郎 (担当長), 石川博樹

国際交流担当

渡辺己 (担当長), 近藤信彰, 河合香吏, 伊藤智ゆき (フォーラム担当)

編集担当

深澤秀夫 (担当長), 椎野若菜, 近藤信彰, 陶安あんど, 伊藤智ゆき, 呉人徳司

出版担当

峰岸真琴 (担当長), 高島淳, 陶安あんど

広報企画担当 (『FIELDPLUS』, 広報物制作, 企画展担当)

太田信宏 (担当長), 高松洋一 (『FIELDPLUS』編集長), 西井涼子, 星泉, 河合香吏, 石川博樹, 錦田愛子, 荻谷康太, 佐久間寛

基礎データ担当 (要覧, ウェブサイト担当, 年次報告書)

小田淳一 (担当長/Web 管理者), 澤田英夫 (要覧・Web 担当長), 西井涼子 (要覧), 児倉徳和 (要覧), 椎野若菜 (要覧), 町田和彦 (要覧), 星泉 (年次報告担当長), 錦田愛子 (年次報告), 山越康裕 (年次報告)

*ただしウェブサイトの改善に関しては, 基礎データ全員でかかわることとする。

研修担当

塩原朝子 (担当長), 中見立夫, 芝野耕司, 呉人徳司, 山越康裕

II-2.3.3 全学委員一覧

大学本部会議等	会議等名	氏名		任期
	理事・副学長会議	宮崎恒二	役職指定委員	2015.4.1-2016.3.31
	学長室会議	宮崎恒二	役職指定委員	2015.4.1-2015.3.31
	研究活動に関わる不正防止計画推進本部	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31

全学会議・委員会等	会議・委員会等名	氏名		任期
	経営協議会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	教育研究評議会	宮崎恒二	役職指定委員	2015.4.1-2016.3.31
		飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		黒木英充	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	情報公開・個人情報保護委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	ハラスメント防止委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		塩原朝子	選出委員	2015.5.21-2017.5.20
	ハラスメント相談員	山越康裕	選出委員	2015.5.21-2017.5.20
		西井涼子	選出委員	2015.5.21-2017.5.20
	情報マネジメント委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		中山俊秀	委員 (委員長指名)	2015.4.1-2017.3.31
	基金委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	苦情処理委員会	高松洋一	選出委員	2015.4.1-2017.3.31

	(苦情処理相談員)			
	危機管理委員会	飯塚正人	委員(学長指名)	2015.4.1-2017.3.31
	国際交流会館運営委員会	河合香吏	選出委員	2014.4.1-2016.3.31
		椎野若菜	選出委員	2014.4.1-2016.3.31

全学各室	室名	氏名		任期
	特命事項担当室	宮崎恒二	室員	2013.4.1-2016.3.31
	点検・評価室	栗原浩英	室員	2015.4.1-2017.3.31
		澤田英夫	室員	2015.4.1-2017.3.31
	広報マネジメント室	星 泉	室員	2015.4.1-2017.3.31
	施設マネジメント室	伊藤智ゆき	室員	2015.4.1-2017.3.31
	男女共同参画推進室	黒木英充	室員	2015.4.1-2016.3.31
全学本部・基盤	全学本部・基盤等名	氏名		任期
	国際学術戦略本部	宮崎恒二	室長	2015.4.1-2017.3.31
		近藤信彰	室員	2015.4.1-2017.3.31
	社会・国際貢献基盤(社会貢献部門)	錦田愛子	部門員	2015.4.1-2015.3.31
	経営戦略情報本部	栗原浩英	本部長	2015.4.1-2017.3.31
	学術情報基盤(学術情報部門)	宮崎恒二	基盤長・部門長	2015.4.1-2016.3.31
		荒川慎太郎	部門員	2015.4.1-2017.3.31
学術情報基盤(情報基盤部門)	小田淳一	部門員	2013.4.1-2016.3.31	
	澤田英夫	部門員	2013.4.1-2016.3.31	

総合戦略会議	専門部会等名	氏名		任期
	総合戦略会議	宮崎恒二	役職指定委員	2015.4.1-2016.3.31
		飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	将来構想専門部会	飯塚正人	役職指定委員	
	研究アドミニストレーション・オフィス	飯塚正人	役職指定委員	
人事・財務マネジメント・オフィス	飯塚正人	役職指定委員		

全学センター等運営委員会・その他	運営委員会等名	氏名		任期
	学術情報基盤委員会	宮崎恒二	委員長	2015.4.1-2016.3.31
		飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	文書館運営委員会	宮崎恒二	役職指定委員	2015.4.1-2016.3.31
		飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	東京外国語大学出版会運営委員会	AA 研所員の参画はなし		
	国際日本研究センター運営委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	多言語・多文化教育研究センター運営委員会	AA 研所員の参画はなし		
		保健管理センター運営委員会	飯塚正人	役職指定委員
		呉人徳司	選出委員	2014.4.1-2016.3.31
大学院協議会	澤田英夫	選出委員	2015.4.1-2017.3.31	

II-3 研究活動の詳細

II-3.1 センター

II-3.1.1 情報資源利用研究センター

センター長： 中山俊秀

副センター長： 澤田英夫

センター員： 小田淳一，高松洋一，荻谷康太，児倉徳和

1. アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化の推進

本年度は以下のプロジェクトを支援し、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を引き続き推進した。

1) 「ベンデ語の語学教材 (“Tusahule Sibhende”(2015)) のマルチメディア (Web) 版の作成」 (新規プロジェクト)

代表者：阿部優子

プロジェクト参加者：澤田英夫

公開 URL：<http://bendeproject.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語：英語，ベンデ語，スワヒリ語

内容の説明： 現地コミュニティのために作成したベンデ語の学習教材で，音声，映像，簡単なベンデ語語彙集（ベンデ語－スワヒリ語－英語－日本語）などを含む。

今年度の活動： 既存の紙媒体での教材に，音声や映像をつけてオンライン教材化する作業を進めた。また，現地コミュニティでは，近年，スマートフォンが普及し始めていることから，今後，スマートフォン版への移行を考えている。

2) 「インド洋民話のDB化」

代表者：小田淳一

プロジェクト参加者：

Marie-Anick Gence (マリー＝アニック・ジャンス：レユニオン精神衛生公共法人)

Isabelle Cillon (イザベル・シヨン：レユニオンの職業的語り手)

Live Yu-Sion (リヴ・ユ＝シオン：レユニオン大学)

公開 URL：http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html

コンテンツの主要言語：日本語（一部オリジナルのテキスト）

内容の説明： インド洋西域で採話した民話（及びライフヒストリー）を日本語に訳したものである。将来的には S.トンプソンの索引カタログに準拠したモチーフ索引を作成し，それを検索キーとしたデータベースの構築を目標としている。

今年度の活動： レユニオンで採話したライフヒストリー1編の邦訳，パリ近郊で行ったコモロ移民への聴き取り調査の邦訳，パリ INALCO でコモロ人の言語学者と民話学者へのインタビュー，パリでコモロ人の歴史家に対して行ったインタビューの邦訳を行った。

3) 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」

代表者：奥田統己

プロジェクト参加者：山越康裕

公開 URL：<http://ainugo.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語：アイヌ語，日本語

内容の説明： 田村すゞ子氏により採録されたアイヌ語資料のオンライン版である。対応する日本語訳が付されたアイヌ語（カタカナ表記・ローマ字表記）を見ながら，ポーズによる切れ目ごとに音声を聞くことができる。

今年度の活動： 昨年度公開した資料に加え，新たに4編のテキストを追加した。既公開資料同様，テキストは行番号・話者情報・アイヌ語カタカナ表記・アイヌ語ローマ字表記・日本語訳・注釈の6行立てで構成されており，アイヌ語カタカナ表記と日本語訳を除く4行については必要に応じて表示を隠せるよう整えた。

4) 「電子辞書プロジェクト」

代表者：高島淳

プロジェクト参加者：峰岸真琴

公開 URL：<http://www.aa-ken.jp/edic/jmd/>

コンテンツの主要言語：マラヤーラム語

内容の説明： インド共和国ケーララ州 (Kerala) の公用語であり、ドラヴィダ語族の主要言語の一つであるマラヤーラム語 (Malayalam or Malayali 話者人口はおよそ 3000 万人) について、編纂中の『日本語マラヤーラム語辞典』を電子化して、電子辞書として公開するもの。

今年度の活動： 2012 年度までに構築したマラヤーラム語電子辞書に 4200 か所あまりの修正がナンビヤール氏から寄せられたのでその修正を 2014 年度に行ったが、その過程でさらに約 1800 か所の要修正項目が発見されたため、それらを修正し、2015 年 11 月半ばから電子辞書のデータを更新して公開している。

5) 「モンゴル文語・満洲文語辞書の電子化利用に関する研究」(新規プロジェクト)

代表者：栗林均

プロジェクト参加者：町田和彦

公開 URL：http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_20.html

コンテンツの主要言語：モンゴル語、満洲語、中国語、日本語

内容の説明： 清代満洲語の辞典 5 種類の見出し語および本文をローマ字転写で検索するデータベース。満洲語の語釈、漢語対訳、モンゴル語対訳 (ローマ字転写)、日本語訳解を含む。一部の辞典では検索によってヒットした項目の掲載されている原本の頁を画像で参照することができる。

今年度の活動： 清代モンゴル語の辞典 5 種類についても、上記満洲語の辞典と同様の作業を行っている。具体的には、データの入力および、画像ファイルの作成、辞書データおよび公開用 html データとしての加工、それらの点検作業である。

6) 「ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析」(新規プロジェクト)

代表者：町田和彦

プロジェクト参加者：萩田博、萬宮健策

公開 URL：http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/etym_hirdu/2015.html

コンテンツの主要言語：ヒンディー語、ウルドゥー語、英語

内容の説明： ヒンディー語 (デーヴァナーガリー文字) とウルドゥー語 (アラビア文字) の語句を、形態素レベルで、辞書の見出し語形と接辞に自動解析する。解析に成功した見出し語形に対し語源情報を付加して表示するシステム。

今年度の活動： ヒンディー語とウルドゥー語合わせて 2 万強の見出し語の語源情報を確定し語源情報辞書を入力した。2014 年度終了した IRC プロジェクト「ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析」で開発された解析プロセスに、今回の語源情報辞書を最終段階で参照させるプロセスを加えた。入力外注したヒンディー語雑誌の記事は、解析の実験用サンプルとして使用した。

7) 「ハウサ語、ヨルバ語電子辞書の作成と公開」

代表者：塩田勝彦

プロジェクト参加者：町田和彦

公開 URL：http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/IRC/2013/Hausa_Yoruba/Hausa_Yoruba_dic.html

コンテンツの主要言語：ハウサ語、ヨルバ語、英語

内容の説明： ハウサ語とヨルバ語の語彙集および入力資料の全文検索をおこなうことができる。

今年度の活動： 2015 年度はハウサ語およびヨルバ語のデータを補強した。

8) 「ソンガイ語テキスト集の電子化と公開」

代表者：佐久間寛

公開 URL：<http://songhay.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語：ソンガイ語、英語、日本語

内容の説明： 資料作成者が 2004 年から 07 年にかけてニジェール共和国西部で採録したソンガイ語

による農村部住民の語りを，同国教育省の定める正記法 (Arrete N°02152/MEN/SPCNRE du 19 Octobre 1999 fixant l'orthographe de la langue SONAY-ZARMA)に基づいて転写し，英訳および邦訳を付したものである。

今年度の活動： 2014年度に引きつづきソングアイ語の音声資料の転写と邦訳及び英訳を作成し，データベースを更新した。

9) 「オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化」(新規プロジェクト)

代表者：江川ひかり

公開 URL： <http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>

コンテンツの主要言語：日本語

内容の説明： 19世紀にオスマン朝時代のイスタンブルで上演された演劇のポスターおよびプログラムのデータベース。地区，上演年，劇団名，原作者で検索が可能。検索結果をクリックすると，該当する画像を拡大して見ることもできる。

今年度の活動： 20年前に公開したままになっていたサイトの内容を見直し，不具合を解消するとともに，新たに序文を追加した。

10) 「アラビア文字等紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開」

代表者：高松洋一

公開 URL： <http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/>

コンテンツの主要言語：英語(計算ページ)・日本語(解説)

内容の説明： アラビア文字による紀年銘(クロノグラム)をウェブ上で計算するツールである。ウィンドウにアラビア文字の文字列を入力またはペーストしてボタンをクリックすると，各文字に割り当てられた数値を合計し，計算結果を数式で表示する。

今年度の活動： 計算プログラムのバグを修正した。iOSへの対応を行ない，iPhone用のボタン入力サイトを用意した。またiPadでアラビア文字がつながらずに一文字一文字バラバラに表示される不具合を修正した。

11) 「チュルク諸語対照基礎語彙(第2期)」

代表者：児倉徳和

プロジェクト参加者：風間伸次郎

公開 URL： <http://turkbv.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語：チュルク諸語(トゥヴァ語・ハカス語)，日本語，英語

内容の説明： チュルク諸語の基礎語彙を対照して見ることのできる音声付検索可能データベース。現在トゥバ語(3方言のべ5話者)とハカス語(5方言のべ7話者)のデータが閲覧可能。音声はそれぞれのセルをクリックすると再生される。

今年度の活動： 2014年度に行った第1期に引き続き，最終的にチュルク諸語全体の基礎語彙データベースの作成を目標とするも，資料の整理状況に鑑み，今年度はハカス語の延べ7名分のデータを整理し，公開することとした。

12) 「言語データベースツール」(新規プロジェクト)

代表者：渡辺己

公開 URL： <http://ilcaa-lingtools.aa-ken.jp>

コンテンツの主要言語：日本語

内容の説明： 言語データ用データベースプログラム

今年度の活動： 言語データを格納，検索などできるデータベースを作成した。

13) 「Toolbox データのウェブ公開用ツール」

代表者：渡辺己

公開 URL： <http://ilcaa-lingtools.aa-ken.jp>

コンテンツの主要言語：日本語

内容の説明： SIL Toolboxのデータをウェブ公開できるようにhtmlに変換するプログラム。

今年度の活動： 2014年度はスライアモン語のテキストをウェブ公開するため，本ツールの作成を開始したが，2015年度はこのツールがより汎用的に使えるように改良し，ツール自体の公開を

することとした。

2. ワークショップの開催

IRC ワークショップは、所内外の主に若手研究者を対象に、蓄積した研究成果・手法を発信し、普及させることを目的とするもので、このワークショップによって発信される研究成果・手法に関心を持つ参加者自身の研究を促進し、そうした研究者を募って共同研究を組織し、ひいては、その研究成果を核とした研究分野の形成・発展を促すことが期待されている。2015年度に開催したワークショップは以下の通り。

- 1) IRC 国際ワークショップ「レユニオン島—混成の調和を有する複雑なフランスの南半球領土」(2015年4月7日, AA 研セミナー室 (301))
講演者: マリー=アニック・ジャンス (人類学, レユニオン精神衛生公共法人)
- 2) IRC 国際ワークショップ「アフリカ史再構成のための神話学への統計学の応用」(2016年2月3日, AA 研マルチメディア会議室 (304))
講演者: ジュリアン・デュイ (神話学, エコール・サントラル・パリ)
- 3) IRC ワークショップ「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える: 言語体系を例に」(2016年3月4日, AA 研セミナー室 (301))
ディスカッサント: 阿部 明典 (千葉大学文学部行動科学科教授)
伊藤 克彦 (京都大学医学研究科分子病診療学准教授)
内海 彰 (電気通信大学大学院情報理工学研究科教授)
村井 源 (東京工業大学大学院理工学研究科価値システム専攻助教)
森 浩禎 (奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科教授)

II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

センター長: 床呂郁哉

副センター長: 太田信宏

フィールド研究班: 深澤秀夫 (班長), 太田信宏, 荻谷康太, 石川博樹, 山越康裕, 佐久間寛

連携地域研究班: 黒木英充 (班長), 塩原朝子, 西井涼子, 床呂郁哉

1. 研究手法の開発

フィールドサイエンスの研究手法を開発し、洗練させるべく、6月27日(土)の「海外学術調査フォーラム」にて、海外学術調査ワークショップ「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション—あつめる・はかる・かぞえる—」を開催した。難波 紘二 (鹿鳴荘病理研究所・広島大学/病理学) による講演「科学研究と不正—STAP 事件をめぐって」、及び黒木 英充 (AA 研/歴史学) による講演「破壊されゆく都市の記録と記憶—19世紀アレppoの人口と空間」を実施した。I-3.2.4 海外調査専門委員会を参照

また、小規模の人数でより集中的に議論をおこなう公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキアム」について、2010年度組織面・制度面での整備を進めて海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキアム運営委員会」を中心に、コロキアムの企画・運営体制を強化するとともに、所内では基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」との連携を進めた。2015年7月10日(金)及び同年12月26日(土)にコロキアム「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」を連続ワークショップとして基幹研究人類学班との共催で計2回開催した。

2. 新たな研究ネットワークの形成

フィールドネットでは学術連携および交流を目的とするウェブ上における所属や研究分野を超えた交流の場を提供すると共に、公募の結果採択した「フィールドネット・ラウンジ」を次のように2回開催した。第1回ワークショップ「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家: 20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」(2016年1月9日(土)開催)。第2回ワークショップ「装い/社会/身体: フィールドワーカーによる通文化比較研究」(2016年1月10日(土)開催)。

3. 現地研究拠点

本研究所では、アジア・アフリカをめぐる研究状況と学術的戦略構想に鑑み、ベイルート (レバノン) とコタキナバル (マレーシア) に研究拠点を設置して国際共同研究などの活動を続けている。ベイルートについては、レバノン政府の閣議決定による認可を得て 2006年2月に正式に中東研究日本センター Japan Center for Middle Eastern Studies (略称 JaCMES) を発足させ、コタキナバルについても 2008年3月にコタキナバル・リエゾンオフィス Kota Kinabalu Liaison Office (略称 KKLO) を設置して活動を開始した。現

在はフィールドサイエンス研究企画センターが両拠点の維持・運営にあたっている。

中東研究日本センター (JaCMES)

- 2015年9月3日(木)及び4日(金)にJaCMESにて共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第2期)」第1回(通算第4回目)研究会を開催した。
- 2015年11月27日(金)にJaCMESにて公募の結果選抜した4名の若手研究者を派遣し、第10回研究報告会“Middle East and Islamic Studies in Japan: The State of the Art”を開催した。各人に対して海外の大学関係者にコメンテータを依頼し、研究報告に対する批判・助言・意見を含む討論を行った。
- 2016年2月16日(火)及び17日(水)にAA研にて共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第2期)」第2回(通算第5回目)研究会を開催した。
- 2016年3月10日(木)にJaCMESにて研究会“Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Groups in the Middle East”を共催で実施した。
- 2016年3月21日(月)にJaCMESにてJaCMES諮問委員会をレバノン人の委員3名を招いて開催した。
- 2016年3月22日(火)にバイルート市内にて映画“Lebanon 1949: The Newborn State on Film”と題したドキュメンタリー映像上映とラウンドテーブル講演講演を実施した。

コタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO)

- 2015年7月5日(日)にAA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により第1回ワークショップを実施した。
- 2015年9月7日(月)マレーシア・サバ大学においてボルネオの言語研究とマレー語研究の過去と現在に関するワークショップが実施された。
- 2015年9月27日(日)にコタキナバル市内のホテル会場において、共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により東南アジアの文化多様性に関する第2回ワークショップを開催し、日本側、ならびにマレーシア側から研究者などが参加した。
- 2016年1月9日(土)にコタキナバル日本人学校において邦人向け講演会を開催し、坪井祐司(AA研機関研究員)がマレーシアの歴史と社会に関する講演を行った。
- 2016年2月21日(日)AA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により第3回ワークショップを実施した。
- 2016年3月21日(月)にコタキナバルのマレーシア・サバ大学(UMS)においてアジア・アフリカの文化と社会に関する現地講演会を開催した。日本から若手研究者3名、マレーシア側から2名の研究者が講演し、UMSの研究者や学生らも交えた質疑応答も行った。

4. 海外学術調査総括班活動

- 2015年6月27日(土)に海外学術調査フォーラムを開催した。
- 海外学術調査ワークショップ「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション—あつめる・はかる・かぞえる—」
 1. 「科学研究と不正—STAP事件をめぐって」
難波紘二(鹿鳴荘病理研究所・広島大学/病理学)
 2. 「破壊されゆく都市の記録と記憶—19世紀アレポの人口と空間」
黒木英充(AA研/歴史学)
- 以下7つの地域に分かれた地域別分科会を開催、及び、日本学術振興会研究助成第一課長を招いて、3会場において「科学研究費補助金の執行について」質疑応答を実施した。
 - ・ 大陸部東南アジア
 - ・ 島嶼部東南アジア・太平洋
 - ・ 東アジア
 - ・ 南アジア・西アジア・中央アジア・北アフリカ
 - ・ 北米・中南米
 - ・ 極地・北ユーラシア・ヨーロッパ
- 科研費海外学術調査研究代表の研究者を中心に全国から117名の参加を得た。また、海外学術調査フェスタと称する文理融合型の共同研究についてのポスター発表の場を設け12件の展示を得た。
- 3月29日(火)に海外調査専門委員会を開催し、海外学術調査フォーラムの今後の具体的な方向性や、フィールドサイエンス・コロキウム及びフィールドネットの運営状況などについて審議した。

5. 地域研究コンソーシアムとの連携

10月31日(土)、11月1日(日)に2015年度年次集会・シンポジウムをAA研で開催し、シンポジウムに計3名の所員が司会・パネラーとして参加したほか、コンソーシアム幹事組織として運営に関わり、先導的な役割を果たした。

II-3.2 共同利用・共同研究課題

II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況

複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性

研究期間：2013–2015 代表：中山俊秀／所員 4, 共同研究員 16)

所員：澤田英夫, 塩原朝子, 渡辺己

共同研究員：青井隼人, 大島一, 大堀壽夫, 加藤昌彦, 加藤重広, 下地理則, 鈴木亮子, 高橋康德, 巽智子, 長崎郁, 中山久美子, 西村義樹, 柳村裕, 吉岡乾, Sandra Thompson, Tsuyoshi ONO

研究会等の内容

第1回研究会 2015年12月6日(日) 12:30–18:00

- 【発表】・下地理則(九州大学)：「叙述と修飾—言語運用からみた伊良部方言の形容詞」
・吉岡乾(国立民族学博物館)：「ブルシヤスキー語の長短差のある自由変異に踏み込む算段」

【ディスカッション】テーマ：文法体系の動的体系性に着目した言語研究の進め方

第2回研究会 2016年1月31日(日) 13:00–18:30

- 【発表】・下地理則(九州大学)：『節は語彙素になりうるか—伊良部方言の分格を含む節—』
・加藤重広(北海道大学)：『形態統語論的な規則の拮抗について』

【オープンディスカッション】

第3回研究会 2016年3月22日(火) (13:00–18:00); 3月23日(水) (10:00–15:00)

- 【発表】・加藤昌彦(大阪大学)「ポー・カレン語の動作主非焦点化再考」
・高橋康德(神戸大学)「上海語偏重の通時変化と音韻解釈」
・青井隼人(日本学術振興会・国立国語研究所)「舌端母音の発展メカニズム」
・中山俊秀(東京外国語大学AA研)「話しことばが新たに拓く文法研究を考える」

【オープンディスカッション】

研究成果一覧

〔学術論文〕計14件

1. 加藤重広「構文推意の語用論的分析—可能構文を中心に—」『北海道大学文学研究科 紀要』146, 2015. 259–294.
2. 加藤重広「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15巻2号, くろしお出版, 2015. 48–64. (査読有)
3. 加藤重広「発話的な効力と発話内的な効力—日本語の疑問形式を出発点に—」『日本語語用論フォーラム1』, ひつじ書房, 2015. 27–56. (査読有)
4. 加藤重広「日本語の情報構造と語用論的選好」『情報科学と言語研究』, 現代図書, 2015. 43–64.
5. 加藤昌彦「ポー・カレン語の名詞句」『シナ=チベット系諸言語の文法現象1 名詞句の構造』, 京都大学人文科学研究所, 2016. 95–112.
6. 渡辺己「対照研究で読み解く日本語の世界—スライアモン語の他動詞化接尾辞」『日本語学』Jan-35, 2016. 70–80.
7. 鈴木亮子「会話における動詞由来の反応表現—「ある」と「いる」を中心に—」『コミュニケーションのダイナミズム：自然発話データから』藤井洋子・高梨博子編, pp.63-84. 2016年3月. ひつじ書房, 2016. 63–84. (査読有)
8. Asako Shiohara, “The definite marker in Balinese”, *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*, ILCAA, TUFS, 2015. 141–159.
9. 吉岡 乾「ブルシヤスキー語の動詞語幹と他動性」『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, くろしお出版, 2015. 321–334. (査読有)

10. 井上史雄・柳村裕,「外行語の世界分布地図—Google Trends データの因子分析—」『明海日本語』20, 2015. 1-10. (査読有)
11. 井上史雄・柳村裕,「外行語世界分布の国別因子分析—Google Trends による傾向—」『計量国語学』30-2, 2015. 73-97. (査読有)
12. 大島一「コーパスから見たハンガリー語の自他動詞」『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの—』, くろしお出版, 2015.12. 401-414. (査読有)
13. 大島一「(連用修飾的): 複文»:ハンガリー語」『語学研究論集』No.20, 東京外国語大学語学研究所, 2015.11. 133-142. (査読有)
14. 大島一「オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー語話者の言語状況について」『ウラリカ』No.16, 日本ウラル学会, 2015.8. 55-71. (査読有)

[口頭発表等] 計 22 件

1. Ono, Tsuyoshi; Nakayama, Toshihide; Suzuki, Ryoko, “Fixedness and unithood in Miyako and Japanese conversation: An exploration into the emergence of structure and interaction”, International Pragmatics Association, 2015.07.30. Antwerp, Belgium
2. Nakayama, Toshihide, “Noun Phrases in Discourse: Why and how might they be interesting”, JSPS-Academy of Finland Bilateral Joint Research Project, 2016.3.12. Keio University
3. Nakayama, Toshihide, “Noun Phrases in Nuuchahnulth: Their place in grammar and discourse”, JSPS-Academy of Finland Bilateral Joint Research Project, 2016.3.12. Keio University
4. 中山俊秀「話しことばが新たに拓く文法研究を考える」, シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 4」, 2016.3.25. 東京工科大学
5. 加藤重広「動的な文脈設定と線条的語用論の試み」, 京都語用論コロキウム, 2016.3.13. 京都工芸繊維大学
6. SAWADA, Hideo, “On the simplex-causative verb pairs in Lhaovo”, the 25th meeting of Southeast Asian Linguistic Society, 2015.5.29. Payap University, Chiang Mai, Thailand
7. SAWADA, Hideo, “A preliminary report of Lhangsu patois of Lhaovo in central Kachin State”, the 48th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2015.8.21. University of California, Santa Barbara, California, USA
8. 澤田英夫「ロンウォー語複動詞構造の構成素性テスト」, 2015 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2016.3.6. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館)
9. Suzuki, Ryoko and Tsuyoshi Ono, “The use of frequent verbs as reactive tokens in Japanese everyday talk: Formulaicity, florescence, and grammaticization”, NINJAL International Symposium on Grammaticalization in Japanese and across languages, 2015.7.3. 国立国語研究所
10. Thompson, Sandra A. and Ryoko Suzuki, “The connector so in English Conversation: what does it connect?”, The 14th International Pragmatics Conference, 2015.7.29. University of Antwerp, Belgium.
11. 大野剛・鈴木亮子. 「会話と定型性」, 第 11 回話しことばの言語学ワークショップ, 2015.8.22. 慶応義塾大学日吉キャンパス.
12. Ryoko Suzuki, “NP Symposium: Introduction”, International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction, 2016.3.12. 慶応義塾大学日吉キャンパス.
13. Ono, Tsuyoshi and Sandra Thompson, “Japanese NPs in Everyday Talk: a Discourse Profile”, International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction, 2016.3.12. 慶応義塾大学
14. 新永悠人・青井隼人「久高島方言の特殊な舌頂音の静的パラトグラフィー調査報告」, 2015 年度 (第 38 回) 沖縄言語研究センター公開研究発表会, 2015.7.4. 琉球大学
15. 青井隼人「多良間方言の三型アクセント」, 第 29 回日本音声学会全国大会, 2015.10.4. 神戸大学
16. Yoshioka, Noboru, “Noun Modifying Expressions in Eastern Burushaski”, International workshop on Noun Modifying Expressions in South Asian Languages, 2015.12.22. Deccan College
17. 吉岡乾「ドマーキ語の言語状況について—消滅の危機に瀕した北パキスタンの印欧語—」, 日本南アジア学会 第 28 回大会, 2015.9.27. 東京大学
18. 吉岡乾「ブルシャスキー語の空間参照枠」, 日本言語学会 第 150 回大会, 2015.6.20. 大東文化大学
19. Yoshioka, Noboru, “On the Copulae of Languages in Northern Pakistan”, 2nd Kashmir International Conference on Linguistics, 2015.5.5. The University of Azad Jammu and Kashmir
20. Takahashi, Yasunori, “Phonological representation of pitch fall in Shanghai tone sandhi”, The 23rd Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics, 2015.8.26. Hanyang University
21. Tomoko Tatsumi, Julian M. Pine & Ben Ambridge, “Predicting past and non-past errors in the acquisition of Japanese verb inflection”, Boston University Conference on Language Development, 2015.11.15. Boston University

22. OSHIMA, Hajime, “The Functional Meaning of Associative Plural in Hungarian: Contrast with the Burgenland Dialect of Hungarian in Austria”, The 12th International Congress for Finno-Ugric Studies, 2015.8.19. University of Oulu, Finland

〔図書〕計2件

1. 加藤昌彦『ニューエクスプレス ビルマ語』, 白水社, 2015. 全166頁.
2. 西山 敏樹・常盤 拓司・鈴木 亮子 (著)『アカデミックスキルズ 実地調査入門: 社会調査の第一歩』, 慶応義塾大学出版会, 2015. 全140頁.

〔社会に向けた成果発表〕計2件

1. 加藤重広「辞書は現代語にいかにかに寄り添うか」『文學』2015年9-10月号, 岩波書店, 2015. 17-32.
2. 大島一「ハンガリー語: 日本語と似ているところ, 違うところ」『言葉とその周辺をきわめる3』, 東京外国語大学語学研究所, 2015. 51-70.

通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造

研究期間: 2013-2015 (代表: 内海敦子/所員 1, 共同研究員 19)

所員: 塩原朝子

共同研究員: 稲垣和也, 大角翠, 小野正樹, 片桐真澄, 加藤重広, 菊澤律子, 北野浩章, 月田尚美, 長屋尚典, 西山國雄, 野瀬昌彦, 野元祐樹, 三宅良美, 吉田朋彦, 米田信子, Anja Latrouite, Daniel Kaufman, František Kratochvíl

研究会等の内容

第1回研究会 (国内, 通算7回目) 2015年5月10日 (日) 開催

John BOWDEN, 北野浩章, 塩原朝子, 降幡正志, 内海敦子各氏が統語的特徴と情報構造, 名詞の形態的特徴と情報構造について発表し, その後全員で議論した。

第2回研究会 (国内, 通算8回目) 2015年10月25日 (日) 開催

米田信子, 吉田朋彦, 月田尚美, 野元裕樹, John BOWDEN 各氏が情報構造の影響により特定の構文が選ばれたり, 指示詞が情報ステータスにからんでどう用いられているかを発表し, 全員で議論した。

第3回研究会 (国際, 通算9回目) 2016年2月18日~20日開催

Arndt RIESTER, Stefan BAUMANN, James Sneed GERMAN, Sonja RIESBERG, Nikolaus P. HIMMELMANN, 内海敦子, 三宅良美, John BOWDEN, Anja LATROUITE, 長屋尚典, Hyun Kyung Hwang, Liselotte SNIJDERS, Shirley N. DITA, 北野浩章, 月田尚美, 塩原朝子, I Wayan Arka, Rik De BUSSER の各氏が, 情報構造が与えるプロンディへの影響, 情報ステータスを分析する際の理論的な方法論, その具体的応用について発表した。

研究成果一覧

〔学術論文〕計17件

1. Naomi Tsukida, “Ditransitive alignment and causative construction in Seediq”, *New Advances in Formosan Linguistics*, Taipei: Academia Sinica, 2015. 223-251. (査読有)
2. Midori Osumi, “La Grammaire du Tiri (Tinrin)”, *traduit par Thierry Boucquey*, Nouméa: l’Académie des Langues Kanak, in press (査読有)
3. 三宅良美「インドネシア語における人称指示と定性」『秋田大学教育文化学部研究紀要「人文社会科学」』71巻, 2016. 9-13.
4. Atsuko Utsumi, “Topic-marking Constructions in Bantik”, *Proceedings for the second workshop on information structure of Austronesian languages*, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 42-51.
5. 内海敦子「Bantik 語の Pluractional Verb—意味分析と用例—」『明星大学研究紀要—人文学部—日本文学学科』23号, 明星大学, 2015. 330-344.
6. 内海敦子「北スラウェシ州の民話の分類」『言語と文化』21号, 日本インドネシア学会, 2015. 67-75.
7. 月田尚美「セデック語の不定詞構文」『日本語学』34号7, 2015. 68-76. (査読有)
8. 長屋尚典「ラマホロット語のアスペクト辞 morō の二つの解釈と話者の知識」『東京外国語大学論集』91号, 2015. 57-68. (査読有)
9. 長屋尚典「ラマホロット語の自他交替」『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, 東京: くろしお出版, 2015. 189-204. (査読有)

10. Naonori Nagaya, "Perfect in Tagalog", *Southeast Asian Studies TUFUS* 21 号, 東京外国語大学, 2016. 1-14. (査読有)
11. 野瀬昌彦「ニューギニア系言語アメリ語における香辛料・ハーブの語彙と味覚語彙に関する言語学的分析」『彦根論叢 (滋賀大学経済学部紀要)』405 号, 滋賀大学, 2015. 46-57.
12. Masahiko Nose, "Borrowing temporal expressions in New Guinea languages: a contrastive study of loanwords", 『東北大学言語学論集』24 号, 東北大学, 2016. 95-104.
13. 小野正樹「言い換え表現と配慮表現から見たトートロジー表現について」『日本語コミュニケーション研究論集』5 号, 日本語コミュニケーション研究会, 2016. 19-30. (査読有)
14. 小野正樹「慣習化された日本語配慮表現の発想」『日本語用論学会大会研究発表論文集』10 号, 2015. 311-314. (査読有)
15. Kazuya Inagaki, "Discourse and information structure in Kadorih", *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2015. 27-39.
16. 稲垣和也「インドネシア語の所有構文」『インドネシア 言語と文化』22 号, 日本インドネシア学会, 77-99.
17. Kazuya Inagaki, "Clause combining in Kadorih", *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 59, Atma Jaya Catholic University of Indonesia. 3-20. (査読有)

[口頭発表等] 計 18 件

1. Yoshimi Miyake, "Definiteness and referencing with -nya, ini, itu, and dia/ia", International Symposium on Malay-Indonesian Linguistics, 2015.06.13. Novita Hotel, Jambi, Sumatra, Indonesia.
2. Yoshimi Miyake, "Narrating the experience of encountering ghosts/spirits in Javanese", International Pragmatics Association (IPrA), 2015.06.26-30. University of Antwerp.
3. Yoshimi Miyake, 「インドネシア異文化体験ジョークのメタ・プラグマティクス」, 第 46 回日本インドネシア学会, 2016.11.14-15. 京都外国語専門学校
4. Atsuko Utsumi, "Sun: Austronesian", AA 研共同研究課題「アジア地理言語学研究」第 2 回研究会, 2015.12.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
5. Atsuko Utsumi, "Milk: Austronesian", AA 研共同研究課題「アジア地理言語学研究」第 3 回研究会, 2016.02.29. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
6. Anthony Jukes, Atsuko Utsumi, Takashi Nakagawa, "Directional and Relative Height Terms in Sangiric Languages", 13th International Conference on Austronesian Linguistics, 2015.7.21. Academia Sinica: Taiwan
7. Atsuko Utsumi, "Potential and Accidental Verbs in Sangiric Languages", 13th International Conference on Austronesian Linguistics, 2015.7.18. Academia Sinica: Taiwan
8. 内海敦子「インドネシア・フィリピンの諸言語における情報構造の分析」, 第 150 回日本言語学会, 2015.06.20. 大東文化大学板橋キャンパス
9. Naomi Tsukida, Complementation strategies in Seediq, 13th International Conference on Austronesian Languages, 2015.07.22. Academia Sinica: Taiwan
10. 長屋尚典「タガログ語の naka-結果状態構文」, 第 150 回日本言語学会, 2015.06.20. 大東文化大学板橋キャンパス
11. Naonori Nagaya, "Possession and nominalization in Lamaholot", 13th International Conference on Austronesian Languages, 2015.7.19. Academia Sinica: Taiwan
12. Naonori Nagaya, "Affectedness and volitionality: The case of Tagalog", Affectedness Workshop 2015: Verb Classes and the Scale of Change in Affected Arguments, 2015.13-14. Nanyang Technological University, Singapore
13. 長屋尚典「意志と知識: タガログ語のヴォイス現象」, 成蹊大学アジア太平洋研究センター・研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として—」2015 年度第 2 回研究会, 2015.10.11. 成蹊大学アジア太平洋研究センター
14. 長屋尚典「使役と事象構造: 重なる使役, 繰り返す使役」, 日本言語学会第 151 回大会ワークショップ パネル, 2015.11.29. 名古屋大学
15. Naonori Nagaya, "The Tagalog ano 'what': From interrogative to discourse marker", Workshop on Discourse Markers and Discourse Connectives in Several Languages, 2016.01.13. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
16. 小野正樹「言い換え研究から見たトートロジー表現」, ウズベク共和国学術会議「翻訳・翻案と日本文化—テキストの世界展開をめぐる—」, 2016.03.16. タシケント国立東洋学大学 (ウズベキスタン共和国タシケント市)

17. 稲垣和也「インドネシア語における所有」, 京都大学言語記述研究会第 65 回例会, 2015.9.27. 京都大学文学部
18. 稲垣和也「インドネシア語の所有構文」, 第 46 回日本インドネシア学会大会, 2015.11.15. 京都外国語専門学校

〔図書〕計 2 件

1. 中村渉(編)・佐々木冠・野瀬昌彦(共著)『認知日本語学講座 6 認知類型論』, くろしお出版, 2015. 全 352 頁.
2. 岩波書店辞典編集部: 野瀬昌彦分担執筆『世界の名前』, 岩波書店(岩波新書), 2016. 全 256 頁.

〔社会に向けた成果発表〕計 5 件

1. Atsuko Utsumi, “Dialectal Differences in the Talaud Language”, Workshop on Language Documentation at Manado, Manado State University, 2015.8.6-7.
2. 内海敦子「インドネシアに見る国家とイスラム教」, 明星大学公開講座, 明星大学, 2015.10.3.
3. 長屋尚典「フィリピン料理—やさしい国のおいしい料理—」『世界を食べよう!—東京外国語大学の世界料理—』, 東京: 東京外国語大学出版会, 2015. 70–75.
4. 長屋尚典「フィリピンの言葉は繰り返す」『東京外国語大学オープンアカデミー 2014 年度後期開講講座『言葉とその周辺をきわめる 3 活動報告書』, 東京: 東京外国語大学 語学研究所, 2016. 71–93.
5. 長屋尚典「項目」「アラインメント」「意志性」「一致」「格」「空間参照枠」「屈折・派生」「形態素」「形態論」「形態論的プロセス」「形容詞」「言語類型論」「語」「項 構造」「語順」「語類」「主語」「所有」「数」「数詞」「接近可能性の階層」「接語」「接辞」「側置詞」「重複」「動詞」「動詞化」「フィリピン・タイプ」「文法関係」「名詞」「名詞化」「有標性」「連続体」, 『明解言語学辞典』, 東京: 三省堂

〔その他: オンラインリソースなど〕計 1 件

北野浩章 書評『やりとりの言語学—関係性思考がつなぐ記号・認知・文化』(著) N.J.エンフィールド(監修) 井出祥子(訳) 横森大輔・梶丸岳・木本幸憲・遠藤智子 大修館書店 2015.]

日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究

研究期間: 2013–2015 (代表: 角田三枝 / 所員 2, 共同研究員 7)

所員: 星泉, 児倉徳和

共同研究員: 梅谷博之, 海老原志穂, 大塚行誠, 桐生和幸, 千田俊太郎, 角田太作

研究会等の内容

第 1 回研究会 (2015 年 5 月 9・10 日) では, これまでの調査結果をふまえて, 本プロジェクト全体としてはどのようなことが言えるか, また, 個々の言語では「思考プロセス」に関してどのようなことがわかるかということを中心に検討を行った。以下の発表を行った。

- ① 海老原志穂 (AA 研共同研究員・AA 研研究機関研究員)「アムド・チベット語の調査結果見直し 2」
- ② 角田三枝 (AA 研共同研究員・立正大学)「統計結果の報告」
- ③ 角田三枝 (同上)「調査結果の概要, 思考プロセスとの関係」
- ④ 星泉 (AA 研所員)「カム・チベット語と思考プロセス」
- ⑤ 児倉徳和 (AA 研所員)「シベ語と思考プロセス」
- ⑥ 千田俊太郎 (AA 研共同研究員・京都大学)「朝鮮語と思考プロセス」
- ⑦ 梅谷博之 (AA 研共同研究員・AA 研特任研究員)「モンゴル語と思考プロセス」
- ⑧ 桐生和幸 (AA 研共同研究員・美作大学)「ネワール語と思考プロセス」
- ⑨ 大塚行誠 (AA 研共同研究員・東京外国語大学)「ビルマ語と思考プロセス」

第 2 回研究会 (2015 年 12 月 5・6 日) では, 年度末に予定している公開ワークショップを念頭に, そこで発表する内容を中心に検討した。以下の発表を行った。

- ① 海老原志穂 (AA 研共同研究員・AA 研研究機関研究員)「アムド・チベット語の調査結果見直し 3 と発表準備」
- ② 児倉徳和 (AA 研所員)「シベ語と「思考プロセス」」
- ③ 角田三枝 (AA 研共同研究員・立正大学)「「思考プロセス」と本プロジェクトによる発見・発表準備」
- ④ 星泉 (AA 研所員)「カム・チベット語と「思考プロセス」」

- ⑤ 千田俊太郎 (AA 研共同研究員・京都大学) 「朝鮮語と「思考プロセス」
- ⑥ 梅谷博之 (AA 研共同研究員・AA 研特任研究員) 「モンゴル語と「思考プロセス」
- ⑦ 角田太作 (AA 研共同研究員・国立国語研究所名誉教授) 「一般言語学における本プロジェクトの成果の位置づけ」

第3回研究会 (2016年1月23・24日) の1日目は、公開ワークショップとし、AA 研において研究発表を行った。また、二日目は、研究内容についてディスカッションおよび、今後の成果発表 (論文や書籍) について話し合った。公開ワークショップでの発表内容は、以下のとおりである。

- (1) 「日本語のノダに類する文末表標識の通言語的研究・調査結果と発見」
角田三枝 (AA 研共同研究員・立正大学非常勤講師)
- (2) 各言語におけるノダ文相当表現
「朝鮮語」千田俊太郎 (AA 研共同研究員・京都大学)
「アムド・チベット語」海老原志穂 (AA 研共同研究員・AA 研研究機関研究員)
「カム・チベット語」星泉 (AA 研)
「シベ語」児倉徳和 (AA 研)
「モンゴル語」梅谷博之 (AA 研共同研究員・AA 研特任研究員)
「ビルマ語」大塚行誠 (AA 研共同研究員・東京外国語大学非常勤講師)
「ネパール語」桐生和幸 (AA 研共同研究員・美作大学)
- (3) 「本プロジェクトの一般言語学と類型論における貢献」
角田太作 (AA 研共同研究員・国立国語研究所名誉教授)

研究成果一覧

〔口頭発表等〕計1件

Kiryu, Kazuyuki, “Grammaticalization of nominalizer constructions in Tibeto-Burman languages”, NINJAL International Symposium: Grammaticalization in Japanese and Across Languages, 2015.7.3. 国立国語研究所

〔図書〕計1件

星泉『古典チベット語文法：『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 全 xviii+295 頁.

“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ

研究期間：2014-2016 (代表：星泉/所員 1,共同研究員 7)

共同研究員：海老原志穂, 津曲真一, 平田昌弘, 別所裕介, ジャブ, ジュ・カザン, ナムタルジャ

ウェブサイト：<http://home.hiroshima-u.ac.jp/gyamtso/>

研究会等の内容

第1回研究会 (通算第4回目) 2015年6月6日 (土)・7日 (日)

6月6日 (土) (1)ビジネスミーティング (全員)

- (2)研究会 津曲真一「放生 (ツェタル) の宗教的意義」(AA 研共同研究員・東京理科大ほか)
- 別所裕介『チベット牧畜辞典』第一部に関する提案 (AA 研共同研究員・広島大学)
- 山口哲由「自然利用技術としての牧畜」(研究協力者・農業環境技術研究所)
- 海老原志穂「家畜の名称の語彙項目検討」(AA 研共同研究員・研究機関研究員)

(3)講演 小川康「チベット医学と牧畜」(ゲストスピーカー チベット医学・薬草研修センター)

6月7日 (日) (1)研究会 平田昌弘「乳加工の語彙項目検討」(AA 研共同研究員・帯広畜産大学)

小川龍之介「肉・骨の語彙項目検討」(研究協力者・帯広畜産大学)

星泉「家事労働に関する語彙項目検討」(AA 研)

別所裕介・津曲真一「宗教に関する語彙調査報告」

(2)ビジネスミーティング (全員)

第2回研究会 (通算第5回目) 2015年10月31日 (土)・11月1日 (日)

10月31日 (土) (1)ビジネスミーティング (全員)

(2)研究会 海老原志穂「忘却されていく牧畜語彙」

津曲真一「家畜と宗教儀礼の変遷」

山口哲由「牧畜技術の変遷：放牧地私有化の前後の比較」
平田昌弘「中国青海省におけるアムド系牧畜民の乳加工体系の柔軟性」
星泉「おいしくて健康なバターを追求して：ある牧畜民の発明」
別所裕介「家畜を肉にする前に：ゲワチュをめぐり商品経済」

(3)講演：阿部治平・古橋武 ゲストスピーカー・上游会デルゲル基金
「青海省における乳製品のイノベーション」

11月1日(日) (4)研究会：チベット牧畜辞典の編集作業について(全員)

第3回研究会(通算第6回目) 2016年3月26日(土)・27日(日)

3月26日(土) (1)研究会 海老原志穂「忘却されていく牧畜語彙2」

津曲真一「家畜と宗教儀礼の変遷2」

山口哲由「牧畜技術の変遷：放牧地私有化の前後の比較2」

平田昌弘「中国青海省におけるアムド系牧畜民の乳加工体系の柔軟性2」

星泉「おいしくて健康なバターを追求して：ある牧畜民の発明2」

別所裕介「ツァルのリフォーム：チベットの伝統的な衣装と現代におけるイノベーション」

3月27日(日) (2)研究会 全員『チベット牧畜辞典』の編集作業について

研究成果一覧

[学術論文] 計7件

1. 平田昌弘・ナムタルジャ・小川龍之介・海老原志穂・津曲真一・別所裕介・星泉「中国青海省のアムド系チベット牧畜民の乳加工体系：青海省東部の定住化遊牧世帯と農牧複合世帯の事例から」, *Milk Science* 64-1, 2015. 7-13. (査読有)
2. 海老原志穂「アムド・チベット語の名詞句構造」『シナ=チベット系諸言語の文法現象1 名詞句の構造』, 京都大学人文科学研究所, 2016. 3-13.
3. 津曲真一“Meaningful to Behold: A Translation of Longchenpa's Biography with Explanatory Notes 2”, 『駒沢女子大学研究紀要』22, 駒沢女子大学, 2015. 173-187.
4. 津曲真一「「良き死」の諸相：アジアの伝統宗教の立場から」『死生学年報2016：生と死に寄り添う』, 東洋英和女学院大学死生学研究所, 2016. 7-26.
5. 別所裕介「現代チベットにおける民族運動と『不殺生』の位相—アムド地方におけるラカルの実践の事例から—」『「周縁」を生きる少数民族—現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』, 勉誠出版, 2015. 3-32. (査読有)
6. Bessho, Yusuke, “Migration for Ecological Preservation?: Tibetan Herders' Decision-Making Process Regarding the Eco-Migration Policy in Golok”, *NOMADIC PEOPLES* 19-1, White Horse Press, 2015. 189-208. (査読有)
7. 別所裕介「現代チベットの牧畜社会を対象とした「家畜慣行の60年史」作成」『財団法人三島海雲記念財団研究報告書』51, 2015. 180-183.

[口頭発表等] 計6件

1. 平田昌弘「人類にとってのミルク利用の意義：その起源と発達」, 東北大学東北アジア研究センター創設20周年記念国際シンポジウム, 2015.12.5. 東北大学
2. 星泉「チベット牧畜民の言語と文化を追いかけて」, フィールド言語学カフェ, 2015.11.23. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
3. 星泉「チベット牧畜民の女の仕事：乳と糞のある暮らし」, 東京外国語大学×府中市 連続講座「暮らしの空間と女性」, 2016.3.22. 府中市生涯学習センター
4. Ebihara, Shiho, “How Tibetan People Cognize Yaks: A Study on Lexicons for cognizing Yaks in Amdo Tibet”, The 4th International Seminar of Young Tibetologists, 2015.9.9. University of Leipzig
5. 海老原志穂「チベット牧畜地域でのフィールドワーク」, フィールド言語学ワークショップ, 2016.3.24. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
6. Bessho, Yusuke, “From ‘Ethnic Culture’ to ‘Ecological Culture’: New-reformed concept of ‘Primitive Religion’ in Contemporary Tibet”, 4th International Seminar of Young Tibetologists, 2015.9.8. University of Leipzig

[図書] 計1件

チベット文学研究会(星泉・海老原志穂他)(編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 vol. 3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 全174頁.

〔社会に向けた成果発表〕計16件

1. 平田昌弘「牧畜民の乳文化」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 33-39.
2. 平田昌弘「乳のある食事」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 40-41.
3. 星泉「糞利用の達人」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 25-28.
4. 星泉「火を囲む暮らし：かまどからストーブへ」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 29-32.
5. 星泉『「さよならテルロン谷」失われゆく牧畜の暮らしへの鎮魂歌』『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 80-83.
6. 海老原志穂「チベット人はヤクをどのように認識しているのか?」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 12-18.
7. 海老原志穂「家畜の毛にささえられた牧畜民の暮らし」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 19-21.
8. 海老原志穂「家畜民の「家」：テント」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 22-24.
9. 海老原志穂「「去る者」と「戻る者」：「夏の草原」と「牧畜民の子」」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 54-56.
10. 海老原志穂「牧畜とことわざ」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 64-65.
11. 海老原志穂『「チュラ」：チベット人女性たちの愛情の物語』『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 84-88.
12. 津曲真一「チベットの放生：ツェタル」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 48-49.
13. 津曲真一「焚き上げと信仰」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 45-47.
14. 別所裕介「持てる者と持たざる者の相克—冬虫夏草バブルが現代牧畜社会にもたらしたもの」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 48-51.
15. 別所裕介『「ヤルツァ・エコノミー」—現代牧畜社会における『冬虫夏草経済圏』とその周辺』『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 60-61.
16. 星泉「慈悲、誇り、故郷」『ピエリア』8, 東京外国語大学出版会, 2016. 24-25.

〔その他：オンラインリソースなど〕計1件

星泉『チベット牧畜語彙データベース』<http://nomadic.aa-ken.jp/>

青海チベットの牧畜語彙の調査記録を公開する。現在は主に非公開の共同編集用データベースが稼働中で、本サイトではデータの一部のみを公開している。準備が整い次第、一般公開予定。(2015年作成)

インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築

期間：2014-2016年度（代表：塩原朝子／所員 2 共同研究員 19）

所員：渡辺己

共同研究員：阿部優子, 稲垣和也, 内海敦子, 長崎郁, 長屋尚典, 三宅良美, Alexander Adelaar, Anthony Jukes, Antoinette Schapper, Antonia Soriente, Frantisek Kratochvil, Hendrik Paat, I Wayan Arka, John Bowden, Katubi, Ketut Artawa, Rik de Busser, Sonja Riesberg, Yanti

研究会等の内容

第1回研究会（通算第4回目）日時：2016年1月23日（土）10:00-17:30

阿部優子（AA研共同研究員・AA研特任研究員）

「言語調査成果還元を試み—タンザニア・ベンデ語教科書のケーススタディ」

ビジネスミーティング（活動報告と来年度の計画策定）、各自のウェブページ作成作業

第2回研究会（通算第5回目）日時：2016年2月15日（月）14:00-17:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室(306) 使用言語：英語

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) “Phonological Structure of Jambi Malay”

Dominikus Tauk (Udayana University) “Language Documentation of Helong Language, Timor, Indonesia”

第3回研究会(通算第6回目)日時：2016年3月19日 10:00-17:00

John Bowden (AA 研外国人研究員) “The Directional System of North Maluku Malay”

Anthony Jukes (AA 研外国人研究員) “Linguistic Enfranchisement”

ビジネスミーティング(活動報告と来年度の計画策定), 各自のウェブページ構築作業

インドネシアにおけるワークショップ(本プロジェクトの企画により LingDY2 経費で開催)

- Workshop on Language Documentation at Jambi, Sumatra (Politeknik Jambi, Indonesia) (2015年6月15・16日)
- Workshop on Language Documentation at Manado (Manado State University, Indonesia) (2015年8月6・7日)
- Language conservation and documentation: Reasons, Opportunities and Challenges (The University of Nusa Cendana, Indonesia) (2015年8月10~12日)
- Workshop on Language Documentation (Denpasar Language Center, Indonesia) (2015年8月26・27日)

研究成果一覧

[口頭発表等] 計6件

1. Asako Shiohara, “Constructing a Network for Documenting Minority Languages in Indonesia”, International Conference on Language, 2015.11.26. LIPI (インドネシア科学院)
2. Asako Shiohara, “Documenting Sumbawa Language with the Sumbawa "Bungaku" Association”, 国際ワークショップ: Endangered Languages: dialect variation and linguistic Identity, 2016.3.16. 東京外国語大学 語学研究所
3. Antonia Soriente and Ilaria Micheli, “Oral Tradition as a field of research in HG History, Language and Identity. Case studies from Africa and Indonesia”, Conference on Hunter Gatherers societies CHAGS XI, 2015.9.7-11. University of Vienna
4. Antonia Soriente, “Foundations of language documentation and experience in Borneo”, Workshop on language documentation at Universitas Cendana Kupang, 2015.8.6-7. Universitas Negeri Manado
5. Antonia Soriente, “Language documentation and language endangerment”, Workshop on language documentation at Universitas Cendana Kupang, 2015.8.10-12. Universitas Cendana Kupang
6. Antonia Soriente, “Oral traditions and Language documentation”, Workshop on language documentation at Denpasar Language Center, 2015.8.28-29. Denpasar Language Center

[社会に向けた成果発表] 計3件

1. 稲垣和也「インドネシアの無文字世界：文字とことばを無文字から考える」, 神戸市外国語大学オープン・セミナー2015後期「教養講座II『アジアの文字とことばの世界』」, 神戸市外国語大学
2. 塩原朝子「話者コミュニティによる少数言語の記録活動を育てる」『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 20160120. 16-17.
3. 長屋尚典「フィリピン料理—やさしい国のおいしい料理—」, 沼野恭子(編)『世界を食べよう!—東京外国語大学の世界料理—』, 東京外国語大学出版会, 2015. 70-75.

朝鮮語アクセント・イントネーション研究

研究期間：2014-2016 (代表：伊藤智ゆき/所員 1, 共同研究員 7)

所員：伊藤智ゆき

共同研究員：宇都木昭, 姜英淑, 孫在賢, 福井玲, 李文淑, Clemens Poppe, John Whitman

研究会等の内容

第1回研究会(通算第4回目)日時：2015年7月11日(土) 14:00-17:10

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア会議室(304)

ソ・ミンジョン(東京外国語大学・大学院生)「大邱方言におけるアクセント類型によるピッチの実現」

John WHITMAN (AA 研共同研究員・国立国語研究所) “Tonogenesis in Korean then and now”

第2回研究会(通算第5回目)日時：2015年12月19日(土) 13:00-17:10

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所セミナー室(301)

孫在賢(AA 研共同研究員・徳成女子大学)「大邱方言の用言のアクセント」

黄賢暎(国立国語研究所) “Interaction between focus prosody and wh-scope marking”

姜英淑(AA 研共同研究員・松山大学)「韓国光陽地域方言におけるアクセントの多様性」

早田輝洋（九州大学元教授）「上代日本語の母音脱落—母音の広狭を条件としない見方—」

第3回研究会（通算第6回目）日時：2016年3月12日（土）13:30-17:10

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディアセミナー室(306)

李美姫（東京大学・大学院生）「韓国語釜山方言の外来語アクセントについて」

李文淑（AA研共同研究員・東京理科大学）「全羅道方言のアクセントとその変化様相」

福井玲（AA研共同研究員・東京大学）

「小倉進平の朝鮮語音声観察について—慶尚道アクセントと母音体系を中心に—」

研究成果一覧

〔学術論文〕計9件

1. 姜英淑「訓蒙字会における固有語の傍点 I —叡山文庫所蔵本を中心に—」『言語文化研究』35-1, 松山大学, 2015. 203-315.
2. 姜英淑「訓蒙字会諸異本における固有語の傍点 (II)」『言語文化研究』35-2, 松山大学, 2016. 207-306.
3. 福井玲「中世韓国語の「傍点」をめぐるいくつかの基本的な課題」『言語研究』148, 日本言語学会, 2015. 61-80. (査読有)
4. 福井玲 書評「石川遼子著『金沢庄三郎—地と民と語とは相分つべからず—』ミネルヴァ書房刊 2014.」『歴史言語学』4, 日本歴史言語学会, 2015. 33-40. (査読有)
5. Fukui, Rei, “The sun in Korean”, *Studies in Asian Geolinguistics* 1, 2015. 55-60.
6. 孫在賢「韓国語諸方言の二音節用言のアクセント」『日本文化研究』56, 東アジア日本学会, 2015. 197-210. (査読有)
7. 孫在賢「韓国語と日本語の用言のアクセント」『比較日本学』35, 漢陽大学校日本学国際比較研究所, 2015. 249-260. (査読有)
8. 孫在賢「韓日言語の使役形と受身形のアクセント」『日本語学研究』47, 韓国日本語学会, 2016. 23-34. (査読有)
9. John Whitman, “Old Korean”, *The Handbook of Korean Linguistics*, London: Wiley-Blackwell, 2015. 421-438. (査読有)

〔口頭発表等〕計4件

1. 姜英淑「韓国釜山方言の混成語形成におけるアクセント」, 日本言語学会第151回大会, 2015.11.28. 名古屋大学
2. 金英周・五十嵐陽介・宇都木昭・酒井弘「韓国語慶尚道方言における属格 主語構造」, 日本言語学会第151回大会, 2015.11.28. 名古屋大学
3. 宇都木昭 “Hankwuke ekyang yenkwu.wa ilpon.eseuy ekyang kyoyuk: hyenhwang.kwa kwacey”, *Cey 22 cha hayoy sekhak chocheng kangyenhoy (korye tayhakkyo BK21 phullesu hankukemunhaksaeptan)*, 2016.3.24. 高麗大学校 (ソウル)
4. Chiyuki Ito, “Dependent vs. independent accentual changes: a case study of Yanbian Korean nouns”, *The 10th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL-10)*, 2015.6.13. 東京外国語大学

〔社会に向けた成果発表〕計1件

伊藤智ゆき「朝鮮語祖語の音韻体系再建の試み」『日本語学』34-10, 明治書院, 2015.8. 44-53.

アジア地理言語学研究

研究期間：2015-2017（代表：遠藤光暁／所員 2, 共同研究員 18）

所員：峰岸真琴, 呉人徳司

共同研究員：岩田礼, 植屋高史, 岸江信介, 倉部慶太, 近藤美佳, 清水政明, 白井聡子, 白石英才, 鈴木博之, 中井精一, 長渡陽一, 西本希呼, 深澤美香, 福嶋秩子, 松本亮, 八木堅二, Sirivilai Teerarojanarat

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目）日時：2015年10月3日（土）13:00-18:00・4日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3F 大会議室(303) 使用言語：英語

テーマ：“sun”, 発表者数 16 名。アジア全体の諸言語における「太陽」を表す語彙の地理分布を地図化し, その分布の意味を言語史・言語接触・文化などの観点から解釈した。

10月3日

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University)
Goals of the Project “Studies in Asian Geolinguistics” 2015-2017
Tokusu KUREBITO (ILCAA) “Sun” in Paleo-Asiatic”
Hidetoshi SHIRAIISHI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University) “ ‘Sun’ in Nivkh”
Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Chiba University)
“ ‘Sun’ in Ainu”, “Geographical distribution of ‘daytime’ in Ainu”
Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies)
“ ‘Sun’ in Uralic and Tungusic”
Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University) “ ‘Sun’ in Mongolic and Turkic”
Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima) “ ‘Sun’ in Japanese”
Rei FUKUI (The University of Tokyo) “ ‘Sun’ in Korean”, “Studies on Korean Dialects by Dr. Shimpei Ogura”
Takashi UEYA (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies) “ ‘Sun’ in Sinitic”

10月4日

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University) “ ‘Sun’ in Hmong-Mien”
Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University)
“ ‘Sun’ in Tai-Kadai”, “Additional Remarks on the ‘Sun’ in Tai-Kadai”
Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, Reitaku University) “ ‘Sun’ in Tibeto-Burman”
Mika KONDO (ILCAA Joint Researcher, Osaka University) “ ‘Sun’ in Austroasiatic”
Atsuko UTSUMI (Meisei University) “ ‘Sun’ in Austronesian”
Noboru YOSHIOKA (National Museum of Ethnology) “ ‘Sun’ in Indo-Aryan”
Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies) “ ‘Sun’ in Asian Semitic”
All members Discussion

第2回研究会（通算第2回目）日時：2015年12月19日（土）13:00-18:00・20日（日）10:00-12:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3F マルチメディア会議室(304)

使用言語：英語

テーマ：“rice”，および前回発表がなかった語族の“sun”，発表者約14名。「太陽」についてはアジア全体の概観も行い、「稲」を表す語彙についてアジアの相当程度の語族の地理分布とその解釈について論じた。

12月19日

Chitsuko FUKUSHIMA (ILCAA Joint Researcher, University of Niigata Prefecture) “ ‘Sun’ in Asia”
Tokusu KUREBITO (ILCAA) “Sun: Paleo-Asiatic”
Atsuko UTSUMI (Meisei University) “Sun: Austronesian”
Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology)
“General Remarks on Rice for the Asian Geolinguistics”
Tokusu KUREBITO (ILCAA) “Rice: Paleo-Asiatic”
Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies)
“Rice: Uralic and Tungusic”
Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University) “ ‘Rice plant’ in Mongolic and Turkic”
Rei FUKUI (The University of Tokyo) “Rice and related words in Korean”
Kenji YAGI (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University) “Rice in Sinitic”

12月20日

Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima)
“Dialectal Word-forms Associated with the Word Ine (rice) in Japanese”
Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology) “Rice plant: Tibeto-Burman”
Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University) “Rice: Tai-Kadai”
Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University) “Rice: Austroasiatic”
Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies) “Rice: Arabic Languages”

第3回研究会（通算第3回目）日時：2016年2月29日（月）13:00-18:00，3月1日（火）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3F マルチメディア会議室(304)使用言語：英語

テーマ：“milk”，および今年度全体を通じた補足，発表者約17名。「乳」を表す語彙についてアジア全体の地理分布と解釈を論じた。

2月29日

Shiho EBIHARA (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) “General Remarks on milk”
Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies)
“ ‘Milk’ in Uralic and Tungusic”
Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Chiba University) “ ‘Milk’ in Ainu”, “ ‘Rice’ in Ainu”
Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima) “ ‘Milk’ in Japanese”

Rei FUKUI (The University of Tokyo) “ ‘Milk’ in Korean”
Takashi UEYA (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies) “ ‘Milk’ in Sinitic”
Shiho EBIHARA (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) “ ‘Milk’ in Tibeto-Burman”
Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University) “ ‘Milk’ in Hmong-Mien”, “ ‘Rice’ in Hmong-Mien”
Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology) “ ‘Rice’: overview”

3月1日

Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University) “ ‘Milk’ in Mongolic and Turkic”
Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University) “ ‘Milk’ in Tai-Kadai”
Makoto MINEGISHI (ILCAA) “ ‘Milk’ in Austroasiatic”
Atsuko UTSUMI (Meisei University) “ ‘Milk’ in Austronesian”
Noboru YOSHIOKA (National Museum of Ethnology) “ ‘Milk’ in South Asia”, “ ‘Rice’ in South Asia”
Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies) “ ‘Milk’ in Arabic”
Hidetoshi SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University)
“ ‘Rice’ in Nivkh”, “ ‘Milk’ in Nivkh”
Tokusu KUREBITO (ILCAA) “ ‘Sun’ in Paleo-Asiatic”, “ ‘Rice’ in Paleo-Asiatic”, “ ‘Milk’ in Paleo-Asiatic”
Noa NISHIMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University) “ ‘Rice: Austronesian”
詳しくは <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp210> を参照されたい。

研究成果一覧

[学術論文] 計 22 件

1. 遠藤光暁「阿美語身体部位詞彙の地理語言学研究」『青山スタンダード論集』10, 2015.
2. 遠藤光暁「近 150 年来漢語各種方言里的声調演變過程—以艾約瑟的描写為出發点」『現代漢語的歷史研究』, 浙江大学出版社, 2015.
3. Mitsuaki Endo, “Geographical Distribution of Tone in Tai-Kadai”, 『經濟研究』7, 青山学院大学, 2015.
4. 鈴木博之「藏語方言学研究与语言地图: 如何看待“康方言”」『民族学刊』2016 年第 2 期, 2016. 1–13. (査読有)
5. Mitsuaki ENDO, Goals of the Project “Studies in Asian Geolinguistics” 2015-2017, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 1–4.
6. Ryo MATSUMOTO, “Sun” in Tungusic and Uralic, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 5–5.
7. Yoshio SAITO, “Sun” in Mongolic and Turkic, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 6–7.
8. Mika FUKAZAWA, “Sun” in Ainu, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 8–9.
9. Takashi UEYA and Kenji YAGI, “Sun” in Sinitic languages, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 10–11.
10. Yoshihisa TAGUCHI, “Sun” in Hmong-Mien, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 12–13.
11. Satoko SHIRAI, Keita KURABE, Kazue IWASA, Hiroyuki SUZUKI, and Shiho EBIHARA, Sun: Tibeto-Burman, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 14–17.
12. Mitsuaki ENDO, “Sun” in Tai-Kadai, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 18–19.
13. Mika KONDO, “Sun” in Austroasiatic, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 20–21.
14. Noboru YOSHIOKA, Sun: South Asia, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 22–23.
15. Yoichi NAGATO, The Sun: Arabic Languages, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 24–25.
16. Shinsuke KISHIE, Yukichi SHIMIZU, and Yukako SAKOGUCHI, Dialectal Forms Associated with the Word Taiyō (Sun) in Japanese, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 37–43.
17. Mika FUKAZAWA, Geographical distribution of ‘daytime’ in Ainu, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 44–54.
18. Rei FUKUI, The sun in Korean, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 55–60.
19. Liying QIN and Hiroyuki SUZUKI, Chasing a Cat from the Mekong to the Salween: A Geolinguistic Description of ‘Cat’ in Trung and Khams Tibetan in North-western Yunnan, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 61–71.
20. Dawa Drolma and Hiroyuki SUZUKI, Preliminary Report on the Darmdo Minyang Linguistic Area, with a Geolinguistic Description of Terms for ‘Sun’, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 72–78.
21. Hiroyuki SUZUKI, A Geolinguistic Description of Terms for ‘Sun’ in Tibetic Languages of the Eastern Tibetosphere, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 79–85.
22. Makoto MINEGISHI, Toshiki OSADA, Nathan BADENOCH, Masaaki SHIMIZU, Atsushi YAMADA, and Yuma ITO, A Survey of Recent Austroasiatic Studies, *Studies in Asian Geolinguistics*1, 2015. 86–93.

[口頭発表等] 計 2 件

1. 遠藤光暁「雲南語言地図—声調部分」, チベット・ビルマ諸語/タイ・カダイ諸語研究会, 2015.10.24. 神戸研究学園都市 UNITY
2. Mitsuaki Endo, “Problems in Yunnan Dialect Geography, with special reference to the Yunlüe Yitong”, International Workshop on the History of Colloquial Chinese, 2016.3.10. Rutgers University

[図書] 計1件

遠藤光暁『元代音研究—「脈訣」ペルシャ語訳による』, 汲古書院, 2016. 全213+377頁.

[社会に向けた成果発表] 計1件

遠藤光暁「グロットグラム・言語層位学・言語地図・構造方言学・語の伝播・語の放射・語の旅行・語の病気・語の治療・語の癒着・語の切断・残存形式・時系列言語地図・周辺分布・圏論的分布・ABA分布・地域基準・地理言語学・同音衝突・類音牽引」, 『明解言語学辞典』, 三省堂, 2015. 多数.

東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究

研究期間：2015-2017（代表：Eric McCready/所員 1, 共同研究員 17）

所員：峰岸真琴

共同研究員：伊藤さとみ, 大島義和, 高橋清子, 田窪行則, 長屋尚典, 野元裕樹, 原由理枝, 山田真寛, Christopher Davis, Christopher Tancredi, Gregoire Winterstein, Hooi Ling Soh, Jozina Vander Kloek, Magdalena Kaufmann, Malte Zimmermann, Stefan Kaufmann

研究会等の内容

1st meeting: 4 Jul.2015 Venue: Room 304, ILCAA

Eric McCREADY (Project Leader, Aoyama Gakuin University) project overview

Hiroki NOMOTO (TUFS) “Sentence final particles in Malay”

Christopher TANCREDI (Keio University) “Introduction to formal semantics and pragmatics”

2nd meeting: 17-18 Oct at Room 304, ILCAA.

Stefan KAUFMANN (Kyoto University) “Dynamic semantics tutorial”

Christopher DAVIS (University of the Ryukyus) “Question semantics”

Magdalena KAUFMANN (Kyoto University) “Imperative semantics”

Satomi ITO (Ochanomizu University) “Particles in Mandarin”

3rd meeting: 9-10 Jan. 2016 at Room 302, ILCAA

Eric McCready “Sentence-final Particles and Coherence”

Christopher DAVIS (University of the Ryukyus)

“Contextual relations, pragmatic constraints, and discourse particles: case study of Japanese ‘yo’”

David Y. OSHIMA (Nagoya University) “The Japanese discourse particle yo in declaratives

Stefan KAUFMANN (Kyoto University) “Content and role of semantic contribution: Two faces of German ‘ja’”

Magdalena KAUFMANN (Kyoto University) “Discourse particle ‘ruhig’: discourse effects, desires, and modality”

研究成果一覧

[学術論文] 計13件

1. 長屋尚典「ラマホロット語のアスペクト辞 morō の二つの解釈と話者の知識」『東京外国語大学論集』91, 2015. 57-68.
2. 長屋尚典「ラマホロット語の自他交替」『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, くろしお出版, 2015. 189-204.
3. Nagaya, Naonori, “Perfect in Tagalog”, *Southeast Asian Studies TUFS* 21, 2016. 1-14. (査読有)
4. Nomoto, Hiroki, “Decomposing Malay anaphoric expression”, *Proceedings of the Twenty-First Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA)*, Asia-Pacific Linguistics, 2016. 219-236.
5. 野元裕樹, アズヌール・アイシヤ・アブドゥッラー「マレーシア語の連用修飾的複文」『語学研究所論集』20, 2015. 253-276. (査読有)
6. McCready, Eric, “Against Lexical Self-Reference”, *Linguistic Inquiry* 46, 2015. 742-754. (査読有)
7. McCready, Eric and Y. Hara, “Particles of (Un)expectedness: Cantonese Wo and Lo”, *Proceedings of LENLS* 12. 2015. 25-38. (査読有)
8. 高橋清子「タイ語の語用論的小辞」『神田外語大学紀要』28, 2016. 289-309.
9. Tancredi, Christopher, “Anaphora, Deaccenting, and Context Incrementation”, 『より良き代案を絶えず求めて=In Untiring Pursuit of Better Alternatives』, 開拓社, 2015. 423-434. (査読有)
10. Tancredi, Christopher, “Focus and Givenness Across the Grammar”, *New Frontiers in Artificial Intelligence*, Springer, 2015. 200-222.
11. Tancredi, Christopher, “The Phonology of Accent”, *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 46. 2015. 237-266.

12. Hayashi, Midori and David Y. Oshima, "How multiple past tenses divide the labor: The case of South Baffin Inuktitut", *Linguistics: An Interdisciplinary Journal of the Language Sciences* 53, 2015. 773–808. (査読有)
13. Oshima, David Y., "Ellipsis of SAY, THINK, and DO in Japanese subordinate clauses: A constructional analysis", *Proceedings of the 22nd International Conference of HPSG*, CSLI Publications, 2015. 157–176.

[口頭発表等] 計 23 件

1. 長屋尚典「タガログ語の naka-結果状態構文」, 第 150 回日本言語学会, 2015.6.20-21. 大東文化大学
2. Nagaya, Naonori, "Possession and nominalization in Lamaholot", Thirteenth International Conference on Austronesian Linguistics, 2015.7.18-23. Academia Sinica, Taipei, Taiwan
3. Nagaya, Naonori, "Affectedness and volitionality: The case of Tagalog", Affectedness Workshop 2015: Verb Classes and the Scale of Change in Affected Arguments, 2015.8.13-14. Nanyang Technological University, Singapore
4. 長屋尚典「意志と知識: タガログ語のヴォイス現象」, 成蹊大学アジア太平洋研究センター・研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として—」2015 年度第 2 回研究会, 2015.10.11. 成蹊大学アジア太平洋研究センター
5. 長屋尚典「使役と事象構造: 重なる使役, 繰り返す使役」, 日本言語学会第 151 回大会ワークショップ パネル, 2015.11.28-29. 名古屋大学
6. Nagaya, Naonori, The Tagalog ano 'what': From interrogative to discourse marker, *Discourse Markers and Discourse Connectives in Several Languages*, 2016.1.13. Institute of Language Research, Tokyo University of Foreign Studies
7. Nagaya, Naonori & Hyun Kyung Hwang, Focus and prosody in Tagalog: A preliminary analysis, *The third International Workshop on Information Structure in Austronesian Languages*, 2016.2.18-20. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies
8. Nomoto, Hiroki, The development of the passive in Balinese, *The Fifth International Symposium on the Languages of Java (ISLOJ)*, 2015.6.6-7. インドネシア教育大学
9. Nomoto, Hiroki, "A comparative study of the development of the passive in Balinese and Malay", *The 10th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL)*, 2015.6.13-14. 東京外国語大学
10. Nomoto, Hiroki, "Pelaku ayat pasif dalam bahasa Melayu Klasik", *International Workshop: Current issues in research on languages in Borneo and Malay language*, 2015.9.7. マレーシア・サバ大学
11. McCready, Eric and Y. Hara, "Particles of Unexpectedness: Cantonese Wo and Lo", *LENLS 12*, 2015.11.15. Keio University
12. McCready, Eric and U. Tawilapakul, "A Unified Analysis of (Some) Discourse Particles in Japanese and Thai", *TEAL 10*, 2015.6.13. Tokyo University of Foreign Studies
13. McCready, Eric and U. Tawilapakul, "Particles, Issues and Intonation", *AAA 2*, 2015.6.5. Potsdam University
14. McCready, Eric, "On the Semantics of Pragmatic Particles", *SEALS 2015*, 2015.5.28. Payap University
15. Davis, Christopher and Eric McCready, "(Anti)honorifics and Questions in Japanese", *Formal Semantics in Ied*, 2016.3.2. The Hong Kong Institute of Education
16. Davis, Christopher, "Plurality and Distributivity in Yaeyaman Wh-Questions", *Semantics and Linguistic Theory 25*, 2015.5.15. Stanford University
17. Tancredi, Christopher, "The Grammar of TOPIC, FOCUS, and Givenness", *Syntax Brown Bag*, 2016.1.29. New York University
18. Tancredi, Christopher, "The Grammar of TOPIC, FOCUS, and Givenness", *Ling Lunch*, 2016.2.4. MIT
19. Tancredi, Christopher, "The Phonology and Phonetics of TOPIC, FOCUS, and Givenness", *Ellipsis Licensing Beyond Syntax*, 2016.1.16. Leiden University
20. Tancredi, Christopher, *The Syntax, Semantics and Pragmatics of TOPIC, FOCUS, and Givenness*, *Ellipsis Licensing Beyond Syntax*, 2016.1.15. Leiden University
21. Tancredi, Christopher, "Newness, Givenness and Focus", 日本英語学会国際春季フォーラム 2015, 2015.4.18-19. 成蹊大学
22. Oshima, David Y., "Ellipsis of SAY, THINK, and DO in Japanese subordinate clauses: A constructional analysis", *The 22nd International Conference of HPSG*, 2015.8.10-14. 南洋工科大学
23. Oshima, David Y., "Focus particle stacking: How a contrastive particle interacts with ONLY and EVEN", *Workshop on Altaic Formal Linguistics 11*, 2015.6.4-6. University of York

[図書] 計 1 件

McCready, Eric, *Reliability in Pragmatics*, Oxford University Press, 2015. 220pp.

[社会に向けた成果発表] 計 3 件

1. 長屋尚典「フィリピン料理—やさしい国のおいしい料理—」『世界を食べよう!—東京外国語大学の世界料理—, 東京外国語大学出版会, 2015. 70–75.
2. 長屋尚典「フィリピンの言葉は繰り返す」『東京外国語大学オープンアカデミー 2014 年度後期開講講座—言葉とその周辺をきわめる 3 活動報告書』, 東京外国語大学 語学研究所, 2016. 71–93.
3. 野元裕樹「マレーシア・シンガポールの言語」『東京外国語大学オープンアカデミー 2014 年度後期開講講座—言葉とその周辺をきわめる 3 活動報告書』, 東京外国語大学 語学研究所, 2016. 1–27.

[その他: オンラインリソースなど] 計 3 件

1. 長屋尚典 「アラインメント」「意志性」「一致」「格」「空間参照枠」「屈折・派生」「形態素」「形態論」「形態論的プロセス」「形容詞」「言語類型論」「語」「項構造」「語順」「語類」「主語」「所有」「数」「数詞」「接近可能性の階層」「接語」「接辞」「側置詞」「重複」「動詞」「動詞化」「フィリピン・タイプ」「文法関係」「名詞」「名詞化」「有標性」「連続体」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編), 『明解言語学辞典』三省堂. 2015.
2. 野元裕樹 書評『意味論キーターム事典』(M. Lynne Murphy, Anu Koskela (著)・今井邦彦 (監訳)・岡田聡宏・井門亮・松崎由貴 (訳) 開拓社.), 『英語教育』2016 年 2 月号, 92-93. 大修館書店.
3. 野元裕樹 『東京外国語大学言語モジュール: マレーシア語彙モジュール』
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/ms/vmod/>, 日本語版に加え, 英語版, ビルマ語版も作成

「アルタイ型」言語に関する類型的研究

研究期間: 2015–2017 (代表: 山越康裕/所員 4, 共同研究員 14)

所員: 呉人徳司, 児倉徳和, 渡辺己

共同研究員: 麻生玲子, 梅谷博之, 江畑冬生, 蝦名大助, 風間伸次郎, 鍛冶広真, 下地理則, 松本亮, 吉岡乾, 吉村大樹, 白尚輝, 蔡熙鏡, Arzhaana Syuryun, Jingang

研究会等の内容

第 1 回研究会 (通算第 1 回目) 日時: 2015 年 5 月 23 日 (土) 13:00-18:00

山越康裕 (AA 研所員) 「主旨説明」

風間伸次郎 (AA 研共同研究員・東京外国語大学) 「アルタイ型言語について」

全員: 総合討論・今後の計画

第 2 回研究会 (通算第 2 回目) 日時: 2015 年 10 月 3 日 (土) 13:00-18:00

白尚輝 (AA 研共同研究員・北海道大学大学院)

「地域言語学的観点からみたツングース諸語の副動詞語尾 -mi と-rAk-」

全員: 「連辞性」に関するデータ報告および総合討論・今後の計画

第 3 回研究会 (通算第 3 回目) 日時: 2016 年 1 月 30 日 (土) 13:00-18:00

渡辺己 (AA 研所員) 「セイリッシュ語から見る『アルタイ型』」

江畑冬生 (AA 研共同研究員・新潟大学) 「統語法から見た日本語動詞の活用体系」

バダガロフ, ジャルガル バヤンダラエヴィチ (AA 研外国人研究員) “Grammaticalization of *a- and *bu- in Buryat”

研究成果一覧

[学術論文] 計 16 件

1. 山越康裕「シネヘン・ブリヤート語テキスト(5): 王様と役人になる二人の男の子」『北方言語研究』6, 2016. 111–130. (査読有)
2. 白尚輝「地域類型論的観点から見たツングース諸語の定動詞における 3 人称標示: 数の対立を中心に」『北方言語研究』6, 2016. 53–71. (査読有)
3. EBATA, Fuyuki, “Postmodification in Sakha (Yakut)”, *Altai Hakpo* 25, 2015. 133–143. (査読有)
4. 渡辺己「対照研究で読み解く日本語の世界—スライアモン語の他動詞化接尾辞」『日本語学』35(1), 2016. 70–80.
5. 風間伸次郎「地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」『北方言語研究』6, 2016. 81–110. (査読有)
6. 風間伸次郎「ツングース諸語の自他について」『有対動詞の通言語的研究 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, くろしお出版, 2015. 91–107. (査読有)
7. 風間伸次郎「日本語(話しことば)は従属部標示型の言語なのか?—映画のシナリオの分析による検証—」『国立国語研究所論集』9, 2015. 51–80. (査読有)

8. 風間伸次郎「対照研究で読み解く日本語の世界—ツングース諸語をはじめとするアルタイ諸言語」『日本語学』34(11), 2015. 58–67.
9. 吉岡 乾「ブルシヤスキー語の動詞語幹と他動性」『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, くろしお出版, 2015. 321–334. (査読有)
10. 下地理則「南琉球与那国語の格配列について」『琉球諸語と古代日本語』, くろしお出版, 2016. 173–208. (査読有)
11. 下地理則「琉球諸方言における有標主格と分裂自動詞性」『方言の研究』1, ひつじ書房, 2015. 1–26. (査読有)
12. KUREBITO, Tokusu, “Chukchi as a polysynthetic language”, *Linguistic Typology of the North* 3, ILCAA, Tokyo Univeristy of Foreign Studies, 2016. 59–71.
13. 呉人徳司「作为一个跨境语言的命运和困境—卫拉特蒙古语的过去和现在」『跨境语言与社会生活』, 商务印书馆, 2015. 221–234.
14. 梅谷博之「モンゴル語の他動詞派生接辞 -AA と -GA : Grep を利用した形態素分析の試み」『東京大学言語学論集』36, 2015. e67–e90. (査読有)
15. UMETANI, Hiroyuki, “Description of the verb-deriving suffix -s ‘to speak of’ in colloquial Khalkha Mongolian”, *Acta Linguistica Petropolitana* 11(3), 2015.12. 501–518.
16. KOGURA, Norikazu, “On the form and function of verbal suffix -mi (-mbi) in Sibe: Is it a vestige of subject agreement?”, *Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference*, 2015. 23–34. (査読有)

〔口頭発表等〕計 17 件

1. 山越康裕「おもしろいぞ世界のことは：国境越えたらしくみも変わる～中国東北部のモンゴル系言語」, フィールド言語学カフェ：世界の言語で読む Le Petit Prince, 2015.11.23. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
2. 山越康裕「中国領内のブリヤート」, フィールド言語学カフェ特別編「ブリヤートの言語と文化」, 2016.1.14. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
3. YAMAKOSHI, Yasuhiro, “The use of verbal nouns in The Secret History of the Mongols”, The 12th Seoul International Altaic Conference, 2016.7.17. Seoul National University
4. BAEK, Sangyub, Conditional forms in Tungusic from the perspective of areal linguistics, The 12th Seoul International Altaic Conference, 2015.7.18. Seoul National University
5. BAEK, Sangyub, Third person marking on finite indicative forms in Tungusic, International Conference: Northeast Asia, North Pacific as a Linguistic Area, 2015.8.21. Hokkaido University
6. EBATA, Fuyuki, Sentence-final clitics for propositional modality and interpersonal modality in Sakha (Yakut), The 12th Seoul International Altaic Conference, 2015.7.17. Seoul National University
7. KAZAMA, Shinjiro, “On the Silverstein's hierarchy from the viewpoint of linguistic area and linguistic typology”, International Conference: Northeast Asia, North Pacific as a Linguistic Area, 2015.8.21. Hokkaido University
8. EBINA, Daisuke, “A Comparison of Person-marking Systems between Quechua and Aymara—A Possible Contact Situation”, Seminario Internacional “Dinámicas de Contacto—Español y lenguas amerindias”, 2015.11.22. 東京大学駒場キャンパス
9. YOSHIOKA, Noboru, “Noun Modifying Expressions in Eastern Burushaski”, International workshop on Noun Modifying Expressions in South Asian Languages, 2015.12.22. Deccan College
10. 吉岡乾「ドマーキ語の言語状況について—消滅の危機に瀕した北パキスタンの印欧語—」, 日本南アジア学会第 28 回大会, 2015.9.27. 東京大学
11. 吉岡乾「ブルシヤスキー語の空間参照枠」, 日本言語学会 第 150 回大会, 2015.6.20. 大東文化大学
12. YOSHIOKA, Noboru, “On the Copulae of Languages in Northern Pakistan”, 2nd Kashmir International Conference on Linguistics, 2015.5.5. The University of Azad Jammu and Kashmir
13. SHIMOJI, Michinori, “Kakarimusubi in the Irabu dialect of Ryukyuan”, International Workshop: Kakarimusubi from a Comparative Perspective, 2015.9.5. 国立国語研究所
14. 呉人徳司「東郷語の語言接触と使用状況」, The 13th Urban language Seminar, 2015.8.11. 陝西師範大学 (中国)
15. 呉人徳司「作为一个跨境语言的变异现象—以中国和蒙古国的蒙古语个案为例」, 第二届跨境语言研究论坛, 2015.10.24. 玉溪師範大学 (中国)
16. 梅谷博之「モンゴル語ハルハ方言の人称所属小辞の音韻的特徴」, 2015 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2016.3.26. 京都大学ユーラシア文化研究センター

17. 児倉徳和「動詞完了アスペクト三形式の機能とイントネーション」, 第4回シベ語研究会, 2015.05.31. 東京外国語大学本郷サテライト

通言語的・類型論的観点からみた琉球諸方言のケースマーケティング

研究期間：2015–2017（代表：下地理則／所員 1, 共同研究員 13）

所員：中山俊秀

共同研究員：青井隼人, 麻生玲子, クリストファー・デイビス, 重野裕美, 白田理人,
當山奈那, 中川奈津子, 新永悠人, 原田走一郎, 又吉里美

研究会等の内容

合計3回の研究会を行った。当初の目玉の観点である、有標主格の問題を出発点にして、南北琉球諸語の格体系の概要の報告を行って問題点を整理し（第1回）、そこから発展した議論である主語の「無助詞」標示の問題を掘り下げて検討しあい（第2回）、さらに談話データにおける格標示の実態とその記述法・分析法を議論した（第3回）。その結果、有標主格の問題をはじめ、あらゆる問題を扱ううえで肝となる概念がハダカ標示であるという共通の認識が固まり、それに関連してハダカ標示が頻出する談話データをどう扱うかについても情報交換ができた。また、上記の研究会を通して、各方言の格体系に関する Analytical questionnaire（調査者用の調査票）の基礎的な議論を行った。

研究成果一覧

〔学術論文〕計2件

1. 下地理則「南琉球与那国語の格配列について」『琉球諸語と古代日本語』, くろしお出版, 2016. 167–198. (査読有)
2. 下地理則「琉球諸方言における有標主格と分裂自動詞性」『方言の研究』1, ひつじ書房, 2015. 100–133. (査読有)

〔口頭発表等〕計2件

1. 新永悠人「北琉球沖縄久高島方言のアスペクト・ヴォイス接辞と主語・目的語のケースマーケティング」, 合同シンポジウム「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」, 2015.8.21. 国立国語研究所
2. 新永悠人「沖縄県久高島方言の主語・目的語の格標示」, 日本言語学会第151回大会, 2015.11.29. 名古屋大学

公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究

研究期間：2015–2016（代表：児倉徳和／所員 3, 共同研究員 10）

所員：呉人徳司, 山越康裕

共同研究員：梅谷博之, 海老原志穂, 風間伸次郎, 川澄哲也, 栗林均, 佐藤暢治, 松岡雄太, 山田洋平, 照日格图 (ジョリクト), 郝日楽 (ホリロ)

研究会等の内容

2015年度は3回の研究会を行った。

第1回研究会（2015年5月24日）

1. 児倉徳和 (AA 研所員) 趣旨説明
2. 栗林均 (AA 研共同研究員・東北大学) 『蒙古語族語言方言研究叢書』内資料の電子データベース化について
3. 山田洋平 (AA 研共同研究員・東京外国語大学) 『蒙古語族語言方言研究叢書』の証拠性の分析
4. 海老原志穂 (AA 研共同研究員・AA 研関研究員) 「チベット語諸方言の証拠性」

第2回研究会（2015年10月4日）

1. 児倉徳和 (AA 研所員) 『蒙古語族語言方言研究叢書』データベース化の進捗について
2. ホリロ (AA 研共同研究員・東京外国語大学) 『蒙古語族語言方言研究叢書』の音韻の記述について
3. データベースの構築に関する相談・討論
4. 今後のプロジェクト活動に関する相談・討論

第3回研究会（2016年3月11日）

1. 梅谷博之 (AA 研共同研究員・AA 研特任研究員) 「河西回廊地域モンゴル諸語の人称代詞」

2. 山越康裕 (AA 研所員) 「モンゴル語族における名詞の格体系と数標示」
3. 児倉徳和 (AA 研所員) 『『蒙古語族語言方言研究叢書』データベース化の進捗報告』
4. 今データベースの構築に関する議論

研究成果一覧

〔学術論文〕 計 1 件

山越康裕 「シネヘン・ブリヤート語テキスト(5) : 王様と役人になる二人の男の子」 『北方言語研究』 6, 2016. 111-130. (査読有)

〔口頭発表等〕 計 1 件

Yamakoshi, Yasuhiro, “The use of verbal nouns in The Secret History of the Mongols”, The 12th Seoul International Altaistic Conference, 2016.7.17. Seoul National University

〔その他〕 計 1 件

栗林均 『言語資料検索システム』 モンゴル系諸言語および満洲語の言語資料。中に本課題で扱う保安語・土族語・ダグル語について「蒙古語族語言方言研究叢書」語彙集から、モンゴル語族の同源語の項目が文語形により検索可能になっている。各言語のべ 5000 行のデータを含む。

<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/kdic/list?groupId=26>

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間

研究期間 : 2014-2016 (代表 : 宮原暁 / 所員 1, 共同研究員 9)

所員 : 床呂 郁哉

共同研究員 : 市川哲, 王柳蘭, 片岡樹, 河合洋尚, 木村自, 中西裕二, 三尾裕子, 横田祥子

研究会等の内容

平成 27 年度, 本研究では, 女性の経験世界を内側から検討するローカル空間の調査と「外界」との関係から検討するディアスポリック空間に関し, 国内で 2 回研究会を実施するとともに, 2 つの国際会議において共同研究者を主体としたパネルを組み, 研究報告を行った。

研究成果一覧

〔学術論文〕 計 12 件

1. 宮原暁 「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」 『Discussion Paper Series インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間』 1, 大阪大学グローバルコラボレーションセンター, 2016. 1-3.
2. 河合洋尚・呉雲霞 「ベトナム北部華人の移住と社会的ネットワーク—6 つの広東系 / 客家系家族をめぐって」 『Discussion Paper Series インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間』 1, 大阪大学グローバルコラボレーションセンター, 2016.
3. 王柳蘭 「泰緬境界の中国穆斯林移民郷情」 『Discussion Paper Series インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間』 1, 大阪大学グローバルコラボレーションセンター, 2016.
4. 片岡樹 「山地からみたブンチュム崇拝現象—ラフの事例—」 『東南アジア研究』 53-1, 2015. 100-136. (査読有)
5. 片岡樹 「文化の資源化と宗教—中国ラフ族の『胡蘆文化』論をめぐって—」 『民族文化資源とポリティクス—中国南部地域の分析から—』, 風響社, 2016. 235-270.
6. 河合洋尚・阿部朋恒 「中国雲南省における〈僑郷空間〉の創出—紅河県を事例として—」 『僑郷—華僑のふるさと—の表象と実像』, 行路社, 2016. 287-317.
7. 河合洋尚 「都市景観をめぐるポリティクス—中国における漢族文化の類型学と〈場所〉の再構築」 『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』, 時潮社, 2016. 195-224.
8. 河合洋尚 「景観人類学の動向と本書の枠組み」 『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』, 時潮社, 2016. 13-36.
9. 河合洋尚 「『世界遺産』と景観再生—円形土楼と困龍屋の比較研究」 『中国地域の文化遺産—人類学の視点から—』, 国立民族学博物館, 2016.
10. 飯田卓・河合洋尚 「序」 『中国地域の文化遺産—人類学の視点から—』, 国立民族学博物館, 2016.

11. 河合洋尚・呉雲霞「越南客家の神佛信仰与宗族宗教景観的創造」『全球化背景下客家文化景観的創造—環南中国海的個案』, 暨南大学出版社, 2015. 166-186.
12. 宮原曉 “Women’s Experiences in ‘Chinese Diasporic Space’ in Southeast Asia: Movement, Nostalgia, and Interface”, 『Discussion Paper Series インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間』1, 大阪大学グローバルコラボレーションセンター, 2016.

[口頭発表等] 計 12 件

1. 宮原曉 “1730 Jesuit House in Cebu” as a Focal Point for “Chinese Exchange”, International Interdisciplinary Conference “MOVEMENTS, NARRATIVES AND LANDSCAPES”, 2015.6.5. University of Zadar, Croatia
2. 宮原曉 “Overseas Death, Burial Practices, and Ancestral Worship: A Historical Overview and A Conceptual Framework”, IUAES Inter-Congress 2015, 2015.7.17. Thammasat University, Bangkok
3. 宮原曉 “Sever Ties and Mobile Bone: An Interpretation for Cremation Practices among Diasporic Chinese in the Philippines”, Workshop on "Death, Burial Rituals, and Cemeteries among Chinese Communities in Insular Southeast Asia: 16th and 17th to 21st Centuries." 2015 at Kaisa-Angelo King Heritage Center, Intramuros, Manila, Philippines. 2015.8.5. Kaisa-Angelo King Heritage Center
4. 宮原曉 “Women’s Experiences in “Chinese Diasporic Space” in Southeast Asia”, 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies. 2015.10.17. 華僑大学
5. 王柳蘭 “Reimagining Homeland – Ethno-religious Hardship and Family Experiences among Chinese Muslim Women in Thailand”, 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies. 2015.10.17. 華僑大学
6. 三尾裕子 “Local Women Who Impacts on the Culture and Ethnicity of People of Chinese Origin: Case of Minh Huong in Central Vietnam”, 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies. 2015.10.17. 華僑大学
7. 敖梦玲 朱东芹 「菲华文学中的女性形象」, 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies. 2015.10.17. 華僑大学
8. 片岡樹「架空の言語と架空の識字力？—タイ国における大乘系漢文經典の知識—」, 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 2015.5.30-31. 大阪国際交流センター
9. 片岡樹 “Baba Cemeteries in Thailand”, IUAES Inter-Congress 2015, 2015.7.17. Thammasat University, Bangkok
10. 片岡樹 “A New Hybrid Chinese Used in Mahayana Chanting among the Chinese Immigrants of Thailand”, 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies. 2015.10.15-18. 華僑大学
11. 片岡樹 “Command on the Forests: International Relations of Southeast Asia as Viewed from the Highlands”, the Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA) 2015 Conference, 2015.12.12-13. Kyoto International Conference Center
12. 片岡樹「タイ国の中国系大乘仏教」, 華僑華人学会研究大会, 2015.11.14-15. 京都大学

[図書] 計 4 件

1. 木村自『雲南ムスリム・ディアスポラの民族誌』, 風響社, 2016. 全 276 頁.
2. 河合洋尚 (編)『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』, 時潮社, 2016. 全 371 頁.
3. 河合洋尚・飯田卓 (編)『中国地域の文化遺産—人類学の視点から』, 国立民族学博物館, 2016. 全 328 頁.
4. 夏遠鳴・河合洋尚 (編)『全球化背景下客家文化景観的創造—環南中国海的個案』, 暨南大学出版社, 2015. 全 212 頁.

「もの」の人類学的研究 (2) (人間／非人間のダイナミクス)

研究期間：2014-2016 代表：床呂郁哉／所員 3, 共同研究員 16)

所員：河合香吏, 西井涼子

共同研究員：伊藤詞子, 内堀基光, 大村敬一, 奥野克巳, 春日直樹, 金子守恵, 久保明教, 黒田末寿, 湖中真哉, 小松かおり, 田中雅一, 中村美知夫, 丹羽朋子, 檜垣立哉, 森田敦郎, 吉田ゆか子

研究会等の内容

第 1 回研究会：5 月 16 日 (土) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306 号室

報告 1：中村恭子 (AA 研特任研究員)「空虚な坩堝：いまひとたびの壺葬論」

報告 2：内堀基光 (AA 研共同研究員・放送大学)「非人工物をどう語るか」

第 2 回研究会：7 月 12 日 (日) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306 号室

報告1：山崎吾郎（大阪大学）「関係性の連鎖とコミュニケーション：意識障害をめぐる実践論」

報告2：檜垣立哉（大阪大学）「冶金学・ドゥルーズとテクノロジー」

第3回研究会：11月8日（日）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所306号室

報告1：奥野克巳（立教大学）

「人は鳥を食べ、鳥は獣を助ける：ボルネオ島・プナンのパースペクティヴィズムの一断面」

報告2：伊藤詞子（京都大学）「チンパンジーにとっての『もの』」

報告3：大村敬一（大阪大学）「オントロジー（存在論）からコスメティクス（化粧術）へ：在来知と近代科学を対称的に扱うために」

報告4：岩谷彩子（京都大学）

「生産的な廃棄物—インドの露天商がつなぐ人、もの、その境界（1）」

第4回研究会：2月13日（土）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所405号室

報告1：湖中信哉（静岡県立大学）「サバンナの存在論」

報告2：岩谷彩子（京都大学）

「生産的な廃棄物—インドの露天商がつなぐ人、もの、その境界（2）」

報告3：長沼毅（広島大学）「第五種接近遭遇—宇宙人とのコミュニケーション」

研究成果一覧

〔学術論文〕計29件

1. 床呂郁哉「野性のチューリングテスト」『他者』, 京都大学学術出版会, 2016. 399–418. (査読有)
2. 床呂郁哉「非人間—もの、技術」『情動』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 30–46.
3. TOKORO, Ikuya, “‘Center/Periphery’ Flow Reversed?: Twenty Years of Cross-border Marriages between Philippine Women and Japanese Men”, *Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation-States.*, NUS Press & Kyoto Univ. Press, 2016. 105–117. (査読有)
4. 奥野克巳「飢え、食べ、排泄する—狩猟採集民の食行動をめぐる民族誌」『社会人類学年報』41, 弘文堂, 2015. 1–23. (査読有)
5. 奥野克巳「『森は考える』を考える—アヴィラの森の諸自己の生態学」『現代思想』臨時3月増刊号05-01-44, 青土社, 2015. 214–225.
6. 丹羽朋子「〈窓花〉から〈剪纸〉へ—中国・陝北農村における女性の主体化の系譜学に向けて」『アジア・アフリカ言語文化研究』90, 2015. 5–27. (査読有)
7. 丹羽朋子「中国・黄土高原の暮らしと切り紙の無形文化遺産化—窑洞の村のエコミュージアム活動をめぐる〈翻訳劇〉の諸相—」, 国立民族学博物館調査報告『中国地域の文化遺産—人類学の視点から』136, 2016. 271–294. (査読有)
8. 久保明教「記号の離床—将棋電王戦にみる人間と機械のアナログカルな相互作用」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』, 東京大学出版会, 2016. 236–253.
9. 久保明教「知能機械の人類学—アクターネットワーク論の限界を超えて」『現代思想』43-18, 青土社, 2015. 88–89.
10. 久保明教「方法論的独他論の現在—否定形の関係論へ」『現代思想』05-01-44, 青土社, 2015. 190–201.
11. 河合香吏「野（フィールド）から紙（ペーパー）へ—生態人類学のドキュメンテーション」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』, 東京大学出版会, 2016. 194–211.
12. 河合香吏「進化から他者を問う—人類社会の進化的基盤を求めて」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 1–18. (査読有)
13. 河合香吏「『敵を慮る』という事態の成り立ち—ドドスにとって隣接集団とはいかなる他者か」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 207–225. (査読有)
14. 春日直樹「贈与と賠償：アナロジーの双方向性と非対称性」『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』, 東京大学出版会, 2016. 177–193.
15. 内堀基光「他者としての精霊：イバン民族誌から」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 315–338. (査読有)
16. 黒田末寿「伊谷純一郎の霊長類社会学」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』, 東京大学出版会, 2016. 114–134.
17. 黒田末寿「霊長類社会における承認する他者、不可解な他者」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 21–41. (査読有)

18. Oomura, Keiichi, *The Two Faces of Tomorrow: Human Bio-sociocultural Diversity Expanded through Space Development.*, *JAXA Research and Development Memorandum JAXA-RM-14-012E*, JAXA, 2015. 5–31.
19. 大村敬一「多重拡張する精神の可能性：ネアンデルタールから宇宙まで」『狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の実証的研究：文部科学省科学研究 費補助金(新学術領域研究) 交代劇 A02 班研究報告書 No.5』, 神戸学院大学人文学部, 2015. 19–36.
20. 大村敬一「人類でなくなるための人類学：受動的な能動性が拓くおぞましくも美しき未来」『現代思想』43 (13), 青土社, 2015. 227–245.
21. 大村敬一「イヌイト・アート：イメージをめぐる交渉と実験の場」『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題：国立民族学博物館所蔵のイヌイト および北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(国立民族学博物館調査報告 (Senri Ethnological Reports) No.131, 2015. 10–35.
22. 大村敬一「宇宙時代の自然＝社会哲学：社会生成の装置の過去・現在・未来」『バイオサイエンス時代から考える人間の未来』, 勁草出版, 2015. 53–80.
23. 大村敬一「他者のオントロギー：イヌイト社会の生成と維持にみる人類の社会性と倫理の基盤」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 229–250. (査読有)
24. 西井凉子「『顔』と他者—顔を覆うヴェールの下のムスリム女性たち」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 275–294. (査読有)
25. 中村美知夫「動物は『他者』か、あるいは動物に『他者』はいるのか？」『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 43–64. (査読有)
26. Nakamura, Michio, “Introduction”, *Mahale Chimpanzees: 50 Years of Research*, Cambridge University Press, 2015. 1–4. (査読有)
27. Itoh Noriko, Nakamura Michio, “Diet and feeding behavior.”, *Mahale Chimpanzees: 50 Years of Research*, Cambridge University Press, 2015. 227–245. (査読有)
28. 金子守恵『民族生物学会第14回国際学術会議報告(於ブータン)』『文化人類学』79.4, 2015. 433–538. (査読有)
29. Kaneko, Morie, “Collections and Archives on Ethiopian Studies at the Frobenius Institute”, *Nilo-Ethiopian Studies* 20, 2015. 33–40. (査読有)

〔口頭発表等〕計29件

1. 床呂郁哉「ボーダーの形成と越境のダイナミクス—東南アジア海域世界の事例から」, 地域研究コンソーシアム年次集会, 2015.11.1. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
2. 床呂郁哉「「もの」の人類学の可能性—日本における物質文化研究の展開からの応答」, 日仏会館主催講演会, 2015.11.24. 日仏会館
3. 床呂郁哉「顔と身体表現に基づく異文化理解—シンポジウム趣旨説明」, アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究人類学班主催シンポジウム, 2015.12.13. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
4. 床呂郁哉「粘土造形をめぐる教育・学習の人類学(コメンテーター報告)」, 教育・学習の人類学研究会, 2016.1.15. 京都大学
5. 奥野克巳「プナンのイヌ—人の道具でもあり, 人に近い非人間」, 第49回日本文化人類学会研究大会・分科会「文化空間において我々が犬と出会うとき—狗類学(こうるいがく)への招待」, 2015.5.31. 大阪国際交流センター
6. 丹羽朋子「民族誌的「展示」が内包する複数の時間性—映像インスタレーションを用いたフィールドワーク展を事例に」, 日本文化人類学会第49回研究大会, 2015.5.31. 大阪国際交流センター
7. 久保明教「ロボットの人類学とは何か—知能機械をめぐる非連続的思弁と連続的実践の狭間で」, AI 社会論研究会, 2015.6.15. ドワンゴ株式会社
8. 久保明教「時間の狭間で言葉をつくる—対称性人類学から探る人間/機械の近未来を捉えうる知のあり方」, 国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター新規研究開発領域「Future Humanity」(仮) 第1回検討ワークショップ, 2015.6.29. 国立研究開発法人科学技術振興機構
9. 久保明教「アナロジーの功罪：知能機械への感情移入とは何か」, モバイルコンテンツフォーラム, 2015.10.28. ドワンゴ株式会社
10. 吉田ゆか子「仮面から考える顔の文化論にむけて—バリ島仮面劇トベンを手がかりに」, シンポジウム「顔と身体表現に基づく異文化理解」, 2015.12.13. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

11. Yukako Yoshida, “Globalization of Performing Arts and its Materiality: How Japanese performers treat Balinese gamelan instruments and masks”, International Council for Traditional Music 42nd world conference, 2015. 7.17. カザフ国立芸術大学
12. 吉田ゆか子 「特異な身体をめぐる遊戯—バリ島の演劇における『障害』の模倣表現とその受容」, 日本文化人類学会第49回研究大会, 2015. 5.31. 大阪国際交流センター
13. 吉田ゆか子 「バロン・ダンスの仮面からみるバリ島文化観光—芸能の『資源化』をめぐる」, 現代人類学研究会, 2015. 4.25. 東京大学駒場キャンパス
14. 河合香吏 「ともに生きる—共同研究『人類社会の進化的基盤研究』の試みから」, 第10回人類学関連学会協議会合同シンポジウム, 2015.10.11. 関西学院大学
15. 河合香吏 「企画シンポジウム・広義の人類学から多角的にヒトの進化を考える—生態人類学」, 人類学若手の会第4回総合研究集会, 2016.2.4. 九州大学
16. 内堀基光 「凡庸ながらマルクスの箴言から：サルの解剖とヒトの解剖との対照の延長上で語ること」, 日本霊長類学会自由集会, 2015.7.18. 京都大学
17. 黒田末寿 「滋賀県余呉の焼畑技術の考察：とくに栽培カブの採種技術の由来について」, 「焼畑の技術と知恵を活かした日本の森づくりに資する実践的地域研究」報告会, 2015.6.21. 高知大学
18. 黒田末寿 「実践で学んだ滋賀県余呉町の焼畑技法-在地の知の再検討」, 京都大学生存基盤科学研究ユニット・京滋FS事業第83回実践型地域研究定例研究会, 2016.2.22. 京都大学東南アジア研究所
19. Oomura, Keiichi, “Conditions for Well-being: Subsistence Systems in Contemporary Inuit Societies”, The Second International Conference, “WISDOM ENGAGED: Traditional Knowledge & Community Well-Being”, 2015.2.19. Snell Hall, University of Alberta
20. Oomura, Keiichi, “Politics of the Homo Sapience Multiple: The Anthropological Tasks Unfolded by Taking Inuit Ontology Seriously”, The International Workshop “Politics of Environmental Knowledge: Encounters between Indigeneity and Modernity”, 2015. 3.07. Osaka University, Nakanoshima Centre
21. 大村敬一 「イヌイトの知識と近代科学はどう違うのか？—カナダ・イヌイトを通して人類の秘密を探る」, 『北極クラブ』第3回講演会, 2015.5.30. 東京資源会館
22. 大村敬一 「イヌイト・アートをめぐるコスメティックの政治：＜旅するアート＞と＜インヴォリューションするアート＞のもつれ合い」, 国立民族学博物館 共同研究会「表象のポリティックス」ミニシンポ, 2016.1.31. 国立民族学博物館
23. 大村敬一 「＜足し算の人類学＞から＜引き算の人類学＞へ：エドゥアルド・コーン著『森は考える：人間的なるものを超えた人類学』, 科研費基盤研究(A)「動物殺しの比較民族誌研究」(立教大学・研究代表者：奥野克巳)第5回研究会新刊本合評会2, 2016.2.19. 東北大学大学院文学研究科
24. Oomura, Keiichi, “Potentialities of Inuit Qaujimatugangit: Challenges of Nunavutmiut for Governance in Future”, Inuit Qaujimatugangit Workshop, 2016.3.16. Frobisher Inn, Koojesse Room North, Iqaluit
25. 西井涼子 「ムスリム女性とヴェール：タイのダツ運動の事例から」, 「東南アジア・中東に跨がるイスラーム・ネットワークの動態に関する学術的研究」研究会, 2015.10.3. 鹿児島大学法文学部
26. 西井涼子 「顔の不在もたらしこと—ムスリム女性のヴェール着用をめぐる」, 基幹研究人類学シンポジウム『顔と身体表現に基づく異文化理解』, 2015.12.13. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
27. Morie Kaneko & Masayoshi Shigeta, “Formation and sharing of local knowledge on the production and consumption of fermented ensete (*Ensete ventricosum*, Musaceae) starch among the Aari people of Southwestern Ethiopia”, 19th international conference of Ethiopian Studies, 2015.8.26. University of Warsaw
28. 金子守恵・重田真義 「エチオピア西南部オモ系農耕民アリによるエンセーテ (*Ensete ventricosum*) 品種の認知・栽培・利用をめぐる在来知」, 第25回日本熱帯生態学会年次大会, 2015.6.21. 京都大学
29. HIGAKI, Tatusya, “Deleuze and Technology, eleuze Studies in Asia Conference”, 2015.6.6. Manipal University, India

〔図書〕計8件

1. 床呂郁哉 (編) 『顔と身体表現に基づく異文化理解』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 全114頁.
2. 奥野克巳 (共監訳) 『森は考える：人間的なるものを超えた人類学』, 亜紀書房, 2016. 全492頁.
3. 吉田ゆか子 『バリ島仮面舞踊劇の人類学—人とモノの織りなす芸能』, 風響社, 2016. 全380頁.
4. 河合香吏 (編) 『他者—人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 全454頁.
5. 春日直樹 (編) 『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』, 東京大学出版会, 2016. 全337頁.
6. 内堀基光・山本真鳥 (編) 『人類文化の現在：人類学研究』, 放送大学教育振興会, 2016. 全284頁.

7. Nakamura M, Hosaka K, Itoh N, Zamma K, *Mahale Chimpanzees: 50 Years of Research.*, Cambridge University Press, 2015. 750 pp.
8. 檜垣立哉『日本哲学原論序説』, 人文書院, 2015. 全 282 頁.

〔社会に向けた成果発表〕計 10 件

1. 床呂郁哉「ひともの関係性を探る—人間と非人間の揺らぎと越境をめぐって」(巻頭特集・責任編集)『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 2-11.
2. 吉田ゆか子「バリ島天女の舞にみる人と仮面の関係」『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 8-9.
3. 吉田ゆか子「芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点の探求」『民博通信』150, 国立民族学博物館, 2015. 22-23.
4. 吉田ゆか子「他者と折り合うユーモア—バリ島仮面舞踊劇トペン」『月刊みんぱく』2015年6月号, 国立民族学博物館, 2015. 8-8.
5. Yoshida, Yukako, How Replicated Masks Work in Balinese Society: The Case of Topeng Legong., *Proceedings of the 3rd Symposium of the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia*, 2015. 218-222.
6. 河合香吏「ともに生きる—霊長類学と人類学からのアプローチ」(巻頭特集・責任編集)『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 2-11.
7. 河合香吏「フィールドワークって何? テーマ: 育てる」(巻頭言)『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 13-13.
8. 大村敬一「動物を通して家族をつくる: カナダ・イヌイトの生業システムにみる世界生成の秘密」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 10-11.
9. 大村敬一「イヌイトの知識と近代科学はどう違うのか?—カナダ・イヌイトを通して人類の秘密を探る」『アークトス』47, アークトス, 2015. 1-7.
10. 中村美知夫「どこまでが『人間』? どこまでが『もの』?—動物からの問い」『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 4-5.

人類社会の進化史的基盤研究 (4)

研究期間: 2015-2017 代表: 河合香吏/所員 3, 共同研究員 19)

所員: 床呂郁哉, 西井涼子

共同研究員: 足立薫, 伊藤詞子, 内堀基光, 大村敬一, 春日直樹, 北村光二, 黒田末寿, 杉山祐子, 曾我亨, 竹ノ下裕二, 田中雅一, デイビッド・S・スプレイグ, 寺嶋秀明, 中川尚史, 中村美知夫, 西江仁徳, 花村俊吉, 船曳建夫, 山越言

ウェブサイト: <http://human4.aa-ken.jp/>

研究会等の内容

第1回研究会 (通算第1回目)

- (1) 趣旨説明 (河合香吏・AA 研)
- (2) 本共同研究課題に向けての3分野からの話題提供
 - 1) 竹ノ下祐二 (AA 研共同研究員・中部学院大学) 「霊長類学」
 - 2) 杉山祐子 (AA 研共同研究員・弘前大学) 「生態人類学」
 - 3) 春日直樹 (AA 研共同研究員・一橋大学) 「社会文化人類学」

第2回研究会 (通算第2回目)

- (1) 内堀基光 (AA 研共同研究員・放送大学) 「生きる共同体にとっての過去と未来—死者・神・自然」
- (2) 足立薫 (AA 研共同研究員・京都産業大学) 「社会の進化と種間関係」
- (3) 藤井真一 (大阪大学大学院生) 「暴力と平和カーソロモン諸島の「民族紛争」渦中における生存戦略」

第3回研究会 (通算第3回目)

- (1) 黒田末寿 (AA 研共同研究員・滋賀県立大学名誉教授) 「類人猿のホーティカルチャー」
- (2) 寺嶋秀明 (AA 研共同研究員・神戸学院大学) 「極限的出会いと進化—ヒトは何とどのように出会い, どう進化してきたのか?」
- (3) 大村敬一 (AA 研共同研究員・大阪大学) 「消滅の恐怖と魅惑—カナダ・イヌイト社会の生成・維持のメカニズムにみる人類の社会性のエンジン (「引き算の人類学」の試み序章)」

研究成果一覧

[学術論文] 計 31 件

1. 河合香吏「進化から「他者」を問う—人類社会の進化史的基盤を求めて」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 1-18. (査読有)
2. 黒田末壽「霊長類社会における承認する他者, 不可解な他者」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 21-41. (査読有)
3. 中村美知夫「動物は『他者』か, あるいは動物に『他者』はいるのか?」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 43-64. (査読有)
4. 曾我亨「他者が立ち現れるとき」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 65-86. (査読有)
5. 北村光二「拒否できる他者」の出現: 人間社会への移行における不可避の条件」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 87-105. (査読有)
6. 早木仁成「共感と社会の進化—他者理解の人類史」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 107-122. (査読有)
7. 西江仁徳「続・アルファオスとは「誰のこと」か?—チンパンジー社会における「他者」のあらわれ」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 125-148. (査読有)
8. 伊藤詞子「出会われる「他者」: チンパンジーはいかにくわからなさ>と向き合うのか」, 『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 149-176. (査読有)
9. 花村俊吉「見えないよそ者の声に耳を敬てるとき—チンパンジー社会における他者」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 177-205. (査読有)
10. 河合香吏「「敵を慮る」という事態の成り立ち—ドドスにとって隣接集団とはいかなる他者か」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 207-225. (査読有)
11. 大村敬一「他者のオントロジー: イヌイト社会の生成と維持にみる人類の社会性と倫理の基盤」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 229-250. (査読有)
12. 杉山祐子「祖霊・呪い・日常生活における他者の諸相—ザンビア農耕民ベンバの事例から」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 251-278. (査読有)
13. 西井凉子「「顔」を覆うヴェールの下のムスリム女性たち」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 275-294. (査読有)
14. 田中雅一「道具と道義—他者論への実践的アプローチ」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 295-313. (査読有)
15. 内堀基光「他者としての精霊—イバン民族誌から」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 315-338. (査読有)
16. 山越言「野生動物との距離をめぐる人類史」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 339-365. (査読有)
17. 足立薫「環境の他者へ—平衡と共存の行動学私論」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 357-377. (査読有)
18. 竹ノ下祐二「社会という「物語」—分業, 協同育児と他者性の進化」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 379-398. (査読有)
19. 床呂郁哉「野生のチューリング・テスト—非人間のくも>が他者となるとき」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 399-418. (査読有)
20. 船曳建夫「苦悩としての他者—三者関係と四面体モデル」『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 419-438. (査読有)
21. 黒田末壽「伊谷純一郎の霊長類社会学」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式—』, AA 研および東京大学出版会, 2016. 114-134. (査読有)
22. 足立薫「霊長類学における共感と共存」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式—』, AA 研および東京大学出版会, 2016. 136-154. (査読有)
23. 西井凉子「人が家で死ぬということ—死のプロセスについての南タイのフィールドからの人類学的実践」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式—』, AA 研および東京大学出版会, 2016. 158-176. (査読有)
24. 河合香吏「野 (フィールド) から紙 (ペーパー) へ—生態人類学のドキュメンテーション」『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式—』, AA 研および東京大学出版会, 2016. 194-211. (査読有)

25. 黒田末壽「霊長類を観察する—生態的参与観察の可能性—」『人はなぜフィールドに行くのか? : フィールドワークへの誘い』, 東京外国語大学出版会, 2015. 132-148. (査読有)
26. 床呂郁哉「<通過儀礼>から<終わりなき旅>へ—「遅い知」としての人類学的フィールドワーク試(私論)—」『人はなぜフィールドに行くのか? : フィールドワークへの誘い』, 東京外国語大学出版会, 2015. 270-292. (査読有)
27. 西井涼子「ある女性の生によりそって—フィールドにおける20年の「問い」のゆくえ—」『人はなぜフィールドに行くのか? : フィールドワークへの誘い』, 東京外国語大学出版会, 2015. 228-249. (査読有)
28. 大村敬一「果てしなき問いの連鎖を追いかけて: 実践を駆動する力としてのフィールドワーク」『人はなぜフィールドに行くのか? : フィールドワークへの誘い』, 東京外国語大学出版会, 2015. 250-269.
29. Matsumoto T, Itoh N, Inoue S, and Nakamura M, An observation of a severely disabled infant chimpanzee in the wild and her interactions with her mother, *Primates*57, 2016. 3-7. (査読有)
30. 大村敬一「人類でなくなるための人類学: 受動的な能動性が拓くおぞましくも美しき未来」『現代思想』vol. 43(13), 2015. 227-245. (査読有)
31. 大村敬一「ムンディ・マキーナ(世界生成の機械): イヌイトの知識から考える存在論と相互行為のダイナミクス」『動物と出会うII: 心と社会の構成』, ナカニシヤ出版, 2015. 250-269.

[口頭発表等] 計22件

1. 河合香吏「サル屋とヒト屋の共同研究とは? 「人類社会の進化的基盤研究」の試み」, 日本霊長類学会・自由集会, 2015.7.18. 京都大学
2. 河合香吏「ともに生きる—共同研究「人類社会の進化的基盤研究」の試みから—」, 第10回人類学関連学会協議会合同シンポジウム「群れる・集う—人類社会の原点を問う—」人類学関連学会協議会・日本民俗学会第67回年会併催, 2015.10.11. 関西学院大学
3. 河合香吏「企画シンポジウム・広義の人類学から多角的にヒトの進化を考える—生態人類学」, 人類学若手の会第4回総合研究集会, 2016.2.4. 九州大学
4. 中村美知夫「野生チンパンジーのデモグラフィと『老い』」, 第2回ジェロントロジー研究会, 2016.3.1. 東京文京学習センター
5. 中村美知夫・伊藤詞子「マハレのチンパンジーの果実採食の季節性と年変動—とくに *Saba comorensis* の重要性に着目して」, 第31回日本霊長類学会大会, 2015.7.20. 京都大学
6. 中村美知夫「「生物多様性」をローカライズする—タンザニア西部における地域コミュニティによる内発的自然保護を支援する環境教育システムの構築」, トヨタ財団 研究助成プログラム助成対象者ワークショップ「社会の新たな価値創出をめざして」, 2015.7.4. 京都大学
7. 西江仁徳「タンザニア・マハレM集団の野生チンパンジーの出産と子殺し/カニバリズムの新事例」, 第31回日本霊長類学会大会, 2015.7.20. 京都大学
8. 島田将喜・西江仁徳・中村美知夫「マハレ山塊国立公園の野生チンパンジーにおける社会的慣習の集団間伝播」, 第69回日本人類学会大会, 2015.10.12. 産業技術総合研究所臨海副都心センター
9. Tanaka, Masakazu, Military Environmental Problems: The Case of USMC Air Station Futenma, Okinawa, Workshop The Anthropology of Contemporary Civil-Military Entanglements Network (ACCME), 2015.6.28. Tel Aviv
10. 田中雅一「インド・ムンバイ売春街に見る宗教的要素とその不在」, 日本宗教学会第73回学術大会, 2015.9.6. 創価大学
11. 田中雅一「基地とともに生きるということ 普天間基地周辺に住む住民の聞き取り調査から考える軍事環境問題」, 日本平和学会秋季研究集会, 2015.11.28. 琉球大学
12. 田中雅一「インド・ムンバイの売春街におけるジェンダー, 宗教, カースト」, 京都大学, 2015. 12.12. 京都大学東京オフィス
13. 竹ノ下祐二「東山動物園の飼育ニシゴリラの社会的発達: 母—子および非母—子関係」, 第31回日本霊長類学会大会, 2015.7.18-20. 京都大学
14. Yamakoshi, Gen, Ethologie et ethnohistoire des chimpanzés, Séminaire: « Anthropologie évolutionnaire » Animalités croisées, animalités partagées. , 2015.8-9. Centre de la Vieille Charité, Marseille
15. 山越言・杉山幸丸・松沢哲郎・座馬耕一郎: 2015.6.20-21. 京都大学「ギニア, ボソウの野生チンパンジー群における耳部損傷頻度の定量化: センサーカメラを用いた個体識別と生息密度推定への応用に向けて」, 第25回日本熱帯生態学会年次大会, 2015.6.20-21. 京都大学

16. 山越言「西アフリカの精霊の森のチンパンジー探検記：わたしたちの祖先と暮らす人々」, 平成 27 年度第 5 回「信州サイエンステクノロジーコンテスト」～「科学の甲子園」長野県予選～サイエンス講演会, 2015.11.14. 信州大学
17. Yamakoshi, G., “Who Owns African Nature? African Perspectives on the Future of Community-Based Conservation”, African Potentials 2016: International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence, 2016.1. 23–24. Kyoto University
18. 内堀基光「凡庸ながらマルクスの箴言から：サルの解剖とヒトの解剖との対照の延長上で語ること」, 第 31 回日本霊長類学会・自由集会, 2015.7.18. 京都大学
19. 伊藤詞子「霊長類学者, 人類学者に会う」, 第 31 回日本霊長類学会・自由集会, 2015.7.18. 京都大学
20. 北村光二「「コミュニケーションの進化」を考える」, 第 31 回日本霊長類学会・自由集会, 2015.7.18. 京都大学
21. 大村敬一「イヌイトの知識と近代科学はどう違うのか? : カナダ・イヌイトを通して人類の秘密を探る」, 『北極クラブ』第 3 回講演会, 2015.05.30. 東京資源会館
22. Omura, K., “Human Bio-Cultural Diversity and Space Development. Socio-cultural Approaches for Space Exploration”, ISTS 2015(30th International Symposium on Space Technology and Science), 2015.07.9. Kobe International Conference Center

〔図書〕計 7 件

1. 河合香吏(編)『他者—人類社会の進化』, AA 研および京都大学学術出版会, 2016. 全 454 頁.
2. Nakamura M, Hosaka K, Itoh N, and Zamma K.(eds.), *Mahale Chimpanzees: 50 Years of Research*, Cambridge University Press, 2015. 780 pp.
3. 中村美知夫『「サル学」の系譜—人とチンパンジーの 50 年』, 中公叢書, 2015. 全 299 頁.
4. 中川尚史『“ふつう”のサルが語るヒトの進化と起源』, ぶねうま舎, 2015. 全 204 頁.
5. 山越言・目黒紀夫・佐藤哲(編)『アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか: 住民参加型保全の逆説を乗り越える』, 京都大学学術出版会, 2016. 全 300 頁.
6. 杉山祐子・山口恵子(共著)『地方都市とローカリティ』, 弘前大学出版会, 2016. 全 302 頁.
7. 内堀基光・山本真鳥(共編)『人類文化の現在—人類学研究』, 放送大学教育振興会, 2016. 全 284 頁.

〔社会に向けた成果発表〕計 8 件

1. 河合香吏「ともに生きる—霊長類学と人類学からのアプローチ」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 2-3.
2. 伊藤詞子「離れ合いつつ, ともに生きるチンパンジー」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 4-5.
3. 竹ノ下祐二「アフリカの森でともに生きるチンパンジー, ゴリラ, そしてヒト」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 6-7.
4. 寺嶋秀明「森に生きる技術—人とつながる・自然とつながる」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 8-9.
5. 大村敬一「動物を通して家族をつくる—カナダ・イヌイトの生業システムにみる世界生成の秘密」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 10-11.
6. 床呂郁哉「ひとと「もの」の関係を探る—人間と非人間の境界の揺らぎと越境をめぐる」『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 2-3.
7. 中村美知夫「どこまでが「人間」? どこまでが「もの」?—動物からの問い」『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 4-5.
8. 若生謙二・森謙二・伊谷原一・石田戠・山越言「家族って何? 動物との比較から家族を考える—動物集団から人間家族へ—」『ヒトと動物の関係学会誌』42, ヒトと動物の関係学会, 2015. 26-34.

『プレゼンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために

研究期間：2015–2017 (代表：中村隆之/所員 1, 共同研究員 8)

所員：佐久間寛

共同研究員：粟飯原文子, 小川了, 佐々木祐, 砂野幸稔, 星埜守之, 真島一郎, 吉田裕

研究会等の内容

第1回研究会 (2015年6月20日)

発表者 (1) : 中村隆之「詩の国民性 (民族性) とは何か? 脱植民地化期のフランス語圏カリブ・アフリカ知識人における文学の問いをめぐって」 コメンテーター: 砂野幸稔

第2回研究会 (2015年10月3日)

発表者 (1) 佐久間寛「プレザンス・アフリケーヌ誌目録の構想と初期の概容 (1955-1960年)」

発表者 (2) 小川了「Hosties Noires に至る道 B. ジャーニュと W.E.B. デュボイスから L.S. サンゴールへ」

コメンテーター: 佐々木祐

第3回研究会 (2016年3月5日)

発表者 (1) 松井裕史「隆起する大地の夢想—セゼールの詩学と政治」 コメンテーター: 平田周

発表者 (2) 中村隆之「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』」 コメンテーター: 西成彦

研究成果一覧

[学術論文] 計 11 件

1. 中村隆之「西川長夫の著作における〈新〉植民地主義のテーマについて」『立命館言語文化研究』27 巻 1 号, 立命館大学言語文化研究所, 2015. 175-180. (査読有)
2. 中村隆之「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』(1)」『立命館言語文化研究』27 巻 2・3 号, 立命館大学言語文化研究所, 2015. 189-205. (査読有)
3. 佐久間寛「セゼールとモース—脱植民地期の黒人知識人と人類学の対話」『立命館言語文化研究』27 巻 2・3 号, 立命館大学言語文化研究所, 2016. 233-245. (査読有)
4. Yukitoshi Sunano, Stratégie culturelle d'une société multilingue: Paysage linguistique d'un pays ouest-africain, le Sénégal, 『熊本県立大学文学研究科論集』8, 2015. xlix-lxxv. (査読有)
5. Yukitoshi Sunano, Comment les langues africaines des anciennes colonies françaises pourront-elles être réhabilitées? Le cas du Sénégal, 『熊本県立大学文学部紀要』Vol.21 No.74, 2015. 1-13. (査読有)
6. Yukitoshi Sunano, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 1.Dakar, 『熊本県立大学文学部紀要』Vol.22 No.75, 2016. 77-109. (査読有)
7. 小川了「アンチモダンとしてのプシカリとヴォレノーヴェン—ナショナリズム・カトリシズム・植民地主義」『ブラック・モダニズム—間大陸的黒人文化表象におけるモダニティの生成と歴史化をめぐって』, 未知谷, 2015. 65-97.
8. 真島一郎「呪術と精霊の渦巻く格闘—コートジボアール・ダン族のレスリング」『スポーツロジイ Sportology』3 号, みやび出版, 2015. 7-27.
9. 真島一郎「翻訳論 ver.2015—生の振幅をめぐる賭け」『ザ・コンテンポラリー2—誰が世界を翻訳するのか』展図録, 金沢 21 世紀美術館, 2016. 132-135.
10. 真島一郎「非暴力の牙」『現代思想』44 巻 2 号, 青土社, 2016. 129-137.
11. 栗飯原文子「第三世界」『グローバルヒストリーとしての「1968 年」—世界が揺れた転換点』, ミネルヴァ書房, 2015. 51-77.

[口頭発表等] 計 10 件

1. 中村隆之「20 世紀フランス語圏カリブ海文芸誌の研究の現状と課題—『アコマ』誌を事例に」, 大東文化大学語学教育研究所第 1 回研究発表会, 2015.6.15. 大東文化大学語学教育研究所
2. 中村隆之「都市とリズム—エドゥアール・グリッサンを手がかりに」, 公開研究会「都市空間の未来像」Vol.2 「近代都市の境界: 関係・混淆・錯綜」, 2015.9.26. 大阪大学大学院国際公共政策研究科
3. 佐久間寛「首長, 組合, モラル: 西アフリカ農村社会におけるアントレプレナーシップ」, アントレプレナーシップ研究会 (北海道大学科学研究費基盤研究 (C)「ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究」), 2016.2.27. 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
4. 佐久間寛「明かされる場, 隠される者, 映される事—西アフリカ農村の命名式をめぐる映像=人類学」, AA フォーラム, 2015.12.10. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
5. 真島一郎「3・11 と 6・23 をつなぐために」, 国際シンポジウム『非暴力の牙』, 2015.11.23. 東京外国語大学
6. 真島一郎「西アフリカと東アジア—映しあう破局と主権の鏡」, 日本平和学会 2015 年秋期研究集会シンポジウム『ヤナマール, 新たな非暴力のかたち—西アフリカ社会運動体の訴える成長の破局, 生者の主権』, 2015.11.28. 琉球大学法文学部
7. 真島一郎「アフリカに根はあったのか—東アジアの視界から」, シンポジウム『越境とリミックスの世界文学』, 2016.3.8. 日本女子大学目白キャンパス新泉山館

8. 真島一郎「他者の生を，自己の生につなげる—山口昌男と文化人類学」，東京外国語大学・読売新聞立川支局共催連続市民講座第11回，2016.3.19. 東京外国語大学アゴラ・グローバル プロメテウス・ホール
9. 吉田裕「困難な自律の方へ—ジョージ・ラミング中期作品試論」，日本英文学会関東支部（第11回）シンポジウム—カリブ・アフリカ文学と「民衆」，2015.10.31. 慶応義塾大学三田キャンパス
10. 吉田裕 コメント「セッション1 移動する原爆—文学」，第49回原爆文学研究会「国際会議：核・原爆と表象／文学—原爆文学の彼方へ」，2015.12.12. 九州大学西新プラザ大会議室

〔図書〕計3件

1. 中村隆之『エドゥアール・グリッサン—<全世界>のヴィジョン』，岩波書店，2016. 全225頁.
2. 砂野幸稔『シクルマーアフリカ統一の夢』，山川出版社，2015. 全88頁.
3. 小川了『第一次大戦と西アフリカ—フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」』，刀水書房，2015. 全378頁.

〔社会に向けた成果発表〕計10件

1. 中村隆之「剥奪から混淆へ」『世界の名前』，岩波書店，2016.182–184.
2. 星埜守之「意味の喪失と記号の残存—シュルレアリスム断想」『パリ II—近代の相克』（西洋近代の都市と芸術3） ，竹林舎，2015.346–353.
3. 星埜守之「『クレオール文学』を翻訳する—『テキサコ』を中心に」，*Les lettres françaises*35，2015.63–77.
4. 真島一郎「迷宮への愛を生きる」『ピエリア』7，東京外国語大学出版会，2015.20–21.
5. 吉田裕【書評】「C・L・R・ジェームズ（著）本橋哲也（訳）『境界を越えて』月曜社刊，2015.」『週刊読書人』3098，2015.4–4. (URL: <http://dokushojin.shop-pro.jp/?pid=91847599>)
6. Yoshida Yutaka and Rebecca Jennison, 【翻訳】 Words for a Preface: Jindalle/ Azaleas or Flowers for Body Offerings, *Still Hear the Wound: Toward an Asia, Politics, and Art to Come*, Cornell University East Asia Program, 2015. xliiii–lvi. (URL: <https://cap.einaudi.cornell.edu/publication/new-title-still-hear-wound-toward-asia-politics-art-come-selected-essays-edited-lee>)
7. 栗飯原文子【翻訳】「ヴィジャイ・プラシャド「イスラーム国とは何か」」『現代思想』3月臨時増刊号，青土社，2015.239–257.
8. 栗飯原文子：「コンゴ版ダンディズム—古くて新しい“エレガンス”の伝統—ダニエール・タマーニ」『SAPEURS the Gentlemen of Bacongo』，『こころ』27，平凡社，2015.170–173.
9. 栗飯原文子【翻訳】ラジャ・マルチー「ムンバイからパリへ—南アジア，死を招く裏切り行為」『現代思想』1月臨時増刊号，青土社，2015.260–264.
10. 栗飯原文子【翻訳】ウォレ・ショインカ『狂人と専門家』「紛争地域から生まれた演劇7」，国際演劇協会日本センター，2015.5–86.

中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存（第2期）

研究期間：2013-2015（代表：黒木英充／所員 4，共同研究員 13）

所員：近藤信彰，高松洋一，錦田愛子

共同研究員：岩崎えり奈，上野雅由樹，臼杵陽，加藤博，松原康介，山本薫，吉村貴之，

Aida Kanafani-Zahar, Bernard Hourcade, Carla Edde, Malek Sharif, Nora Lafi, Stefan Knost

ウェブサイト：http://meis2.aacore.jp/jr_me_urban_societies

研究会等の内容

第1回研究会（通算第4回目）日時：2015年9月3日（木）・4日（金）10:00-14:00

場所：3日 JaCMES, Beirut, 4日 Crowne Plaza, Beirut 使用言語：英語

3日：Hidemitsu Kuroki “Introduction”,

Presentations for the coming volume's publication by Kaoru Yamamoto, Malek Sharif, Carla Edde, & Nora Lafi;

Introduction of paper summaries' by Aida Kanafani-Zahar, Hiroshi Kato, Erina Iwasaki, Bernard Hourcade, Masayuki Ueno, & Takayuki Yoshimura

4日：Presentations by Nobuaki Kondo, Yoichi Takamatsu, Stefan Knost, Hidemitsu Kuroki, Aiko Nishikida, & Kosuke Matsubara

第2回研究会（通算第5回目）成果報告書の論文構想発表

日時：2016年2月16日（火）14:00-17:30・17日（水）13:30-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3F 大会議室(303) 使用言語：英語

16 日：Hidemitsu KUROKI (ILCAA) “Introduction”, Paper Presentations:

Kaoru Yamamoto “Writing the Memories of War in Post-war Lebanon”

Malek Sharif “The building up of sectarian sentiments in Beirut and the 1903 massacre of Christians which did not happen”

Aiko Nishikida “Restricted Coexistence among Palestinians and Israelis of Different Citizenship”

Nobuaki Kondo “Non-Muslims at the Shari`a Courts of Qajar Tehran”

Paper Summaries' Introductions:

Aida Kanafani-Zahar “Food traditions between city and village”

Bernard Hourcade “The suburbs of Tehran: the role of cultural/ ethnic factors in the critical social geography of the capital city”

Carla Edde “Who’s Beirut? Accommodating demography and politics: Maronites in Beirut in the 19th and early 20th centuries”

Masayuki Ueno “An Experimental Experience in Political Participation: Istanbul Armenians in the 1860s and 1870s”

Takayuki Yoshimura “The Armenian Repatriation and its influence toward the Armenian Communities in Lebanon and Syria”

17 日：Paper Presentations

Yoichi Takamatsu “Greek Orthodox (Rum) population of late 18th and 19th- Centuries Istanbul: a study of the population registers(nüfus defterleri)”

Madoka Morita “Open to Whom?: “Public Space” and Gender/Religious Boundaries in Istanbul (1730-54)”

Nora Lafi “Organizing Coexistence in Early Ottoman Aleppo: the 1518, 1526 and 1536 Tahrîr Defteri and Kanunname”

Hidemitsu Kuroki “Population of Mid-19th Century Aleppo Reconsidered”

Stefan Knost “Waqf and the State in Late 19th Century Ottoman Urbanism: The Case of Aleppo”

Kosuke Matsubara, “The genealogy of Haussmannisation in the historic city of Aleppo: A case study of the overseas deployment of French urbanism”

Hidemitsu KUROKI (ILCAA) Concluding remarks

研究成果一覧

[学術論文] 計 15 件

1. Hourcade, Bernard, “Tehran az 1979 payetakht-e iranian shod”, Proceedings of the conference on decentralization and ordering the capital, Ahmadi S. and Roumina E. University Tarbiat-e modares, Center of Political geography, 378-382. 2015.
2. Hourcade, Bernard, “Iran quel avenir? Les trois défis iraniens : nationalisme, Islam et mondialisation”, *Parcours*, 51-52. 149-174.2015. (査読有)
3. Hourcade, Bernard: “L’Iran et le monde arabe?” une rivalité dépassée?”, *Hérodote*, 160-161. 337-363.2015. (査読有)
4. 岩崎えり奈：「チュニジアの2014年選挙と地域」, 『中東研究』 524,76～95.2015.
5. Hiroshi Kato, Erina Iwasaki: “Réseaux locaux en Egypte: Rôle des associations villageoises au Caire”, *Mediterranean World*, Vol.22.1-16. 2015.
6. Hiroshi Kato, Erina Iwasaki: “Personality” of Economic Development in the Delta region of Egypt in modern times: Focus on Buhaira governorate”, *Journal of Asian Network for GIS-based Studies (JANGIS)*, No.3, 31-37. 2016. (査読有)
7. Kondo, Nobuaki: “The Shah ‘Abd al-‘Azim Shrine and its Waqf under the Safavids”, *Mapping Safavid Iran*, (Nobuaki Kondo ed), ILCAA, 41-65. 2015.
8. Lafi, Nora: “The Nature of Jewish Spaces in Ottoman Algiers”, *Jewish and Non-Jewish Spaces in the Urban Context*, Alina Gromova, Felix Heinert, Sebastian Voigt (eds.), Berlin, Neofelis Verlag, 83-98. 2015. (査読有)
9. Lafi, Nora: “L’empire ottoman en Afrique: perspectives d’histoire critique”, *Cahiers d’Histoire. Revue d’Histoire Critique*, 128. 59-70. 2015. (査読有)
10. Lafi, Nora: “Diversity and the nature of the Ottoman Empire from the construction of the imperial old regime to the challenges of modernity”, *Routledge International Handbook of Diversity Studies*, Steven Vertovec (ed.), London, Routledge, 125-131. 2015. (査読有)
11. 高松洋一：「勅令の「裏側」を読む—大宰相府伝来の勅令正文に関する一考察」, 『近世イスラーム国家史研究の現在』 近藤信彰 (編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 299-328. 2015.
12. Matsubara, Kosuke: “Gyoji Banshoya (1930–1998): a Japanese planner devoted to historic cities in the Middle East and North Africa”, *Planning Perspectives(Online)* 1-33.2015. (査読有)

13. Matsubara, Kosuke: “Japanese Collaborators in the Golden Age of Modern Khmer City and Architecture in Cambodia”, Proceedings of the 15th SCA Conference and International Symposium, 16. 13-18. 2015. (査読有)
14. Matsubara, Kosuke: “The Work of Gyoji Banshoya in the Middle East and North Africa”, *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 1: Tehran, Aleppo, Istanbul, and Beirut*, MEIS series 19. Kuroki, Hidemitsu, ILCAA. 167-192. 2015.
15. 山本薫:「イスラエル・アラブの文化創造力: アイロニーの系譜」『ユダヤ・イスラエル研究』29. 35-40. 2015.

[口頭発表等] 計 43 件

1. Hidemitsu Kuroki, “Armenians in Mid-19th Century Aleppo”, Symposium “Armenians of Syria”, 2015.5.25. Haigazian University.
2. Hidemitsu Kuroki, “China-Japan-Korea Cooperation for Middle Eastern Studies”, International Symposium on “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7. Shanghai International Studies University.
3. Hidemitsu Kuroki, “Syrian civil war and the role of East Asian countries”, International Symposium on “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7. Shanghai International Studies University.
4. Hidemitsu Kuroki, “An inevitable wave?: Syrian(and Lebanese) migrants to Europe in historical context”, International Symposium “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints, 2015.12. 北海道大学
5. 黒木英充「近現代の歴史的シリアにおける人間移動と少数派」, 東京大学中東地域研究センター公開シンポジウム『移動・移民と中東』, 2016.1.30. 東京大学駒場キャンパス
6. Hidemitsu Kuroki, “Lebanon-Mexico-Japan Connection: Background of Revival of “Lebanon 1949”, Film Screening Meeting “Lebanon 1949”, 2016.3.22. Metropolis Empire Sofil, Beirut.
7. 黒木英充「シリア危機と多民族・多宗教問題」, 神奈川大学生涯学習エクステンション講座, 2015.6.6. 神奈川大学みなとみらいエクステンションセンター
8. 黒木英充「レバノン・ディアスポラ(移民)の意図せざる拡散と戦略的な拡張」 武蔵大学公開講座『ディアスポラから見る世界』, 2015.10.17. 武蔵大学
9. Hourcade, Bernard: “Iran, une puissance émergente ou marginalisée?”, Conférence de l'Association des professeurs d'histoire et géographie, 2015.4.1. Reims.
10. Hourcade, Bernard: “Téhéran: une métropole au cœur des crises et des espoirs de l'Iran, Conférence “Le printemps culturel”, 2015.5.10. Neuchatel (Suisse).
11. Hourcade, Bernard: “L'Iran et les crises internationales du Moyen orient”, Conférence du Monde Diplomatique. 2015.7.4. Paris.
12. Hourcade, Bernard: “Les nouveaux défis de l'Iran nation émergente”, Conférences Amphi, 2015.10.15. Paris, Institut d'Études Politique.
13. Hourcade, Bernard: “A New Iran Facing the Oil Monarchies”, Seminar: The nuclear agreement with Iran: regional implications, 2015.11.24. Helsinki, The Finnish Institute of International Affairs.
14. Hourcade, Bernard: “L'Iran: une ouverture prometteuse”, Conférence Akteos au Sénat, 2015.12.16. Paris, Palais du Luxembourg.
15. Hourcade, Bernard: “La situation géopolitique de l'Iran”, Conférence de La Fondation Méditerranéenne d'Etudes Stratégiques, 2015.12.19. Toulon.
16. Hourcade, Bernard: “L'Iran, une société en mouvement, une puissance émergente”, Conférence de Centre Varois de Conférences Internationales, 2016.1.20. Toulon.
17. Hourcade, Bernard: “Les nouveaux défis internationaux de l'Iran”, Sénat, Fondation, «Prospective et innovation», 2016.2.11. Paris, Palais du Luxembourg.
18. Hourcade, Bernard: “Les villes et métropoles d'Iran: le creuset d'une nouvelle société nationaliste, islamique, ou mondialisée”, Grandes conférences Sarah Yalda du «Figaro» 2016.1.15. Paris, Théâtre des Mathurins.
19. Hourcade, Bernard: “Iran Arabie vers une guerre régionale?”, Grandes conférences Sarah Yalda du «Figaro», 2016.1.20. Paris, Théâtre des Mathurins.
20. Hourcade, Bernard, et als, The International dimension of the elections, Seminar “Analyzing the Results of the February 26 Iranian Elections”, 2016.3.2. Washington DC, W. Wilson Center
21. Iwasaki, Erina, Overview of the Study Villages, 上智大学アジア文化研究所ワークショップ『Direction of Changes in the Nile River and the Egyptian Villages』, 2016年3月11日. 上智大学.
22. Iwasaki, Erina: “Water Management System in Rashda Village, Dakhla Oasis”, Organized Session “Study of 'Sustainable' Development in the Water-Scarce Society - Case of a Village in the Western Desert (Egypt)”, International Symposium on Agricultural Meteorology(ISAM 2016), 2016年3月15日. 岡山大学.

23. 岩崎えり奈：「チュニジアについて」上智大学イスラーム研究センター (SIAS) 主催シンポジウム『「アラブの春」から「イスラム国」へ—無秩序と混乱の広がる中東・北アフリカの現状』, 2015年12月5日.上智大学.
24. Iwasaki, Erina: “Modern Cairo and Alexandria from the Demographic Viewpoint” Meeting of the Project at JaCMES “Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2”, 2016年2月17日. AA 研.
25. Iwasaki, Erina, Yuki Maruyama, Bouya Ahmed Ould Ahmed, Mitsuteru Irie: “Management of Water Resource and Agriculture in the Senegal River area (Mauritania) – Interdisciplinary Study of Farmers’ Strategy”, Session of “Survival Strategy in Arid Land-Management of Water Resource and Agriculture” Tsukuba Global Science Week (TGSW) 2015, 2015年9月28日. 筑波大学.
26. Kato, Hiroshi, and Erina Iwasaki: “Alexandria in the Time of Constantine Cavafy (1863-1933)”, Workshop co-organized by the Mediterranean Studies Group (Hitotsubashi University, Tokyo) and University of Ionia, 2016.3.28. University of Ionia (Corfu, Greece).
27. Kondo, Nobuaki: “Multiconfessionalism in 19th Century Iran: Jews in Qajar Tehran, a Reappraisal”, Seminar für Arabistik/Islamwissenschaft am Orientalischen Institut, 2015.11.23. Martin-Luther-Universität Halle- Wittenberg.
28. Kondo, Nobuaki: “State and Shrine in Iran: Waqf Administration of the Shah ‘Abd al-‘Azim Shrine under the Qajars”, The Fourth International Symposium of Inter-Asia Research Networks “Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations”, 2015.12.5.東洋文庫.
29. Nishikida, Aiko, & Ken Shimizu: “Arab migrants-refugees from Swedish foreign policy’s perspective”, A two-day symposium sponsored by the Institute of Arab and Islamic Studies, “Researching the Middle East: Fieldwork, Archives, Issues, and Ethics”, 2015.6.10. The University of Exeter, Exeter, UK.
30. 錦田愛子：「再難民化する難民たち—中東から北欧を目指すアラブ系住民の移動」, 日本政治学会 2015 年度研究大会, 2015.10.11. 千葉大学
31. 錦田愛子：「見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防—国家承認, エルサレム, 和平分割案」, 地域研究コンソーシアム 年次集会一般公開シンポジウム「境界境域への挑戦と『地域』」, 2015.11.1.AA 研
32. Nishikida, Aiko: “The Choice to Move: Palestinian refugees' migration to European countries”, International Symposium “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian viewpoint”, 2015.12.8.Hokkaido University.
33. Takamatsu, Yoichi: “Turkish printed books with the Greek handwritten title in the Ayasofya Library”, Human Mobility and Multi-Ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies, 2015.9.4. Crowne Plaza, Beirut.
34. 高松洋一：「マフムト1世による Ayasofya 図書館の蔵書形成—歴史書を中心として」, 日本オリエント学会 第 57 回大会, 2015.10.18. 北海道大学文学部
35. 高松洋一：「オスマン朝の勅令起草過程で作成される文書類型について—大宰相府と財務長官府の協働の観点から—」, 2015 年度東洋史研究会大会, 2015.11.3. 京都大学文学部
36. Takamatsu, Yoichi: “I. Mahmûd’un İstanbul’da Kurduğu Üç Kütüphane: Ayasofya, Fatih ve Galatasaray Kütüphaneleri”, XVIII. Yüzyıl Osmanlı Kitap Koleksiyonerleri Bilgi Üretimi ve Dağılımı, 2015.12.25. Koç Üniversitesi Anadolu Medeniyetleri Araştırmaları Merkezi, İstanbul.
37. Matsubara, Kosuke: “The Result of Slum Upgrading Projects in 1950’s Algiers”, The Tunisia-Japan Symposium on Science, Society and Technology, 2016.02.23. University of Tsukuba.
38. Matsubara, Kosuke: “The genealogy of Haussmannisation in the historic city of Aleppo-A case study of the overseas deployment of French urbanism”, Annual meeting of Meurban-2, 2016.02.17. ILCAA.
39. Matsubara, Kosuke: “Les ouvrages de Gyoji Banshoya au Moyen-Orient et Maghreb”, Conférences Glycines, 2016.02.11. Centre d’études diocésain-Les Glycines.
40. Matsubara, Kosuke: Gyoji Banshoya’s work-As a Turning Point of Urban Planning Policy”, Annual meeting of Meurban-2, 2015.09.04. JaCMES.
41. 山本薫「アラブの春と広場文化」, 特定課題講座「風に吹かれて—テントが世界を包む」, 2015.6.17. 明治大学和泉キャンパス
42. 山本薫「アラブ小説の現在—国際アラブ文学賞審査員を務めて」, 中東現代文学研究会, 2015.6.21.早稲田大学
43. 山本薫「アラブの春・若者・詩—アラブ世界における若者の躍動とその後」, 早稲田奉仕園イスラーム連続講座, 2015.8.3. 早稲田奉仕園

[図書] 計 5 件

1. Hourcade, Bernard: “Géopolitique de l’Iran: Les défis d’une renaissance”, Armand Colin. Paris. 2016. pp337pp.
2. Kondo, Nobuaki (ed.): “Mapping Safavid Iran” ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo. 2015. 246pp.
3. Lafi, Nora, Ulrike Freitag, Nelida Fuccaro, Claudia Ghrawi (eds.): “Urban Violence in the Middle East: Changing Cityscapes in the Transition from Empire to Nation State”, Berghahn Books. Oxford and New York. 2015.334pp.

4. Lafi, Nora, Michel Espagne, Pascale Rabault-Feuerhahn(eds.): “Silvestre de Sacy. Le projet européen d’une science orientaliste”, Editions du Cerf. Paris. 2015.356pp.
5. 錦田愛子(編):『移民／難民のシティズンシップ』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2016. 全258頁.

〔社会に向けた成果発表〕計8件

1. 黒木英充:『先読み! 夕方ニュース』「夕方ホットトーク 内戦激化 シリアを崩壊から救うことはできるか—中東の最重要課題を展望する③」NHK ラジオ第1. 2015.6.24
2. 黒木英充:「内戦長期化 シリアのいま」, NHK Eテレ『視点・論点』.
3. 黒木英充:「ニュースの本棚 『テロ』とは何か」, 朝日新聞.
4. 黒木英充:「読書館 津村一史(著)『中東特派員はシリアで何を見たか』」, 西日本新聞, 2016.3.13
5. 黒木英充(インタビュー): “Kuroki li-l-Hayat: Hilal al-Hadarat tahawwal li-l-Hurub” (黒木がハヤートに: 文明の三日月地帯が戦争の三日月地帯に変容), Al-Hayat (レバノンのアラビア語最大紙), 2015.11.26.
6. 高松洋一:「定説をフィールドから問い直す: 大村幸弘(著)『トロイアの真実—アナトリアの発掘現場から』 シュリーマンの実像を踏査する」『FIELDPLUS』15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2016. p.27.
7. Kaoru Yamamoto: “al-Yaban wa Shabab al-Dimqratiya al-Judud al-Arabi al-Jadid”, Mulhaq al-Kutub, 2015.11.8. (<https://www.alaraby.co.uk/supplementbooks/3c74cfc9-a13b-4370-9ee2-84390941301c>)
8. 山本薫:『子のない母』に寄せて, 山形国際ドキュメンタリー映画祭『アラブをみる—ほどけゆく世界を生きるために』パンフレット. 2015.

〔その他: オンラインリソースなど〕計1件

黒木英充・高松洋一・松原康介: “*Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities*”, 中東都市・領域の古地図と Google Maps の重ね合わせによる研究情報共有システム <http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容

研究期間: 2013–2015 代表: 菅原由美/所員 3, 共同研究員 8)

所員: 澤田英夫, 塩原朝子, 宮崎恒二

共同研究員: 青山亨, 深見純生, 山崎美保, Eni Sri Budi Lestari, Oman Fathurahman, Sri Budi Lestari, Willem van der Molen

研究会等の内容

第1回研究会 6月20日(土) 2015年2月国際シンポジウム総括

Peter WORSLEY “Javanese Epic Poetry, the Lived Environment and Cosmological Order”

第2回研究会 7月26日(日)

山崎美保 「9世紀から10世紀の古ジャワ語刻文に記された呪詛における一考察」

菅原由美 「ジャワにおけるイスラーム流入期の宗教規律について」

第3回研究会 2015年11月23日(月) ジャワ語史資料紹介

青山亨 「プルボチョロコの『ジャワ文学史』解題」, 深見純生 「ババッド・タナ・ジャウイ解題」

菅原由美 「D.A. Rinkes のワリ・ソング研究」

第4回研究会 2016年3月5日(土)

Edwin WIERINGA “Satan’s Sermon: A late-19th-century Javanese Elite Objections to the Spirit of the Age”, 今期の総括, 来期予定策定会議

研究成果一覧

〔学術論文〕計10件

1. Sugahara, Yumi, “Transformation of the Isra’ Mi’ raj Story in Modern Southeast Asia”, *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (4): Local and Global Dynamism in Transformation of Islamic Tales* 27, Institute of Asian Cultures, Center for Islamic Studies, Sophia University, 2016. 1–10.
2. 青山亨 「東京外国語大学における東南アジア「地域基礎」の試み—東南アジア史教育の視点から—」『教育が開く新しい歴史学』, 山川出版社, 2015. 104–121.
3. 青山亨 「インドネシアの華人—同化から統合へ—」『多文化社会読本—多様な世界, 多様な日本』, 東京外国語大学出版会, 2016. 112–128.

4. 青山亨「東南アジアを中心とした古代仏教史（5世紀～8世紀）叙述のための覚書」, 科学研究費補助金（基盤研究B）「東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究：7～10世紀を中心に」（課題番号25284140 代表者：深見純生 桃山学院大学）報告書, 2016. 27-36.
5. 深見純生「南海の崑崙再考」『東南アジア古代史の複合的研究』, 桃山学院大学総合研究所, 2016. 13-25.
6. 深見純生「15世紀のマジャパヒト」『昭和女子大学国際文科研究所紀要』21, 2015. 43-57.
7. 深見純生（訳）「ババッド・タナ・ジャウイ（8）第5部 ババッド・マタラム 2」『人間文化研究』（桃山学院大学総合研究所）3, 2015. 147-174.
8. 深見純生（訳）「ババッド・タナ・ジャウイ（9）第5部 ババッド・マタラム 3」『人間文化研究』（桃山学院大学総合研究所）4, 2016. 299-322.
9. 山崎美保「バリトゥン王（在位898-910年頃）の統治と王権強化」『東南アジア 歴史と文化』44, 2015. 83-100. (査読有)
10. 山崎美保「ルカム Rukam 刻文の転写と翻訳」『東南アジア史の複合的研究』, 2015. 87-103.

〔口頭発表等〕計10件

1. 菅原由美「ジャワの19世紀をどう記述するか—写本に見るインドネシアのイスラーム潮流」, 東南アジア史学会賞受賞記念講演, 2015.5.30. 愛媛大学
2. Sugahara, Yumi, “Transformation of the Isra’ Mi’ raj Story in Modern Southeast Asia”, NIHU Program for Islamic Area Studies, fifth International Conference, 2015.9.12. Sophia University
3. 菅原由美「東南アジア島嶼部におけるイスラーム化の進展と伝統の創出—ミラージュ物語を題材に」, イスラーム協会講演会「東南アジアのイスラーム—知の伝統とネットワーク」, 2016.1.30. 東京大学
4. Noriko Nishino, Toru Aoyama, Jun Kimura, Takenori Nogami and Le Thi Lien, Nishimura Project: Tang Dynasty Chau Tang Shipwreck and “Maritime Ceramic Route”, The 3rd Congress of the Asian Association of World Historians, 2015.5.29. Nanyang Technological University
5. 西野範子・青山亨・木村淳・野上建紀「パネル「9-10世紀の東アジア～イスラーム世界間の東西海上交易—文献史学と考古学の視点から—」報告4「ベトナム, 南シナ海沖・チャウタン海揚がりの資料の初歩的報告」, 東南アジア学会第93回研究大会, 2015.5.31. 愛媛大学
6. 深見純生「『新唐書』瞻博伝諸国の集団朝貢と那提三蔵」, 東南アジア古代史科研, 2016.3.9. 九州国立博物館
7. 深見純生「三転四起する扶南」, 東南アジア古代史科研, 2015.11.21. 早稲田大学
8. 深見純生「ジャワの中心性—歴史と生態学」, AA 研フォーラム兼古ジャワ語研修文化講演, 2015.8.21. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
9. 深見純生「東南アジア史用語リスト案について」, 東南アジア学会第93回研究大会, 2015.6.1. 愛媛大学
10. 深見純生「8～10世紀の海域アジア—文献から—」, 東南アジア学会第93回研究大会, 2015.6.1. 愛媛大学

〔図書〕計5件

1. Robson, Stuart, *The Kakawin Ghaṭotkacāsraya by Mpu Pamuluh*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2016. x+332 pp.
2. Fathurahman, Oman, *Shattariyah silsilah in Aceh, Java and the Lanao area of Mindanao*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2016. xi+140 pp.
3. Sugahara, Yumi (ed.), *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (4): Local and Global Dynamism in Transformation of Islamic Tales*, Institute of Asian Cultures, Center for Islamic Studies, Sophia University, 2016. vi+110 pp.
4. 長谷部美佳・受田宏之・青山亨（編）『多文化社会読本—多様な世界, 多様な日本』, 東京外国語大学出版会, 2015. 全264頁.
5. 深見純生（編）『東南アジア古代史の複合的研究』, 桃山学院大学総合研究所, 2016. 全209頁.

歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化（2）

研究期間：2013-2015（代表：石川博樹／所員 2, 共同研究員 15）

所員：深澤秀夫

共同研究員：網中昭世, 安溪貴子, 石山俊, 工藤晶人, 小松かおり, 佐藤靖明, 杉村和彦, 鈴木英明, 鶴田格, 永原陽子, 藤岡悠一郎, 藤本武, 眞城百華, 溝辺泰雄, 村尾るみこ

研究会等の内容

2015年度は以下の研究会を開催した。なお第3回研究会は、基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像

の探求」との共催により、公開シンポジウムとして開催した。

第1回研究会（2015年7月11日開催）成果出版物『食と農のアフリカ史』原稿合評会

第2回研究会（2015年10月25日開催）成果出版物『食と農のアフリカ史』「総説」合評会

発表：池上甲一（近畿大学）「なぜアフリカの土地はねらわれるのか：土地収奪と新植民地主義」

第3回研究会 公開シンポジウム「食と農のアフリカ史を考える」（2016年3月13日開催）

【発表】石川博樹（AA研）ほか『食と農のアフリカ史』の出版を記念して」

石川博樹「食と農のアフリカ史をめぐる歴史学研究の可能性」

小松かおり（静岡大学）「食と農のアフリカ史をめぐる人類学研究の可能性①食の視点から」

藤本武（富山大学）「食と農のアフリカ史をめぐる人類学研究の可能性②農の視点から」

研究成果一覧

〔学術論文〕計27件

1. 安溪貴子「毒抜き法をとおして見るアフリカの食の歴史：キャッサバを中心に」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 155-173.
2. 安溪貴子・石川博樹・小松かおり・藤本武「アフリカの食の見取り図を求めて」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 23-52.
3. 池上甲一「土地収奪と新植民地主義：なぜアフリカの土地はねらわれるのか」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 325-345.
4. 石川博樹「食と農のアフリカ史序説」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 1-20.
5. 石川博樹「エチオピアのエンセーテ栽培史を探る：文字資料研究の可能性」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 175-190.
6. 石山俊「サハラ・オアシスのナツメヤシ灌漑農業：統合的手法からの農業史理解」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 115-134.
7. 工藤晶人「大陸の果ての葡萄酒：アルジェリアと南アフリカ」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 223-236.
8. 小松かおり・佐藤靖明「バナナからみたアフリカ熱帯雨林農耕史」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 97-113.
9. 佐藤千鶴子「歴史研究と農業政策：南アフリカ小農論争とその影響」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 311-324.
10. 佐藤靖明「バナナを基盤とする農耕社会の柔軟性：ウガンダ中部、ガンダの事例から」『争わないための生業実践：生態資源と人びとの関わり』（アフリカ潜在力 4）, 京都大学学術出版会, 2016. 151-180.
11. 佐藤靖明「人とバナナのかかわりを探る方法を求めて：民族植物学調査の試行錯誤」『フィールドの見方』（100万人のフィールドワーカーシリーズ 2）, 古今書院, 2016. 27-44.
12. 佐藤靖明・小松かおり・石川博樹「アフリカ農業史研究の手法」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 79-93.
13. 杉村和彦「東アフリカ農牧民から見た世界史像」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 135-151.
14. 鈴木英明「世界商品クローヴがもたらしたもの：19世紀ザンジバル島の商業・食料・人口移動」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 209-222.
15. 鈴木英明「驚異としてのアフリカ大陸」『驚異の文化史：中東とヨーロッパを中心に』, 名古屋大学出版会, 2015. 290-305.
16. 鶴田格「緑の革命とアフリカ：トウモロコシを中心に」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 237-252.
17. 永原陽子・藤岡悠一郎「土地改革：大規模商業農場とコミユナルランド」『ナミビアを知るための53章』, 明石書店, 2016. 169-173.
18. 藤岡悠一郎「気候変動とアフリカ農業：ナミビア農牧民の食料確保に注目して」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 255-271.
19. 藤岡悠一郎「マルーラ酒が取り持つ社会関係：オバンボの暮らし」『ナミビアを知るための53章』, 明石書店, 2016. 264-268.
20. 藤岡悠一郎・手代木功基「食肉産業の展開：商業畜産と生業牧畜の区分を超えて」『ナミビアを知るための53章』, 明石書店, 2016. 182-187.

21. 藤本武「親密な暴力、疎遠な暴力：エチオピアの山地農民マロにおける略奪婚と民族紛争」『喧嘩から戦争まで：戦いの人類誌』、勉誠出版、2015. 127-136.
22. 藤本武「エチオピアの雑穀テフ栽培の拡大：食文化との関わりから」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』、昭和堂、2016. 191-206.
23. 藤本武・石川博樹「アフリカの作物：成り立ちと特色」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』、昭和堂、2016. 53-77.
24. 村尾るみこ「限界を生きる焼畑農耕民の近現代史：ザンビア西部のキャッサバ栽培技術を中心に」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』、昭和堂、2016. 273-288.
25. 溝辺泰雄「脱植民地化のなかの農業政策構想：ガーナ独立期の政治指導者クワメ・ンクルマの開発政策から」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』、昭和堂、2016. 291-309.
26. Adebola Adewumi Ajadi, Oladimeji Idowu Oladele, Koichi Ikegami, and Tadasu Tsuruta, "Rural Women's Farmers Access to Productive Resources: The Moderating Effect of Culture among Nupe and Yoruba in Nigeria", *Agriculture & Food Security* 4-26, 2015. 1-9. (査読有)
27. Shamik Chakraborty, Hiroshi Yasuda, Abhik Cchakraborty, Hajime Nabeta, Takayuki Kawai, and Shun ISHIYAMA, "The Nile and Recent Changes in Its Basin Environment: Evidences from Literature", *Journal of Resources and Ecology* 6-5, 2015. 345-352. (査読有)

〔口頭発表等〕計10件

1. 石山俊「チャド湖岸地域における農耕民カネムブの南下移住」、日本沙漠学会第26回学術大会、2015.5.23-24. 秋田カレッジプラザ
2. 石山俊、石本雄大、稲井啓之、門村浩、坂井真紀子、宮寄英寿、ムニアンディ・ジェガディーサン「アフリカ・アジア熱帯乾燥地における生業戦略：極端気候下の地域間比較を目指して」、日本沙漠学会第26回学術大会、2015.5.23-24. 秋田カレッジプラザ
3. 佐藤靖明「文化としてのバナナ：アジア・アフリカの民族植物学的比較」、旗美社大公共論壇、2016.2.29. 旗山、台湾
4. 藤岡悠一郎・西川芳昭・水落裕樹・飯嶋盛雄「作付様式の理解に向けた地理学手法の検討：ナミビア北部農村を事例に」、日本アフリカ学会第52回学術大会、2015.5.24. 犬山国際観光センターフロイデ
5. 藤本武「消えた略奪婚：エチオピア西南部の農耕民マロの事例」、日本アフリカ学会第52回学術大会、2015.5.23. 犬山国際観光センターフロイデ
6. 藤本武「つながりが育むフィールドワークとエスノグラフィー」、第133回北陸人類学研究会（日本文化人類学会北陸支部例会）、2015.7.25. 富山大学人文学部
7. Adebola Adewumi Ajadi, Oladimeji Idowu Oladele, Koichi Ikegami, and Tadasu Tsuruta, "Farmers' Awareness and Participation in Extension Activities in Rural Nigeria: A Case of Patigi Local Government Area of Kwara State", 第65回地域農林経済学会大会、2015.10.31. 鳥取大学
8. Ankei, Takako, "African Dietary Practices and Migration with Focus on Cassava Diffusion", EAAA(East Asian Anthropologists Association), 2015.9.22. 中国雲南省昆明大学
9. Fujimoto, Takeshi, "From Frontier to Periphery: An Anthropological Analysis of Lowland Settlement Abandonment Among the Malo of Southwest Ethiopia", 19th International Conference of Ethiopian Studies, 2015.8.25. University of Warsaw, Poland
10. Yasuaki Sato, "Banana as Cultures: An Ethnobotanical Comparison between Africa and Asia", 国立新竹教育大學 身體與飲食 無形文化資産工作坊, 2016.1.12. 国立新竹教育大學, 新竹・台湾

〔図書〕計5件

1. 石川博樹・小松かおり・藤本武（編）『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』、昭和堂、2016. 全384頁.
2. 石山俊『サーヘル内陸国チャドの環境人類学：貧困・紛争・砂漠化の構造』、総合地球環境学研究所、2016. 全103頁.
3. 藤岡悠一郎『サバンナ農地林の社会生態誌：ナミビア農村にみる社会変容と資源利用』、昭和堂、2016. 全288頁.
4. ISHIYAMA, Shun, *Human resources and Engineering in the Post-oil Era, A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East (NAWATA, Hiroshi ed.)*, Shokadoh Book Sellers, 2016. 224 pp.
5. Suzuki, Hideaki (ed.), *Abolitions as a Global Experience*, NUS Press, 2016. 303 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計4件

1. 藤岡悠一郎「食糧不足のアフリカ？」『教育科学 社会科教育』678, 明治図書、2015. 68-69.

2. 藤岡悠一郎「アフリカのイメージといえばこれでしょ！」『教育科学 社会科教育』669, 明治図書, 2015. 93-93.
3. 深澤秀夫「日本で作ろう！マダガスカル料理 28 Lelan'omby sy Petits-pois」『マダガスカル研究懇談会ニューズレター』33, マダガスカル研究懇談会, 2015. 40-41.
4. 深澤秀夫「日本で作ろう！マダガスカル料理 29 Kafe」『マダガスカル研究懇談会ニューズレター』34, マダガスカル研究懇談会, 2016. 40-41.

〔その他：オンラインリソースなど〕計2件

1. 溝辺泰雄『NHK 高校講座「世界史」』第21回「アフリカへのヨーロッパ人の進出」監修・講師
<http://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/sekaishi/archive/chapter021.html>
2. 溝辺泰雄『NHK 高校講座「世界史」』第38回「アフリカ諸国の独立」監修・講師
<http://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/sekai>

イスラームに基づく経済活動・行為

研究期間：2013-2015（代表：福島康博／所員 2, 共同研究員 10）

所員：黒木英充, 床呂郁哉

共同研究員：赤堀雅幸, 今堀恵美, 大川真由子, 上山一, 川端隆史, 小牧幸代, 砂井紫里, 佐竹弘靖, 塩谷もも

ウェブサイト：<http://islamandeconomy.web.fc2.com/aaken/index.html>

研究会等の内容

平成27年度は、研究会をAA研にて2回実施した。

本年度第1回研究会は、6月7日に開催した。報告者は2名で、共同研究員の小牧幸代氏（高崎経済大学）によるインドにおける聖遺物グッズとポスターの考察に関する報告、および同じく共同研究員の赤堀雅幸氏（上智大学）による欧米におけるムスリムを顧客とする小規模ビジネスに関する報告であった。

本年度第2回研究会は、3月13日に開催した。報告者は3名で、共同研究員の大川真由子氏（神奈川大学）による「ハラール化粧品とイスラーム的「美」」、共同研究員の小牧幸代氏（高崎経済大学）による「宗教商品をめぐるグローバル経済」、および同じく共同研究員の福島康博（AA研フェロー）による「イスラーム金融をめぐるイスラーム性」という発表タイトルでの報告が行われた。

研究成果一覧

〔学術論文〕計8件

1. 塩谷もも「インドネシアにおけるバティック布の現状とアイデンティティ」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』, 54, 2016. 51-61. (査読有)
2. 今堀恵美「「見えない」仕事, 「見せない」仕事—ウズベキスタンの刺繍業における男性性」『仕事の人類学 労働中心主義の向こうへ』, 中谷文美・宇田川妙子(編), 世界思想社, 2016. 25-46. (査読有)
3. 上山一・臼杵悠「イスラム銀行利用者による金融商品の利用動機と継続的取引の決定要因—ヨルダンの事例から—」『アジア経済』56・4, 2015. 2-27. (査読有)
4. 上山一「利子なし銀行の発展と実態—ヨルダンにおけるイスラーム金融の行方」『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』, 塩尻和子(編), 明石書店, 2016. 384-400.
5. Okawa, Mayuko: "The Empire of Oman in the Formation of Oman's National History: An analysis of School Social Studies Textbooks and Teachers' Guidelines", *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 31-1, 2015. 95-120. (査読有)
6. 大川真由子「序—帰還から故郷を問う」『文化人類学』80-4, 2016. 534-548. (査読有)
7. 福島康博・砂井紫里「アジア四カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較：イスラーム地域研究の視点から」『第30回日本観光研究学会全国大会学術論文集』日本観光研究学会(編), 2015. 345-348.
8. Sai, Yukari and Johan Fischer: Muslim food consumption in China: Between qingzhen and halal?, *Halal Matters: Islam, Politics and Markets in Global Perspective*, Bergeaud-Blackler, Florence, Fischer, Johan and John Lever (eds.), Routledge, 2015. 160-174. (査読有)

〔口頭発表等〕計20件

1. 塩谷もも「ムスリム観光客の増加と異文化理解」, 島根県立大学短期大学部松江キャンパス総合文化講座, 2016.7.29. 島根県立大学松江キャンパス
2. Hajime Kamiyama: "Libya after the 2011 Revolution: An Economic and Social Perspective", International Conference,

- Libya in Transition: Elites, Civil Society, Factionalism and State Reshaping, 2015.6.24. École française de Rome, Italia.
3. Hajime Kamiyama:“Legal Issues Related to Commercial Agency in the United Arab Emirates, Tunisia-Japan” Symposium on Science, Society and Technology TJASSST 2015, 2016.2.23. University Hall, University of Tsukuba, Tsukuba
 4. 大川真由子:「帝国と混血—人類学的視点から」, 早稲田人類学会第17回総会公開シンポジウム, 2016.1.30. 早稲田大学
 5. Hidemitsu Kuroki:“Armenians in Mid-19th Century Aleppo”, Symposium “Armenians of Syria”, 2015.5.25. Haigazian University.
 6. Hidemitsu Kuroki:“China-Japan-Korea Cooperation for Middle Eastern Studies”, International Symposium on “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7. Shanghai International Studies University.
 7. Hidemitsu Kuroki:“Syrian civil war and the role of East Asian countries”, International Symposium on “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7. Shanghai International Studies University.
 8. Hidemitsu Kuroki:“An inevitable wave?: Syrian(and Lebanese) migrants to Europe in historical context”, International Symposium “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints”, 2015.12.9. 北海道大学
 9. 黒木英充「近現代の歴史的シリアにおける人間移動と少数派」, 東京大学中東地域研究センター公開シンポジウム『移動・移民と中東』, 2016.1.30. 東京大学駒場キャンパス
 10. Hidemitsu Kuroki:“Lebanon-Mexico-Japan Connection: Background of Revival of “Lebanon 1949”, Film Screening Meeting “Lebanon 1949”, 2016.3.22. Metropolis Empire Sofil, Beirut.
 11. 黒木英充:「シリア危機と多民族・多宗教問題」, 神奈川大学生涯学習・エクステンション講座, 2015.6.6. 神奈川大学みなとみらいエクステンションセンター
 12. 黒木英充:「レバノン・ディアスポラ(移民)の意図せざる拡散と戦略的な拡張」武蔵大学公開講座『ディアスポラから見る世界』, 2015.10.17. 武蔵大学
 13. 福島康博:「ムスリムがマイノリティーである国におけるハラール・レストランの比較と分析:フィリピンとシンガポールの事例から」, アジア政経学会2015年度全国大会, 2015.6.14.立教大学池袋キャンパス
 14. 福島康博・砂井紫里:「アジア四カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較:イスラーム地域研究の視点から」, 第30回日本観光研究学会全国大会, 2015.11.29. 高崎経済大学
 15. 福島康博:「東南アジア3カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較」, 第24回日本マレーシア学会研究大会, 2015.12.12. 立教大学新座キャンパス
 16. 砂井紫里:「台湾における「ムスリムフレンドリー」環境整備」, 第24回日本マレーシア学会研究大会, 2015.12.12. 立教大学新座キャンパス
 17. SAI, Yukari:“Halal Food and Muslim-Friendly Services in Taiwan”, International Conference on Islam in Global Perspective, 2015.11.1. New York University Abu Dhabi, UAE
 18. SAI, Yukari:“Being There: Mosque, Restaurants, and Cultural Landscapes in Non-Muslim Hui Community”, 2015 Annual Conference of the East Asian Anthropological Association, 2015.10.4. National Chengchi University, Taiwan.
 19. SAI, Yukari: “Halal Food Regulation and Consumption in China”, National institutes for Humanities of Japan (NIHU) Program for Islamic Area Studies (IAS) Fifth International Conference, 2015.9.11. Sophia University.
 20. 砂井紫里:「清真とハラールのゆらぎ:清真の制度化および中国福建省のムスリムと非ムスリムの食実践」, 日本文化人類学会第49回研究大会, 2015.5.30. 大阪国際交流センター

〔社会に向けた成果発表〕計15件

1. 上山一:「エジプトのマクロ経済動向と政策課題について」『中東協力センターニュース』11月号, 中東協力センター, 21~30. 2015.11.20. <http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/2015-11/josei03.pdf>
2. 黒木英充:『先読み! 夕方ニュース 夕方ホットトーク』「内戦激化 シリアを崩壊から救うことはできるか—中東の最重要課題を展望する③」, NHK ラジオ第1.
3. 黒木英充:「内戦長期化 シリアのいま」, NHKE テレ『視点・論点』2015.
4. 黒木英充:「ニュースの本棚 『テロ』とは何か」, 朝日新聞 2015.12.20.
5. 黒木英充:「読書館 津村一史著『中東特派員はシリアで何を見たか』」, 西日本新聞. 2016.3.13
6. 黒木英充:“Kuroki li-l-Hayat: Hilal al-Hadarat tahawwal li-l-Hurub” (黒木がハヤートに: 文明の三日月地帯が戦争の三日月地帯に変容), *Al-Hayat* (レバノンの最大紙), 2015.11.26.
7. 小牧幸代:「パキスタン, 神学校で若者育成, 越境するテロ集団連動」『中外日報』4月29日付, 中外日報社. <http://www.chugainippoh.co.jp/rensai/sekai/20150429.html>
8. 小牧幸代:「インドのテーマパーク」『月刊みんぱく』8月号, 国立民族学博物館. P7. http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/showcase/bookbite/gekkan/1508_02-09.pdf

9. 砂井紫里：「食卓からみるイスラーム」『世界を知る イスラームを知る（早稲田大学イスラーム地域研究機構連携講座）』第3回。2015.4.23. 早稲田大学エクステンションセンター中野校
10. 砂井紫里：「食卓からみるイスラーム社会」金沢大学公開講座『イスラーム世界の歴史と文化Ⅲ～生活に根ざした宗教』, 2015.10.25. 金沢大学サテライト・プラザ
11. 砂井紫里：「プレゼンテーション 大学での取り組み紹介」, JAPAN HALAL EXPO 2015 セミナー, 2015.11.26. 幕張メッセ
12. 砂井紫里：「宗教と食」, 平成27年度文化庁委託事業ちば多文化協働プロジェクト（公益財団法人千葉県国際交流協会）2015第3回多文化理解セミナー, 2015.12.11. ちば国際コンベンションビューロー
13. 砂井紫里：「ムスリム学生の視点から」, 東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄付講座第3回食のハラール性に関する国際シンポジウム『食のハラールの原点：宗教実践としてのハラールとインバウンドビジネス』2016.2.3. 東京工業大学蔵前会館くらまえホール.
14. 砂井紫里：「ムスリムの食卓と中華世界」, 南大塚地域文化創造館, 平成27年度冬の文化カレッジ『世界の食文化—アジア イスラームの食文化—』第3回, 2016.3.10 南大塚地域文化創造館.
15. 砂井紫里：「陸と海がつながる美味しいごはん」, 南大塚地域文化創造館平成27年度冬の文化カレッジ『世界の食文化—アジア・イスラームの食文化—』第4回, 2016.3.17. 南大塚地域文化創造館,

[その他：オンラインリソースなど] 計1件

黒木英充・高松洋一・松原康介：“Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities” 中東都市・領域の古地図と Google Maps の重ね合わせによる研究情報共（査読有）システム
<http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

新出多言語資料からみた敦煌の社会

研究期間：2014–2016（代表：松井太／所員 1, 共同研究員 9）

所員：荒川慎太郎

共同研究員：赤木崇敏, 岩尾一史, 岩本篤志, 橘堂晃一, 坂尻彰宏, 佐藤貴保, 白玉冬, 山本明志

研究会等の内容

第1回研究会（2015年5月2日・3日）

松井太・荒川慎太郎「プロジェクト全体の進捗について」

松井太「敦煌諸石窟のウイグル語・モンゴル語題記銘文」

白玉冬「フフホト白塔のウイグル文字題記解説初案」

橘堂晃一「敦煌石窟のブラーフミー銘文」

荒川慎太郎「2014年12月敦煌西夏文題記調査報告」

コメンテーター：メフメト=オルメズ（AA 研外国人研究員・ユルドゥズ工科大学）, 荻原裕敏（京都大学）, 慶昭蓉（龍谷大学）

第2回研究会（2015年7月12日・13日）

松井太・荒川慎太郎「プロジェクト全体の進捗について」

松井太・白玉冬・橘堂晃一・メフメト=オルメズ「河西地域ウイグル・モンゴル題記総合討議」

岩尾一史「古代チベット帝国崩壊後の青海諸勢力」

第3回研究会（2016年3月21日・22日）

松井太, 荒川慎太郎「プロジェクト全体の進捗について」

赤木崇敏「10世紀榆林窟の供養人像の報告調査」

坂尻彰宏「漢文銘文と供養人像からみた榆林窟と地域社会：10世紀前後の場合」

岩本篤志「国内所蔵中国西域出土文献の研究：国会図書館蔵本を中心に」

荒川慎太郎「2015年12月敦煌西夏文題記調査報告」

研究成果一覧

[学術論文] 計29件

1. 赤木崇敏「敦煌三界寺僧道真とコータン王家」『内陸アジア言語の研究』30, 2015. 199–222. (査読有)

2. 赤木崇敏「唐宋代敦煌社会の水利と渠人」『唐代史研究』18, 2015. 3–26. (査読有)

3. 赤木崇敏「曹氏帰義軍時代の瓜州オアシスの統治権：瓜州オアシスからの陳情書 P.ch.2943」『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(科研成果報告書), 大阪大学, 2016. 1–24.

4. 赤木崇敏「曹氏歸義軍節度使時代の敦煌石窟と供養人像」『敦煌写本研究年報』10, 2016. 285–308.
5. Arakawa Shintaro, “On the design of a “Trebuchet” in the Tangut Manuscript of IOM, RAS”, *Written Monuments of the Orient*, 2015-2, 2015. 21–30. (査読有)
6. 荒川慎太郎「西夏語の3種の遠称指示代名詞の使い分けについて」『言語研究』148, 2015. 103–121. (査読有)
7. 荒川慎太郎「河西地域石窟の西夏文題記に関する覚書(4)」『ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究』(科研成果報告書), 東京外国語大学, 2016. 1–30.
8. 荒川慎太郎「西夏の「砲」設計図について」『ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究』(科研成果報告書), 東京外国語大学, 2016. 31–44.
9. 岩尾一史「9世紀の歸義軍政權と伊州: Pelliot tibétain 1109を中心に」『敦煌写本研究年報』10, 2016. 341–356. (査読有)
10. 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌: チベット帝国期と帝国崩壊後」『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(科研成果報告書), 2016. 25–36.
11. 岩本篤志「天理図書館蔵《石室遺珠》中敦煌医方考」『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(科研成果報告書), 2016. 37–44.
12. 岩本篤志「敦煌本脉書小考: ロシア蔵文献と『平脉略例』を中心に」『敦煌写本研究年報』10, 2016. 387–398.
13. 橘堂晃一「ウイグル文慈恩宗唯識文献「大唐三蔵行跡讚」について」『敦煌写本研究年報』10, 2016. 371–386. (査読有)
14. 橘堂晃一「ウイグル文華嚴經研究の新展開: 奥書と訳出の背景を中心に」『東洋史苑』86/87, 2016. 1–26. (査読有)
15. 佐藤貴保「西夏文草書体官文書の解読に向けて: 法令集を用いた崩し字用例の収集と分析」『ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的な研究』(科研成果報告書), 東京外国語大学, 2016. 110–94.
16. 佐藤貴保「西夏の河西回廊支配: 出土史料からの再検討」『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(科研成果報告書), 大阪大学, 2016. 45–61.
17. 坂尻彰宏「敦煌般次考」『内陸アジア言語の研究』30, 2015. 173–197. (査読有)
18. 坂尻彰宏「三つの索勳像: 供養人像からみた帰義軍史」『敦煌写本研究年報』10, 2016. 309–325. (査読有)
19. 坂尻彰宏「城址の垂直分布からみた敦煌オアシス地域: 10世紀前後の「二州八鎮」を中心に」『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(科研成果報告書), 大阪大学, 2016. 75–85.
20. 白玉冬(訳)「回鶻汗國葛啜王子墓誌再解讀及其歴史意義」『唐研究』21, 2015. 499–526. (査読有)
21. 白玉冬「沙州帰義政權大中五年入朝路再釈」『内蒙古社会科学』2016-1, 2016. 83–87. (査読有)
22. 白玉冬「沙陀後唐・九姓タタル関係考」『東洋學報』97-3, 2015. 384–360. (査読有)
23. Matsui, Dai, “Six Seals on the Verso of Čoban’s Decree of 726 AH/1326 CE”, *Orient* 50, 2015. 35–39. (査読有)
24. Matsui, Dai and Ryoko Watabe, “A Persian-Turkic Land Sale Contract of 660 AH/1261–62 CE”, *Orient* 50, 2015. 41–51. (査読有)
25. Matsui, Dai, Ryoko Watabe and Hiroshi Ono, “A Turkic-Persian Decree of Timurid Mīrān Šāh of 800 AH/1398 CE”, *Orient* 50, 2015. 53–75. (査読有)
26. Matsui, Dai, “Old Uigur Toponyms of the Turfan Oases”, *Kutadgu Nom Bitig: Festschrift für Jens Peter Laut zum 60. Geburtstag*, Harrassowitz, 2015. 275–304.
27. 松井太「回鶻文・蒙古文文獻中所見蒙古帝國時期對度量衡的統一」『回鶻學譯文集新編』, 甘肅教育出版社, 2015. 345–359.
28. Matsui, Dai, “Ürümchi we qedimki ‘Yürünčin’ sözi toghrisida”, 『語言與翻譯 (Til we terjme)』2015-4, 2015. 11–15. (査読有)
29. 山本明志「河南省滎陽の金元時代の石刻史料」『歴史評論』783, 2015. 16–25.

〔口頭発表等〕計29件

1. 赤木崇敏「オアシスの水利と山間草原の遊牧民」, 中央ユーラシア学研究会・共催ワークショップ「出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造」, 2015.9.26. 大阪大学文学研究科
2. 荒川慎太郎「西夏語の1kl:の3つの機能について」, チベット=ビルマ言語学研究会第36回会合, 2015.7.5. 京都大学文学研究科
3. ARAKAWA Shintaro, “On some uses of the Tangut affix 1kl”, 第四届西夏學術論壇暨河西歷史文化研討會, 2015.8.16. 河西学院図書館二楼學術報告庁

4. 荒川慎太郎「西夏語の文法研究：各種資料からみた文法語を例に」，日本言語学会第 151 回大会ワークショップ「古代文字文献を資料とした死言語の文法研究—中エジプト語・契丹語・シュメール語・西夏語の事例から—」，2015.11.29. 名古屋大学
5. 荒川慎太郎「日本西夏学研究現状」，西夏語言与文化學術研討会，2015.12.10. 寧夏大学西夏学研究院
6. 荒川慎太郎「西夏文字草書体に関する近年の研究について」，2015 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会，2016.3.26. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）
7. Iwao, Kazushi, “New trends in Tibetan Studies in Japan: Towards building an interdisciplinary research team”, 伝法の未来を考える GOMANG ACADEMY Open Symposium 2015 Tokyo, 2015.4.5. ロイヤルパークホテル
8. 岩尾一史「チベット帝国と青海東部」，京都大学人文科学研究所共同研究班 A「チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究」，2015.5.23. 京都大学人文科学研究所
9. 岩尾一史「古代チベット帝国の文書と行政」，第 74 回羽田記念館定例講演会，2015.7.4. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）
10. 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌周辺；チベット帝国期から 12 世紀まで」，中央ユーラシア学研究会・共催ワークショップ「出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造」，2015.9.26. 大阪大学文学研究科
11. Iwao, Kazushi, “On the Study of Old Tibetan Contracts”，絲綢之路出土民族契約研究国際學術論壇，2015.10.29. 吐魯番博物館
12. 岩尾一史「碑文史料からみた古代チベット帝国：古チベット語碑文史料概観」，東西学術研究所 2015 年度第 12 回研究例会，2016.1.30. 関西大学児島惟謙館
13. 岩本篤志「トハリスタンの仏教遺跡と玄奘：立正隊による調査と発掘をふまえて」，唐代史研究会 2015 年秋期会合，2015.11.15. 中央大学駿河台記念館
14. 岩本篤志「敦煌景教文献と洛陽景教経幢：唐代景教研究と問題点の整理」，唐代史研究会 2015 年夏期シンポジウム，2015.8.18. 早稲田大学国際会議場
15. 岩本篤志「天理図書館蔵《石室遺珠》中敦煌醫方考」，博物學與寫本文化：知識—信仰傳統的生成與構造學術研討會，2015.6.20. 復旦大学逸夫科技楼
16. 岩本篤志「天理図書館蔵《石室遺珠》敦煌医方考」，中央ユーラシア学研究会・共催ワークショップ「出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造」，2015.9.26. 大阪大学文学研究科
17. 橘堂晃一「ベゼクリク石窟供養比丘図再考：敦煌莫高窟の銘文をてがかりとして」，龍谷大学仏教文化研究所研究談話会，2015.6.13. 龍谷大学
18. 橘堂晃一「敦煌諸石窟婆羅迷文字銘文調査簡報」，敦煌研究院學術講座，2015.12.3. 莫高窟敦煌研究院
19. 橘堂晃一「ウイグル文華嚴經研究の新展開：奥書と訳出の背景を中心に」，中央アジア学フォーラム，2015.12.12. 大阪大学文学研究科
20. 佐藤貴保「西夏の河西回廊支配：出土史料からの再検討」，中央ユーラシア学研究会・共催ワークショップ「出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造」，2015.9.26. 大阪大学文学研究科
21. 白玉冬「呼和浩特白塔回鶻文題記釋讀初案」，中央民族大學中國少数民族語言文學學院學術名家系列講座之一，2015.4.3. 中央民族大学
22. 白玉冬「絲路景教與汪古源流：呼和浩特白塔回鶻文題記釋讀（一）」，紀念楊志玖先生誕辰 100 周年隋唐宋元時期的中國與世界國際學術研討會，2015.10.11. 南開大学
23. Matsui, Dai, “Uigur Buddhist Pilgrims as Seen in the Wall Inscriptions in the Dunhuang Caves”, 2015 Dunhuang Forum: International Symposium on the Role of Dunhuang in China’s Interaction with the Outside World, 2015.8.14. 莫高窟敦煌研究院
24. Matsui, Dai, “Network of the Uigur Buddhists and Christians in the Mongol-Yuan Period”, International Academic Conference “Marco Polo and the Silk Road”, 2015.9.18. 揚州會議中心
25. Matsui, Dai, “Uigur-Turkic Influence on the Qara-Qota Mongolian Documents”, International Scientific Conference “Languages and Literatures of the Turkic Peoples” Dedicated to the 180th Anniversary of the Department of Turkic Philology at the St. Petersburg State University, 2015.10.26. St. Petersburg State University
26. 松井太「回鶻佛教徒在敦煌：敦煌諸石窟回鶻語銘文調査簡報」，敦煌研究院學術講座，2015.12.3. 莫高窟敦煌研究院
27. 松井太「黒城出土蒙古文文書和回鶻文文書」，內蒙古大學蒙古學學院學術講座，2015.12.7. 內蒙古大學
28. Matsui, Dai, “Network under the Mongol Empire as Seen in the Turco-Mongolian Documents Discovered in Central Asia”, Global History Workshop: “Globalization from East Asian Perspectives”, 2016.3.15. 大阪大学中之島センター

29. 山本明志「モンゴル時代のチベットにおける在地氏族と官称号」, 京都大学人文科学研究所共同研究班 A「チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究」, 2016.3.19. 立教大学

[社会に向けた成果発表] 計 2 件

1. 岩尾一史「古チベット語史料を読む：古代チベットの失われた記憶を求めて」『FIELDPLUS』14, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 24-27.
2. 佐藤貴保「塩～中央ユーラシアの塩交易」『世界史のしおり特別編：世界史を動かしたあんな物やこんな物：物から見る社会の動き！10選』, 帝国書院, 2015. 8-8.

里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）

研究期間：2014-2016（代表：陶安あんど／所員 1, 共同研究員 14）

共同研究員：青木俊介, 飯田祥子, 片野竜太郎, 佐藤信, 鈴木直美, 角谷常子, 高村武幸, 中村威也, 廣瀬薫雄, 村上陽子, 目黒杏子, 靱山明, 鷲尾祐子, 渡邊英幸

ウェブサイト：<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/>

研究会等の内容

第 1 回研究会（通算第 19 回目）

日時：2015 年 5 月 1 日（金）14:00-18:00・2 日（土）10:00-18:00・3 日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3F セミナー室（301）

- 1 日 目黒杏子（AA 研共同研究員・京都大学）史料講読「肩水漢簡（弐）10」（前半）（後半）
- 2 日 全員 資料集企画会議, 陶安あんど（AA 研所員）研究報告「里耶秦簡の文書書式について（01）」
靱山明（AA 研共同研究員・東洋文庫）史料講読「里耶秦簡 58」（前半）（後半）
- 3 日 全員 資料集企画会議,
飯田祥子（AA 研共同研究員・龍谷大学）史料講読「五一広場後漢簡牘 06」（前半）（後半）

第 2 回研究会（通算第 20 回目）

日時：2015 年 5 月 8 日（金）14:00-18:00・9 日（土）10:00-18:00・10 日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3F セミナー室（301）

- 8 日 靱山明（AA 研共同研究員・東洋文庫）史料講読「里耶秦簡 59」（前半）（後半）
- 9 日 全員 資料集企画会議
陶安あんど（AA 研所員）研究報告「里耶秦簡の文書書式について（02）」
鈴木直美（AA 研共同研究員・明治大学）研究報告「里耶秦簡にみる官府の織物生産」（前半）（後半）
- 10 日 全員 資料集企画会議
鈴木直美（AA 研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡 60」（前半）（後半）

第 3 回研究会（通算第 21 回目）

日時：2015 年 6 月 19 日（金）14:00-16:00・20 日（土）10:00-18:00・21 日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3F セミナー室（301）

- 19 日 靱山明（AA 研共同研究員・東洋文庫）史料講読「里耶秦簡 61」（前半）
- 20 日 全員 資料集企画会議
靱山明（AA 研共同研究員・東洋文庫）史料講読「里耶秦簡 61」（後半）
目黒杏子（AA 研共同研究員・京都大学）史料講読「肩水漢簡（弐）11」（前半）（後半）
- 21 日 全員 資料集企画会議
鈴木直美（AA 研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡 62」（前半）（後半）

第 4 回研究会（通算第 22 回目）

日時：2015 年 9 月 11 日（金）14:00-18:00・12 日（土）10:00-18:00・13 日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3F セミナー室（301）

- 11 日 鈴木直美（AA 研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡 63」（前半）（後半）
- 12 日 全員 資料集企画会議, 靱山明（AA 研共同研究員・東洋文庫）
史料講読「里耶秦簡 64」（前半）（後半）
陶安あんど（AA 研所員）研究報告「里耶秦簡の文書書式について（03）」
- 13 日 全員 資料集企画会議
角谷常子（AA 研共同研究員・奈良大学）史料講読「肩水漢簡（弐）12」（前半）（後半）

第5回研究会（通算第23回目）

日時：2015年10月9日（金）14:00-18:00・10日（土）10:00-18:00・11日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3Fセミナー室（301）

9日 鈴木直美（AA研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡65」（前半）（後半）

10日 陶安あんど（AA研所員）里耶秦簡訳注読み合わせ01（前半）（後半）

研究報告「里耶秦簡の文書簡牘再利用について(01)」

11日 全員 事務協議

角谷常子（AA研共同研究員・奈良大学）史料講読「肩水漢簡（弐）13」（前半）（後半）

第6回研究会（通算第24回目）

日時：2015年12月11日（金）14:00-18:00・12日（土）10:00-18:00・13日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3Fセミナー室（301）

11日 鈴木直美（AA研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡66」（前半）（後半）

12日 陶安あんど（AA研所員）里耶秦簡訳注読み合わせ02（前半）（後半）

研究報告「里耶秦簡の文書簡牘再利用について(02)」

13日 全員 事務協議

渡邊英幸（AA研共同研究員・愛知教育大学）史料講読「肩水漢簡（弐）14」（前半）（後半）

第7回研究会（通算第25回目）

日時：2016年1月8日（金）14:00-18:00・9日（土）10:00-18:00・10日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3Fセミナー室（301）

8日 鈴木直美（AA研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡67」（前半）（後半）

9日 渡邊英幸（AA研共同研究員・愛知教育大学）史料講読「肩水漢簡（弐）15」（前半）（後半）

榎山明（AA研共同研究員・東洋文庫）史料講読「里耶秦簡68」

10日 全員 事務協議、陶安あんど（AA研所員）里耶秦簡訳注読み合わせ03（前半）（後半）

第8回研究会（通算第26回目）

日時：2016年2月12日（金）14:00-18:00・13日（土）10:00-18:00・14日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3Fセミナー室（301）

12日 鈴木直美（AA研共同研究員・明治大学）史料講読「里耶秦簡69」（前半）（後半）

13日 陶安あんど（AA研所員）里耶秦簡訳注読み合わせ04（前半）（後半）

片野竜太郎（AA研共同研究員）史料講読「里耶秦簡70」

14日 全員 事務協議

目黒杏子（AA研共同研究員・京都大学）里耶秦簡訳注読み合わせ05（前半）（後半）

第9回研究会（通算第27回目）

日時：2016年2月19日（金）14:00-18:00・20日（土）10:00-18:00・21日（日）10:00-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3Fセミナー室（301）

19日 榎山明（AA研共同研究員、東洋文庫）史料講読「里耶秦簡71」（前半）（後半）

20日 陶安あんど（AA研所員）里耶秦簡訳注読み合わせ06（前半）（後半）

青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学）史料講読「里耶秦簡72」

21日 全員 事務協議

飯田祥子（AA研共同研究員・龍谷大学）里耶秦簡訳注読み合わせ07（前半）（後半）

第10回研究会（通算第28回目）

日時：2016年3月11日（金）（AA研フォーラムとして公開）・12日（土）・13日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3Fセミナー室（301）

使用言語：中国語（日本語通訳あり）

11日 宋華強（AA研外国人研究員）研究報告「秦漢簡牘の言語学的研究—北大簡を例に」

石原遼平（東京大学大学院生）研究報告「里耶秦簡に見る労役」

12日 陶安あんど（AA研所員）里耶秦簡訳注読み合わせ08

青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学）・目黒杏子（AA研共同研究員・京都大学）

里耶秦簡暦日索引と注釈検討会

角谷常子（AA研共同研究員・奈良大学）・鈴木直美（AA研共同研究員・明治大学）

里耶秦簡地名索引と注釈検討会

13日 全員 事務協議、青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学）、

高村武幸 (AA 研共同研究員・明治大学)

里耶秦簡官職名索引と注釈検討会, 里耶秦簡人名索引と注釈検討会

研究成果一覧

[学術論文] 計 10 件

1. 陶安あんど「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀等四種』譯注稿一事案三一」『法史学研究会会報』19, 2016. 124-137.
2. 陶安あんど「試談里耶秦簡所見文書簡牘的再利用情況」『出土文獻與學術新知 國際學術研討會暨第四屆出土文獻青年學者論壇論文集』, 吉林大学古籍研究刊行, 2015. 132-150.
3. 鈴木直美「里耶秦簡からみた官府の織物生産」『高橋継男教授古稀記念東洋大学区東洋史論集』, 高橋継男教授古稀記念東洋大学区東洋史論集編集委員会編, 汲古書院, 2016. 1-28.
4. 高村武幸「秦代遷陵県の覚え書」『名古屋大学東洋史研究報告』39, 名古屋大学東洋史研究会, 2015. 25-50. (査読有)
5. 高村武幸「秦・漢時代地方行政における意思決定過程」『東洋学報』97 卷 1 号, 公益財団法人東洋文庫, 2015. 1-31. (査読有)
6. 村上陽子「コムギの伝来と普及—食材を加工する際の工夫を通して」『春耕のとき』, 汲古書院, 2015. 147-174.
7. 目黒杏子「後漢年始儀礼の構成に関する試論」『中国古中世史研究』39 輯, 中国古中世史学会, 2016. 1-35. (査読有)
8. 鷺尾祐子「世帯の分異時期と家族構成の変化について—長沙呉簡による検討」『湖南出土簡牘とその社会』, 汲古書院, 2015. 167-196. (査読有)
9. 鷺尾祐子「嘉禾四年～六年 (235-237) 長沙の婚姻慣行: 婚姻と年齢」『東洋学報』97 卷 1 号, 2015. 111-134. (査読有)
10. 鷺尾祐子「孫策を支えた人々(1) 親族と呉夫人」『中国古代史論叢』第八集, 立命館東洋史学会, 2015. 132-163. (査読有)

[口頭発表等] 計 12 件

1. 青木俊介「秦・漢帝国の都」, 明大アジア史講座 No.21 「秦・漢帝国の実像に迫る—中国古代史研究の最新成果」第 5 回, 2015.6.26. 明治大学
2. 青木俊介「漢代の関所による馬の通行規制」, 国際シンポジウム「古代東アジア都市の馬と環境」, 2016.1.23. 学習院大学
3. 陶安あんど「行事と故事—後漢時代の認識枠組みを超えて—」, 平成 27 年度東洋法制史研究合宿, 2015.8.27. 石川県青少年総合研修センター
4. 陶安あんど「試談里耶秦簡所見文書簡牘的再利用情況」, 国際シンポジウム「“出土文獻與學術新知”國際學術研討會暨第四屆出土文獻青年學者論壇」, 2015.8.22. 吉林大学古籍研究所
5. Arnd Helmut Hafner, “Ist Holz gleich Bambus? - Einige Reflexionen im Spiegel neuerer Tendenzen in der chinesischen und japanischen Forschung antiker chinesischer Holz- und Bambusleisten”, Universität Heidelberg (招待講演), 2015.8.4. Universität Heidelberg
6. 陶安あんど「秦・漢帝国の法制」, 明大アジア史講座 No.21 「秦・漢帝国の実像に迫る—中国古代史研究の最新成果」第 4 回, 2015.6. 19. 明治大学
7. 鈴木直美「秦・漢帝国の家族と戸籍制度」, 明大アジア史講座 No.21 「秦・漢帝国の実像に迫る—中国古代史研究の最新成果」第 4 回, 2015.6.12. 明治大学
8. 高村武幸「秦・漢帝国の『統一』」, 明大アジア史講座 No.21 「秦・漢帝国の実像に迫る—中国古代史研究の最新成果」第 1 回, 2015.5.29. 明治大学
9. 高村武幸「長沙五一広場漢簡と簡牘研究」, 国際シンポジウム「後漢・魏晉簡牘研究の現在」, 2015.9.20. 東京大学
10. 目黒杏子「後漢代年始儀礼の構成に関する考察」, 第 10 回中国古中世史学会国際学術大会「中国 古中世 宗教 文化, 祭祀と喪葬」, 2015.9.19. ソウル大学
11. 渡邊英幸「戦国秦の国境を越えた人々—岳麓秦簡に見える「邦亡」「歸義」「降」を中心に」, 第 64 回東北中国学会大会, 2015.5.30. 東北大学
12. 渡邊英幸「(中華) の淵源と秦の統一」, 明大アジア史講座 No.21 「秦・漢帝国の実像に迫る—中国古代史研究の最新成果」第 2 回, 2015.6.5. 明治大学

[図書] 計 3 件

1. 陶安あんど『嶽麓秦簡復原研究』, 上海古籍出版社, 2016. 全 432 頁.
2. 高村武幸『秦漢簡牘史料研究』, 汲古書院, 2015. 全 6+364+21 頁.
3. 榎山明『秦漢出土文字史料の研究—形態・制度・社会—』, 創文社, 2015. 全 458 頁.

〔社会に向けた成果発表〕 計 12 件

1. 青木俊介「洞庭郡治小考」(URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note10%28Aoki%29.html>)
2. 飯田祥子「長沙五一廣場東漢簡牘 J1 : 325-1-140 木牘の初歩的整理」
(URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note08%28Iida%29.html>)
3. 飯田祥子「湖南長沙五一廣場東漢簡牘 J1 : 129 木牘譯注稿」
(URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note11%28Iida%29.html>)
4. 陶安あんど「「鞫書」と「鞫状」に関する覚書」
(URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note07%28Hafner%29.html>)
5. 角谷常子「語彙考証「郷」」『漢簡語彙考証』, 岩波書店, 2015.179–188.
6. 角谷常子「語彙考証「算」」『漢簡語彙考証』, 岩波書店, 2015.236–242.
7. 角谷常子「語彙考証「占」」『漢簡語彙考証』, 岩波書店, 2015.324–329.
8. 目黒杏子「語彙考証「慈其」」『漢簡語彙考証』, 岩波書店, 2015.254–256.
9. 目黒杏子「肩水金關漢簡 73EJT23:919 と 73EJT23:917 の綴合と試訳」,
(URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note12%28Meguro%29.html>)
10. 榎山明「滕形木簡窺管」(URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note09%28Momiya%29.html>)
11. 鷺尾祐子「語彙考証「壯・狀」」『漢簡語彙考証』, 岩波書店, 2015.333–337.
12. 鷺尾祐子「語彙考証「莊」」『漢簡語彙考証』, 岩波書店, 2015.337–342.

近世イスラーム国家と周辺世界

研究期間 : 2014-2016 (代表 : 近藤信彰 / 所員 4, 共同研究員 19)

所員 : 黒木英充, 高松洋一, アフタンディル・エルキノフ

共同研究員 : 秋葉淳, 阿部尚史, 磯貝健一, 小笠原弘幸, 鴨野洋一郎, 木村暁, 後藤裕加子, 齋藤久美子, 澤井一彰, 島田竜登, 清水保尚, 多田守, 二宮文子, 堀井優, 真下裕之, 黛秋津, 守川知子, 山口昭彦, 和田郁子

研究会等の内容

第 5 回研究会 2015 年 7 月 12 日

近藤信彰 (AA 研所員) 「イスラームにおける王権と正統性—めざすもの」

高松洋一 (AA 研所員) 「オスマン朝君主の呼称と称号—パーディシャー, カリフ, スルタン」

第 6 回研究会 2016 年 1 月 9 日～11 日 第 8 回オスマン文書セミナー

講師 : 秋葉淳, 高松洋一, イラーデ, ハットウ・フマーユーン, 嘆願書

国際ワークショップ Court, Literature and Power in the Early Modern Persianate World

Naofumi Abe (The University of Tokyo)

“Poetics of Politics in Early Qajar Iran: Royal-commissioned Tazkeres at Fath-‘Ali Shah’s Court”

Sunil Sharma (Boston University) “Representing Mughal Decline in Safavid Court Literature”

第 7 回研究会 2016 年 3 月 18 日 国際ワークショップ Islam, Kingship, and Legitimacy in South Asia

Satoshi OGURA (Kyoto University) “Lakṣmī Becomes Dawla: Remarks on the Translation Strategy of

Notions of “Kingship in a Persian Translation of the Rājatarāṅgiṅīs and the Following Chronicles”

A. Azfar Moin (The University of Texas at Austin)

“Universal Peace and Sun Worship in Mughal India: A “Hermetical” Revival in Islam?”

研究成果一覧

〔学術論文〕 計 33 件

1. 近藤信彰 「「近世イスラーム国家」の概念をめぐって」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 1–14.
2. Nobuaki Kondo “The Shah ‘Abd al-‘Azim Shrine and its Waqf under the Safavids”, *Mapping Safavid Iran*, ILCAA, 2015. 41–65.
3. 木村暁 「マンガト朝政権の対シーア派聖戦とメルヴ住民の強制移住」『移動と交流の近世アジア史』, 北海道大学出版会, 2016. 59–85.

4. Kazuaki Sawai “The Great Istanbul Earthquake of 1509 and Subsequent Recovery”, *Mediterranean World* 22, 2015. 29–42.
5. 小笠原弘幸「史料解題 タンズィマート期・アブデュルハミト二世期に作成された歴史教科書」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 361–390.
6. 小笠原弘幸 “Osmanlı Hanedanı'nın Atası Olarak Kayı Han'ın Seçilmesi: Veraset Usulü Açısından Bir Bakış.”, XVI. Türk Tarih Kongresi 20-24 Eylül 2010, Ankara: Kongreye Sunulan Bildiriler.vol.3, part 1, Türk Tarih Kurumu, 2015. 525–533.
7. 小笠原弘幸「オスマン朝におけるヨーロッパ認識の伝統と革新——七世紀中葉以前の北西ユーラシア観を中心に——」『北西ユーラシア歴史空間の再構築』, 北海道大学出版会, 2016. 261–290.
8. Hiroyuki Mashita, “Asad Beg Qazvīnī”, *The Encyclopaedia of Islam, THREE*, 2015-2, Brill, 2015. 29–31. (査読有)
9. 真下裕之「17世紀初頭デカン地方のペルシア語史書 Tadhkirat al-Mulūk について」『近世イスラーム国家史研究の現在』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 197–232.
10. 真下裕之(二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注(4)」『紀要(神戸大学文学部)』43, 2016. 35–73.
11. 真下裕之「近世南アジアにおける人的移動の記録と記憶: デカンのムスリム王朝の出自説をめぐって」『移動と交流の近世アジア史』, 北海道大学出版会, 2016. 33–58.
12. 齋藤久美子「オスマン朝のクズルバシュ対策」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 107–120.
13. 山口昭彦「周縁から見るイランの輪郭形成と越境」『越境者たちのユーラシア』, ミネルヴァ書房, 2015. 79–104.
14. Yamaguchi, Akihiko “The Safavid Legacy as Viewed from the Periphery: The Formation of Iran and the Political Integration of a Kurdish Emirate”, *Mapping Safavid Iran*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2015. 127–154.
15. 清水保尚「16世紀後半のハレブ財政機構—MAD7146の分析を中心として」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 143–163.
16. 堀井優「オスマン帝国のエジプト征服とアレクサンドリアのヴェネツィア人—1517年セリム1世の勅令の部分的再検討—」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 95–105.
17. Horii, Yutaka “The Crisis and Order of Venetian Trade in Later Mamluk Egypt”, *Mediterranean World* 22, 2015. 163–168.
18. 和田郁子「インドの村から長崎へ—綿布から見る近世日本と世界のつながり—」『日蘭関係史をよみとく 下巻運ばれる情報と物』, 臨川書店, 2015. 173–204.
19. 和田郁子「近世インド・港町の西欧系居留民社会における女性」『世界史のなかの女性たち』, 勉誠出版, 2015. 179–194.
20. 和田郁子「ナーガパッティナムの2つの「町」—オランダ東インド会社関連史料を中心に—」『西南アジア研究』83, 2015. 55–66. (査読有)
21. 和田郁子「「境界」を考える—前近代インド社会における婚姻と集団意識」『女性から描く世界史—17～20世紀への新しいアプローチ』, 勉誠出版, 2016. 238–254.
22. 鴨野洋一郎「フィレンツェ・オスマン貿易における駐在員—オスマン貿易商ジョヴァンニ・マリングの書簡から—」, 『関東学院大学経済経営研究所年報』38, 2016. 51–63.
23. 高松洋一「勅令の「裏側」を読む—大宰相府伝来の勅令正文に関する一考察」『近世イスラーム国家史研究の現在』, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 299–328.
24. Yoichi Takamatsu, “Evliya Çelebi Seyahatnâmesi’ne Göre Bitlis’te “Abdal Han’ın Kütüphanesi””, *Journal of Turkish Studies*, 44, 2015. 419–436.
25. 阿部尚史「ムスリム女性の財産獲得—近代イラン有力者家族の婚姻と相続」『女性から描く世界史—17～20世紀への新しいアプローチ』, 勉誠出版, 2016. 145–166.
26. 阿部尚史「ムスリム女性の婚資と相続分—イラン史研究からの視座」『世界史の中の女性たち』, 勉誠出版, 2015. 111–119.
27. 阿部尚史「宮廷詩人とファトフアリー・シャー—カージャール朝宮廷における勅撰詩人伝執筆」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 329–359.
28. Yukako, Goto: “Development of Transport and Growth of Cultural Homogenization in the later Safavid Period”, *Mapping Safavid Iran*, 2015. 96–126.

29. 二宮文子「イスラームにおける奇跡と驚異」『<驚異>の文化史 中東とヨーロッパを中心に』, 名古屋大学出版会, 2015. 42-56.
30. 多田守「17世紀におけるオスマン朝の *avarizhane* を巡って—Hüdavendigâr 県内の諸郡, 特に Göynük 郡に関する事例分析を通して」『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 233-257.
31. 秋葉淳「18世紀オスマン朝史家シェムダーニーザーデ・フンドウクルル・スレイマン・エフェンディの職歴」『近世イスラーム国家史研究の現在』, ILCAA, 2015. 259-276.
32. 秋葉淳「オスマン社会における都市の記憶と自己語り史料—18世紀末~19世紀初頭のイスタンブルとサラエヴォ」『自己語りと記憶の比較都市史』 勉誠出版, 2015. 199-216.
33. 島田竜登「近世バタヴィアのモール人」『移動と交流の近世アジア史』, 北海道大学出版会, 2016. 249-274.

〔口頭発表等〕計47件

1. Nobuaki Kondo, “Multiconfessionalism in 19th Century Iran: Jews in Qajar Tehran, a Reappraisal”, Seminar für Arabistik/Islamwissenschaft am Orientalischen Institut, 2015.11.23. Martin-Luther-Universität Halle- Wittenberg
2. Nobuaki Kondo, “State and Shrine in Iran: Waqf Administration of the Shah ‘Abd al-‘Azim Shrine under the Qajars”, The Fourth International Symposium of Inter-Asia Research Networks “Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations.,” 2015.12.5. 東洋文庫
3. Nobuaki Kondo, “Irano-Japanese Economic Relations.,” First Trilateral Cooperation Area Studies Forum, “China, Korea and Japan's Relations with the Middle East.,” 2015.11.7. Shanghai International University
4. 近藤信彰「明治・大正期における日本・イラン関係」, 国際シンポジウム「日本—イラン関係史」, 2015.7.22. 在東京イラン大使館
5. Nobuaki Kondo, “Ravabet-e Iran va Zhaqon dar Dowre-e Qajar”, 9th scientific seminar, Academic Society of Iranians in Japan, 2015.4.18. 町田市大地沢青少年センター
6. 木村暁「18世紀ブハラ年代記『ハンへの贈り物』について：史料論と王権論からの略考」, 平成27年度九州史学会大会, 2015.12.13. 九州大学
7. 澤井一彰「漢文史料における「ルーム（ルーミー）」再考—オスマン銃の中国への伝播と朶思麻—」, 関西大学東洋史研究大会, 2015.8.1. 関西大学文学部
8. 澤井一彰「近世イスタンブルにおける自然災害と研究の現状（A Survey of Historical Research on Natural Disasters in Early Modern Istanbul）」, 人間文化研究機構広領域型基幹研究「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」対比班 プレ国際シンポジウム「近世巨大都市災害研究の現状と課題—ロンドン・イスタンブル・北京・江戸—」, 2016.2.19. 国文学研究資料館
9. Kazuaki Sawai, “Unending Dialogue between the Present and the Past: A Natural Disasters in Early Modern Istanbul”, Workshop Co-organized by the Mediterranean Studies Group and Ionian University, Department of History, 2016.3.28. Ionian University(Greece)
10. 小笠原弘幸「古典期オスマン帝国における「スルタン」号について」, 日本中東学会第31回年次大会, 2015.5.17. 同志社大学
11. 小笠原弘幸「公定歴史学と教科書—トルコ共和国における「正史」と歴史教育」, 九州史学会2015年大会全体シンポジウム「正史の近代—修史事業と歴史学」, 2015.12.12. 九州大学
12. 真下裕之「インドのムスリム諸政権とカリフ：デリー・スルターン朝時代からムガル帝国時代へ」, 平成27年度九州史学会大会・イスラーム文明部会, 2015.12.14. 九州大学
13. 齋藤久美子「南東アナトリア交易路の表と裏—オスマン政府による統制とその限界」, 立教大学科学研究費共同研究 基盤研究A「近代移行期の港市と内陸後背地の関係に見る自然・世界・社会観の変容」研究会（立教大学 研究代表者 弘末 雅士 課題番号 26244035）, 2015.1.9. 立教大学池袋キャンパス12号館第1会議室
14. Yamaguchi, Akihiko, “Evolution of Center-Periphery Relations as Seen from the Appointment Orders of Local Clerics: The Case of Ardalán Province in the 17th-19th Centuries”, The 8th European Conference of Iranian Studies, 2015.9.18. The State Hermitage Museum (Saint Petersburg, RUSSIA)
15. Horii, Yutaka, “Administrative Aspects of Ottoman-Venetian Connection in the Sixteenth Century”, Workshop in Corfu: “Crises and Networks in the Mediterranean World II,” co-organized by the Mediterranean Studies Group (Tokyo) and Ionian University, Department of History (Corfu, Greece), 2016.3.28. Ionian University, Department of History (Corfu, Greece)

16. 和田郁子「前近代インドにみる「越境」の男女関係—接触がつくり出す「境界」, 京都大学人文科学研究所・共同研究班「前近代ユーラシアにおけるフロンティアとトランス・フロンティア」研究会, 2015.5.22. 京都大学人文科学研究所
17. 和田郁子「近世インド・港町の『オランダ人』社会に生きた女性たち」, 第3回白眉シンポジウム「邂逅の作用反作用: 歴史・芸術・フィールドの視角から」, 2016.1.25. 京都大学芝蘭会館山内ホール
18. Wada, Ikuko, “Early Modern Port Cities of South India as Hubs for Inland and Overseas Trade”, Kyoto University and Sikkim University Joint Workshop on Human Survivability, 2016.3.21. Sikkim University
19. 鴨野洋一郎「前近代北ヨーロッパ商業史論の射程; 斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』(悠書館, 2015年)をめぐって; 「地中海商業との比較から」, バルト＝スカンディナヴィア研究会, 2016.1.23. 早稲田大学
20. 鴨野洋一郎「フィレンツェ・オスマン貿易における駐在員—オスマン貿易商ジョヴァンニ・マリングの書簡から—」, 関東学院大学経済経営研究所プロジェクト研究会, 2016.1.28. 関東学院大学
21. Hidemitsu Kuroki, “Armenians in Mid-19th Century Aleppo”, Symposium “Armenians of Syria”, 2015.5.25. Haigazian University
22. Hidemitsu Kuroki, “China-Japan-Korea Cooperation for Middle Eastern Studies”, International Symposium on “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7. Shanghai International Studies University
23. Hidemitsu Kuroki, “Syrian civil war and the role of East Asian countries”, International Symposium on “China-Japan-Korea Relations with the Middle East”, 2015.11.7. Shanghai International Studies University
24. Hidemitsu Kuroki, “An inevitable wave?: Syrian (and Lebanese) migrants to Europe in historical context”, International Symposium “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints”, 2015.12.9. 北海道大学
25. 黒木英充「近現代の歴史的シリアにおける人間移動と少数派」, 東京大学中東地域研究センター公開シンポジウム「移動・移民と中東」, 2016.1.30. 東京大学駒場キャンパス
26. Hidemitsu Kuroki, “Lebanon-Mexico-Japan Connection: Background of Revival of “Lebanon 1949””, Film Screening Meeting, 2016.3.22. Metropolis Empire Sofil, Beirut
27. 黒木英充「シリア危機と多民族・多宗教問題」, 神奈川大学生涯学習・エクステンション講座, 2015.6.6. 神奈川大学みなとみらいエクステンションセンター
28. 黒木英充「レバノン・ディアスポラ(移民)の意図せざる拡散と戦略的な拡張」, 武蔵大学公開講座『ディアスポラから見る世界』, 2015.10.17. 武蔵大学
29. 高松洋一「オスマン朝君主の呼称と称号—パーディシャー, カリフ, スルタン」, 第5回「近世イスラーム国家と周辺世界」研究会, 2015.7.12. アジア・アフリカ言語文化研究所
30. 高松洋一「マフムト1世による Ayasofya 図書館の蔵書形成 —歴史書を中心として」, 日本オリエント学会, 2015.10.18. 北海道大学
31. 高松洋一「オスマン朝の勅令起草過程で作成される文書類型について—大宰相府と財務長官府の協働の観点から」, 東洋史研究会大会, 2015.11.3. 京都大学
32. Yoichi Takamatsu, “I.Mahmûd’un İstanbul’da kurduğu Üç Kütüphane: Ayasofya, Fatih ve Galatasaray Kütüphaneleri”, XVIII. Yüzyıl Osmanlı Kitap Koleksiyonerleri: Bilgi Üretimi ve Dağılımı, 2015.12.25. Koç Üniversitesi Anadolu Medeniyetleri Araştırma Merkezi, İstanbul
33. Naofumi Abe, “Armenians in Local Iranian Society: Survival of a Religious Minority Community in a Muslim Majority Domain”, International Workshop, “Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Group in the Middle East”, 2016.3.10. Japan Center for Middle Eastern Studies
34. Naofumi Abe, “The Survival Shrine: The Shrine of Sheykh Safi al-Din after the Fall of the Safavids”, The Eighth European Conference of Iranian Studies, St. Petersburg, 2015.9.16. State Hermitage Museum
35. Yukako, Goto, “Tabriz under the Safavids - Its political position, construction, and development”, The 8th European Conference of Iranian Studies, 2015.9.18. The State Hermitage Museum and the Institute of Oriental Manuscripts, Saint Petersburg
36. 二宮文子「19世紀北インドの聖者廟の資産についての分析: サーラル・マスワード廟の事例」, 日本南アジア学会第28回全国大会, 2015.9.27. 東京大学駒場キャンパス
37. 二宮文子「英領インド行政とムスリム聖者廟」, 2015年度九州史学会大会イスラム文明学部会, 2015.12.13. 九州大学箱崎キャンパス
38. Mayuzumi, Akitsu, “The Russian Annexation of Crimea (1783) in the Ottoman-Russian Rivalry over the Black Sea”, ICCEES IX World Congress 2015, 2015.8.3. 神田外語大学
39. Mayuzumi, Akitsu, “The Ayans of Northern Bulgaria and the Danubian Principalities: The Viewpoint of the ‘Eastern Question’”, 5th International Balkan Annual Conference, 2015.11.27. The Bulgarian Academy of Sciences (Sofia)

40. 秋葉淳「裁判官とその発給文書：18世紀オスマン朝歴史家＝裁判官シェムダーニーザーデ・フンドウクル・スレイマンの業績」, 日本中東学会第31回年次大会, 2015.5.17. 同志社大学
41. 秋葉淳「18世紀オスマン帝国の裁判官のプロフィール：遺産目録を史料として」, 第57回日本オリエント学会年次大会, 2015.10.18. 北海道大学
42. 秋葉淳「女性・ジェンダー史からみえるオスマン帝国の社会」, 2015年度NIHUイスラーム地域研究合同集会・公開講演会, 2016.1.30. 早稲田大学
43. Ryuto Shimada, “Iranian Settlers in Ayutthaya and their Intra-Asian Trade in the Seventeenth Century”, Workshop on Maritime Worlds around the China Seas: Emporiums, Connections and Dynamics, 2015.7.1. Academia Sinica, Taipei
44. 磯貝健一「ロシア帝政期中央アジアのシャリーア法廷裁判文書に見える家族内紛争」, 史学研究会例会, 2015.4.18. 京都大学
45. 磯貝健一「史料としての帝政期中央アジアのシャリーア法廷判決台帳」, 第5回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会, 2015.6.20. 京都外国語大学
46. Isogai, Kenichi, “Waqf as a Sustainer of Educational Activity: A Sixteenth Century Waqf for a Bukharan Madrasa”, Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations, 2015.12.5. 東洋文庫
47. 磯貝健一「共有状態にある遺産の持分確定にかんするファトワー文書」, 第14回中央アジア古文書セミナー, 2016.3.13. 京都外国語大学

〔図書〕計3件

1. 近藤信彰(編)『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015. 全397頁.
2. Nobuaki Kondo, ed., *Mapping Safavid Iran*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2015. 246 pp.
3. 澤井一彰『オスマン朝の食糧危機と穀物供給—16世紀後半の東地中海世界—』, 山川出版社, 2015. 全303頁.

〔社会に向けた成果発表〕計14件

1. Satoru Kimura, “Doktor Karimova va Yaponiya”, *Saodat kimyosin izlab*, Toshkent davlat sharqshunoslik instituti huzuridagi Sharq qo‘lyozmalari markazi, 2015.2015. 27–29.
2. 真下裕之「世界史 Q&A ムガル帝国の公用語やイスラームとの関係について教えてください」, 『歴史と地理 世界史の研究』245. 47–49.
3. 黒木英充『先読み！夕方ニュース 夕方ホットトーク』「内戦激化 シリアを崩壊から救うことはできるか—中東の最重要課題を展望する」, NHK ラジオ第1
4. 黒木英充「内戦長期化 シリアのいま」, NHK Eテレ『視点・論点』
(URL: <http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/222388.html>)
5. 黒木英充「ニュースの本棚 『テロ』とは何か」, 朝日新聞. 2015.12.20.
6. 黒木英充「読書館 津村一史著『中東特派員はシリアで何を見たか』」, 西日本新聞. 2016.3.13
7. 黒木英充(インタビュー) “Kuroki li-l-Hayat: Hilal al-Hadarat tahawwal li-l-Hurub” (黒木がハヤートに：文明の三日月地帯が戦争の三日月地帯に変容)」, Al-Hayat (レバノンの最大紙), 2015.11.26
8. 高松洋一「定説をフィールドから問い直す:大村幸弘 著『トロイアの真実—アナトリアの発掘現場から』 シュリーマンの実像を踏査する」, 『FIELDPLUS』15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 27.
9. 阿部尚史「2014年の歴史学会—回顧と展望(西アジア・北アフリカ近現代)」『史学雑誌』124, 2015. 946–951.
10. 二宮文子「アキール文庫スーフィズム関連コレクション」『イスラーム世界研究』9, 2016. 182–186.
11. 近藤信彰「アキール文庫コレクション—ペルシア語詩人伝を中心に」『イスラーム世界研究』9, 2016. 140–143.
12. 黛秋津「自著を語る」『日本トルコ交流協会会報』15, 日本トルコ交流協会, 2015. 2–2.
13. 黛秋津「(耕論)「欧州の境界」」, 朝日新聞 (URL: <http://www.asahi.com/articles/DA3S12005088.html>)
14. 秋葉淳「ファトワーとファトワー集」, 東洋文庫イスラーム地域研究資料室 HP「オスマン帝国史料解題」(URL: <http://tbias.jp/ottomansources/fetva>)

〔その他：オンラインリソースなど〕1件

黒木英充・高松洋一・松原康介: Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities, 中東都市・領域の古地図と Google Maps の重ね合わせによる研究情報共有システム <http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—

研究期間：2014-2016（代表：錦田愛子／所員 2，共同研究員 13）

所員：床呂郁哉

共同研究員：伊藤一頼，小坂田裕子，久保忠行，近藤敦，佐伯美苗，白川俊介，菅原真，陳天璽，飛内悠子，堀抜功二，松尾昌樹，村尾るみこ，柳井健一

研究会等の内容

第1回研究会（通算第4回目）日時：2015年7月25日（土）・26日（日）

場所：名城大学名駅サテライトMSAT 多目的室・ディスカッションルーム1

（名古屋市中村区名駅3-26-8 KDX名古屋駅前ビル13階）

25日14:10-17:00【公開】シンポジウム「外国人の人権とシティズンシップ」

場所：名城大学名駅サテライトMSAT 多目的室

主催：名古屋多文化共生研究会（NAMS）

共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」

近藤敦（AA研共同研究員・名城大学）「外国人の人権への憲法と国際人権法からのアプローチ」

菅原真（AA研共同研究員・南山大学）「日本における外国人の政治的権利—最高裁1995年2月28日判決（民集49巻2号639頁）後の課題と展望—」

宮崎真（弁護士・名古屋多文化共生研究会（NAMS）メンバー）

「医療を理由とする在留の考察～2013年6月27日名古屋高裁判決を例として～」

床呂郁哉（AA研所員）「日比国際結婚移民をめぐる諸問題に関する事例報告-フィリピンの現場から」

コメンテーター 柳井健一（AA研共同研究員・関西学院大学）

司会 小坂田裕子（AA研共同研究員・中京大学）

26日10:00-15:00【非公開】場所：名城大学名駅サテライトMSAT ディスカッションルーム1

（名古屋市中村区名駅3-26-8 KDX名古屋駅前ビル13階）

錦田愛子（AA研所員）趣旨説明

羽田野真帆（特定非営利活動法人 名古屋難民支援室）

「難民との関わりを通じて考える，東海地域在住の難民と地域社会」

錦田愛子（AA研所員）「スウェーデンの難民受け入れ政策とアラブ系移民／難民」

第2回研究会（通算第5回目）日時：2015年12月5日（土）13:00-17:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室(306)

白川俊介（AA研共同研究員・九州大学）

「人の移動の政治哲学—社会正義，グローバル正義，世界構想（仮）」

堀抜功二（AA研共同研究員・日本エネルギー経済研究所中東研究センター）

「湾岸諸国における不法滞在者とアムネ스티政策（仮）」

第3回研究会（通算第6回目）日時：2016年3月2日（水）13:00-17:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室(306)

松尾昌樹（AA研共同研究員・宇都宮大学）

「移民と統治体制の研究：湾岸アラブ型エスノクラシーから新・複合社会へ」

伊藤一頼（AA研共同研究員・北海道大学）「社会統合の促進における内的自決権の意義」

全員 打ち合わせ

研究成果一覧

〔学術論文〕計25件

1. 錦田愛子「「再難民化」するパレスチナ人—繰り返される移動とシティズンシップ」『移民／難民のシティズンシップ』，有信堂高文社，2016. 154-178.（査読有）
2. 久保忠行「分析概念としての〈難民〉—ビルマ難民の生活世界と難民経験」『多配列思考の人類学—差異と類似を読み解く』，風響社，2016. 247-266.
3. 近藤敦「移民政策の制約根拠としての人権と比例原則：『融合的保障』による憲法と人権条約の整合性」『国際人権』26，2015. 9-14.

4. 近藤敦「東北・宮城，東海・愛知における多文化家族への支援—調査報告—」52-2, 2015. 211–236.
5. 近藤敦「比例原則の根拠と審査内容の比較研究—收容・退去強制の司法審査にみる（国際人権）法の支配—」『憲法の基底と憲法論—思想・制度・運用』, 信山社, 2015. 815–837.
6. 近藤敦「民主国家における外国人のシティズンシップ」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 14–35. (査読有)
7. 近藤敦「韓国の多文化家族に対する支援政策と実践の現況」, 『名古屋学院大学論集 社会科学篇』52-4, 2016. 113–144.
8. 近藤敦「外国人の人権に関する憲法と国際人権法からのアプローチ」『多文化共生研究年報』13, 2016. 1–6.
9. 菅原真「政治的権利」『外国人の人権への法的アプローチ』, 明石書店, 2015. 94–121.
10. 菅原真「学校教育法〔第12章〕雑則〔第13章〕罰則」『新基本法コンメンタール 教育関係法』, 日本評論社, 2015. 185–193.
11. 菅原真「国籍と外国人の人権」『憲法基本判例—最新の判決から読み解く』, 尚学社, 2015. 3–17.
12. 伊藤一頼「国有企業・政府系ファンドに対する諸国の外資規制—開放性と安全保障の両立をいかにして図るか—」, (独) 経済産業研究所ディスカッションペーパー (15-J-059), 2015. 1–41.
13. 伊藤一頼「知的財産権に関する諸条約—権利保護の強化, 価値対立の調整」『法学教室』426, 2016. 136–142.
14. 伊藤一頼「脱植民地化プロセスにおける国家形成の論理—発展途上国における市民権概念の示唆」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 36–57. (査読有)
15. 堀抜功二「2022年 FIFA ワールドカップに揺れるカタール—贈収賄問題および外国人労働者問題の政治経済リスク—」『JIME 中東動向分析』14-4, 2015. 1–18.
16. 堀抜功二「「国民マイノリティ国家」の成立と展開—アラブ首長国連邦における国民／移民の包摂と排除の論理」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 106–127. (査読有)
17. 小坂田裕子「先住民族の権利に関する国連宣言」の実施に向けた国際的努力と課題」『中京法学』49-3,4, 2015. 311–343.
18. Yuko Osakada, “The Nagoya Protocol in an Indigenous Peoples' Perspective”, 『中京法学』50-2, 2015. 197–213.
19. 柳井健一「国家・国民・外国人」『現代社会と憲法学』, 弘文堂, 2015. 252–267.
20. 柳井健一「「国家の構成員ではないこと」と「権利保障」の可能性—イギリス・テロ法制の経験を題材に—」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 200–225. (査読有)
21. 飛内悠子「彼らは何者になるのか?—南スーダン独立後のスーダン共和国ハルツームにおける南部出身者の選択」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 81–103. (査読有)
22. 白川俊介「ジョージ・オーウェル『動物農場』の政治哲学的含意についての一試論—ネオリベラル・ディストピアに抗して—」『九州龍谷短期大学紀要』62, 2016. 35–62.
23. 床呂郁哉「フィリピン南部ムスリムの移民／難民状況の動態と「再難民化」」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 179–198. (査読有)
24. 村尾のみこ「限界を生きる焼畑農耕民の近現代史—ザンビア西部のキャッサバ栽培技術を中心に—」『食と農のアフリカ史』, 昭和堂, 2016. 273–290. (査読有)
25. CHEN Tienshi, “Born to Be Stateless, Being Stateless: Transnational Marriage, Migration and the Registration of Stateless People in Japan”, *Marriage Migration in Asia -Emerging Minorities at the Frontiers of Nation-States*, NUS Press Singapore/Kyoto University Press Japan, 2016. 187–201. (査読有)

[口頭発表等] 計 20 件

1. Ken SHIMIZU and Aiko NISHIKIDA, Arab migrants-refugees from Swedish foreign policy's perspective., A two-day symposium sponsored by the Institute of Arab and Islamic Studies, “Researching the Middle East: Fieldwork, Archives, Issues, and Ethics.”, 2015.6.8. University of Exeter, Exeter, UK.
2. 錦田愛子「再難民化する難民たち—中東から北欧を目指すアラブ系住民の移動」, 日本政治学会 2015 年度研究大会, 2015.10.11. 千葉大学
3. Nishikida, Aiko, The Choice to Move: Palestinian refugees' migration to European countries, International Symposium “Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian viewpoint”, 2015.12.8. Hokkaido University
4. 久保忠行「共生の諸側面について (コメンテーターとして参加)」, 第 49 回日本文化人類学会, 2015.5.30. 大阪国際交流センター
5. 久保忠行「アイデンティティの政治は越えられるのか?—カヤー州の歴史, 文化, 人の移動から考える—」, 東文研セミナー・緬甸 (ミャンマー) 勉強会, 2015.6.27. 東京大学東洋文化研究所

6. 久保忠行「つくられる難民—カレンニーの事例から—」, 上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科地域研究専攻主催シンポジウム, 2015.10.23. 上智大学
7. 近藤敦「外国人の人権: 憲法と国際人権法から」, 名古屋多文化共生研究会 2015 年度年次大会, 2015.7.25. 名城大学名駅サテライト
8. 菅原真「政党の憲法上の地位と外国人—「定住外国人地方選挙権訴訟」最高裁判決(最判平成7年2月28日民集49巻2号639頁)から派生する憲法理論的諸問題」, 南山学会法学系列2015年度第1回研究例会, 2015.7.15. 南山大学名古屋キャンパス A 棟2階会議室
9. 菅原真「日本における外国人の政治的権利と地方自治体の役割—最高裁1995年2月28日判決(民集49巻2号639頁)後の課題と展望」, 名古屋多文化共生研究会(NAMS), 2015.7.25. 名城大学名駅サテライト MSAT 多目的室
10. 菅原真「日仏における外国人の参政権」, 第21回慶應義塾大学フランス公法研究会, 2015.7.31. 慶應義塾大学三田キャンパス南館2B15教室
11. 松尾昌樹“Ethnocracy in the Arab Gulf Countries”, *Comparative Approach to Studies on Migrant Workers in Asian Countries*, 2015.9.7-8. The Institute of Asian Studies (IAS) at Universiti Brunei Darussalam (UBD)
12. Yuko Osakada, The Nagoya Protocol in an Indigenous Peoples' Perspective, Japan-Korea Workshop on Access to Genetic Resources and Benefit Sharing Arising from their Utilization under the Nagoya Protocol, 2015.1.29. 名古屋大学
13. 柳井健一「実定憲法としてのマグナ・カルタ」, 法制史学会第67回総会シンポジウム, 2015.6.13. 関西学院大学
14. 飛内悠子「北部ウガンダにおけるキリスト教信仰覚醒運動の歴史と現状」, 日本ナイル・エチオピア学会第24回学術大会, 2015.4.19. 藤女子大学
15. 飛内悠子「帰還民の生活誌—南スーダン共和国カジョケジ郡におけるククの人びとと聖公会」, 日本文化人類学会次世代セミナー, 2015.11.7. 東京外国語大学
16. 白川俊介「マルチナショナルな世界におけるネイション間の正義の問題—規範理論的—考察」, 日本国際化学会, 2015.7.4. 多摩大学湘南キャンパス
17. 白川俊介「グローバルな正義の動機づけに関する—考察—デイヴィッド・ミラーの議論の批判的検討を手がかりに」, 日本法哲学会, 2015.11.7. 沖縄市立自治会館
18. 白川俊介「新自由主義的グローバリゼーションとデモクラシーの行方—ジョージ・オーウェル『動物農場』についての考察を手がかりに—」, 九州大学政治研究会, 2015.12.9. 九州大学伊都キャンパス
19. 村尾るみこ「アフリカ南部の国境地帯における流動性」, 日本アフリカ学会, 2015.5.24. 愛知県犬山市犬山観光センター“フロイデ”
20. CHEN Tienshi, “Sovereignty, Statelessness, and Survivability among Chinese Overseas: Where is or Which is My Homeland?”, CHINESE DIASPORA STUDIES IN THE AGE OF GLOBAL MODERNITY, 2015.11.19-20. Asia Research Institute, National University of Singapore

〔図書〕計2件

1. 錦田愛子(編著)『移民/難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 全258頁.
2. 白川千尋・石森大知・久保忠行(編)『多配列思考の人類学—差異と類似を読み解く』, 風響社, 2016. 全388頁.

〔社会に向けた成果発表〕計4件

1. 錦田愛子「書評『グローバル時代の難民』」『図書新聞』, 2016.3.
2. 佐伯美苗「親子のための月間イオニュース イスラーム国」『イオ』第20巻4号, 朝鮮新報社, 2015.28-29.
3. 佐伯美苗「平和への道 空爆下から第3部アフガン戦禍」『愛媛新聞』12月13日・14日朝刊, 愛媛新聞社
4. 堀抜功二「外国人労働者」『エコノミスト』2015年3月24日号, 2015.35.

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)

研究期間: 2014-2016 (代表: 富沢寿勇(静岡県立大学) / 所員 5, 共同研究員 19)

所員: 西井涼子, 黒木英充, 飯塚正人, 床呂郁哉, 錦田愛子

共同研究員: 今泉慎也, 小河久志, 奥島美香, 金子奈央, 川端隆史, 黒田景子, 塩谷もも, 菅原由美, 鈴木伸隆, 左右田直規, 辰巳頼子, 福島康博, 見市建, 森正美, Azizah Kassim, Julkipli Milhon Adduk, Omar Farouk, Shamsul Amri Baharuddin

研究会等の内容

第1回研究会 日時：2014年7月5日（日）14:00-19:00 場所：AA研マルチメディア会議室（306）

報告1：末近浩太（立命館大学）『ポスト・アラブの春』期の東アラブ地域におけるイスラーム主義

報告2：床呂郁哉（AA研）「フィリピン南部のイスラーム分離主義運動におけるイスラームと（エスノ）ナショナルリズム—モロ・イスラーム解放戦線（MILF）の活動を中心に」

報告の後、全員による質疑応答・総合討論を実施した。

第2回研究会 International Workshop on Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia

日時：2015年9月27日（日）14:00~20:00

場所：Sipadan Room (Level 3), Hotel Le Meridien Kota Kinabalu (Malaysia) 使用言語：英語

Program

14:00-14:10 Opening Remarks Ikuya Tokoro (ILCAA, TUFS)

14:10-14:40 Presentation (1) Yasuko Kobayashi (Nanzan University)

“The 33rd Nahdlatul Ulama National Congress in Jombang, Indonesia”

14:45-15:15 Presentation (2) Omar Farouk (Universiti Sains Malaysia/ILCAA Joint Researcher)

“The Dynamics of Inter-religious co-existence in Penang”

15:30-16:00 Presentation (3) Aiko Nishikida (ILCAA)

“Division and Connection by Islamic Insurgent groups- from cases of Hamas and Islamic State”

16:05-16:35 Presentation (4) Shamsul A. B. (Universiti Kebangsaan Malaysia/ILCAA Joint Researcher)

“Conceptualising the many faces of diversity: Empirical evidence from Malaysian”

16:40-18:00 Discussion

18:00-18:05 Closing Remarks Hisao Tomizawa (University of Shizuoka/ ILCAA Joint Researcher)

第3回研究会 日時：2016年2月21日（日）14:00~19:00 場所：AA研マルチメディア会議室（304）

報告1：奥島美夏（AA研共同研究員・天理大学）

「国境紛争に翻弄されるエスニシティ：ボルネオ島・ティドン族の経験から」

報告2：小河久志（AA研共同研究員・常葉大学）「2つの宗教団体が生み出す新たな関係性—タイ南部イスラーム村落におけるタブリーグとワールド・ビジョンの支援活動に焦点を当てて—」

報告3：Najib Burhani (LIPI, Indonesia / Kyoto University)

“Diverse Islamic Trends and the Construction of Orthodoxy in Indonesia”

研究成果一覧

〔学術論文〕計26件

1. 富沢寿勇「食をめぐる異なる価値との共生：グローバル化の中のハラールとローカリティ」『多文化社会研究』2号，昭和堂，2016. 29-48.
2. 金子奈央「サバにおける教育制度形成の歴史的展開」『東京外大 東南アジア学』21，2016. 34-54.（査読有）
3. 塩谷もも「インドネシアにおけるパティック布の現状とアイデンティティ」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』53，2016. 51-56.（査読有）
4. Sugahara Yumi, “Transformation of the Isra’ Mi raj Story in Modern Southeast Asia”, *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (4): Local and Global Dynamism in Transformation of Islamic Tales* 27, Sophia University, 2015. 1-10.
5. 今泉慎也「パプアニューギニアの鉱物資源開発と慣習地問題」『太平洋島嶼地域における国際秩序の変容と再構築』，日本貿易振興機構アジア経済研究所，2016. 93-139.（査読有）
6. 今泉慎也「パプアニューギニアの資源開発と慣習地」『アジア研ワールドトレンド』244，日本貿易振興機構アジア経済研究所，2016. 16-19.
7. 今泉慎也「(海外法律情報) タイにおける生殖補助医療立法について」『論究ジュリスト』15，有斐閣，2015. 2-3.
8. 西井涼子「人が家で死ぬということ—死のプロセスについての南タイのフィールドからの人類学的実践」，『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』，東京大学出版会，2016. 158-176.
9. 西井涼子「『顔』と他者—顔を覆うヴェールの下のイスラーム女性たち」『他者—人類社会の進化』，京都大学学術出版会，2016. 275-294.（査読有）
10. 鈴木伸隆「世界遺産観光と地域経済—フィリピン・イロコス・スール州の歴史都市ビガンの事例から—」『国際公共政策論集』37，筑波大学大学院人文社会科学研究所国際公共政策専攻，2016. 1-21.（査読有）
11. 左右田直規「多文化空間における出会いと別れ—『タウンボーイ』を読む」『タウンボーイ』，東京外国語大学出版会，2015. 194-204.

12. 左右田直規「マレーシア料理～海の十字路の食文化―その多彩さとつながり」『世界を食べよう！東京外国語大学の世界料理』, 東京外国語大学出版会, 2015. 76–81.
13. 川村晃一・見市建「大統領選挙―庶民派对エリートの大激戦」『新興民主主義大国インドネシア―ユドヨノ政権の10年とジョコウィ大統領の誕生』, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2015. 73–93.
14. 見市建「イスラームと政治―ユドヨノ期の「保守化」とジョコウィ政権の課題」『新興民主主義大国インドネシア―ユドヨノ政権の10年とジョコウィ大統領の誕生』, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2015. 245–267.
15. 見市建「ジャカルタ・テロ事件のインパクト」『東亜』585, 霞山会, 2016. 8–9.
16. 見市建「ユドヨノの保守的宗教政策とジョコウィ政権における変化」『アジア研ワールドトレンド』241, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2015. 25–27.
17. 錦田愛子「「再難民化」するパレスチナ人―繰り返される移動とシティズンシップ」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 154–178.
18. 奥島美夏「東カリマンタン・カヤン系諸族の言語保存運動―インドネシアのモン・クメール語族の現在」『インドネシア・ニューズレター』90, 日本インドネシア NGO ネットワーク, 2015. 2–13.
19. 辰巳頼子「ひきつづく課題, 「支援」の困難と可能性―福島第一原発事故から東京への母子避難者の三年間」『災害後の人々の移動とアソシエーションに関する人類学・社会学的研究: 文部科学省科学研究費報告書 2012年度~2015年度 基盤研究(c)』, 2016. 35–58.
20. 鈴木伸隆「岡田泰平著『「恩恵の論理」と植民地―フィリピン植民地フィリピンの教育とその遺制―』」『東南アジア―歴史と文化―』45, 東南アジア学会, 2015. 154–159.
21. 見市建「書評 “Mitsuo Nakamura, The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town, c.1910s-2010, 2nd Enlarged Edition”」『アジア経済』56-2, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2015. 122–125. (査読有)
22. 見市建 書評「森下明子(著)『天然資源をめぐる政治と暴力―現代インドネシアの地方政治』京都大学学術出版会, 2015年, 250p.」『アジア・アフリカ地域研究』15-1, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, 2015. 129–132. (査読有)
23. 床呂郁哉「フィリピン南部ムスリムの移民／難民状況の動態と「再難民化」」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 179–198.
24. 床呂郁哉「野性のチューリングテスト」『他者―人類社会の進化』, 京都大学学術出版会, 2016. 399–418. (査読有)
25. 床呂郁哉「ボーダーの形成と越境のダイナミクス―東南アジア海域世界の事例から」『境界・境域への挑戦と「地域」―JCAS シンポジウム報告書』, 地域研究コンソーシアム・京都大学地域研究統合情報センター・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 40–47.
26. 錦田愛子「見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防」『境界・境域への挑戦と「地域」―JCAS シンポジウム報告書』, 地域研究コンソーシアム, 京都大学地域研究統合情報センター, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 18–25.

〔口頭発表等〕計36件

1. 富沢寿勇「文化人類学よりみたハラール産業の現状」, 食品品質プロフェッショナルズ主催セミナー『ハラールの真の理解に向けて』, 2015.8.5. 東京海洋大学
2. 富沢寿勇 “The Significance of the Halal Industry in the Age of Global Consumerism”, International Forum on China Hui Muslim Studies, 2015.9.8. 銀川悦海賓館(中国)
3. 富沢寿勇「現代ハラール産業の可能性」『ハラールビジネスセミナー』, 2015.9.29. ホテルセンチュリー静岡
4. 富沢寿勇「ヒトの動物観・動物利用の諸相―近親化と差別化の交錯史」, 日本実験動物技術者協会総会, 2015.10.9. グランシップ(静岡市)
5. 富沢寿勇「食をめぐる異なる価値との共生―グローバル化の中のハラールとローカリティ―」, シンポジウム「グローバル化する食文化とローカリティの変容―味覚の世界から考える多文化状況―」, 2015.11.6. 長崎大学
6. 富沢寿勇「ハラール産業の現状と日本の対応」, 静岡産品を使ったハラールフード試食会, 2016.1.27. ホテルクエスト清水
7. 富沢寿勇 “Global Halal Market: Challenge and Opportunities”, AHAL Academic Discourse, 2016.3.24. Universiti Utara Malaysia, Malaysia

8. Ogawa Hisashi, "Expansion and Control: Islamic Basic Education in Thailand under the Multicultural Circumstances", The 9th International Convention of Asia Scholars, 2015.7.7. Adelaide Convention Centre, Australia
9. 小河久志「宗教領域にみるインド洋津波災害」, 日本文化人類学会課題研究懇談会「危機の克服と地域コミュニティ」第10回研究会, 2015.10.31. 名古屋大学
10. 塩谷もも「ムスリム観光客の増加と異文化理解」, 島根県立大学短期大学部松江キャンパス総合文化講座, 2016.7.29. 島根県立大学松江キャンパス
11. Masami Mori Tachibana, "Constitutional or un-constitutional?: Way to have own basic law of Muslims in the Philippines", International Conference of Commission on Legal Pluarism, IUAES, 2016.12.15. Indian Institute of Technology in Bombay, India
12. 菅原由美「ジャワの19世紀をどう記述するか—写本に見るインドネシアのイスラーム潮流」, 東南アジア史学会賞受賞記念講演, 2015.5.30. 愛媛大学
13. Sugahara Yumi, "Transformation of the Isra' Mi'raj Story in Modern Southeast Asia", NIHU Program for Islamic Area Studies, fifth International Conference, 2015.9.12. 上智大学
14. 菅原由美「東南アジア島嶼部におけるイスラーム化の進展と伝統の創出—ミラージュ物語を題材に」, イスラム協会講演会「東南アジアのイスラーム—知の伝統とネットワーク」, 2016.1.30. 東京大学
15. 西井涼子「人が家で死ぬということ—死のプロセスの共有について」『複雑系研究会:世界に遍在する意識』, 2015.4.26. 早稲田大学複雑系高等学術研究所
16. 西井涼子「ムスリム女性とヴェール: タイのダツツ運動の事例から」『東南アジア・中東に跨がるイスラーム・ネットワークの動態に関する学術的研究』研究会, 2015.10.3. 鹿児島大学法文学部
17. 西井涼子「タイにおけるムスリムと仏教徒との関係—南タイの事例を中心に」, メコン地域研究会2016年2月研究会, 2016.2.15. 新虎ノ門倶楽部
18. 西井涼子「死と身体—タイのフィールドから考える」, 東京外国語大学/読売新聞立川支局共催 連続市民講座『今を生きる～人々が暮らしている/きた世界』(第10回), 2016.2.20. 東京外国語大学アゴラ・グローバルプロメテウス・ホール
19. 西井涼子「紛争状況下で日常を生きる—南タイのムスリム女性」, 東京外国語大学×府中市連携講座『暮らしの空間と女性』(第1回—全4回), 2016.3.1. 府中市生涯学習センター
20. 福島康博「ムスリムがマイノリティである国におけるハラール・レストランの比較と分析: フィリピンとシンガポールの事例から」, アジア政経学会2015年度全国大会, 2015.6.14. 立教大学池袋キャンパス
21. 福島康博・砂井紫里「アジア四カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較: イスラーム地域研究の視点から」, 第30回日本観光研究学会, 2015.11.29. 高崎経済大学
22. 福島康博「東南アジア3カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較」, 第24回日本マレーシア学会研究大会, 2015.12.12. 立教大学新座キャンパス
23. Miichi Ken, "The Politics of Decentralization and Role of Accountabilities in Indonesia", Association for Asian Studies (AAS), 2015.6.23. Academia Sinica, Taipei, Taiwan
24. Miichi Ken, "Politics of Accountability in Indonesia: A Case of Jakartan Governorship", Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA), 2015.12.12. Kyoto International Conference Center
25. 錦田愛子「再難民化する難民たち—中東から北欧を目指すアラブ系住民の移動」, 日本政治学会2015年度研究大会, 2015.10.11. 千葉大学
26. 錦田愛子「見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防—国家承認, エルサレム, 和平分割案—」, 地域研究コンソーシアム 年次集会—一般公開シンポジウム, 2015.11.1. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
27. Nishikida Aiko, "The Choice to Move: Palestinian refugees' migration to European countries", International Symposium "Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian viewpoint", 2015.12.8. 北海道大学
28. 錦田愛子「中東世界の現状と課題—イスラーム地域の実態とシリア紛争・難民危機—」, 銀青会 2015年度公開講座, 2016.3.17. 亜細亜大学
29. 西井涼子「顔の不在もたらすこと—ムスリム女性のヴェール着用をめぐる」, 基幹研究人類学シンポジウム『顔と身体表現に基づく異文化理解』, 2015.12.13. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
30. 床呂郁哉「マレーシア・フィリピンから世界を見る—東南アジアの文化多様性のなかのイスラーム」, 長野イスラーム勉強会(板垣雄三東京大学名誉教授代表)招待講演, 2015.12.5. 松本商工会館
31. 床呂郁哉「ボーダーの形成と越境のダイナミクス—東南アジア海域世界の事例から」, 地域研究コンソーシアム 年次集会—一般公開シンポジウム, 2015.11.1. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

32. 床呂郁哉「東南アジアと中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態：概説とイントロダクション」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所科学研究費基盤研究(A)「東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究」(代表: 床呂郁哉) 成果公開研究会, 2015.10.3. 鹿児島大学法文学部
33. Kuroki Hidemitsu, "Armenians in Mid-19th Century Aleppo", Symposium "Armenians of Syria", 2015.5.25. Haigazian University, Lebanon
34. Kuroki Hidemitsu, "China-Japan-Korea Cooperation for Middle Eastern Studies", International Symposium on "China-Japan-Korea Relations with the Middle East", 2015.11.7. Shanghai International Studies University, China
35. Kuroki Hidemitsu, "Syrian civil war and the role of East Asian countries", International Symposium on "China-Japan-Korea Relations with the Middle East", 2015.11.7. Shanghai International Studies University, China
36. Kuroki Hidemitsu, "An inevitable wave?: Syrian (and Lebanese) migrants to Europe in historical context", International Symposium "Middle-Eastern Migration/ Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints" 2015.12.9. 北海道大学

[図書] 計3件

1. 小河久志『「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム—タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌—』, 大阪大学出版会, 2016. 全260頁.
2. 錦田愛子(編)『移民/難民のシティズンシップ』, 有信堂高文社, 2016. 全258頁.
3. 黒木英充・塩谷昌史・柳澤雅之(編)『境界・境域への挑戦と「地域」—JCAS シンポジウム報告書』, 地域研究コンソーシアム, 京都大学地域研究統合情報センター, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 全64頁.

[社会に向けた成果発表] 計11件

1. 富沢寿勇「人文社会科学の役割とアジアを中心とした人材育成」『アジア危機管理コラム』
(URL: http://global-center.jp/review/column/2013_5563c6c8a56c4/31_55a88b320d288_55cad29513d07_55d12afe6802d/index.html)
2. 富沢寿勇「めぐり, めぐって・・・マレー王権の伝統と現代」『The Daily NNA マレーシア版』
(URL: http://news.nna.jp/free/news/20160301myr023A_lead.html)
3. 富沢寿勇(監修)『しずおかムスリムおもてなしガイドブック』非売品, 未刊行配付
4. Miichi Ken, Democratization and the Changing Role of Civil Society in Indonesia, Middle East Institute, 2015.
(URL: <http://www.mei.edu/content/map/democratization-and-changing-role-civil-society-indonesia>)
5. 黒木英充『先読み! 夕方ニュース 夕方ホットトーク』「内戦激化 シリアを崩壊から救うことはできるか—中東の最重要課題を展望する」, NHK ラジオ第1
6. 黒木英充「内戦長期化 シリアのいま」, NHKE テレ『視点・論点』
(URL: <http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/222388.html>)
7. 黒木英充「ニュースの本棚 『テロ』とは何か」, 2015(平成27)年12月20日. 朝日新聞
(URL: <http://www.asahi.com/articles/DA3S12126038.html>)
8. 黒木英充「読書館 津村一史(著)『中東特派員はシリアで何を見たか』」, 西日本新聞, 2016.3.13
9. 黒木英充「Kuroki li-l-Hayat: Hilal al-Hadarat tahawwal li-l-Hurub(黒木がハヤートに: 文明の三日月地帯が戦争の三日月地帯に変容)」, Al-Hayat (レバノンの最大紙), 2015.11.26.
10. 床呂郁哉「ミンダナオ紛争と和平の行方—スルールの難民の視点から」, Asia Peacebuilding Initiatives
(URL: <http://peacebuilding.asia/mindanao-peace-process-sulu-refugee-ja/>)
11. Tokoro Ikuya, "The Mindanao Conflict and the Direction of the Peace Process: A Sulu Refugee Perspective", Asia Peacebuilding Initiatives (URL: <http://peacebuilding.asia/mindanao-peace-process-sulu-refugee-s/>)

[その他: オンラインリソースなど] 計2件

1. 福島康博: 2015(平成27)年度 観光庁「ムスリムおもてなしプロジェクト」委員, 観光庁(2015)『ムスリムおもてなしガイドブック: ムスリム旅行者受入環境の向上を目指して』の監修
2. 黒木英充・高松洋一・松原康介 "Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities"
中東都市・領域の古地図と Google Maps の重ね合わせによる研究情報共有システム
<http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

アフリカに関する史的研究と資料

研究期間: 2014-2016 (代表: 荻谷康太/所員 2, 共同研究員 8)

所員：石川博樹

共同研究員：網中昭世，大澤広晃，北川勝彦，工藤晶人，坂井信三，永原陽子，眞城百華，溝辺泰雄

研究会等の内容

第1回（通算第4回）研究会 日時：2015年6月20日（土）13:00-17:30

場所：東京外国語大学本郷サテライト3階

網中昭世（AA研共同研究員・アジア経済研究所）

「文書史料と非文書史料の交差—植民地期モザンビーク農村社会に関する調査から」

坂井信三（AA研共同研究員・南山大学）

「西アフリカのムスリム・コミュニティにおける文書活動研究の可能性」

全員「今度の日程等について」

第2回（通算第5回）研究会 日時：2015年11月15日（日）14:00-17:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト3階

吉田早悠里（名古屋大学）

「エチオピア南西部における「差別」の形成史：文字・口承・身体所作テキストの分析から」

全員「今後の日程等について」

第3回（通算第6回）研究会 日時：2016年3月27日（日）13:00-17:30

場所：東京外国語大学本郷サテライト7階

新谷崇（AA研ジュニア・フェロー）「カトリック教会資料によるイタリア植民地史研究の動向と展望」

眞城百華（AA研共同研究員，上智大学）

「エチオピア・エリトリア現代史への接近—社会史・オーラル・ヒストリーの検討—」

全員「今後の日程等について」

研究成果一覧

〔学術論文〕計15件

1. 石川博樹「食と農のアフリカ史序説」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』，昭和堂，2016. 1-20.
2. 安溪貴子・石川博樹・小松かおり・藤本武「アフリカの食の見取り図を求めて」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』，昭和堂，2016. 23-52.
3. 藤本武・石川博樹「アフリカの作物：成り立ちと特色」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』，昭和堂，2016. 53-77.
4. 佐藤靖明・小松かおり・石川博樹「アフリカ農業史研究の手法」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』，昭和堂，2016. 79-93.
5. 石川博樹「エチオピアのエンセーテ栽培史を探る：文字資料研究の可能性」『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』，昭和堂，2016. 175-190.
6. 大澤広晃「「人道主義」と南アフリカ戦争」『歴史学研究』932，2015. 24-35.（査読有）
7. Hiroaki Osawa, "Wesleyan Methodists, Humanitarianism and the Zulu Question, 1878-87", *Journal of Imperial and Commonwealth History* 43-3, 2015. 418-437.（査読有）
8. Katsuhiko Kitagawa, "Japan's Trade with West Africa in the Inter-War Period", *Kansai University Review of Economics* 17, 2015. 1-28.
9. 坂井信三「仏領西アフリカ植民地におけるクリスチャンとムスリム：テオドール・モノとアマドゥ・ハンパテ・バ」『アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状』，上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター，2016. 19-55.
10. 坂井信三「ニジェール川中流域の国家形成と非形成」『アカデミア 人文・自然科学編』19，2015. 11-29.
11. 永原陽子「南部アフリカ植民地の戦争と災害—リンダーペスト・旱魃・飢餓」『災害・環境から戦争を読む』，山川出版社，2015. 12-44.
12. 永原陽子「植民地期ナミビアでの大虐殺に関する対独補償要求」『アフリカレポート』54，アジア経済研究所，2016. 13-18.（査読有）
13. Yoko Nagahara, "History as an African Potential: Namibia, Southern Africa and East Asian in Historical Connectedness and Contemporaneity", *What Colonialism Ignored: African Potentials: African Potentials' for Resolving Conflicts in Southern Africa*, Langaa, 2016. 133-176.（査読有）
14. 眞城百華「食へのまなざし—エチオピアにおける飢饉・飢餓の経験」『健康教育：表現する身体』，勁草書房，2015. 70-81.

15. Yasu'o Mizobe, "Japanese Newspaper Coverage of Africa (and African Soldiers) during World War II: The Case of the Tokyo Nichi Nichi (Mainichi) Shimbun, 1939–1945", *Ethnicities, Nationalities, and Cross-Cultural Representations in Africa and the Diaspora*, Carolina Academic Press (ISBN: 978-1-61163-663-5), 2015. 163–182. (査読有)

[口頭発表等] 計 12 件

1. Katsuhiko Kitagawa, "Japan's Economic Relations with Africa in the Inter-War Years: Examining the Narratives of Consular Reports: Special Reference to Revision of the Congo Basin Treaty and Japan in the 1930s", International Conference on Africa-Asia: A New Axis of Knowledge, Accra, Ghana, 2015.9.24-26. University of Ghana
2. Katsuhiko Kitagawa, "Development of Japan-Africa Relations in Historical Perspective: Special Reference to Japan's Trade with East and South Africa", International Conference on Africa's Engagement with Japan, China, Korea and India: A Comparative Perspective, Jawaharlal Nehru University, Delhi, India, 2015.10.9-10. Jawaharlal Nehru University
3. 北川勝彦「新生南アフリカの経済事情」, 関西大学政治経済研究所産業セミナー, 2015.12.2. りそな銀行大阪本社
4. Yoko Nagahara, "Colonial Memory and National History: Namibian-German and Korean-Japanese relationship in comparison", Workshop on "Colonial Memories: Comparative Perspective on German, Japanese, and Korean Cases", 2015.6.11. Eberhard Karls Universität Tübingen
5. Yoko Nagahara, "South African Black Soldiers/Labourers in World War I", Captives, recruited, migrants: Empires and labor mobilization, 17th century to present days (EHESS, Paris), 2015.10.2. Collège de France, Salle Claude Lévi-Strauss
6. 永原陽子「21世紀の世界と「植民地責任」」, 多民族共生人権研究集会, 2015.7.22. 大阪市立東成市民センター
7. 眞城百華「エチオピア・TPLF 解放区における女性解放と女性兵士」, 第 52 回日本アフリカ学会学術大会, 2015.5.23. 犬山観光センター「フロイデ」
8. Momoka MAKI, "Women's Fighter in TPLF- Women's Agency in the Struggle and Post-Conflict Society", 19th International Conference on Ethiopian Studies, 2015.8.26. Warsaw University
9. 眞城百華「エチオピア・ティグライ州における政治と女性：ティグライ女性協会の活動を中心に」, 大阪府立大学女性学研究センター・国際シンポジウム『グローバル化と因習に抗する女性たち—エチオピアにおける女性支援 NGO の取り組みから』, 2015.10.3. 大阪府立大学女性学研究センター
10. Yasu'o Mizobe, "Discussant for the first session, 'Between Imperialism and Colonialism: Imperial Rivalry and Politics on the Ground'", Russia and Global History (Slavic-Eurasian Research Center 2015 Summer International Symposium), 2015.7.30. Room 403, Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University, Sapporo, Japan
11. 荻谷康太「「背教者」の奴隷化を巡るウスマン・ダン・フォディオの思想」, 日本アフリカ学会第 52 回学術大会, 2015.5.23. 犬山国際観光センター「フロイデ」
12. 荻谷康太「19 世紀初頭のハウサランドにおける不信仰者の分類」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 AA 研フォーラム, 2015.12.10. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

[図書] 計 3 件

1. 石川博樹・小松かおり・藤本武 (編)『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』, 昭和堂, 2016. 全 384 頁.
2. Kitagawa, Katsuhiko (ed.), *Africa and Asia Entanglements Past and Present*, Kansai University, Print office, 2016. 216 pp.
3. 水野一晴・永原陽子 (編)『ナミビアを知るための 53 章』, 明石書店, 2016. 全 388 頁.

[社会に向けた成果発表] 計 5 件

1. 網中昭世「南アフリカのゼノフォビアに対する反発—モザンビークにおける南アフリカ人国外退去要求—」『アフリカレポート』53, アジア経済研究所, 2015. 39–43.
(URL: http://d-arch.ide.go.jp/idedp/ZAF/ZAF201500_402.pdf)
2. 石川博樹「石田憲著『ファシストの戦争：世界史的文脈から見たエチオピア戦争』」『JANES ニュースレター』22, 日本ナイル・エチオピア学会, 2015. 83–84.
3. 大澤広晃「回顧と展望：アフリカ」『史学雑誌』124-5, 史学会, 2015. 300–303.
4. 眞城百華「エチオピア・ティグライ州における政治と女性：ティグライ女性協会の活動を中心に」『女性学研究』23, 大阪府立大学女性学研究センター, 2016. 67–75.
5. 眞城百華「スーダン出張報告：スーダンから見るエチオピア・エリトリア関係」『アジア・アフリカにおける諸宗教の関心の歴史と現状』, 上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター, 2016. 63–67.

[その他：オンラインリソースなど] 計 2 件

1. 溝辺泰雄『NHK 高校講座「世界史」』第 21 回「アフリカへのヨーロッパ人の進出」監修・講師
<http://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/sekaishi/archive/chapter021.html>

2. 溝辺泰雄『NHK 高校講座「世界史」』第38回「アフリカ諸国の独立」監修・講師
<http://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/sekaishi/archive/chapter038.html>

中国雲南におけるテキスト研究の新展開

研究期間：2015-2017（代表：山田敦士／所員 3，共同研究員 17）

所員：澤田英夫，中見立夫，星泉

共同研究員：飯島明子，伊藤悟，稲村務，川野明正，黒澤直道，立石謙次，清水享，新谷忠彦，富田愛佳，
長谷千代子，奈良雅史，西川和孝，野本敬，堀江未央，山田勅之，吉野晃

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目） 日時：2015年5月23日（土）

山田敦士（AA 研共同研究員・日本医療大学）「趣旨説明」

山田敦士（AA 研共同研究員・日本医療大学）「ワ族におけるテキストとリテラシー」

新谷忠彦（AA 研共同研究員・AA 研フェロー）「タイ文化圏研究の顛末」

第2回研究会（通算第2回目） 日時：2015年7月18日（土）

川野明正（AA 研共同研究員・明治大学）「ヤンゴン華人の雲南墓園の墓誌について」

野本敬（AA 研共同研究員・帝京大学短期大学）「雲南地域史におけるテキストの生成・習合・異種混交」

第3回研究会（通算第3回目） 日時：2015年12月6日（日）

黒澤直道（AA 研共同研究員・國學院大學）「ナシ語テキストの全体像」

山田勅之（AA 研共同研究員・大阪成蹊短期大学）

「ナシ族歴史史料概述：チベット語，モンゴル語，満州語を中心に」

研究成果一覧

〔学術論文〕計14件

1. 伊藤悟「人類学的映像ナラティブの一探究：民族誌映画制作における協働と拡張される感覚」『文化人類学』80(1), 2015. 38-58. (査読有)
2. 伊藤悟「伝統文化と接合する映像メディアの人類学的研究：中国雲南省タイ族の掛け合い歌の事例」『公益財団法人三島海雲記念財団 研究報告書』52, 2015. 136-141.
3. 稲村務「雲南紅河土司の『近代』：清末から共和国成立後まで」『琉大アジア研究』12, 2014. 40-77. (査読有)
4. 稲村務「ハニ族と雲南イ族における薬草知識をめぐるポリティクス：ABS法と非物質文化遺産」『民族文化資源とポリティクス—中国南部地域の分析から—』，風響社，2016. 101-156. (査読有)
5. Inamura, T., Hhamaq tul and Milsanlquvqsanl lol: An Anthropological Comparative Study on “Collective Avoidance Ritual” among Hani-Akha People in China, Laos and Thailand pp.37-60, 『人間科学』琉球大学法文学部人間科学科紀要 34, 2016. 37-60.
6. 吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語：『歌二娘古』発音と注釈」『ミエン・ヤオの歌謡と儀礼』，大学教育出版，2016. 55-71.
7. 吉野晃「〈歌〉の詠唱法と儀礼への応用：タイ北部，ユーミエン（ヤオ）の新たな宗教現象に関する調査の中間報告2」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』67, 2016. 105-112.
8. 山田勅之「カンドゥ問題をめぐる清朝とダライラマ政権の対応：17世紀後半（康熙朝初頭）の清チベット関係」『アジア・アフリカ言語文化研究』90, 2015. 79-103. (査読有)
9. 奈良雅史「動きのなかの自律性：現代中国における回族のインフォーマルな宗教活動の事例から」『文化人類学』80(3), 2015. 363-385. (査読有)
10. 野本敬「イ族史叙述にみる『歴史』とその資源化」『民族文化資源とポリティクス』，風響社，2016. 431-458. (査読有)
11. 野本敬「(書評) 西川和孝『雲南中華世界の膨張：プーアル茶と鉱山開発にみる移住戦略』」中央大学『アジア史研究』40, 2016. 133-143.
12. 黒澤直道「ナシ族のトンバ経典に見られる語気助詞について」『國學院雑誌』116(10), 2015. 1-21. (査読有)
13. 山田敦士「滄源ワ族自治県の碑文テキスト (2)」『北海道民族学』12, 2016. 41-49. (査読有)
14. 山田敦士「班洪ワ族の言語と文字」『饗餐』23, 2015. 102-112.

〔口頭発表等〕計24件

1. 伊藤悟「中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究」東洋音楽学会西日本支部例会, 2015.9.27. 大阪大学
2. 伊藤悟「アジアにおけるヒョウタン楽器」, 世界のヒョウタン展講演会『世界のヒョウタン文化』(生き物文化誌学会園芸例会), 2015.10.3. 国立科学博物館
3. 稲村務「雲南省のアカ族の民族名称と ABS 法: タイとの比較において」, 日本タイ学会, 2015.7.11. 東京学芸大学
4. 稲村務「『伝統的知識』と民俗: 中国・台湾・沖縄奄美の ABS 法を考える」, 日本民俗学会, 2015.10.11. 関西学院大学
5. 稲村務「ラオスのアカ族の植物知識と ABS 法」, 琉球大学ラオス研究会, 2015.12.8. 琉球大学医学部
6. Tsutomu INAMURA, “kha, Aini, Hani: Construction of Ethnicity of the Hilltribe in Sipsong Panna in Yunnan” International Seminar between Department of Sociology, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus and Department of Sociology and Anthropology, Faculty of Humanities and Social Sciences, Khon Kaen University, 2016.2.21. 琉球大学
7. 吉野晃「<歌>の詠唱法と儀礼への応用: タイ北部, ユーミエン (ヤオ) 社会における新たな宗教現象に関する中間報告 3」, 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 2015.5.30. 大阪国際交流センター
8. 吉野晃「タイ北部におけるミエンの歌謡と儀礼の新たな形態について」, 国際シンポジウム“瑶族の歌謡と儀礼”, 2015.11.28. 神奈川大学
9. 奈良雅史 “Keeping Things Flowing: Where Autonomy Hides and Resides for Muslim Minorities in China”, «FRONTIÈRES ET MOBILITÉS DES HOMMES ET DES IDÉES EN ASIE» Premières Rencontres Nationales des Jeunes Chercheur.e.s en Études Asiatiques, 2015.5.26. ボルドー大学
10. 奈良雅史「国家をかわす: 現代中国における回族の自律性をめぐる考察」, 京都人類学研究会 2 月例会, 2016.2.24. 京都大学
11. 立石謙次「中国雲南省白族 (ペー族) の民間芸能と民族文字」, 学校法人東海大学望星学塾 2015 年度後期特別講座, 2015.10.31. 学校法人東海大学望星学塾
12. 立石謙次「葬送の神話: 東アジアの他界観と『古事記』: 白族の事例」, 「古事記学」の構築 国際シンポジウム, 2016.1.23. 國學院大學
13. 立石謙次「南詔国・大理国的王権思想」, 香港科技大学人文学部イベント, 2016.3.1. 香港科技大学人文学部
14. 立石謙次「雲南省大理白族の白文の用法: “訓読”・“音読”を中心に」, 中国語文学会第 152 回定例学術研究発表会, 2016.3.27. 東京語文学院
15. 清水享「中国における彝族の彝文字および彝文文献の現状と課題」, 日本大学史学会, 2016.1.24. 日本大学文理学部
16. 西川和孝「漢族移民と技術移転: 明清期の雲南省南部を中心として」, ゴミア研究会, 2015.10.23. 京都大学東南アジア研究所
17. 黒澤直道「雲南ナシ族の言語意識とその現状: 観光化の功罪」, 中国語文学會 第 149 回定例学術研究発表会, 2015.6.21. 東京語文学院
18. 黒澤直道「ナシ族の文化とことわざ」, ことわざ学会 2 月例会, 2016.2.20. 法政大学
19. 堀江未央「人の移動と魂の所在: 中国雲南省ラフにおける女性の遠隔地婚出」, 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 2015.5.31. 大阪国際交流センター
20. Mio Horie, “House God Abandoned Her: Marriage and Morality among Lahu in Southwest Yunnan, China”, The East and Asian Anthropological Association Conference, 2015.10.3-4. 国立政治大学 (台湾)
21. 堀江未央「家族の離散とつながり: 中国雲南省におけるラフ女性の遠隔地婚出」, 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ, 2016.2.3. 京都大学
22. 堀江未央「中国雲南省におけるラフ女性の民族間遠隔地結婚: 移動する女性の所在を巡る交渉」, 2015 年度日本文化人類学会近畿地区研究懇談会 修士論文・博士論文発表会, 2016.3.20. 神戸大学
23. 山田敦士「ワ語 (中国雲南省) における語形成とレトリック」, 第 71 回札幌学院大学言語学談話会, 2015.6.11. 札幌学院大学
24. 山田敦士「滄源ワ族自治県の文字使用状況: 無文字から多文字併存へ」, 社会言語科学会第 36 回大会, 2015.9.5-6. 京都教育大学

[図書] 計 6 件

1. 稲村務『祖先と資源の民族誌—中国雲南省を中心とするハニ=アカ族の人類学』, めこん, 2016. 全 563 頁.
2. 奈良雅史『現代中国の<イスラーム運動>: 生きにくさを生きる回族の民族誌』, 風響社, 2016. 全 338 頁.

3. 西川和孝『雲南中華世界の膨張：プーアル茶と鉱山開発に見る移住戦略』、慶友社、2015。全336頁。
4. SHINTANI Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.104: The Shanke Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2015. xxiii+165 pp.
5. SHINTANI Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.105: The Zotung Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2015. xxiii+165 pp.
6. SHINTANI Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.106: The Kadaw Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2015. xxiii+165 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計2件

1. 野本敬「『歴史』や『文化』は何の役に立つのか? : 資源としての文化・歴史」, 帝京大学宇都宮キャンパスカレッジインターンシップ
2. 伊藤悟「楽器の旋律と仕事の音によるコミュニケーション」『音文化へのいざないータイ民族の音世界から手作り楽器の世界へ』京都文教大学 科学研究費助成事業アウトリーチ活動

II-3.3 外部資金による研究の詳細

II-3.3.1 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2

【研究集会・ワークショップ】

以下の言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究集会およびワークショップを開催した。

<国際>

- The Documentary Linguistics Seminar - Introduction to Documentary Linguistics - (2015年5月18~21日)
- Documentation Linguistics Seminar (Kalmyk State University, Russia) (2015年5月26~29日)
- Workshop on Language Documentation at Jambi, Sumatra (Politeknik Jambi, Indonesia) (2015年6月15日・16日)
- Workshop on Language Documentation at Manado (Manado State University, Indonesia) (2015年8月6日・7日)
- Language Conservation and Documentation: Reasons, Opportunities and Challenges (The University of Nusa Cendana, Indonesia) (2015年8月10~12日)
- Workshop on Language Documentation (Udayana University, Indonesia) (2015年8月26・27日)
- Austronesian Seminar (Udayana University, Indonesia) (2015年8月28・29日)
- 第2回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」 (2015年12月16~22日)
- ワークショップ「チベット文学と映画制作の現在」(2016年1月27・28日)
- シンポジウム「チベット文学と映画制作の現在」(2016年1月30・31日)
- Documentary Linguistics Workshop 2016 (2016年2月8~13日)
- 国際ワークショップ“The Third International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages”(AA研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」第9回研究会)(2016年2月18~20日)
- International Workshop "Endangered Languages: Dialect Variation and Linguistic Identity" (2016年3月16日)

<国内>

- AA研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」第7回研究会(2015年5月10日), 第8回研究会(2015年10月25日)
- AA研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるミクロ連環系の科学の構築 ~青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第4回研究会(2015年6月6・7日), 第5回研究会(2015年10月31日・11月1日), 第6回研究会(2016年3月26・27日)
- AA研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」第7回研究会(2015年5月9・10日), 第8回研究会(2015年12月5・6日), 第9回研究会(2016年1月23・24日)
- AA研共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語: 運用に基づく文法理論の可能性」第6回研究会(2015年12月6日), 第7回研究会(2016年1月31日), 第8回研究会(2016年3月22・23日)
- AA研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第4回研究会(2016年1月23日), 第5回研究会(2016年2月15日)
- AA研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」第1回研

究会 (2015年5月9・10日), 第2回研究会 (2015年10月10日, 11日), 第3回研究会 (2016年1月9・10日)

- AA 研共同利用・共同研究課題『『アルタイ型』言語に関する類型的研究』第1回研究会 (2015年5月23日), 第2回研究会 (2015年10月3日), 第3回研究会 (2016年1月30日)
- AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第1回研究会 (2015年5月24日), 第2回研究会 (2015年10月4日), 第3回研究会 (2016年3月11日)
- AA 研フィールド言語学ワークショップ: 文法研究ワークショップ: 第10回 (「名詞複数標識の多義性 —純粋複数・近似複数・曖昧・例示—」2015年5月31日)
- AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカルワークショップ: 「琉球・宮古島のことばをフィールドワークする」(2015年7月14~17日), 「言語の調査・研究のための動画制作」(2015年11月18日)
- AA 研フィールド言語学ワークショップ (特別篇) (2016年3月24日)
- チベット語文語文法記述研究会 (2015年4月20日・5月11日・9月28日)
- 言語研修シベ語フォローアップミーティング: 第4回シベ語研究会 (2015年5月31日), 第5回シベ語研究会 (2016年3月21日)
- チベット・ドキュメンタリー映画上映会 (2015年11月1日)
- フィールド言語学カフェ「世界の言語で読む Le Petit Prince」(2015年11月19~23日)
- チベット映画上映会「五色の矢」(2015年11月27日)
- フィールド言語学カフェ・特別編「ブリヤートの言語と文化」(2016年1月14日)

【オンライン研究交流環境】

- AA 研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築 ~青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」で共同研究員・研究協力者が共同で編集できる共同編集用データベースを構築し, オンラインでの共同編集作業を実施した。
- 「Center for Language resource and information of indigenous languages in and around Indonesia」サイト内の Talaud, Bantik, Wayang Kulit, Sumbawa の Resource ページ (言語データを含むページ) 作成
- 「Center for Language resource and information of indigenous languages in Africa」サイト構築
- 「チュルク諸語対照基礎語彙 (第2期)」サイト構築によるチュルク諸語一次資料のオンライン公開 (IRC プロジェクト)

【研究連携】

<海外視察・関係構築>

連携事業をより活発に展開するために以下の海外研究機関を訪問し, 研究交流関係の構築を行った。

- Indonesian Institute of Sciences (LIPI) (インドネシア)
- Kalmyk State University (ロシア)
- Leipzig University (ドイツ)
- Manado State University (インドネシア)
- Northumbria University (イギリス)
- Politeknik Jambi (インドネシア)
- Russian Academy of Sciences (ロシア)
- The Australian National University (オーストラリア)
- The University of British Columbia (カナダ)
- The University of Nusa Cendana (インドネシア)
- Udayana University (インドネシア)
- Universiti Malaysia Sabah (マレーシア)
- University of Malaya (マレーシア)
- カチン=バプティスト=コンベンション (ミャンマー)
- ロンウォー言語文化協会 (ミャンマー)
- イリ師範学院 (中国)
- 青海師範大学 (中国)

<研究交流>

国際シンポジウム, 国際ワークショップ開催に合わせて, 以下の海外研究機関から研究者を招き, 研究交流を行

った。

- Atma Jaya Catholic University of Indonesia (インドネシア)
- Buryat State University (ロシア)
- Centre for Australian Languages and Linguistics, Batchelor Institute of Indigenous Tertiary Education (オーストラリア)
- CNRS - Aix-Marseille University (フランス)
- De La Salle University (フィリピン)
- Heinrich Heine University Düsseldorf (ドイツ)
- Indonesian Institute of Sciences (LIPI) (インドネシア)
- Jakarta Field Station, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology (インドネシア)
- La Trobe University (オーストラリア)
- National Chengchi University (台湾)
- SMP Negeri Pailelang (インドネシア)
- SOAS, University of London (イギリス)
- Stisip Fajar Timur Atambua (インドネシア)
- Udayana University (インドネシア)
- University of Cologne (ドイツ)
- University of Delaware (アメリカ)
- University of Naples "L'Orientale" (イタリア)
- University of Stuttgart (ドイツ)
- 香港大学 (中国)
- 中央民族大学 (中国)
- 中国チベット学研究センター (中国)
- 東北師範大学 (中国)

【現地コミュニティへのアウトリーチ】

危機・少数言語コミュニティへの支援・共同研究活動展開に向け関係構築と予備調査・企画を行った。

- 呉人徳司 ワークショップ企画運営・講師, および研究打ち合わせ (ロシア) 期間: 5/23-6/3/2015
- 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師, 研究成果発表, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 6/5-18/2015
- Anthony Jukes ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 6/14-17/2015
- Timothy McKinnon ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 6/14-17/2015
- John Bowden ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 6/14-17/2015
- Yanti ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 6/14-17/2015
- 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 8/2-15/2015
- 内海敦子 ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 8/2-9/2015
- Anthony Jukes ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 8/4-9/2015
- John Bowden ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 8/5-8/2015
- Timothy McKinnon ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 8/8-12/2015
- Yanti ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Fadjar Ibnu Thufail ワークショップ運営協力 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Imelda ワークショップ運営協力 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Iwan Besikari ワークショップ運営協力 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Obing Katubi ワークショップ運営協力 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Marius Purman Bone ワークショップ運営協力 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Fanny Henry Tondo ワークショップ運営協力 (インドネシア) 期間: 8/8-13/2015
- Antonia Soriente ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 8/9-13/2015
- 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師, 研究成果発表, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 8/21-31/2015
- 稲垣和也 ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア), および研究打ち合わせ 期間: 8/23-30/2015
- Antonia Soriente ワークショップ企画運営協力・講師, および研究成果発表 (インドネシア) 期間: 8/23-30/2015
- Yanti ワークショップ企画運営協力・講師 (インドネシア) 期間: 8/24-28/2015

- Anthony Jukes ワークショップ企画運営協力・講師, および研究成果発表(インドネシア) 期間:8/25-30/2015
- 中山俊秀 ワークショップ企画運営・講師(宮古島) 期間:12/15-23/2015
- 大野剛 ワークショップ企画運営協力・講師(宮古島) 期間:12/14-24/2015

【研究未開発言語調査・研究支援】

研究未開発言語の調査・研究のために以下の通り研究者を派遣した。

- 渡辺己 スライアモン語の調査(カナダ) 期間:7/29-9/4/2015
- 澤田英夫 カチン州のビルマ系危機言語の調査(ミャンマー) 期間:12/13/2015-1/9/2016
- 渡辺己 論集刊行編集打ち合わせ(オーストラリア) 期間:1/18-24/2016
- 星泉 チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂(中国) 期間:2/3-17/2016
- 海老原志穂 チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂(中国) 期間:2/3-17/2016
- 渡辺己 スライアモン語の調査(カナダ) 期間:3/2-7/2016

【若手研究者養成】

- (1) 特任研究員2名, 非常勤研究員1名を雇用し, 特に若手研究者を対象とした言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する共同研究の展開において指導的な役割を負う機会を与えた。
- (2) 若手研究者にむけて以下のワークショップを開催した:
 - The Documentary Linguistics Seminar - Introduction to Documentary Linguistics - (2015年5月18~21日)
 - Documentation Linguistics Seminar (Kalmyk State University, Russia) (2015年5月26~29日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ:文法研究ワークショップ:第10回(「名詞複数標識の多義性 — 純粋複数・近似複数・曖昧・例示—」2015年5月31日)
 - Workshop on Language Documentation at Jambi, Sumatra (Politeknik Jambi, Indonesia) (2015年6月15・16日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ:テクニカルワークショップ:「琉球・宮古島のことばをフィールドワークする」(2015年7月14~17日), 「言語の調査・研究のための動画制作」(2015年11月18日)
 - Workshop on Language Documentation at Manado (Manado State University, Indonesia) (2015年8月6・7日)
 - Language conservation and documentation: Reasons, Opportunities and Challenges (The University of Nusa Cendana, Indonesia) (2015年8月10~12日)
 - Workshop on Language Documentation (Udayana University, Indonesia) (2015年8月26・27日)
 - 第2回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」(2015年12月16~22日)
 - Documentary Linguistics Workshop 2016 (2016年2月8~13日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ(特別篇)(2016年3月24日)

【成果公開・還元】

<学会発表・講演>

以下の通り学会・研究集会等で学術成果の発表を行った。

- 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究:思考プロセスの観点からのアプローチ」第7回研究会(東京)(2015年5月9・10日)
- 児倉徳和 The Documentary Linguistics Seminar -Introduction to Documentary Linguistics- (東京)(2015年5月18~21日)
- 山越康裕 AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第1回研究会(東京)(2015年5月23日)
- 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第1回研究会(東京)(2015年5月24日)
- 澤田英夫 The 25th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (タイ)(2015年5月27~29日)
- 児倉徳和 シベ言語学研修フォローアップミーティング/第4回シベ語研究会(東京)(2015年5月31日)
- 塩原朝子 第19回国際インドネシア語・マレー語学会 (ISMIL19) (インドネシア)(2015年6月12~14日)
- 山越康裕 The 12th Seoul International Altaistic Conference (韓国)(2015年7月16~19日)
- 児倉徳和 The 12th Seoul International Altaistic Conference (韓国)(2015年7月16~19日)
- 阿部優子 13th International Conference of Cognitive Linguistics (イギリス)(2015年7月20~26日)
- 呉人徳司 The 13th Urban Language Seminar (中国・山西师范大学)(2015年8月10~12日)

- 阿部優子 The 8th World Congress of African Languages (京都) (2015年8月20~24日)
- 塩原朝子 第7回 Austronesia/ non-Austronesia の言語と文学セミナー (インドネシア) (2015年8月28・29日)
- 澤田英夫 The 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (アメリカ) (2015年8月21~23日)
- 渡辺己 International Workshop: Kakarimusubi from a Comparative Perspective (東京) (2015年9月6日)
- 海老原志穂 The 4th International Seminar of Young Tibetologists (ドイツ) (2015年9月7~12日)
- 塩原朝子 国際ワークショップ: ボルネオの言語研究とマレー語研究の過去と現在 (マレーシア) (2015年9月7日)
- 児倉徳和 成蹊大学アジア太平洋研究センター研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として」研究会 (東京) (2015年10月11日)
- 呉人徳司 第二屆跨境語言研究論壇 (中国・玉溪师范学院) (2015年10月23~25日)
- 児倉徳和, 中山俊秀, 山越康裕 Luncheon Linguistics (東京) (2015年11月4日)
- 呉人徳司 フィールド言語学カフェ: 世界の言語で読む *Le Petit Prince* (東京) (2015年11月19~23日)
- 児倉徳和 フィールド言語学カフェ: 世界の言語で読む *Le Petit Prince* (東京) (2015年11月19~23日)
- 塩原朝子 フィールド言語学カフェ: 世界の言語で読む *Le Petit Prince* (東京) (2015年11月19~23日)
- 星泉 フィールド言語学カフェ: 世界の言語で読む *Le Petit Prince* (東京) (2015年11月19~23日)
- 山越康裕 フィールド言語学カフェ: 世界の言語で読む *Le Petit Prince* (東京) (2015年11月19~23日)
- 塩原朝子 International Conference on Language, Culture and Society (インドネシア) (2015年11月25・26日)
- 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」第8回研究会 (東京) (2015年12月9・10日)
- 呉人徳司 AA 研フォーラム「フィールド言語学の楽しみと苦しみ」 (2015年12月10日)
- 中山俊秀 フィールドサイエンスコロキウム (東京) (2015年12月26日)
- 渡辺己 Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas (SSILA) (アメリカ) (2016年1月7~10日)
- 山越康裕 フィールド言語学カフェ・特別編「ブリヤートの言語と文化」 (東京) (2016年1月14日)
- 星泉 公開ワークショップ「ノダ文相当表現の通言語的研究」(AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」第9回研究会 (東京) (2016年1月23・24日))
- 渡辺己 AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第3回研究会 (東京) (2016年1月30日)
- 星泉 チベット文学と映画制作の現在 (東京) (2016年1月30・31日)
- 澤田英夫 Documentary Linguistics Workshop 2016 (東京) (2016年2月8~13日)
- 塩原朝子 国際ワークショップ: The Third International workshop on information structure of Austronesian languages (AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」第9回研究会) (2016年2月18~20日)
- 中山俊秀 情報資源利用研究センターワークショップ「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える」 (東京) (2016年3月4日)
- 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第3回研究会 (東京) (2016年3月11日)
- 梅谷博之 AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第3回研究会 (東京) (2016年3月11日)
- 山越康裕 AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第3回研究会 (東京) (2016年3月11日)
- 中山俊秀 International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction (神奈川) (2016年3月12日)
- 塩原朝子 国際ワークショップ: Endangered Languages: dialect variation and linguistic Identity (東京) (2016年3月16日)
- 渡辺己 国際ワークショップ: Endangered Languages: dialect variation and linguistic Identity (東京) (2016年3月16日)
- 児倉徳和 Symposium on evidentiality, egophoricity, and engagement: descriptive and typological perspectives (ストツ

クホルム)(2016年3月17~18日)

- 児倉徳和 シベ言語研修フォローアップミーティング／第5回シベ語研究会(東京)(2016年3月21日)
- 星泉 東京外国語大学×府中市 連続講座「暮らしの空間と女性」(東京)(2016年3月22日)
- 海老原志穂 AA研フィールド言語学ワークショップ(特別篇)(2016年3月24日)
- 梅谷博之 AA研フィールド言語学ワークショップ(特別篇)(2016年3月24日)
- 中山俊秀 「ことば・認知・インタラクション4」(東京)(2016年3月25日)

<出版物刊行>

以下の出版物を刊行した。

- アジア・アフリカの言語と言語学編集担当(編)『アジア・アフリカの言語と言語学 10』(344pp.) (オンラインジャーナル)
- Tokusu Kurebito (ed.) *Linguistic Typology of the North Volume 3* (100pp.)
- チベット文学研究会(星泉・海老原志穂・大川謙作・三浦順子)(編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 Vol. 3 (174pp.)
- 星泉『古典チベット語文法：『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて』(xviii+295pp.)

【調査・研究成果の資源化】

以下の研究未開発言語に関する調査資料，研究成果の分析，電子化，資源化を進めた：

- アイヌ語
- モンゴル諸語
- スライアモン語
- チベット語
- シベ語
- ロンウォー語諸方言
- ラチツ語
- ランスー語

【言語ダイナミクス科学研究推進環境の整備】

言語ダイナミクス科学研究推進に必要な文献資料の整備をはかった。

【共同研究の推進】

<外国人研究員の受入>

- (1) 言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究を専門とする以下の外国人研究員を受入，共同研究にあたった。
 - Anthony Jukes
 - John Bowden
 - Zhargal Badagarov

<AA研共同利用・共同研究課題>

- (2) 以下の共同利用・共同研究課題を組織し，共同研究を推進した：
 - AA研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」
 - AA研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
 - AA研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」
 - AA研共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」
 - AA研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」
 - AA研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング」
 - AA研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」
 - AA研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」

<外国人研究者の短期招へい>

- (3) 国際シンポジウム，ワークショップ開催のため，次の外国人研究者を招へいし，短期共同研究を行った。
 - Anja Latrouite (Heinrich Heine University Düsseldorf)

- Anthony Jukes (CRLD, La Trobe University)
- Antonia Soriente (University of Naples "L'Orientale")
- Arndt Riester (University of Stuttgart)
- David Nathan (EWA, University of Oxford)
- Dominikus Tauf (Udayana University)
- Dorje Tsering / Jangbu (詩人・小説家・映画監督)
- Fadjjar Ibnu Thufail (Indonesian Institute of Sciences (LIPI))
- Fanny Henry Tondo (Indonesian Institute of Sciences (LIPI))
- I Wayan Arka (Australian National University)
- Imelda (Indonesian Institute of Sciences (LIPI))
- Iwan Besikari (SMP Negeri Pailelang)
- James Sneed German (CNRS - Aix-Marseille University)
- John Bowden (Jakarta Field Station, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology)
- Laxianjia (中国チベット学研究センター)
- Liselotte Snijders (早稲田大学)
- Marius Purman Bone (Stisip Fajar Timur Atambua)
- Nikolaus Himmelmann (University of Cologne)
- Obinig Katubi (Indonesian Institute of Sciences (LIPI))
- Peter Austin (SOAS, University of London)
- Rik De Busser (National Chengchi University)
- Shirley N. Dita (De La Salle University)
- Sonja Riesberg (University of Cologne)
- Stefan Baumann (University of Cologne)
- Timothy McKinnon (University of Delaware)
- Yanti (Atma Jaya Catholic University of Indonesia)
- Zhaba (中央民族大学)
- Zhargal Badagarov (Buryat State University)
- 庄声 (東北師範大学)

II-3.3.2 科学研究費等によるその他の研究活動

所員等が代表者の科学研究費補助金の研究分担者と交付（予定）金額

(直接経費のみ 単位：千円)

基盤研究 (A) 一般

- 研究代表者： 峰岸 真琴
 課題番号： 25244017
 課題名： コーパスに基づく談話の結束性の研究
 期間 (年度)： 2013～2016
 交付予定額： 9,500 千円
 研究分担者： 川口裕司, 黒沢直俊, 藤縄康弘, 川上茂信, 鈴木玲子, 岡野賢二, 降幡正志, 野元裕樹, 長屋尚典, 加藤晴子
- 研究代表者： 芝野 耕司
 課題番号： 26240051
 課題名： 大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテーラーメイド日本語教育
 期間 (年度)： 2014～2017
 交付予定額： 11,300 千円
 研究分担者： 藤村知子, 大津友美, 佐野洋, 藤森弘子, 望月源, 鈴木美加
- 研究代表者： 近藤 信彰
 課題番号： 15H01895
 課題名： イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として
 期間 (年度)： 2015～2020

交付予定額： 7,100 千円

基盤研究 (A) 海外学術調査

研究代表者： 小田 淳一
課題番号： 23251010
課題名： インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究
期間 (年度)： 2011～2015
交付予定額： 4,500 千円
研究分担者： 深澤秀夫, 杉本星子, 森山工, 花潤馨也, 飯田卓

研究代表者： 床呂 郁哉
課題番号： 25257002
課題名： 東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究
期間 (年度)： 2013～2016
交付予定額： 5,200 千円
研究分担者： 西井凉子, 福島康博, 富沢寿勇

研究代表者： 黒木 英充
課題番号： 25257003
課題名： レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク—自己多面化と空間構想
期間 (年度)： 2013～2016
交付予定額： 8,400 千円
研究分担者： 鈴木茂, 真島一郎, 飯塚正人

基盤研究 (B) 一般

研究代表者： 宮崎 恒二
課題名： ジャワ語文献に見られるジャワの言語・文化の変容過程
課題番号： 25283003
期間 (年度)： 2013～2016
交付予定額： 2,100 千円
研究分担者： 青山亨, 菅原由美

研究代表者： 高松 洋一
課題名： イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開
課題番号： 25284132
期間 (年度)： 2013～2016
交付予定額： 2,900 千円
研究分担者： 近藤信彰

研究代表者： 錦田 愛子
課題名： アラブ移民／難民の越境移動をめぐる動態と意識：中東と欧州における比較研究
課題番号： 26283003
期間 (年度)： 2014～2016
交付予定額： 5,700 千円
研究分担者： 高岡豊, 濱中新吾, 溝渕正季

研究代表者： 佐藤 大和
課題名： 超文節素の動態形式に基づくアクセント言語と声調言語の対照研究
課題番号： 26284057
期間 (年度)： 2014～2016
交付予定額： 3,600 千円
研究分担者： 峰岸真琴, 益子幸江, 遠藤光暁, 鈴木玲子, 降幡正志, 岡野賢二, 春日淳

研究代表者 星 泉

課題名： チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂
課題番号： 15H03203
期間（年度）： 2015～2017
交付予定額： 5,000 千円
研究分担者： 平田昌弘，別所裕介，海老原志穂

基盤研究（B） 海外学術調査

研究代表者： 飯塚 正人
課題番号： 24401010
課題名： 「イスラーム民主主義」をめぐる思想展開と実現可能性に関する研究
期間（年度）： 2012～2015
交付予定額： 2,700 千円
研究分担者： 山岸智子

研究代表者： 新谷 忠彦
課題名： 言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明
課題番号： 15H05154
期間（年度）： 2015～2017
交付予定額： 3,000 千円

研究代表者 呉人 徳司
課題名： 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究
課題番号： 15H05155
期間（年度）： 2015～2018
交付予定額： 3,400 千円

基盤研究（C） 一般

研究代表者： 河合 香吏
課題番号： 23520980
課題名： 東アフリカ牧畜民の「五感」に基づく世界知覚に関する人類学的研究
期間（年度）： 2011～2015
交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 梅川 通久
課題番号： 23500307
課題名： 人口密度分布のポテンシャル分析による東南アジア大陸部人口動向の解明
期間（年度）： 2011～2015
交付予定額： 800 千円

研究代表者： 梅谷 博之
課題番号： 25370465
課題名： モンゴル語の付属語の自立性に関する研究
期間（年度）： 2013～2016
交付予定額： 600 千円

研究代表者： 齋藤 久美子
課題番号： 25370825
課題名： オスマン朝アジア境域のフロンティア社会 ―アナトリア南東部の地域史の解明を目指して
期間（年度）： 2013～2016
交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 伊藤 智ゆき
課題番号： 26370442

課題名： 韓国語慶尚道方言のアクセント研究
 期間（年度）： 2014～2016
 交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 床呂 郁哉
 課題番号： 25370936
 課題名： スルー海地域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究
 期間（年度）： 2013～2017
 交付予定額： 800 千円

研究代表者： 阿部 優子
 課題番号： 26370477
 課題名： タンガニイカ湖周辺の人々の異動と言語接触に関する研究
 期間（年度）： 2014～2017
 交付予定額： 700 千円

研究代表者： 栗原 浩英
 課題番号： 15K01865
 課題名： ベトナム・中国間境域における協力／対立と国家関係の連動性に関する研究
 期間（年度）： 2015～2017
 交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 中山 俊秀
 課題番号： 15K02473
 課題名： スートカ語における統語構造の特性—節と節結合の連関の中で
 期間（年度）： 2015～2017
 交付予定額： 1,200 千円

研究代表者： 石川 博樹
 課題番号： 15K02888
 課題名： 植民地期 PALOP における主食用作物栽培とその社会的影響に関する研究
 期間（年度）： 2015～2017
 交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 河合 香吏
 課題番号： 15K03034
 課題名： 共鳴する「五感」：東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究
 期間（年度）： 2015～2018
 交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 梅川 通久
 課題番号： 15K00461
 課題名： 人口密度分布のポテンシャル分析に着目した東南アジア大陸部における地理的諸現象の分析
 期間（年度）： 2015～2019
 交付予定額： 800 千円

研究代表者： 中山 久美子
 課題番号： 15K02509
 課題名： スートカ語アハウザット方言の統合テキストデータベースの構築
 期間（年度）： 2015～2017
 交付予定額： 800 千円

研究代表者： 塩原 朝子
 課題番号： 15K02472
 課題名： Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

期間（年度）： 2015～2019
交付予定額： 800 千円

挑戦的萌芽研究

研究代表者： 荒川 慎太郎
課題番号： 25580087
課題名： ロシア所蔵資料の実見調査に基づく西夏文字草書体の体系的研究
期間（年度）： 2013～2015
研究分担者： 佐藤貴保
交付予定額： 900 千円

研究代表者： 小田 淳一
課題番号： 15K12831
課題名： 映像表現と古典的修辞技法との対応関係の情報学的分析
期間（年度）： 2015～2017
交付予定額： 900 千円

若手研究（A）

研究代表者： 佐久間 寛
課題番号： 15H05385
課題名： サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築
期間（年度）： 2015～2018
交付予定額： 2,700 千円

若手研究（B）

研究代表者： 福島 康博
課題番号： 25870206
課題名： イスラーム金融におけるイスラーム性形成の実証研究：マレーシアの事例
期間（年度）： 2013～2016
交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 古谷 伸子
課題番号： 25770303
課題名： タイにおける医療システムの再編と民間治療師実践の変容に関する人類学的研究
期間（年度）： 2013～2017
交付予定額： 600 千円

研究代表者： 児倉 徳和
課題番号： 26770144
課題名： 記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究
期間（年度）： 2014～2016
交付予定額： 900 千円

研究代表者： 山越 康裕
課題番号： 26770146
課題名： 中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション
期間（年度）： 2014～2016
交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 大塚 行誠
課題番号： 26770136
課題名： インド北東部におけるラルテー語の記述言語学的な研究
期間（年度）： 2014～2016

交付予定額： 800 千円

研究代表者： 近藤 洋平
課題番号： 26870123
課題名： 婚姻法の法制史的考察によるイバード派イスラーム法学派の形成と展開の研究
期間 (年度)： 2014～2016
交付予定額： 900 千円

研究代表者： 海老原 志穂
課題番号： 26770137
課題名： 東西方言から見たチベット語の基層の研究
期間 (年度)： 2014～2017
交付予定額： 700 千円

研究代表者： 荻谷 康太
課題番号： 15K16578
課題名： 18-19 世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界
期間 (年度)： 2015～2018
交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 池田 昭光
課題番号： 15K16895
課題名： レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者
期間 (年度)： 2015～2018
交付予定額： 800 千円

研究代表者： 吉村 大樹
課題番号： 15K16740
課題名： アゼルバイジャン語における疑問接語の生起—と生起条件に関する研究
期間 (年度)： 2015～2017
交付予定額： 4,030 千円

研究活動スタート支援

研究代表者： 目黒 紀夫
課題番号： 26885026
課題名： アフリカの野生動物保全に潜む動物愛護の環境統治性の検討
期間 (年度)： 2014～2015
交付予定額： 1,000 千円

特別研究員奨励費

研究代表者： 南波 聖太郎 特別研究員(DC2)
課題番号： 14J09240
課題名： 1970・80 年代におけるベトナムとの「特別な関係」の下でのラオスの政治的主体性
期間 (年度)： 2014～2015
交付予定額： 1,100 千円

研究代表者： 倉部 慶太 特別研究員(PD)
課題番号： 14J02254
課題名： 北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション
期間 (年度)： 2014～2016
交付予定額： 1,400 千円

研究代表者： 岩本 佳子 特別研究員(PD)

課題番号： 15J03916
課題名： オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明
期間(年度)： 2015～2018
交付予定額： 700千円

他大学の研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧と交付予定金額(直接経費のみ 単位：千円)

基盤研究(A)

研究代表者： 長澤 榮治 東京大学・東洋文化研究所・教授
課題番号： 24241079
課題名： アラブ革命と中東政治の構造変動に関する基礎研究
期間(年度)： 2012～2015
研究分担者： 飯塚正人, 鈴木恵美, 松本弘, 岩崎えり奈, 臼杵陽, 泉淳
交付予定額： 5,500千円

研究代表者： 永原 陽子 京都大学・文学研究科・教授
課題番号： 23242033
課題名： 兵士・労働者・女性の植民地間移動にかんする研究
期間(年度)： 2011～2015
研究分担者： 石川博樹, 鈴木茂, 粟屋利江, 今泉裕美子, 中野聡, 難波ちづる, 大久保由理, 浅田進史, 眞城百華, 溝辺泰雄, 槇蒼宇, 網中昭世
交付予定額： 3,300千円

研究代表者： 相田 満 国文学研究資料館・准教授
課題番号： 23240032
課題名： 和漢古典学のオントロジモデルの高次・具現化
期間(年度)： 2011～2015
研究分担者： 梅川通久, 中島和歌子, 三田明弘, 山田奨治, 原正一郎, 野本忠司, 古瀬蔵, 石井行雄, 松井知子
交付予定額： 4,200千円

研究代表者： 西尾 哲夫 国立民族学博物館・教授
課題番号： 24242013
課題名： アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ―エジプト系伝承形成の謎を解く
期間(年度)： 2012～2016
研究分担者： 小田淳一, 杉田英明, 中道静香, 青柳悦子, 鷺見朗子, 永崎研宣, 菅瀬晶子, 岡本尚子, 相島葉月
交付予定額： 7,400千円

研究代表者： 武内 紹人 神戸市外国語大学・外国語学部・教授
課題番号： 24242015
課題名： チベット語最古層の形成とその構造推移 ―データベース解析による辞書と歴史文法の編纂
期間(年度)： 2012～2016
研究分担者： 星泉, 長野泰彦, 白井聡子, 池田巧, 西田愛
交付予定額： 7,000千円

基盤研究(A) 海外学術

研究代表者： 森 雅秀 金沢大学・人間科学系・教授
課題番号： 25257007
課題名： 国際標準となるチベット美術の情報プラットフォームの構築と公開
期間(年度)： 2013～2017
研究分担者： 高島淳, 乾仁志, 高田良宏, 高本康子

交付予定額： 6,700 千円

基盤研究 (B)

研究代表者： 水野 信男 兵庫教育大学・名誉教授
課題番号： 24320040
課題名： 中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究
期間 (年度)： 2013～2015
研究分担者： 小田淳一, 堀内正樹, 西尾哲夫, 斎藤完, 谷正人

研究代表者： 三浦 徹 公益財団法人東洋文庫・研究員
課題番号： 25284141
課題名： ワクフ (イスラーム寄進制度) の国際共同比較研究
期間 (年度)： 2013～2016
研究分担者： 近藤信彰, 大河原知樹, 守川知子, 林佳世子, 永田雄三, 磯貝健一
交付予定額： 2,900 千円

基盤研究 (B) 海外学術

研究代表者： 田川 玄 広島市立大学・国際学部・准教授
課題番号： 24401041
課題名： グローバル化するアフリカにおける〈老いの力〉の生成と変容 ―宗教儀礼領域からの接近
期間 (年度)： 2012～2015
研究分担者： 椎野若菜, 花渕馨也, 慶田勝彦, 浜本満
交付予定額： 2,300 千円

挑戦的萌芽研究

研究代表者： 中谷 英明 関西外国語大学・外国語学部・教授
課題番号： 25540152
課題名： インド古典文献韻律指向検索アーカイブの構築
期間 (年度)： 2013～2016
研究分担者： 芝野耕司
交付予定額： 700 千円

研究成果公開促進費 学術図書 ⑤広領域

所属機関：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
課題番号： 15HP6007
刊行物の名称：Practices, Conventions and Institutions: The Evolution of Human Sociality
著者：河合香吏 外17名
和文・応分の別：欧文
交付予定額： 2,500 千円
判型： B5 変型
頁数：512
出版社名：一般社団法人京都大学学術出版会

II-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれた研究プラットフォームの構築

II-4.1 若手研究者養成プログラム

II-4.1.1 言語研修の実施状況

期間	時間数	講師	研修内容	場所	受講者	修了者
2015年8月6日(木)～9月11日(金)	125時間	依田純和, Mūsā SHAWĀRBAH	アラビア語 パレスチナ方言	東京外国語大学 アジア・アフリカ 言語文化研究所	8 (2)	3 (1)
2015年8月17日(月)～9月4日(金)	100時間	Willem van der MOLEN, 青山亨, 山崎美保, 菅原由美	古ジャワ語	東京外国語大学 アジア・アフリカ 言語文化研究所	6 (0)	6 (0)
2015年8月3日(月)～9月4日(金)	125時間	橋本勝, 中嶋善輝, Myagmarsuren UUGANBAYAR	モンゴル語	貸し会議室 大阪研修センター 十三	3 (0)	3 (0)

() は東京外国語大学学部・大学院履修生の数

II-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ実施状況

1. Documentary Linguistics Workshop (1件)

第9回 Documentary Linguistics Workshop (DocLing2016)

日時: 平成28年2月8日(月)～2月13日(土)

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304・306号室

講師: Peter K. Austin(SOAS, University of London, Visiting Research Professor, University of Hong Kong)

David Nathan (Centre for Australian Languages and Linguistics, Batchelor Institute of Indigenous Tertiary Education)

Anthony Jukes (AA 研共同研究員)

中山俊秀

澤田英夫

2. 文法研究ワークショップ (1件)

第10回「名詞複数標識の多義性 — 純粋複数・近似複数・曖昧・例示—」

日時: 2015年5月31日(日)

会場: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

発表者: 新永悠人(成城大学)・齊藤美穂(神戸大学)

「奄美大島の湯湾方言と瀬戸内方言における名詞複数標識の多義性—純粋複数・近似複数・曖昧・例示—」

重野裕美(広島経済大学)「奄美大島浦方言における名詞複数標識の多義性—純粋複数・近似複数・曖昧・例示—」

平塚雄亮(志学館大学)「甕島里方言における名詞複数標識の多義性」

桐生和幸(美作大学)「ネワール語カトマンズ方言における名詞複数標識の多義性」

3. テクニカル・ワークショップ (3件)

The Documentary Linguistics Seminar -Introduction to Documentary Linguistics -

日時: 2015年5月18日(月)～21日(木) 10:00～12:00

(20日(水)のみ10:00~17:30)

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所304号室

講師：阿部優子(AA研特任研究員)

児倉徳和(AA研所員)

澤田英夫(AA研所員)

塩原朝子(AA研所員)

中山俊秀(AA研所員)

渡辺己(AA研所員)

Umberto ANSALDO(香港大学)

「琉球・宮古島のことばをフィールドワークする」

日時：2015年7月14日(火)~17日(金) 10:30~17:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所304号室

講師：中山俊秀(AA研所員)

大野剛(アルバータ大学教授)

仲間博之(ネイティブスピーカー講師：宮古語西原方言話者)

「言語の調査・研究のための動画制作」

日時：2015年11月18日(水) 14:00~18:00

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所304号室

講師：石井満(尚美学園大学)

4. その他(1件)

「フィールド言語学ワークショップ(特別篇)」

日時：2016年3月24日(木) 10:00~18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所304号室

発表者：木本幸憲(京都大学)

「言語ドキュメンテーションにおけるELANの役割とその実際」(招待講演)

菅沼健太郎(九州大学大学院/日本学術振興会)

「現代ウイグル語の音韻論：固有語借用語間の音韻論的差異についての研究」

(招待講演)

梅谷博之(AA研特任研究員)「「クリティック」と「付属語」は何が違う？」

海老原志穂(AA研研究機関研究員)「チベット牧畜地域でのフィールドワーク」

大西秀幸(東京外国語大学大学院)

「対格~方向格：ラワン語の格助詞 səŋ にみられる方言差」

岡本進(東京外国語大学大学院)「フィジー・バトゥレレ島でのフィールドワーク」

倉部慶太(日本学術振興会)「ジンポー語の人称階層に基づく人称標示」

平田秀(AA研特任研究員)

「三重県尾鷲(おわせ)方言のアクセント体系とその位置づけ」

山田洋平(東京外国語大学大学院/日本学術振興会)

「ダグール語の述語人称とその方言差」

蝦名大助(神戸山手大学)「ケチュア語とアイマラ語の言語接触」(招待講演)

桐生和幸(美作大学)「メチェ語の概要とメチェ語辞書の作成とその活用—デ

ータ処理の方法と活用」(招待講演)

II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況

中東☆イスラーム研究セミナー

期間：2015年12月18日~20日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)

マルチメディアセミナー室(306)

内容：博士論文執筆予定者を対象として、受講者による研究発表とそれを受けた議論を通して、研究のいっそうの深化と討論スキルの向上をはかる

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）
協賛：地域研究コンソーシアム

中東☆イスラーム教育セミナー

期間：2015年9月21日～24日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）
マルチメディア会議室（304）

内容：大学院生を対象に、中東・イスラーム研究に関する講義などにより知識の幅を広げる

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）

協賛：地域研究コンソーシアム

オスマン文書セミナー

期間：2016年1月9日～10日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）
大会議室（303）

内容：オスマン朝の公文書のうち、イスラーム法廷記録に関する帳簿を用いた演習形式によるセミナー

主催：基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

共催：人間文化研究機構地域研究推進事業研究プログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点／共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー実施状況

文化／社会人類学研究セミナー

日時：2015年11月7日（土）13:00～19:00

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)301・306 室

共催：2015年度日本文化人類学会次世代育成セミナー

プログラム

【第1会場 306 室】 司会：西井涼子（AA 研）

挨拶：春日直樹（一橋大学・次世代育成セミナー運営委員会）

講演：森山工（東京大学）「フィールドワークと作品化」

【第1会場 306 室】 司会：河合香吏（AA 研）

飛内悠子（日本学術振興会 PD・大阪大学）

「帰還民の生活誌：南スーダン共和国カジョケジ郡におけるククの人々と聖公会」

コメント：大川真由子（神奈川大学）・佐久間寛（AA 研）

大絵晃世（東京藝術大学）

「「限界芸術」概念の文化人類学的な再考察：「用途と機会」「贈与と交換」を手がかりに～」

コメント：久保明教（一橋大学）・登久希子（民博）

緒方しらべ（日本学術振興会 PD・九州大学）

「アートと人類学：ナイジェリア南西部のアーティストの作品販売と生活を事例に」

コメント 栗田博之（東京外国語大学）・岡崎彰（AA 研）

【第2会場 301 室】 司会：深澤秀夫（AA 研）

小林宏至（日本学術振興会 PD・東北大学）

「宗族が造る家、家が創る宗族：中国福建省客家社会における土楼と宗族」

コメント：小池誠（桃山学院大学）・床呂郁哉（AA 研）

荒木亮（首都大学東京，日本学術振興会 DC1）

「イスラーム復興現象」再考：インドネシア・ムスリムの日常，あるいは「混成現象」という視点をてがかりに」

コメント：赤堀雅幸（上智大学）・飯塚正人（AA 研）

II-4.1.5 短期共同研究員（公募）受け入れ状況

サラントヤ

研究課題名：1920年代における『モンゴル問題』に関する論争と内モンゴル知識人の動向

受入期間：2015.10.1～2015.12.31

受入教員：中見 立夫

II-4.1.6 大学院教育の現在

大学院総合国際学研究所博士後期課程へのAA研教員の協力

教員名	担当科目	授業題目
飯塚正人	中東言語文化論 アジア歴史文化論Ⅲ	近現代イスラーム研究Ⅰ・Ⅱ
石川博樹	アフリカ歴史文化論	アフリカ歴史文化論
河合香吏	アフリカ歴史文化論	生態人類学
栗原浩英	アジア歴史文化論Ⅱ	中ソ対立の歴史的意義 ／中越関係の歴史的変遷
黒木英充	アジア歴史文化論Ⅲ	日本・オスマン関係史
近藤信彰	アジア歴史文化論Ⅲ	近世イランにおけるワクフ文書の研究
澤田英夫	東南アジア言語論	チベット＝ビルマ系言語の形態統語論に関する論文講読
椎野若菜	アフリカ言語文化論	アフリカ女性の処遇について(1) ー土地の権利等に注目して／アフリカ女性の 処遇について(2)ーウガンダの事例
芝野耕司	言語基礎論	言語情報学
高松洋一	アジア歴史文化論Ⅲ	オスマン・トルコ語写本講読
床呂郁哉	文化人類学	文化人類学演習
中見立夫	国際関係論	国際関係史・外交史
中山俊秀	アメリカ言語論	言語使用の中で「文法」を考える・Ⅳ
西井涼子	アジア歴史文化論Ⅱ	人類学的思考における生命・身体・情動
深澤秀夫	文化人類学	現代人類学入門／レヴィ＝ストロース 『親族の基本構造』再読
星泉	言語基礎論	チベット語文語文法記述研究
峰岸真琴	言語基礎論	言語類型論と言語理論Ⅰ・Ⅱ
宮崎恒二	アジア歴史文化論Ⅱ	ジャワ在地文書研究／ジャワの神話と 暦法：インドネシア在地文書研究
渡辺己	言語基礎論	言語基礎論
芝野耕司	比較言語文化論	比較言語文化論（リレー講義）
飯塚正人, 石川博樹, 河合香吏, 栗原浩英, 黒木英充, 近藤信彰, 椎野若菜, 高松洋一, 床呂郁哉, 西井涼子, 深澤秀夫, 宮崎恒二	比較社会論	アジア・アフリカ歴史・人類学研究
飯塚正人, 黒木英充, 近藤信彰, 高松洋一	中東言語文化論 アジア歴史文化論Ⅲ	中東☆イスラーム研究セミナー

II-4.1.7 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

【業績についてはI-2.6.2 所員の研究業績一覧 研究機関研究員／特任研究員の項を参照】

特任研究員

阿部 優子（あべ ゆうこ）

「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」
（言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2：LingDy2）

任期：2013(H25).8.1～2016(H28).3.31

研究主題：バントゥ諸語，記述言語学

梅川 通久（うめかわ みちひさ） 情報資源利用研究センター

任期：2013(H25).9.1～2015(H27).8.31

研究主題：地域情報学，地理情報分析

梅谷 博之（うめたに ひろゆき）

「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」
（言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2：LingDy2）

任期：2013(H25).8.1～2016(H28).3.31

研究主題：モンゴル語

岡田 一祐（おかだ かずひろ）

任期：2015(H27).9.1～2018(H30).8.31

研究主題：日本語史，文学史

近藤 洋平（こんどう ようへい）

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

任期：2015(H27).4.1～2018(H30).8.31

研究主題：宗教学，イスラム学，イバード派

中村 恭子（なかむら きょうこ） 広報担当

任期：2014(H26).4.1～2017(H29).3.31

研究主題：美術（日本画）

平田 秀（ひらた しゅう） 情報資源利用研究センター

任期：2016(H28).3.1～2017(H29).3.31

研究主題：日本語の音声・音韻，日本語アクセント論

松田 訓典（まつだ くにのり） 情報資源利用研究センター

任期：2013(H25).9.1～2016(H28).3.31

研究主題：インド大乘仏教

研究機関研究員

海老原 志穂（えびはら しほ） 基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」

任期：2013(H25).9.1～2016(H28).3.31

研究主題：記述言語学，チベット語方言学

小副川 琢（おそえがわ たく）

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

任期：2014(H26).4.1～2016(H28).3.31

研究主題：シリア・レバノン政治

古谷 伸子 基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

任期：2015(H27).11.1～2016(H28).3.31

研究主題：文化人類学, タイ研究

坪井 祐司 (つぼい ゆうじ)

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

任期：2014(H26).5.1～2018(H30).3.31

研究主題：東南アジア史 (イギリス領マラヤ史)

藤野 陽平 (ふじの ようへい) 基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

任期：2013(H25).10.1～2015(H27).9.30

研究主題：宗教人類学, 東アジアのキリスト教研究

目黒 紀夫 (めぐろ としお)

基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」

任期：2013(H25).4.1～2016(H28).3.31

研究主題：環境社会学, アフリカ地域研究

日本学術振興会特別研究員

岩本 佳子 (いわもと けいこ)

任期：2015(H27).4.1～2018(H30).3.31

研究主題：オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

倉部 慶太 (くらべ けいた)

任期：2014(H26).4.1～2017(H29).3.31

研究主題：北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション

所(柘堀) 木綿子 (ところ(とちほり) ゆうこ)

任期：2013(H25).4.1～2016(H28).3.31

研究主題：近代イスラームにおける国際法理解—アブドゥルカーディルと19世紀世界—

南波 聖太郎 (なんば せいたろう)

任期：2014(H26).4.1～2016(H28).3.31

研究主題：1970・80年代におけるベトナムとの「特別な関係」の下でのラオスの政治的主体性

II-4.2 国内連携研究活動

II-4.2.1 国内研究者受け入れ (フェロー等)

フェロー

岡崎 彰 (おかざき あきら)

研究主題：アフリカを中心とするポピュラー・アートの社会人類学的研究

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：深澤 秀夫

研究成果：

1. 口頭発表：「からだにさわる (触る・障る) ポップアフリカ」, ポップアフリカ 2016 実行委員会「ポップアフリカ 2015@一橋」, 2015.4.19, 一橋大学.
2. 口頭発表：「陽気で難解なアフリカ」, ポップアフリカ 2016 実行委員会「ポップアフリカ 2016@熊本」, 2016.2.28, 熊本大学.

3. 招聘講演：“Is popular art a piece of shit?: some remarks on African resilience”, 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター「JSPS 第 178 回学振ナイロビセミナー」, 2016.3.19, 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター.

押川 文子 (おしかわ ふみこ)

研究主題：現代インドの社会変化

研究期間：2015.4.1.~2018.3.31

受入教員：太田 信宏

研究成果：

1. 著書 (共編)：『暮らしの変化と社会変動 (激動のインド第 5 巻)』(押川文子・宇佐美好文 (共編著)), 2015.5, 日本経済評論社, 278 pp.
2. 著書 (共編)：『「学校化」に向かう南アジア教育と社会変容』(押川文子・南出和余 (共編著)), 2016.2, 昭和堂, 399 pp.
3. 論文：「データからみるインド社会の変化」『暮らしの変化と社会変動 (激動のインド第 5 巻)』(押川文子・宇佐美好文編), 2015.5, 247-272.
4. 論文：「インドの教育制度—国民国家の教育制度とその変容」『「学校化」に向かう南アジア教育と社会変容』(押川文子・南出和余編), 2016.2, 3-50.
5. 口頭発表：「インドの少子化と家族の変化」, 東京外国語大学現代インド研究センター「少子化と家族の変容—中国とインドの比較」, 2015.6.15, 東京外国語大学本郷サテライト.
6. 口頭発表：「シャードラ：拡大する都市周縁庶民の「機会」と「市民性」」, 日本南アジア学会全国大会, 2015.9.26, 東京大学駒場キャンパス.
7. 口頭発表：「経済成長下のインド社会と政治」, 京都大学地域研究統合情報センター「シンポジウム：BICS 諸国の今」, 2015.10.10, あすか会議室 (日本橋) .

加藤 博 (かとう ひろし)

研究主題：近現代におけるエジプト社会経済変容

研究期間：2014.4.1~2016.3.31

受入教員：黒木 英充

研究成果：

1. 著書 (共編)：『アジア経済史研究入門』(水島司・加藤博・久保亨・島田竜登 (編)), 2015, 名古屋大学出版会, 390 pp.
2. 論文：“Réseaux locaux en Egypte: Rôle des associations villageoises au Caire”, *Mediterranean World*, 22, 2015, 1-16.
3. 論文：“‘Personality’ of Economic Development in the Delta region of Egypt in modern times: Focus on Buhaira governorate”, 『アジア歴史 GIS 学会ジャーナル』 3, 2015, 31-37. (査読有)
4. 書評：栗田禎子『中東革命のゆくえ—現代史のなかの中東・世界・日本—』『歴史学研究』 941, 2016.2, 58-61.
5. 講演：「イスラム経済の基本構造」, 成城大学経済研究所講演会, 2015.10.10, 成城大学.
6. 講演：“Islam and the World Today”, The International House of Japan and the Japan Foundation: Special Lecture for Asia Leadership Fellow Program, 2015.10.19, 国際文化会館.
7. 講演：“Egyptian Society Seen through the Eyes of a Japanese Researcher”, 日本学術振興会 the 30th Anniversary of JSPS Research Station, 2016.1.16, Cairo University.
8. 口頭発表：“‘Personality’ of Economic Development in the Delta Region of Egypt in Modern Times. Focus on Buheira Governorate”, World Economic History Congress: 17th World Economic History Congress, 2015.8.4, 京都国際会館.
9. 口頭発表：「エジプト社会経済史研究における空間分析の可能性と限界」, 第 113 回史学会大会公開シンポジウム, 2015.11.14, 東京大学.
10. 口頭発表：“Change of Nile Irrigation System and Egyptian Villages”, 上智大学アジア文化研究所ワークショップ “Direction of Changes in the Nile River and the Egyptian Villages”, 2016.3.11, 上智大学.
11. 口頭発表：“Introduction. Background of the Research, Overview of Research Field, and Research Objectives”, Organized Session “Study of ‘Sustainable’ Development in the Water-Scarce Society - Case of a Village in the Western Desert (Egypt)”, 日本農業気象学会: International Symposium on Agricultural Meteorology, 2016.3.15, 岡山大学.

12. 口頭発表：“Alexandria in the Time of Constantine Cavafy (1863-1933)”，一橋大学地中海研究会国際ワークショップ，2016.3.28, Ionian University (Greece).

川上 泰徳 (かわかみ やすのり)

研究主題：ペイルートのパレスチナ難民の政治社会意識の変遷

研究期間：2015.1.1～ 2017.12.31

受入教員：飯塚 正人

研究成果

1. 著書：『中東の現場を歩く』, 2015, 合同出版, 391 pp.
2. 著書：『ジャーナリストはなぜ「戦場」に行くのか』（危険地報道を考える会（編））, 2015, 集英社, 246 pp.
3. 講演：「中東激動と日本の関わり：シリア難民と「イスラム国」の行方」, 名古屋外国語大学リベラルアーツセンター文化講演会, 2016.1.9, 名古屋外国語大学.
4. シンポジウム：「ジャーナリストはなぜ「戦場」に行くのか」, 集英社シンポジウム「ジャーナリストはなぜ「戦場」に行くのか」, 2016.1.15, 文京シビックセンター.
5. 報道：「アラブの春5周年（上）（中）（下）」『ニューズウィーク日本版 Newsweek Japan』, 2016.2.15–17.
<http://www.newsweekjapan.jp/kawakami/2016/02/post-11.php>
6. 報道：「サウジアラビア全解剖」『週刊東洋経済』, P72. 東洋経済新報社. 2016.2.13.
7. 報道：「安保法制 紛争地の現実, イラク戦争の教訓」, 『Journalism ジャーナリズム』 no.301, 朝日新聞出版, 2015.6.

木俣 美樹男 (きまた みきお)

研究主題：インド亜大陸の雑穀農耕文化の起源と展開過程

研究期間：2014.4.1～ 2017.3.31

受入教員：太田 信宏

研究成果

1. 論文：「生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察」『民族植物学ノオト』 8, 2015.9, 23-66.
2. 論文：“Domestication process and linguistic differentiation of millets in the Indian subcontinent”, *Ethnobotanical Notes* (『民族植物学ノオト』) 9, 2016.2, 12–24.
3. 論文：“Tertiary domestication process of *korati*, *Setaria pumila* (Poaceae) through the mimicry to other grain crops in the Indian subcontinent”, *Ethnobotanical Notes* (『民族植物学ノオト』) 9, 2016.2, 25–38.
4. 論文：“Domestication process of *korati*, *Setaria pumila* (Poaceae), in the Indian subcontinent on the basis of cluster analysis of morphological characteristics and AFLP markers”, *Ethnobotanical Notes* (『民族植物学ノオト』) 9, 2016.2, 39–51.
5. 論文：“Domestication and dispersal of *Panicum miliaceum* L. (Poaceae) in Eurasia”, *Ethnobotanical Notes* (『民族植物学ノオト』) 9, 2016.2, 52–65.
6. 論文：“Agricultural complex of millets in the Indian subcontinent”, *Ethnobotanical Notes* (『民族植物学ノオト』) 9, 2016.2, 2–11. (Y. ISHIKAWA, H. KAGAMI, A. OTSUBO, K. OTSUKA と共著)

栗林 均 (くりばやし ひとし)

研究主題：モンゴル文語・満州文語辞書の電子化利用に関する研究

研究期間：2013.4.1～ 2017.3.31

受入教員：町田 和彦

研究成果

1. 著書：『伝統的モンゴル語辞書資料集』, 2015.12, 東北大学東北アジア研究センター, 352 pp.
2. 著書：『蒙漢字典—モンゴル語ローマ字転写配列—』, 2016.1, 東北大学東北アジア研究センター, 608 pp.
3. 著書（共編）：『『西藏歴史檔案薈粹』所収パспа文字文書』（栗林均・松川節（共編著））, 2016.2, 東北大学東北アジア研究センター, 110 pp.

4. 口頭発表：「言語資料検索システムの開発と運用」,東北アジア研究センター創設20周年記念 国際シンポジウム, 2015.12.6, 仙台国際センター.

古谷 伸子 (こや のぶこ)

研究主題：タイにおける民間治療師実践の変容と医療システムの再編に関する研究

研究期間：2014.5.1～2017.4.30

受入教員：西井 涼子

研究成果

論文：“The Folk Medicine Revival Movement in Northern Thailand: The Exercise of Healers’ Capacities and Legitimization of Healing Practices”, *Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond* (ed. by TANABE, Shigeharu), 2016.3, 63–83.

競争的研究資金

研究代表者： 古谷伸子

期間 (年度)： 2013～2016

種目： 若手研究 (B)

課題名： タイにおける医療システムの再編と民間治療師実践の変容に関する人類学的研究

佐藤 大和 (さとう ひろかず)

研究主題：日本語と東南アジア諸言語における超分節的特性の動態に関する研究

研究期間：2012.4.1～2017.3.31

受入教員：峰岸 真琴

研究成果

1. 論文 (共著)：「タイ語の3語文の音響音声学的分析」,『第29回日本音声学全国大会予稿集』(益子幸江・峰岸真琴・佐藤大和 (共著)), 2015.10. 86–91. (査読有)
2. 口頭発表：「映像作品における会話のリズムと間合い」, 日本認知学会研究分科会「間合い—時空間インタラクション」第3回研究会, 2015.5.23. 京都大学.

競争的研究資金

研究代表者： 佐藤大和

期間 (年度)： 2014～2016

種目： 基盤研究 (B) 一般

課題名： 超分節素の動態形式に基づくアクセント言語と声調言語の対照研究

清水 昭俊 (しみず あきとし)

研究主題：歴史的状況における人類学

研究期間：2009.7.1～2015.6.30

受入教員：宮崎 恒二

新谷 忠彦 (しんたに ただひこ)

研究主題：言語資料による大陸部東南アジアの歴史の解明

研究期間：2010.4.1～2016.3.31

受入教員：澤田 英夫

研究成果

1. 著書：*Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.104, The Shanke Language*, 2015, ILCAA, Tokyo, xxiii+265 pp.
2. 著書：*Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.105, The Zotung Language*, 2015, ILCAA, Tokyo, xxiii+265 pp.
3. 著書：*Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.106, The Kadaw Language*, 2015, ILCAA, Tokyo, xxv+265 pp.

4. 口頭発表：「タイ文化圏研究の顛末」, アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題『中国雲南テキスト研究の新展開』第1回研究会, 2015.05.23. アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

研究代表者： 新谷忠彦
期間（年度）： 2015～2017
研究種目： 基盤研究（B） 海外学術調査
研究課題名： 言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明

高城 玲（たかぎ りょう）

研究主題：タイにおける相互行為の人類学的研究
研究期間：2014.4.1～2016.3.31
受入教員：西井 涼子

研究成果

1. 著書（共編）：『DVDブック 甦る民俗映像—渋谷敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア—』（宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城玲（共編）, 2016.3, 岩波書店, 480 pp.
2. 論文：「方法としての現地上映会—現代に生きる映像資料」『DVDブック 甦る民俗映像—渋谷敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア—』（宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城玲（共編）, 2016.3, 99–114.
3. 書評：「辛島理人著『帝国日本のアジア研究—総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義—』」『神奈川大学アジア・レビュー』Vol. 3, 2016.3, 164–166.
4. 口頭発表：「現代タイにおける政治対立の歴史的背景—政治・社会運動と地方農村部」, 神奈川大学アジア研究センター公開研究会, 2015.10.13, 神奈川大学.

田村 すゞ子（たむら すずこ）

研究主題：アイヌ語をはじめとする危機に瀕した言語の実地調査で起こる問題と記述的研究の課題
研究期間：2014.10.1～2015.8.3
受入教員：山越 康裕

福島 康博（ふくしま やすひろ）

研究主題：マレーシアにおけるイスラーム金融のイスラーム性に関する研究
研究期間：2014.5.1～2017.4.30
受入教員：床呂 郁哉

研究成果：

1. 論文（共著）：「アジア四カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較：イスラーム地域研究の視点から」（福島康博・砂井紫里（共著））『第30回日本観光研究学会全国大会学術論文集』, 2015.11, 345-348.
2. 口頭発表：「ムスリムがマイノリティーである国におけるハラール・レストランの比較と分析：フィリピンとシンガポールの事例から」, アジア政経学会2015年度全国大会, 2015.6.14, 立教大学（池袋キャンパス）
3. 口頭発表：「アジア四カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較：イスラーム地域研究の視点から」, 第30回日本観光研究学会全国大会, 2015.11.29, 高崎経済大学.
4. 口頭発表：「東南アジア3カ国のムスリム対応レストランをめぐる状況の比較」, 第24回日本マレーシア学会研究大会, 2015.12.12, 立教大学 池袋キャンパス.
5. 口頭発表：「イスラーム金融をめぐるイスラーム性：マレーシアの事例から」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題『イスラームに基づく経済活動・行為』第2回研究会, 2016.3.13, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

研究代表者：福島康博
期間（年度）：2013～2015

種目：若手研究 (B)

課題名：イスラーム金融におけるイスラーム性形成の実証研究：マレーシアの事例

ジュニア・フェロー

新谷 崇 (あらや たかし)

研究主題：イタリア領東アフリカにおける植民地統治と宗教の問題(1935～1941年)

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：石川 博樹

研究成果：

1. 口頭発表：「カトリック聖職者のファシズム体制への支持形成について」, 第138回イタリア言語文化研究会例会, 2015.5.16. 早稲田大学(戸山キャンパス).
2. 口頭発表：「ファシズムの帝国主義とカトリック聖職者—エチオピア戦争への支持をめぐって—」, 第63回イタリア学会大会, 2015.10.17. 学習院大学.

池田 昭光 (いけだ あきみつ)

研究主題：「移動」への視点—レバノン人に学ぶ

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：黒木 英充

研究成果

1. 論文：「流れと顔—レバノンにおける民族誌的研究—」, 2016.3. (査読有)
2. 書評：“Are Knudsen and Michael Kerr (eds.), *Lebanon: After the Cedar Revolution*. New York: Oxford University Press, 2013”, 『日本中東学会年報』第31巻第2号, 2016.3, 361–364.

稲山 円 (いなやま まどか)

研究主題：イランにおける女性の宗教実践に関する人類学的研究

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：宮崎 恒二

大島 一 (おおしま はじめ)

研究主題：ハンガリー周辺地域のハンガリー語方言における言語接触

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：塩原 朝子

研究成果

1. 論文：「ハンガリー語：日本語と似ているところ、違うところ」『言葉とその周辺をきわめる 3』, 2016.3, 51–70.
2. 論文：「コーパスから見たハンガリー語の自他動詞」『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの—』(パルデシ・桐生・ナロック(編)), 2015.12, 401–414. (査読有)
3. 論文：「(連用修飾的)：複文：ハンガリー語」『語学研究論集』No.20, 2015.11, 133–142. (査読有)
4. 論文：「オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー語話者の言語状況について」『ウラリカ』No.16, 2015.8, 55–71. (査読有)
5. 口頭発表：“The Functional Meaning of Associative Plural in Hungarian: Contrast with the Burgenland Dialect of Hungarian in Austria”, The 12th International Congress for Finno-Ugric Studies, 2015.8.19, University of Oulu, Finland.

大塚 行誠 (おおつか こうせい)

研究主題：ミャンマーおよびインド北東部におけるクキ・チン諸語の研究

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：澤田 英夫

研究成果

1. 論文：「ラルデー語における音韻体系—ミゾ語およびティディム・チン語との対照的考察—」『東京大学言語学論集 電子版』(eTULIP) 36, 2015.9, 49–59. (査読有)
2. 論文：「ラルデー語の基礎語彙とテキスト」『アジア・アフリカの言語と言語学』10, 2016.3, 325–344. (査読有)
3. 論文：“Person marking system in Asho Chin”, *North East Indian Linguistics* (ed. by Linda KONNERTH, Stephen MOREY, Priyankoo SARMAH, Amos TEO) 7, 2015, 125–137. (査読有)

競争的研究資金

研究代表者：大塚行誠

期間(年度)：2014～2016

研究種目：若手研究(B)

研究課題名：インド北東部におけるラルデー語の記述言語学的な研究

勝畑 冬実(かつはた ふゆみ)

研究主題：エジプトにおける近現代イスラーム改革思想の表象

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：飯塚 正人

研究成果

1. コメント：イラン映画『チャドルと生きる』, 中東映画研究会第17回「映画から見る中東社会の変容」, 2015.5.27, 東京大学.
2. プロデューサー・字幕翻訳：エジプト映画『敷物と掛布』, 中東映画研究会第20回「映画から見る中東社会の変容」, 2016.2.11, 東京大学.

菅野 美佐子(かんの みさこ)

研究主題：インド北部におけるジェンダー規範の変容—想像と実態のはざまの生活世界—

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：椎野 若菜

研究成果

1. 口頭発表：「ウッタル・プラデーシュ州における高齢者のケアをめぐる実践と課題—ジェンダーの視点から—」, 日本南アジア学会第28回全国大会, 2015.9.27.
2. 口頭発表：「インドにおける高齢者のケアをめぐる実践と課題—ジェンダーの視点から—」, 政治経済学・経済史学会秋季学術大会.
3. 口頭発表：“Burden for Life or Reason to Live: Women’s work as surviving strategies in Poverty”, 京都大学科学研究費基盤研究(B)『生活世界の変容とジェンダー：インド高齢女性のライフヒストリーを通して』(代表：押川文子), Workshop on Hearing Women’s Voices: Senior Women’s Recollection of Everyday Life in South Asia.

栗田 知宏(くりた ともひろ)

研究主題：東アフリカ系ブリティッシュ・エイジアンのエスニック・アイデンティティに関する調査研究

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：椎野 若菜

研究成果

口頭発表：『ジハーディー・ラップ』という問題系—『イスラーム主義』とヒップホップの蜜月をめぐる一考察—, 日本ポピュラー音楽学会第27回年次大会, 2015.12.5, 京都精華大学.

小林 貴幸(こばやし たかゆき)

研究主題：東アジアにおける社会集団の構造と対人関係に関する比較

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：深澤 秀夫

研究成果

論文：「師弟を結ぶもの、分かちもの—台湾の空手社会」『月刊みんぱく』（山中由里子編）2016年4月号，2016.4, 5.

西村（西野）範子（にしむら（にしの） のりこ）

研究主題：ベトナムの国際社会参画時代における内政と対中国関係の変動

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：栗原 浩英

研究成果

1. 口頭発表：“Lung Khe citadel in Bac Ninh province in the Red River Delta: New understanding from historical and archaeological perspectives, Asian Association of World Historians”, *The Third Congress of the Asian Association of World Historians*, 2015.5.29, Nanyang Technological University (NTU), Singapore.
2. 口頭発表：「ベトナム，南シナ海沖・チャウタン海揚がり資料の初歩的報告」，東南アジア学会第93回研究大会，2015.5.31，愛媛大学.

宮本 隆史（みやもと たかし）

研究主題：近代インド社会における犯罪と刑罰の認識

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：太田 信宏

研究成果

1. 論文：“Locating penal transportation: punishment, space and place c. 1750-1900”, *Historical Geographies of Prisons: Unlocking the Usable Carceral Past* (ed. by Karen M. Morin and Dominique Moran), 147-167, 2015, Routledge, London. (Clare Anderson, Carrie M. Crockett, Christian G. De Vito, Kellie Moss, Katherine Roscoe, Minako Sakata と共著)
2. 書評：『ユーラシア地域大国論』（1・2・3・6巻）ミネルヴァ書房『南アジア研究』26, 2015, 198-203.
3. 口頭発表：“Introduction of Scientific Methods into Prison Management in British India”, *The Association for Asian Studies: 2015 AAS in Asia Conference*, 2015.6.23, Academia Sinica, Taipei, Taiwan.
4. 口頭発表：「植民地インドの刑罰制度における個人とコミュニティの概念」，2015年日本南アジア学会全国大会，2015.9.27，東京大学駒場キャンパス.

II-4.2.2 海外学術調査総括班の活動

I-3.2.4 海外調査専門委員会 を参照

II-4.2.3 四大学連合附置研究所長懇談会

2015年度実施

四大学連合附置研究所長懇談会（第29回）

日時： 2015年6月11日（木）16:30 - 17:30

会場： 東京工業大学西9号館2階コラボレーションルーム

当番機関： 東京医科歯科大学 難治疾患研究所

懇談事項： ①第10回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

四大学連合文化講演会（第10回）

日時： 2015年10月2日（金）15:00 - 18:30

会場： 東京医科歯科大学 M&Dタワー2F 鈴木章夫記念講堂（東京都文京区湯島1-5-45）

主催：四大学連合（東京医科歯科大学，東京外国語大学，東京工業大学，一橋大学）

企画：四大学連合附置研究所

後援：お茶の水会，東京外語会，蔵前工業会，如水会

【プログラム】

14:20 開場

15:00 - 15:10 開会挨拶 東京医科歯科大学 学長

15:10 - 15:20 来賓挨拶 文部科学省

15:20 - 16:00 「紛争下での安全保障と政治～ガザ戦争後のパレスチナ／イスラエルの攻防～」
東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授 錦田 愛子

16:00 - 16:40 「免震構造建物の震災後健全性評価方法」
東京工業大学 応用セラミックス研究所 教授 山田 哲

16:40 - 17:00 休憩

17:00 - 17:40 「途上国における家計の災害への脆弱性」一橋大学 経済研究所 教授 黒崎 卓

17:40 - 18:20 「緑内障研究の最前線」東京医科歯科大学 難治疾患研究所 教授 田中 光一

18:20 - 18:30 閉会の辞 東京工業大学 学長

四大学連合附置研究所長懇談会（第30回）

日時： 2015年11月4日（水）16:30～17:30

会場： 東京医科歯科大学 M&D タワー2階共用講義室2

- 懇談事項： ①第10回四大学連合文化講演会について
②四大学連合文化講演会で撮影した記録映像の取扱いについて（確認）
③その他（次回以降の四大学連合文化講演会について，次回当番機関について）

II-4.2.4 シンポジウム等

開催日	内容・使用言語・場所・開催主体
2015年 5月31日 (日)	フィールド言語学ワークショップ：第10回 文法研究ワークショップ「名詞複数標識の多義性—純粹複数・近似複数・曖昧・例示—」【公開】 1. 新永悠人（成城大学）・齊藤美穂（神戸大学）「奄美大島の湯湾方言と瀬戸内方言における名詞複数標識の多義性—純粹複数・近似複数・曖昧・例示—」 2. 重野裕美（広島経済大学）「奄美大島浦方言における名詞複数標識の多義性—純粹複数・近似複数・曖昧・例示—」 3. 平塚雄亮（志學館大学）「甌島里方言における名詞複数標識の多義性」 4. 桐生和幸（美作大学）「ネワール語カトマンズ方言における名詞複数標識の多義性」 使用言語：日本語 AA 研（304） 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開(LingDy2)
6月20日 (土)	共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」第9回研究会【非公開】 1. 2015年2月国際シンポジウム総括【非公開】 2. Peter WORSLEY (AA 研外国人研究員) “Javanese Epic Poetry, the Lived Environment and Cosmological Order” 【公開】 使用言語：英語および日本語 AA 研（302） 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」
7月14(火) ～17(金)	フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ「琉球・宮古島のことばをフィールドワークする」【公開】 講師：中山俊秀（AA 研所員），大野剛（アルバータ大学），仲間博之（ネイティブスピーカー講師：宮古語西原方言話者） 使用言語：日本語

	AA 研 (304)
	AA 研, 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開 (LingDy2)
7月25日 (土)	<p>シンポジウム「外国人の人権とシティズンシップ」/共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民/難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」第4回研究会【公開】</p> <p>1. 近藤敦 (AA 研共同研究員, 名城大学) 「外国人の人権への憲法と国際人権法からのアプローチ」</p> <p>2. 菅原真 (AA 研共同研究員, 南山大学) 「日本における外国人の政治的権利—最高裁1995年2月28日判決(民集49巻2号639頁)後の課題と展望—」</p> <p>3. 宮崎真 (弁護士, 名古屋多文化共生研究会 (NAMS) メンバー) 「医療を理由とする在留の考察—2013年6月27日名古屋高裁判決を例として—」</p> <p>4. 床呂郁哉 (AA 研所員) 「日比国際結婚移民をめぐる諸問題に関する事例報告—フィリピンの現場から」</p> <p>コメンテーター 柳井健一 (AA 研共同研究員, 関西学院大学)</p> <p>司会 小坂田裕子 (AA 研共同研究員, 中京大学)</p>
	使用言語: 日本語
	名城大学名駅サテライト MSAT 多目的室
	名古屋多文化共生研究会 (NAMS), 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民/難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」
11月1日 (日)	<p>地域研究コンソーシアム 2015 年度年次集会シンポジウム【公開】 地域研究コンソーシアム (JCAS) 2015 年度年次集会における一般公開シンポジウム 2015 年度 JCAS 年次集会シンポジウム</p> <p>司会 黒木英充 (AA 研所員) 趣旨説明</p> <p>報告 1. 保坂修司 (日本エネルギー経済研究所) 「まっすぐな国境線—アラビアのロレンスとイスラム国」</p> <p>報告 2. 錦田愛子 (AA 研所員) 「見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防—国家承認, エルサレム, 和平分割案」</p> <p>報告 3. 松里公孝 (東京大学) 「ボーダーを堅牢化しない紛争—ウクライナほか環黒海地域の経験から」</p> <p>報告 4. 武内進一 (JETRO アジア経済研究所) 「アフリカの国境は紛争の主因か?」</p> <p>報告 5. 床呂郁哉 (AA 研所員) 「ボーダーの形成と越境のダイナミクス—東南アジア海域世界の事例から」</p> <p>コメント 1. 清谷典子 (国際移住機関(IOM)駐日事務所)</p> <p>コメント 2. 岩下明裕 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)</p> <p>総合討論</p>
	使用言語: 日本語
	AA 研 (303)
	AA 研, 地域研究コンソーシアム
11月18日 (水)	<p>フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「言語の調査・研究のための動画制作」【公開】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言語学的フィールドワークにおける一般的な動画撮影。 ・撮影した動画資料の加工。 ・言語研究に使用する映像刺激の作成。 <p>講師: 石井満 (尚美学園大学)</p>
	使用言語: 日本語
	AA 研 (304)
	AA 研, 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開 (LingDy2)

<p>12月13日 (日)</p>	<p>基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」公開シンポジウム「顔と身体表現に基づく異文化理解」【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 床呂郁哉 (AA 研所員) 趣旨説明 2. 山口真美 (中央大学：心理学) 「文化への熟達過程を知る」 3. ロベルト・カルダラ (フリブール大学：認知科学), 渡邊克巳 (東京大学：認知科学) 「顔認識の多様性—東アジアと欧米を比較して」 4. 吉田ゆか子 (国立民族学博物館：人類学) 「仮面から考える顔の文化論にむけて—バリ島仮面劇トペンの事例から」 5. 西井涼子 (AA 研所員：人類学) 「顔の不在がもたらすこと—ムスリム女性のヴェール着用をめぐる」 6. 金沢創 (日本女子大学：心理学), 北山晴一 (立教大学：社会デザイン学), 原島博 (東京大学：コミュニケーション工学) コメント 7. ディスカッション <p>使用言語：日本語</p> <p>AA 研 (303)</p> <p>基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」</p>
<p>12月16日 (水)～22 (火)</p>	<p>第2回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構造分析用言語資料の収集 (録音, 録画, 書き取り) ・談話資料の収集 ・音素構造, 形態法, 統語 ・音素構造, 形態法, 統語法の基本構造の分析 ・言語資料の処理と整理 <p>講師：中山俊秀 (AA 研所員), 大野剛 (アルバータ大学)</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>沖縄県宮古島市池間地域</p> <p>AA 研, 言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開 (LingDy2)</p>
<p>12月18日 (金)</p>	<p>地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「領土の再編と地域研究：南スーダン独立後「スーダン地域再考の試み」」【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 開会の辞 2. 苅谷康太 (AA 研所員, アドバイザー) 「企画説明」 3. モハマド・オマル・アブディン (東京外国語大学), 橋本栄莉 (日本学術振興会／九州大学) 「趣旨説明」 4. 報告 1 モハマド・オマル・アブディン (東京外国語大学) 「南スーダン独立後の政治的対立と新たな紛争：国際関係と国内情勢の変化」スーダン共和国を中心に 村橋勲 (大阪大学) 「南スーダン独立後の政治的対立と新たな紛争：国際関係と国内情勢の変化」南スーダン共和国を中心に 5. 質疑応答 6. 報告 2 モハマド・オマル・アブディン 「体制によるスーダン人アイデンティティ再構築の試み：南スーダン独立後のバシール大統領の演説に着目して」 飛内悠子 (日本学術振興会／大阪大学) 「移動から生まれるローカル性：南スーダン独立後におけるハルツームのイメージを巡って」 7. 質疑応答 8. 報告 3 村橋勲 (大阪大学) 「南スーダン難民の移動と活性化する経済活動：ウガンダの難民居住地と国境におけるマーケットの拡大」 橋本栄莉 (日本学術振興会／九州大学) 「難民居住地における社会組織の再編：南スーダンの国内避難民キャンプとウガンダの難民居住地の事例を中心に」 仲尾周一郎 (日本学術振興会／京都大学) 「領土の再編と言語史の再編：南スーダン・アラビア語クレオールの場合」 9. 質疑応答 10. 栗本英世 (大阪大学) コメント 11. 総合討議

	12. 閉会の辞
	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	地域研究コンソーシアム, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 科研費基盤研究(A)「ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築」(研究代表者: 岩下明裕 (北海道大学)), AA 研
12月26日 (土)	第2回フィールドサイエンス・コロキウム: ワークショップ「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」【公開】 1. 野林厚志 (国立民族学博物館)「エスノアーケオロジー (スト) の可能性と限界」 2. 中山俊秀 (AA 研所員)「データと理論: データあつての理論か, 理論あつてのデータか」総合討論
	使用言語：日本語
	AA 研 (306)
	フィールドサイエンス研究企画センター, 基幹研究「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」
2016年 1月23日 (土)	公開ワークショップ「ノダ文相当表現の通言語的研究」/共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」第9回研究会【公開】 公開ワークショップ「ノダ文相当表現の通言語的研究」 1. 角田三枝 (AA 研共同研究員, 立正大学非常勤講師)「日本語のノダに類する文末表標識の通言語的研究・調査結果と発見」 2. 各言語におけるノダ文相当表現 千田俊太郎 (AA 研共同研究員, 京都大学)「朝鮮語」 海老原志穂 (AA 研共同研究員, AA 研研究機関研究員)「アムド・チベット語」 星泉 (AA 研所員)「カム・チベット語」 児倉徳和 (AA 研所員)「シベ語」 梅谷博之 (AA 研共同研究員, AA 研特任研究員)「モンゴル語」 大塚行誠 (AA 研共同研究員, 東京外国語大学)「ビルマ語」 桐生和幸 (AA 研共同研究員, 美作大学)「ネワール語」 3. 角田太作 (AA 研共同研究員, 国立国語研究所名誉教授)「本プロジェクトの一般言語学と類型論における貢献」
	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展 (LingDy2), 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」
3月4日 (金)	情報資源利用研究センター(IRC)ワークショップ「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える: 言語体系を例に」【公開】 1. 中山俊秀 (AA 研所員) ワークショップの趣旨説明 2. オープンディスカッション ディスカッサント 森浩禎 (奈良先端科学技術大学院大学)・村井源 (東京工業大学)・内海彰 (電気通信大学)・伊藤克彦 (京都大学)・阿部明典 (千葉大学)
	使用言語：日本語
	AA 研 (301)
	情報資源利用研究センター

3月13(日)	<p>基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開シンポジウム「食と農のアフリカ史を考える」／共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化(2)」第10回研究会【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 深澤秀夫 (AA 研所員) 開会の挨拶 2. 石川博樹 (AA 研所員) ほか『食と農のアフリカ史』の出版を記念して 3. 石川博樹 (AA 研所員) 「食と農のアフリカ史をめぐる歴史学研究の可能性」 4. 小松かおり (AA 研共同研究員, 静岡大学) 「食と農のアフリカ史をめぐる人類学研究の可能性1 食の視点から」 5. 藤本武 (AA 研共同研究員, 富山大学) 「食と農のアフリカ史をめぐる人類学研究の可能性2 農の視点から」 6. 池上甲一 (近畿大学) コメント1 7. 池谷和信 (国立民族学博物館) コメント2 8. 深澤秀夫 (AA 研所員) 閉会の辞 <p>使用言語：日本語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」, 共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化(2)」</p>
3月24日 (木)	<p>フィールド言語学ワークショップ(特別篇)【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 招待講演その1 木本幸憲(京都大学) 「言語ドキュメンテーションにおけるELANの役割とその実際」 菅沼健太郎(九州大学大学院／日本学術振興会) 「現代ウイグル語の音韻論」 2. 特任研究員・研究機関研究員講演 梅谷博之(AA 研特任研究員) 「「クリティック」と「付属語」は何が違う？」 海老原志穂(AA 研研究機関研究員) 「チベット牧畜地域でのフィールドワーク」 3. ライトニングトーク 大西秀幸(東京外国語大学大学院生) 岡本進(東京外国語大学大学院生) 倉部慶太(東京外国語大学／日本学術振興会) 平田秀(AA 研特任研究員) 山田洋平(東京外国語大学／日本学術振興会) 4. 招待講演その2 蝦名大助(神戸山手大学) 「ケチュア語とアイマラ語の言語接触」 桐生和幸(美作大学) 「メチェ語の概要とメチェ語辞書の作成とその活用—データ処理の方法と活用」 <p>使用言語：日本語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」(LingDy)</p>

II-4.3 国際連携研究活動

II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧

開催日	内容・使用言語・場所・開催主体
2015年 4月7日 (火)	<p>国際ワークショップ「レユニオン島—混成の調和を有する複雑なフランスの南半球領土」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 小田淳一 (AA 研所員) ワークショップの説明と講演者紹介 2. マリー=アニック・ジャンス (人類学, レユニオン精神衛生公共法人) 「レユニオン島—混成の調和を有する複雑なフランスの南半球領土」

	使用言語：フランス語（通訳あり）
	AA 研（301）
	IRC，基幹研究「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」
4月8日 （水）	国際ワークショップ：“Persian and Chinese Historiography in the Mongol Empire” 1. Geoffrey HUMBLE (National Museum of Ethnology / University of Birmingham) “Rule and Regency in the Early Mongol Empire: Re-Reading Narratives of Toregene Khatun” 2. Osamu OTSUKA (The University of Tokyo) “Abū al-Qāsim Qāshānī’s Zubdat al-Tawārikh and the Historiography of the Late Ilkhanid Period.”
	使用言語：英語
	AA 研（301）
	IRC，基幹研究「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」
5月1日 （木）	国際研究会： Dr. Iqbal Surani (École Pratique des Hautes Études) “From Haridas to ‘Alidas”
	使用言語：英語
	本郷サテライト7階会議室
	基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」
6月15日 （月）～6 月16日 （火）	Workshop on Language Documentation at Jambi, Sumatra Coordinators: Yanti (ILCAA Joint Researcher, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) and Asako SHIOHARA (ILCAA) Lecturers: John BOWDEN (ILCAA Joint Researcher, Jakarta Field Station, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology) Anthony JUKES (ILCAA Joint Researcher, La Trobe University) Antonia SORIENTE (ILCAA Joint Researcher, University of Naples “L’Orientale”, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology) Tim McKINNON (University of Delaware) Yanti (ILCAA Joint Researcher, Atma Jaya Catholic University of Indonesia)
	使用言語：英語
	Seloko Institute (Jambi), Atma Jaya Catholic University, Indonesia
	文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」, Seloko Institute (Jambi), Atma Jaya Catholic University of Indonesia
8月6日 （木）～8 月7日 （金）	Workshop on Language Documentation at Manado Coordinators: Atsuko UTSUMI (ILCAA Joint Researcher, Meisei University) and Asako SHIOHARA (ILCAA) Lecturers: Anthony JUKES (ILCAA Joint Researcher, La Trobe University), Antonia SORIENTE (ILCAA Joint Researcher, University of Naples “L’Orientale”), Asako SHIOHARA (ILCAA), Atsuko UTSUMI (ILCAA Joint Researcher, Meisei University), John BOWDEN (ILCAA Joint Researcher, Jakarta Field Station), Yanti (ILCAA Joint Researcher, Atma Jaya Catholic University of Indonesia)
	使用言語：英語
	Manado State University, Indonesia

	文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」, Manado State University
9月3日 (木) ~9 月4日 (金)	<p>共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第2期)」第4回研究会</p> <p>9月3日(開催場所: JaCMES, Beirut)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Hidemitsu KUROKI (ILCAA) Introduction 2. Kaoru YAMAMOTO (Tokyo University of Foreign Studies) presentation of paper for the next volume 3. Aida Kanafani-Zahar (ILCAA Joint Researcher, Centre National de la Recherche Scientifique) presentation of paper for the next volume 4. Malek Sharif (ILCAA Joint Researcher, American University of Beirut) presentation of paper for the next volume 5. Hiroshi KATO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Fellow) & Erina IWASAKI (ILCAA Joint Researcher, Sophia University), Masayuki UENO (ILCAA Joint Researcher, Osaka City University), Takayuki YOSHIMURA (ILCAA Joint Researcher, Waseda University), Akira USUKI (ILCAA Joint Researcher, Japan Women's University), and Bernard HOURCADE (ILCAA Joint Researcher, Centre National de la Recherche Scientifique) Summaries <p>9月4日(開催場所: Crowne Plaza, Beirut)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Nora Lafi (ILCAA Joint Researcher, Zentrum Moderner Orient) presentation of paper for the next volume 2. Nobuaki KONDO (ILCAA) presentation of paper for the next volume 3. Yoichi TAKAMATSU (ILCAA) presentation of paper for the next volume 4. Stefan Knost (ILCAA Joint Researcher, Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) presentation of paper for the next volume 5. Hidemitsu KUROKI (ILCAA) presentation of paper for the next volume 6. Aiko NISHIKIDA (ILCAA) presentation of paper for the next volume 7. Kosuke MATSUBARA (ILCAA Joint Researcher, University of Tsukuba) presentation of paper for the next volume 8. Next meeting's arrangement
	使用言語: 英語
	JaCMES / Crowne Plaza, Beirut
	共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第2期)」
9月7日 (月)	<p>国際ワークショップ「ボルネオの言語研究とマレー語研究の過去と現在」</p> <p>Opening</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Welcoming remarks by Professor Dr. Jacqueline Pugh-Kitingan, Holder of the Kadazandusun Chair, UMS 2. Speech by Dr. Mark Miller, Academic Services, SIL Malaysia 3. Speech by Professor Dr. Ikuya Tokoro, ILCAA, TUFS 4. Speech by Professor Datuk Dr. Mohd. Harun Abdullah, Vice-Chancellor, UMS 5. Exchange of mementos <p>Session 1: Perspectives on Languages in Sabah</p> <p>Chair: Professor Dato' Dr. Hashim Awang, Professor of Anthropology, Faculty of Humanities, Arts and Heritage, UMS</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Dr. Mark Miller (Academic Services, SIL Malaysia, Dr. Jeannet Stephen, Deputy Dean

	<p>(Research & Innovation), Centre for the Promotion of Knowledge and Language Learning, UMS, Professor Dr. Jacqueline Pugh-Kitingan, Holder of the Kadazandusun Chair, UMS) “Review of Ethnologue Descriptions of Languages in Sabah—Preliminary Findings”</p> <p>2. Dr. Paul Porodong (Senior Lecturer, Sociology and Social Anthropology Program, Faculty of Humanities, Arts and Heritage, UMS) “Indigeneity, Language and Identity in Sabah—a perspective from the Rungus of Sabah”</p> <p>3. Dr. Jane Wong Kon Ling (Senior Lecturer, Centre for the Promotion of Knowledge and Language Learning, UMS) “Is Sabah Malay a Real Language?”</p> <p>4. Discussion</p> <p>Session 2: Topics on Indigenous Languages of Borneo</p> <p>Chair: Veronica Petrus Atin, Senior Lecturer, Centre for the Promotion of Knowledge and Language Learning, UMS</p> <p>1. Paul Kroeger (Graduate Institute of Applied Linguistics, Dallas, Texas, USA, and SIL International) “Speaker Oriented Particles in Kimaragang Dusun”</p> <p>2. Dyg Siti Ifwah Fauzani Binti Awang Haji Chuchu (Malay Language and Linguistics Program, Faculty of Arts and Social Sciences Universiti Brunei Darussalam, UBD) “Morfo-Sintaksis Bahasa Belait”</p> <p>3. Discussion</p> <p>Session 3: (Voice in) Malay Varieties</p> <p>Chair: Dr. Jane Wong Kon Ling, Senior Lecturer, Centre for the Promotion of Knowledge and Language Learning, UMS</p> <p>1. Pg Mohamed Pg Damit (Malay Language and Linguistics Program, Faculty of Arts and Social Sciences, UBD) “Pasif Semu dalam Bahasa Melayu: Satu Penggolongan Semula”</p> <p>2. Hiroki Nomoto (Faculty of Languages and Cultures, Faculty of Foreign Studies, TUFS) “Pelaku ayat pasif dalam bahasa Melayu Klasik”</p> <p>3. Asako Shiohara (ILCAA, TUFS) “Voice in “eventive” coordinate clauses in Standard Indonesian”</p> <p>4. Discussion</p> <p>Closing</p> <p>使用言語：英語</p> <p>UMS (Faculty of Humanities, Arts and Heritage, Unibersiti Malaysia Sabah)</p> <p>The Kadazandusun Chair and Faculty of Humanities, Arts and Heritage, UMS; SIL International; KKLO</p>
<p>9月27日 (日)</p>	<p>東南アジアにおけるイスラームと文化的多様性に関する国際ワークショップ</p> <p>1. 床呂郁哉 (AA 研所員) 開会挨拶</p> <p>2. 小林寧子 (南山大学) “The 33rd Congress of the Nahdlatul Ulama: The AHWA and the Rais Aam”</p> <p>3. オマル・ファルーク (AA 研共同研究員, マレーシア理科大学) 「ペナンにおける宗教間の共存のダイナミクス」</p> <p>4. 錦田愛子 (AA 研所員) 「イスラーム過激派により分断され、つながれるもの—ハマースとイスラーム国をめぐる中東事情」</p> <p>5. シャムスル・A・B (AA 研共同研究員, マレーシア国民大学) “Conceptualizing diversity and its traits: The empirical case from Malaysia”</p> <p>6. 討論</p> <p>7. 富沢寿勇 (AA 研共同研究員, 静岡県立大学) 閉会挨拶</p> <p>8. 情報交換会</p>

	使用言語：英語
	Meeting Suite 3, Hotel Meridien Kota Kinabalu (Jalan Tun Fuad Stephens, Kota Kinabalu, Malaysia)
	共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化的多様性に関する学際的研究（第二期）」
10月16日 (金)	講演会：“Orientalism at the Russian Consulate in Beirut” 1.黒木英充（AA 研所員） 挨拶 2. Paul du Quenoy (ベイルート・アメリカン大学准教授／北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任准教授) “Orientalism at the Russian Consulate in Beirut?: Konstantin Petkovich’s Lebanon and the Lebanese (1885)” 3.質疑応答
	使用言語：英語
	千代田区立図書文化館（東京）4階セミナールーム A
	科研費基盤(A)海外調査「レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク—自己多面化と空間構想力」、基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」
11月27日 (金)	日本における中東・イスラーム研究の最前線 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No. 10) 1. Welcome Address by Hidemitsu Kuroki (Head, JaCMES/ Professor, ILCAA) Chair: Aiko Nishikida (Associate Professor, ILCAA) 2. Shoko Watanabe (Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization) "State Formation and Religious Education Faced with Social Aspirations: The Expansion of the Tunisian al-Zaytuna after the Second World War" 3. Woohyang Sim (Waseda University) "The Educational Aspiration of Saudi Arabian Young Generation: Implication for Creating New Framework to Explain GCC Society Based on Awareness Survey to its Youth" Coffee Break Chair: Nobuaki Kondo (Professor, ILCAA) 5. Madoka Morita (The University of Tokyo) "Between Hostility and Hospitality: Neighborhoods and Dynamics of Urban Migration in Istanbul (1730-54)" 6. Kie Inoue (The University of Tokyo) "Ruzbihan Baqli Shirazi's Conception of Prophets and Saints"
	使用言語：英語
	JaCMES
	基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」
12月2日 (水)	国際ワークショップ：“The Politics of Aesthetics and Modernity in Thai Contemporary Arts” 15:00-16:00 Pandit Chanrochanakit (AA 研外国人研究員) “The Politics of Aesthetics and Modernity in Thai Contemporary Arts” 16:00-17:00 Comment and Discussion Commentator: Akira OKAZAKI (AA 研フェロー)
	使用言語：英語

	AA 研 (304)
	基幹研究「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」
2016 年 1 月 8 日 (金)	講演会: Sunil Sharma (Boston University) “Amir Khusraw as a Persian, Indo-Persian, and Persianate Poet”
	使用言語: 英語 (通訳なし)
	AA 研 (306)
	基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」, 中東イスラーム研究拠点
1 月 11 日 (月)	国際ワークショップ: “Court, Literature and Power in the Early Modern Persianate World”
	1. Welcoming
	2. Naofumi ABE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo) “Poetics of Politics in Early Qajar Iran: Royal-commissioned Tazkeres at Fath-’Ali Shah’s Court”
	3. Sunil Sharma (Boston University) “Representing Mughal Decline in Safavid Court Literature”
	4. General Discussion
	使用言語: 日本語, 英語
	本郷サテライト 4 階会議室
	共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」, 基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」, 中東イスラーム研究拠点
1 月 27 日 (水) ~ 28 日 (木)	ワークショップ「チベット文学と映画制作の現在」
	1 月 27 日
	1. ジャバ (中央民族大学) 「チベット現代文学の現在」
	2. 討論
	3. ラシャムジャ (中国チベット学研究センター) 「創作と使用言語」
	4. 討論
	1 月 28 日
	1. ドルジェ・ツェリン/ジャンブ (詩人・映画監督) 「チベット語自由詩の歴史」
	2. 討論
	3. ドキュメンタリー映画上映『ココノール』
	4. 討論
	5. 閉会の辞
	使用言語: 日本語, チベット語, 英語
	AA 研 (302)
	文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」
1 月 30 日 (土) ~ 31 日 (日)	シンポジウム「チベット文学と映画制作の現在」
	1 月 30 日
	1. 開会の辞
	2. 海老原志穂 (AA 研研究機関研究員)・大川謙作 (日本大学)・星泉 (AA 研所員)・三浦順子 (翻訳家)「翻訳者によるチベット現代文学作品案内」
	3. ジャバ (中央民族大学) 「チベット現代文学概説」, 質疑応答
	4. ラシャムジャ (中国チベット学研究センター) 「チベット語で創作すること」, 質疑応答
	5. 大川謙作 (日本大学)・小野田俊蔵 (佛教大学)・西田愛 (神戸市外国語大学)・

	<p>山口守 (日本大学) パネルディスカッション</p> <p>1月31日</p> <p>1. ドルジェ・ツェリン/ジャンプ (詩人・小説家・映画監督) 「チベット語自由詩概説」, 質疑応答</p> <p>2. ドルジェ・ツェリン監督 ドキュメンタリー映画『冬虫夏草』上映, 質疑応答</p> <p>3. 岩尾一史 (神戸市外国語大学)・別所裕介 (広島大学)・三浦順子 (翻訳家) パネルディスカッション</p> <p>4. 閉会の辞</p> <p>使用言語: 日本語, チベット語, 英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」</p>
2月3日 (水)	<p>国際ワークショップ「アフリカ史再構成のための神話学への統計学の応用」</p> <p>1. 小田淳一 (AA 研所員) ワークショップの説明と講演者紹介</p> <p>2. ジュリアン・デュイ (神話学, エコール・サントラル・パリ (パリ中央工芸学校)) 「アフリカ史再構成のための神話学への統計学の応用」</p> <p>使用言語: 英語 (通訳なし)</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>IRC</p>
2月8日 (月) ~ 2月13日 (土)	<p>第9回 Documentary Linguistics Workshop</p> <p>講師: Peter K. Austin (SOAS, University of London; Visiting Research Professor, University of Hong Kong), David Nathan (Centre for Australian Languages and Linguistics, Batchelor Institute of Indigenous Tertiary Education), Anthony Jukes (AA 研共同研究員) ほかに</p> <p>使用言語: 英語</p> <p>AA 研</p> <p>文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」</p>
2月16日 (火) ~ 2月17日 (水)	<p>共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存 (第2期)」第5回研究会</p> <p>成果報告書の論文構想発表</p> <p>2月16日</p> <p>1. Hidemitsu KUROKI (ILCAA) “Introduction”</p> <p>2. Kaoru YAMAMOTO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies) “Writing the Memory of War in Post-war Lebanon”</p> <p>3. Malek SHARIF (ILCAA Joint Researcher) “The building up of tension in Beirut and the 1903 massacre of Christians which did not happen”</p> <p>4. Aiko NISHIKIDA (ILCAA) “Restricted Coexistence among Palestinians and Israelis of Different Citizenship”</p> <p>5. Nobuaki KONDO (ILCAA) “Non-Muslims at the Shari’a Courts of Qajar Tehran”</p> <p>6. Aida Kanafani-Zahar (ILCAA Joint Researcher, Centre National de la Recherche Scientifique), Bernard HOURCADE (ILCAA Joint Researcher, Centre National de la Recherche Scientifique), Carla Edde (ILCAA Joint Researcher, Saint-Joseph University), Masayuki UENO (ILCAA Joint Researcher, Osaka City University), Takayuki</p>

	<p>YOSHIMURA (ILCAA Joint Researcher, Waseda University) Summaries 2月17日</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Hiroshi KATO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Fellow) & Erina IWASAKI (ILCAA Joint Researcher, Sophia University) “Reconsideration on Cairo and Alexandria in the Modern History of Egypt” 2. Yoichi TAKAMATSU (ILCAA) “Greek Orthodox (Rum) population of late 18th and 19th- Centuries Istanbul: a study of the population registers (nüfus defterleri)” 3. Madoka MORITA (The University of Tokyo) “Open to Whom?: “Public Space” and Gender/Religious Boundaries in Istanbul (1730-54)” 4. Nora LAFI (ILCAA Joint Researcher, Zentrum Moderner Orient) “Organizing Coexistence in Early Ottoman Aleppo: The 1518, 1526, and 1536 Tapu Tahrir” 5. Hidemitsu KUROKI (ILCAA) “Population of Mid-19th Century Aleppo Reconsidered” 6. Stefan KNOST (ILCAA Joint Researcher, Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) “Waqf and the State in Late 19th Century Ottoman Urbanism: The Case of Aleppo” 7. Kosuke MATSUBARA (ILCAA Joint Researcher, University of Tsukuba) “The genealogy of Haussmannisation in the historic city of Aleppo: A case study of the overseas deployment of French urbanism” 8. Hidemitsu KUROKI (ILCAA) Concluding remarks <p>使用言語：英語</p> <p>AA研 (303)</p> <p>共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存 (第2期)」</p>
<p>2月18日 (木)～ 2月20日 (土)</p>	<p>第3回オーストロネシア諸語の情報構造に関する国際ワークショップ 2月18日 13:30-18:30</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Arndt RIESTER (Institute for Natural Language Processing, University of Stuttgart) “Information structure analysis of spoken discourse” 2. Stefan BAUMANN (University of Cologne) “Prosodic cues to information structure” 3. James Sneed GERMAN (CNRS - Aix-Marseille University) “Information Structure and Prosody in Uncharted Territory” 4. Sonja RIESBERG, Stefan BAUMANN, Janina KALBERTODT, Nikolaus P. HIMMELMANN (University of Cologne) “Native speakers’ perception of prosodic prominence and its implication for information structure in Papua Malay” 5. Nikolaus P. HIMMELMANN (University of Cologne) “Lexical pitch accent and/or stress in Eastern Indonesia? Prosody (and information structure) in Wooi” 6. 内海敦子 (AA研共同研究員, 明星大学) “The intonation of interrogatives and focused elements in the Bantik language” <p>2月19日 10:00-17:35</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 三宅良美 (AA研共同研究員, 秋田大学) “Information structure in Javanese conversational sequences” 2. John BOWDEN (AA研共同研究員, AA研外国人研究員) “Notes on information structure and intonation in Colloquial Jakarta Indonesian” 3. Anja LATROUITE (AA研共同研究員, Heinrich Heine University Dusseldorf) “Word Order Choices, Information Structure and Common Ground in Tagalog” 4. 長屋尚典 (AA研共同研究員, 東京外国語大学), Hyun Kyung Hwang (国立国語研究所) “Focus and prosody in Tagalog: A preliminary study” 5. Liselotte SNIJDERS (早稲田大学) “The information structure of discontinuous

	<p>expressions”</p> <p>6. Shirley N. DITA (De La Salle University) “Information Structure in Ilocano”</p> <p>7. 北野浩章 (AA 研共同研究員, 愛知教育大学) “Complement-taking strategies in Kapampangan”</p> <p>8. 月田尚美 (AA 研共同研究員, 愛知県立大学) “Speech report construction in Seediq”</p> <p>9. General Discussion</p> <p>2月20日 9:30-13:00 (公開), 14:00-16:00 (非公開)</p> <p>1. 塩原朝子 (AA 研所員) “Constituent order in Sumbawa”</p> <p>2. I Wayan Arka (Australian National University) “Information structure in Marori”</p> <p>3. Rik De BUSSER (AA 研共同研究員, National Chengchi University) “Referential cohesion and textual variation in Bunun”</p> <p>4. General Discussion</p> <p>5. Business Meeting</p> <p>使用言語: 英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」, 文部科学省特別経費「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」</p>
2月19日 (金)	<p>国際研究会: “On the Unpublished Memoirs of an Arab-Ottoman Officer during WWI”</p> <p>Malek Sharif “Swimming against the currents: On the unpublished memoirs of an Arab-Ottoman officer during WWI”</p> <p>Discussion</p> <p>使用言語: 英語</p> <p>本郷サテライト7階会議室</p> <p>基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」</p>
3月10日 (木)	<p>国際ワークショップ: “Vulnerability and Resilience: Ecology of Non-Dominant Groups in the Middle East</p> <p>1. 趣旨説明</p> <p>2. Karen HAMADA (The University of Tokyo) “Armenian Christology in the Christian-Muslim Dialogue of the 14th-15th Centuries”</p> <p>3. Ryoko ISAKA (The University of Tokyo) “Russian Orthodox Clergy in 19th-Century North Caucasus: Their Activities and Their Attitudes towards Muslims”</p> <p>4. Antranig DAKESSIAN (Haigazian University) and Ray MOUAWAD (Saint Joseph University) コメント</p> <p>5. Yohei KONDO (ILCAA Research Associate) “From the Dissociation to Coordination: A Case of the Modern Ibadis”</p> <p>6. Naoko KUWAHARA (Fukuyama City University) “Constitution and the Realm of Religious Personal Laws: Beyond “blindness of differences” and “absolute religious autonomy”?”</p> <p>(コメンテーター: Namie TSUJIGAMI (The University of Tokyo))</p> <p>7. Naofumi ABE (The University of Tokyo) “Armenians in local Iranian Society: Survival of a Religious Minority Community in a Muslim Majority Domain”</p> <p>(コメンテーター: Antranig DAKESSIAN (Haigazian University))</p>

	<p>8. Hidemi TAKAHASHI (The University of Tokyo) “Descriptions of Disasters in Barhebraeus’ Historical Works”</p> <p>9. Hiroko MIYOKAWA (Sophia University) “The Establishment of the Coptic Museum and its Nationalization”</p> <p>10. Ray MOUAWAD (Saint Joseph University) コメント</p>
	使用言語：英語
	JaCMES
	基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」, 東京大学中東地域研究センター
3月15日 (火)	<p>講演会: A. Azfar Moin (The University of Texas at Austin) “The Politics of Saint Shrines in the Persianate Empires”</p>
	使用言語：英語 (通訳なし)
	本郷サテライト 5階会議室
	科研費基盤研究(A)「イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として」, 基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」
3月18日 (金)	<p>国際ワークショップ: “Islam, Kingship, and Legitimacy in South Asia”</p> <p>1. Satoshi OGURA (Kyoto University) “Lakṣmī Becomes Dawla: Remarks on the Translation Strategy of Notions of Kingship in a Persian Translation of the Rājatarāṅgīnīs and the Following Chronicles”</p> <p>2. A. Azfar Moin (The University of Texas at Austin) “Universal Peace and Sun Worship in Mughal India: A “Hermetical” Revival in Islam?”</p>
	使用言語：英語
	AA研 (303)
	共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」, 科研費基盤研究(A)「イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として」, 基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」
3月21日 (月)	<p>国際ワークショップ: “Cultures and Societies in Asia and Africa”</p> <p>1. モハメドハムダン・ハジアドナン (マレーシア・サバ大学) 開会挨拶(1)</p> <p>2. 床呂郁哉(AA研所員) 開会挨拶(2)</p> <p>3. 講演(1). 祖田亮次 (大阪市立大学) 「マレーシア・サラワク州における小農アブラヤシ栽培とモザイク景観」</p> <p>4. 講演(2). 伏木香織 (大正大学) 「Suluk と Siu Lam Pek: 東南アジアと台湾における指人形劇ポテヒのトポロジー」</p> <p>5. 講演(3). 金子守恵 (京都大学) 「エチオピアにおけるエンセーテの生産に関する在来知: 30年間の変遷に注目して」</p> <p>6. 講演(4). グスニ・サート (マレーシア・サバ大学) 「サバ州のサマ・バジャウ人の社会的分類とその結果をめぐる諸問題」</p> <p>7. 講演(5). ヨン・パウリン (マレーシア・サバ大学) 「ラハ・ダトゥのシラム・コミュニティにおける伝統薬の慣行と挑戦: 予備的考察」</p> <p>討論 閉会</p>
	使用言語：英語

	コタキナバル Meeting Room, Faculty of Humanities, Arts and Heritage, Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu
	KKLO, School of Social Science, Universiti Malaysia Sabah
3月22日 (火)	講演会：“Lebanon 1949: A Newborn State on Film”
	使用言語：英語，アラビア語
	Metropolis Empire Sofil, Ashrafieh, Gerges Tueini Str., Bldg. 28, 1st floor, Beirut
	JaCMES, Notre Dame University-Louaize, 科研費基盤(A)海外調査「レバノン・シリア移民の拡張型ネットワークー自己多面化と空間構想力」

II-4.3.2 外国人研究員招聘

I-4.3.3 外国人研究員招聘を参照。

また、それぞれの業績はI-2.7.2 所員の研究業績一覧 外国人研究員の項を参照。

II-4.3.3 外国研究者受け入れ（フェロー等）

フェロー

呉 天 泰 (Wu, Tien-Tai)

研究主題：Studies on Indigenous Peoples of Taiwan in the Contemporary Japan

研究期間：2014.8.1～2015.7.30

受入教員：西井 涼子

John Bowden (ジョン バウデン)

研究主題：アトマジャヤ・インドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：塩原 朝子

研究成果

論文：“Towards a history, and an understanding of Indonesian slangar”, *NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*, vol.58, 2015.3, 9-24. (査読有)

JUKES, Anthony (アンソニー ジュークス)

研究主題：アトマジャヤ・インドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：塩原 朝子

研究成果

論文：“Makasar”, *Journal of the International Phonetic Association*, vol. 46-01, 2016.4, 99-111. (査読有)

SORIENTE, Antonia (アントニア ソリヤンテ)

研究主題：アトマジャヤ・インドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集

研究期間：2013.4.1～2016.3.31

受入教員：塩原 朝子

研究成果

1. 著書 : *Petualangan Unjung dan Mbui Kuvong. Sastra lisan dan Kamus Punan Tuvu' dari Kalimantan. (The adventures of Unjung and other Punan Tuvu' stories with a dictionary and grammatical notes, 2015, EFEO-KPG (Gramedia), Jakarta, Indonesia.*
2. 論文 : “Yang lalu yang tak lekang: Dongeng dan mitos suku Punan Tuvu' dari Kalimantan” (A very recent past: Stories and myth of the Punan Tuvu' in Kalimantan), *Petualangan Unjung dan Mbui Kuvong. Sastra lisan dan Kamus Punan Tuvu' dari Kalimantan. (The adventures of Unjung and other Punan Tuvu' stories with a dictionary and grammatical notes)* (ed. by Césard Nicolas, Antonio Guerreiro, Antonia Soriente (eds)), 2015, 21-45. (査読有)
3. 論文 : “Catatan tata bahasa Punan Tuvu” (Grammatical notes of the Punan Tuvu' language), *Petualangan Unjung dan Mbui Kuvong. Sastra lisan dan Kamus Punan Tuvu' dari Kalimantan. (The adventures of Unjung and other Punan Tuvu' stories with a dictionary and grammatical notes)* (ed. by Césard Nicolas, Antonio Guerreiro, Antonia Soriente (eds)), 2015, 47-62. (査読有)
4. 論文 : “Cerita rakyat Punan Tuvu” (Stories of the Punan Tuvu' in Kalimantan with translation in Indonesian), *Petualangan Unjung dan Mbui Kuvong. Sastra lisan dan Kamus Punan Tuvu' dari Kalimantan. (The adventures of Unjung and other Punan Tuvu' stories with a dictionary and grammatical notes)* (ed. by Césard Nicolas, Antonio Guerreiro, Antonia Soriente (eds)), 2015, 63-163. (査読有)
5. 論文 : “Kamus bahasa Punan Tuvu' - Bahasa Indonesia” (Dictionary Punan Tuvu'-Indonesia), *Petualangan Unjung dan Mbui Kuvong. Sastra lisan dan Kamus Punan Tuvu' dari Kalimantan. (The adventures of Unjung and other Punan Tuvu' stories with a dictionary and grammatical notes)* (ed. by Césard Nicolas, Antonio Guerreiro, Antonia Soriente (eds)), 2015, 187-236. (査読有)
6. 論文 : “The Languages and Peoples of the Müller Mountains: A Contribution to the Study of the Origins of Borneo's Nomads and their Languages”, *Wacana* (ed. by Wacana), vol.16, 2, 2015, 339-354. (査読有)
7. 口頭発表 : “Oral Tradition as a field of research in HG History, Language and Identity. Case studies from Africa and Indonesia”, University of Vienna: Conference on Hunter Gatherers societies CHAGS XI, 2015.0907-11, University of Vienna.
8. 口頭発表 : “Language Classification in Borneo: the Position of Merap”, Universitas Udayana Denpasar: Seminar Internasional Bahasa Dan Sastra Austronesia Dan Non-austronesia VII, 2015.08.28-29, Universitas Udayana Denpasar.
9. 口頭発表 : “Mbraa. A Modang-Bahau language? A preliminary description and classification of an endangered language”, Academia Sinica. Taipei: 13th International Conference on Austronesian Linguistics, 2015.07.18-23, Academia Sinica. Taipei.
10. 講演 : “A new look at the Kayanic branch: data from Merap”, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig: Diversity linguistics: Retrospect and Prospect”, 2015.05.1-3, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig.

YANTI (ジャンティ)

研究主題 : アトマジャヤ・インドネシアカソリック大学との共同編集による国際言語学雑誌 NUSA の編集

研究期間 : 2013.4.1~2016.3.31

受入教員 : 塩原 朝子

研究成果

1. 著書 : Critò Kitò: A Collection of Jambi Stories in the Seberang Dialect, Masyarakat Linguistik Indonesia, Jakarta.
2. 論文 : “The Grammar of Binding: Innate or Learned?”, *Cognition* 141, vol.58, 2015.4, 138-160. (査読有)
3. 論文 : “Infixation and Apophony in Malay: Description and Developmental Stages”, *Linguistik Indonesia (Journal of the Linguistic Society of Indonesia)*, vo.1.33-1, 2015.2, 1-19. (査読有)
4. 口頭発表 : “The Typology of Voice in Malayic: The development of agent-demoting passives”, *Academia Sinica: The 13th International Conference on Austronesian Linguistics*, 2015.07.18-23, Academia Sinica.

鄧 応文 (Deng Ying Wen)

研究主題 : 冷戦期における日本と東南アジアの関係

研究期間 : 2015.5.28~2015.7.23

受入教員 : 栗原浩英

研究成果

1. 論文：「越日関係：漸行漸近」『当代世界』2015年11期，59-62（査読有）
2. 口頭発表：「中国の東南アジア研究の現状と現段階における中越関係」，日本ベトナム研究者会議研究会，2015年7月6日，早稲田大学
3. 口頭発表：「在越南泰国的中国企业現状研究」，雲南社会科学院：「中越建交65周年記念国際研討会」，2015年9月10日，雲南社会科学院

ジュニア・フェロー

FAKHREJAHANI, Arezoo（アレズ・ファクレジャハニ）

研究主題：イランと中東他国との関係，そして，相違

研究期間：2014.4.1～2016.3.31

受入教員：飯塚 正人

周 太 加（ジュクタルジャ）

研究主題：青海近代史—アムドにおけるチベット人の文化活動を手掛かりとして

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：星 泉

研究成果

論文：「ボランティア先生の思い出」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』3，（チベット文学研究会（星泉・海老原志穂・大川謙作・三浦順子）編），2015.2, 26-30.

II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業

2015年度派遣者一覧

言語研修のための資料収集を目的とした派遣

新永悠人氏（成城大学非常勤講師）

目的：2016（平成28）年度言語研修『琉球語』実施のための教材作成準備作業

渡航先：日本（奄美大島宇検村湯湾集落）

期間：2015年8月27日～9月5日

西岡美樹氏（大阪大学大学院言語文化研究科専任講師）

目的：2016（平成28）年度言語研修『ヒンディー語』実施のための教材作成準備作業

渡航先：インド

期間：2015年8月29日～9月30日

西田文信氏（岩手大学人文社会科学部准教授）

目的：2016（平成28）年度言語研修『ゾンカ語』実施のための教材作成準備作業

渡航先：ブータン，タイ，日本

期間：2015年12月23日～2016年1月9日

II-4.4 研究成果と資料の公開

II-4.4.1 出版

2015年度にAA研から刊行された出版物は下記の通りである。なお，既刊書の電子化公開については「5.電子化公開」を参照のこと。

1. 逐次刊行物

『アジア・アフリカ言語文化研究』Journal of Asian and African Studies

① No.90 (2015.9)

② No.91 (2016.3)

編集：アジア・アフリカ言語文化研究所編集委員会（委員長：床呂郁哉）年に2回発行

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/jaas/back-issue>

所外の研究者をふくむ編集専門委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文を掲載。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ている。

『FIELDPLUS』 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/field-plus/back-issue>

① No.14 (2015.7) 巻頭特集 ともに生きる—霊長類学と人類学からのアプローチ
責任編集／河合香吏

② No.15 (2016.1) 巻頭特集 ひとと「もの」の関係性を探る—人間と非人間の境界の揺らぎと越境をめぐって 責任編集／床呂郁哉

多様な研究分野の垣根を超えて、世界のあらゆる地域をフィールドとする研究者たちの取り組みや経験を紹介する雑誌。年2回（1月・7月）刊行。

高校生以上の若い世代をふくむ多くの読者を対象として、豊富なカラー写真や図を使い、フィールド研究の面白さを伝えていく。

『アジア・アフリカの言語と言語学』 Asian and African Languages and Linguistics/AALL ISSN: 2188-0840

編集：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 『アジア・アフリカの言語と言語学』編集部

Vol.10 (2016.3) Special Feature: An Overview of Event Integration Patterns in African Languages 山越康裕

（編集責任者）《No.8より、オンラインジャーナル化》<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall/back-issue/>

フィールドワークに基づく記述的言語研究の成果を発信するために2006（平成18）年に創刊された学術雑誌。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の言語学分野の研究者が編集。本誌は、アジア・アフリカの言語を主な対象とし、一次データに基盤を置いた記述的研究の成果を共有することで、(i)言語システムの実現形である個別言語の包括的な理解を深め、(ii)人間言語の構造的多様性を明らかにし、(iii)言語記述・理論研究にも貢献することを目的としている。

2. 言語研修テキスト

① アラビア語パレスチナ方言

1. 『アラビア語パレスチナ方言研修テキスト1 文法編—*The Palestinian Arabic - Grammar*』, ILCAA Intensive Language Course 2015: Palestinian Arabic, Textbook 1; 依田純和 Yoda Sumikazu. 2015.12.25. ISBN: 978-4-86337-205-4.

2. 『アラビア語パレスチナ方言研修テキスト2 単語集—*The Palestinian Arabic - Glossary*』, ILCAA Intensive Language Course 2015: Palestinian Arabic, Textbook 2; 依田純和 Yoda Sumikazu. 2015.12.25. ISBN: 978-4-86337-206-1.

② モンゴル語

1. 『モンゴル語研修テキスト1 モンゴル語会話・講読—*Mongolian Conversation and Reader*』 ILCAA Intensive Language Course 2015: Mongolian, Textbook 1, 橋本勝, M.オーガンバイル, Hashimoto Masaru, and Uuganbayar Myagmarsuren 2015.7.27. ISBN: 978-4-86337-203-0.

2. 『モンゴル語研修テキスト2 明解モンゴル語文法—*Comprehensive Grammar of the Mongolian Language*』 ILCAA Intensive Language Course 2015: Mongolian Language, Textbook 2, 中嶋善輝 Nakashima Yoshiteru, 2015.1.23. ISBN: 978-4-86337-204-7.

③ 古ジャワ語

『「古ジャワ語基礎—文法と読解」*An Introduction to Old Javanese*』 ILCAA Intensive Language Course 2015, Old Javanese, Textbook, Molen, Willem van der. 2015.8.19. ISBN: 978-4-86337-207-8.

3. 地域・文化研究

東アジア (EAST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#eastasiaJ/>

『「華人」という描線—行為実践の場からの人類学的アプローチ』 *Describing "Something Chinese":*

Anthropological Analysis based on an Action-Centered Approach, 津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（編）Tsuda, Koji, Sakurada, Ryoko, and Fushiki, Kaori (eds.), 2016.3.20. ISBN: 978-4-86337-223-8.

北東アジア (NORTHEAST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#northeastasiaJ/>

1. 『ナーナイの文化と生活1 ツングース言語文化論集60』*Nanay Cullllture and Living 1*, 風間伸次郎（採

録・訳注) Kazama, Shinjiro(trans. and annotated), 2015.8.1. ISBN: 978-4-86337-209-2.

2. *Linguistic Typology of the North vol.3*, Berge, Anna, Hori Hirofumi, Kurebito Tokusu, Ebata Fuyuki, Syuryun Aizhaana, and Huang Xing, 2016. ISBN: 978-4-86337-218-4.

東南アジア (SOUTHEAST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#southeastasia/>

1. *The Shanke Language*, [LSTCA104] Linguistic Survey of Tay Cultural Area, Shintani, Tadahiko L. A. 2015.6.24. ISBN: 978-4-86337-183-5.
2. *The Zotung Language*, [LSTCA105] Linguistic Survey of Tay Cultural Area, Shintani, Tadahiko L. A. 2015.9.30. ISBN: 978-4-86337-210-8.
3. *The Kadaw Language*, [LSTCA106] Linguistic Survey of Tay Cultural Area, Shintani, Tadahiko L. A. 2015.12.25. ISBN: 978-4-86337-174-3.
4. *The Kakawin Ghaṭotkacāśraya by Mpu Panuluh*, [JVS-3] Javanese Studies: Contributions to the Study of Javanese Literature, Culture and History, Robson, Stuart (ed. and trans.) 2016.3. ISBN 978-4-86337-224-5.
5. *Shaṭṭārīyah silsilah in Aceh, Java, and the Lanao area of Mindanao*, [JVS-4] Javanese Studies: Contributions to the Study of Javanese Literature, Culture and History, Fathurahman, Oman, 2016.3. ISBN: 978-4-86337-225-2.

南アジア (SOUTH ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#southasia/>

1. *Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya*, Sakai, Masamichi, and Takashima Jun, 2015. ISBN: 978-4-86337-213-9.
2. 『チベット文学と映画制作の現在 Sernya Vol. 3』 *Tibetan Literature and Filmmaking Sernya Vol. 3*, 星泉・海老原志穂・大川謙作・三浦順子ほか(編), Hoshi Izumi, Ebihara Shiho, Okawa Kensaku, Miura Junko et al. 2016.1.30. ISBN: 978-4-86337-217-7.
3. 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』(14世紀) に基づいて—』 *A Grammar of Classical Tibetan based on The Clear Mirror: A Royal Genealogy (the 14th century)*, 星泉 Hoshi Izumi, 2016.3.28. ISBN: 978-4-86337-226-9.

西アジア (WEST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#westasia/>

[Studia Culturae Islamicae]イスラム文化シリーズ ※(ISSN1340-5306)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/islamicae/>

1. *Tuḥfat al-Khānī or Tārīkh-I Raḥīm Khānī: An Early Manghit Chronicle in Central Asia*, Muḥammad Qāzī Vafā' Karmīnagī (d.1769). [SCI-103] Studia Culturae Islamicae [MEIS-20] Middle East and Islamic Studies Series, Sefatgol, Mansur (ed.), and Kondo Nobuaki (collabo.), 2015. ISBN: 978-4-86337-201-6
2. 『近世イスラーム国家史研究の現在』 *Studies on Early Modern Islamic Dynasties: The State of the Art*, [SCI-104] Studia Culturae Islamicae [MEIS-21] Middle East and Islamic Studies Series 近藤信彰(編) Kondo, Nobuaki (ed.), 2015.7.15. ISBN: 978-4-86337-202-3.
3. *Mapping Safavid Iran*, [SCI-105] Studia Culturae Islamicae [MEIS-22] Middle East and Islamic Studies Series, Kondo Nobuaki (ed.), 2015. ISBN: 978-4-86337-211-5.

アフリカ (AFRICA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#africa/>

1. 『モーリシャスのボージプリー語民話』 *Bhojpurī folktales of Mauritius*, 町田和彦・小田淳一・杉本星子・ギルジャーナンドシング ビーセーサル(アルヴィンド)(編訳) Machida Kazuhiko, Oda Jun'ichi, Sugimoto Seiko, and Geerjandsingh Bissessur (Arvind) (eds.), 2016.3.31. ISBN: 978-4-86337-215-3.
2. 『マダガスカルの人 II—ヴェズ・タンドゥルイ・マシクル・ベツイミサラカ・ツイミヘティ—』 *Malagasy Boky II Angano* 飯田卓・西本希呼・ラザフィアルヴェニ ミシエル・深澤秀夫(編訳), Iida Taku, Nishimoto Noa, Razafiarivony Michel, and Fukazawa Hideo (eds.), 2016.3.31. ISBN: 978-4-86337-216-0.
3. *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*, Shiino Wakana, Shiraiishi Soichiro, and Ondicho Tom, 2016. ISBN: 978-4-86337-219-1.
4. 『食と農のアフリカ史—現代の基層に迫る』 *A History of Food and Agriculture in Africa: Exploring the Basis of Modernity*, 石川博樹・小松かおり・藤本武(編), Ishikawa Hiroki, Komatsu Kaori, and Fujimoto Takeshi (eds.), 2016.3.31. ISBN: 978-4-86337-222-1.

広域 (EXTENSIVE AREAS) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#extensive/>

1. *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*. Linguistic Dynamics Science Project 2, 2015.12.25. ISBN: 978-4-86337-212-2
2. 『科学と文化をつなぐ アナロジーという思考様式』 *Connecting Science and Culture*, 春日直樹(編) Kasuga Naoki (ed.), 2016.3.21. ISBN: 978-4-86337-214-6.
3. 『他者—人類社会の進化』 *Otherness: The Evolution of Human Sociality*, 河合香吏 Kawai Kaori, 2016.3.25.

ISBN: 978-4-86337-220-7.

4. 『移民／難民のシティズンシップ』 *Citizenship for Migrants and Refugees: A Comparative Study of Institutions and Practices of Inclusion and Exclusion from Nation-States*, 錦田愛子 (編) Nishikida Aiko (ed.), 2016.3.31. ISBN: 978-4-86337-221-4.

4. 電子出版物

2015 年度から出版の形態の一つとして電子書籍の形も採用し、従来の出版と同様の水準の書籍としての品質の維持、および ISBN の付与を伴った形での電子出版を行なうことにした。学術的な引用についての標準が書籍と同様の形態のものについてしか存在しないという事情から、当面は PDF 形式に限り、改変不能にプロテクトをかけた上で、検索やテキストのコピーは自由な形式で公開していくこととなった。

<https://publication.aa-ken.jp/>

1. Masamichi SAKAI and Jun TAKASHIMA, *Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya*
2. Linguistic Dynamics Science Project 2, *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*

5. 電子化公開

既に刊行された出版物のうち、AA 研から著作権者からの許諾を得て 2015 年度に電子化公開された出版物は下記の通りである。

1. B203『モンゴル語会話・講読』*Mongolian Conversation and Reader*, 橋本勝・M. オーガンバイヤル, Hashimoto Masaru, and Uuganbayar Myagmarsuren, 2015.7.27. ISBN: 978-4-86337-203-0.
2. <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/ilc-list/20153>
3. B207『平成 27 年度言語研修 古ジャワ語研修テキスト「古ジャワ語基礎—文法と読解」』
An Introduction to Old Javanese, Molen, Willem van der, 2015.8.19. ISBN: 978-4-86337-207-8.
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/ilc-list/20152>
4. B212 *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*, Linguistic Dynamics Science Project 2. 2015.12.25. ISBN: 978-4-86337-212-2. <https://publication.aa-ken.jp/>
5. B213 *Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya*, Sakai Masamichi, and Takashima Jun, 2015. ISBN: 978-4-86337-213-9. <https://publication.aa-ken.jp/>

II-4.4.2 データベース構築・公開状況一覧

2015 年度 新規追加 2 件 :

ベンデ語の語学教材 (“Tusahule Sibhende”(2015)) のマルチメディア (Web) 版の作成
(阿部優子)

<http://bendeproject.aa-ken.jp/>

オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化 (江川ひかり)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>

チュルク諸語対照基礎語彙 (児倉徳和, 風間伸次郎)

<http://turkbv.aa-ken.jp/>

アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開 (奥田統己, 山越康裕)

<http://ainugo.aa-ken.jp/index.html>

チベット牧畜語彙データベース (星泉, 海老原志穂, 津曲真一, 平田昌弘, 別所裕介, ジャブ, ジュ・カザン, ナムタルジャ, 山口哲由, 小川龍之介)

<http://nomadic.aa-ken.jp/>

オンライン・スライアモン語テキスト集 (渡辺己)

<http://sliammontexts.aa-ken.jp>

ソングイ語テキスト集の電子化と公開 (佐久間寛)

<http://songhay.aa-ken.jp/>

インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター (塩原朝子, 内海敦子, 稲垣和也)
<http://id-lang-rc.aa-ken.jp/>

リアルタイムフィールドワーク報告システムの構築 (梅川通久)
<http://rfr.aa-ken.jp/>

AA 研辞書データベースの WebAPI 提供への試み (松田訓典)
<http://ircdict.aa-ken.jp/>

ハウサ語, ヨルバ語電子辞書の作成と公開 (塩田勝彦, 町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/IRC/2013/Hausa_Yoruba/Hausa_Yoruba_dic.html

パレスチナ/イスラエルにおける共存を求める運動の記録 (岩崎稔, 錦田愛子, 武田祥英)
<http://otherisrael.aa-ken.jp/>

海外学術調査総括班
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gjsr/index.htm>

アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態 (梶茂樹, 飯塚正人, 石井溥, 小田淳一, 黒木英充, 塩原朝子, 高知尾仁, 永原陽子, Peri Bhaskararao, 深澤秀夫, 星泉)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tagengo/>

地域研究による「人間の安全保障学」の構築 (黒木英充)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/humsecr/>

GIS を用いた認知地図の解析の試み (河合香吏)
http://irc.aa.tufs.ac.jp/gis/gis_project.html

言語調査票 (峰岸真琴)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm

「アサバスカンリバイバル」アサバスカ諸語の言語と文化に関する展示会と学会 (呉人徳司, 中山俊秀, 小田昌教, ジェフ・リアー, 峰岸真琴, 高島淳, 内堀基光)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/athabasca/>

浅井タケ昔話全集 I, II (峰岸真琴)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html

GICAS (COE 拠点) (ペーリ・バースカララーオ, 町田和彦)
<http://www.gicas.jp/>

福建省, 台湾の文化 (三尾裕子)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/>

ベトナム ホイアン歴史民族誌 (三尾裕子, 澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/DAMCSR/hoian.html>

中部ベトナム地名対応表 (現在⇔『同慶地輿志』所収) (澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-viet.html>

チャム碑文検索 (高島淳)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/khmercham/cham_insc.html

チャム碑文画像データベース (澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc/chaminscindex.html>

チャムの碑文 (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc.html>

ビルマ文字のローマ字転写方式 (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf>

ビルマ文字の碑文・墨文 (画像+転写) (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/burminsc.html>

ビルマ語学習のためのテキスト (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/oldtexts-sjis.html>

カチン州地名データベース (試験公開) (澤田英夫・梅川通久)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-kachin.html>

20世紀前半のインドネシア華人関連資料コレクション (津田浩司)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/arsip_tionghoa/

ムラユ語-外来語辞典 “Kitab VORTARO” (津田浩司)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/vortaro/>

南タイホームページ (西井涼子, アレックス・ホーストマン)

http://www.uni-muenster.de/Ethnologie/South_Thai/

サンスクリット電子辞書 (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/sktdic/index.html>

インド聖典データベース (高島淳)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/gicas/ind_scripture.html

ヒンドゥーの神々の画像様相 (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/indspace/dcsidx.html>

アジア文字曼陀羅～インド系文字の旅 (宮崎恒二, 町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/>

Saiva Scriptures (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/saiva/>

アジア諸文字実装プロジェクト (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/asti_j.htm

インド憲法 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/constitution_of_india/consti_top_j.htm

デーヴァナーガリー文字 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/grammatology/devanagari/dvng_r_top_j.htm

ヒンドゥー教の神々 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/hindu_gods/gods_top_j.htm

インド地図 (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7ekmach/map.htm>

ヒンディー語電子辞典 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/mrd/mrd_top_j.htm

ヒンディー語テキストコーパス (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/txtsrchj.htm>

ヒンディー語の文字転写規則 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/dv_trans/dv_tr_j.htm

こうすれば話せる CD ヒンディー語 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/hindi/asahi/as_top_j.htm

エクスプレスヒンディー語 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/hindi/express_hindi/ex_top_j.htm

ヒンディー語オノマトペ (擬態語・擬声語) (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/onoma.htm>

多言語処理技術の基盤整備 (NEDO プロジェクト 2000-2002) (星泉, 町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ekmach/nedo/nedo_top_j.htm

多言語処理技術の基盤整備 (町田和彦, 星泉)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/nedo/nedo_top_j.htm

サンタル語辞書・検索 (峰岸真琴)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Emmine/india/india-j.htm>

現代チベット語動詞辞典 (星泉)

<http://star.aacore.jp/vdic/>

チベットの言語と文化 (星泉)

<http://star.aa.tufs.ac.jp/>

Old Tibetan Documents Online (URL 修正)

(星泉, 今枝由郎, 武内紹人, 岩尾一史, 石川巖, 大原良通, 西田愛, ブランドン・ドットソン, ナタン・ヒル, サム・ヴァン・シャイク)

<http://otdo.aa-ken.jp/>

チベット地図／人名・地名検索 (星泉)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ehoshi/cgi-bin/dictionary/TJmap.html>

チベット語 IM (星泉)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7Ehoshi/tibetjiten/jitenframe.html>

アラビア文字の旅 (宮崎恒二, 町田和彦)

<http://www.gicas.jp/a-moji/index.html>

近現代アラブ・イスラーム研究 (飯塚正人)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/>

カイロの肖像・19世紀 (黒木英充)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/kairo/>

オスマン朝演劇ポスター (飯塚正人)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>

トムソン写真集 (吉澤誠一郎)

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/thomson/>

オスマン古地図 (jpeg データ) (黒木英充)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/map/frameM.html>

マダガスカル研究 (深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>

西アフリカ民族誌 (真島一郎)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/>

フィジー語 CAI (菊澤律子)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7eritsuko/1999/fiji/lesson.html>

ネパール村落民族誌 (石井溥)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~hishii/contents.html>

西夏文字研究 (中嶋幹起)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mnaka/index.htm>

インターネット西夏学会 (中嶋幹起)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mnaka/tangutindex.htm>

ゾンカ語・英語辞書電子化 (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

ウルドゥー語・古典ヒンディー語辞書 (町田和彦)

http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_09.html

Premchand 2011 (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/premchand/mansarovar/mansarovar.htm>

「AjaxIME」(多言語・多文字文字入力システム) (町田和彦)

http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/AjaxIME/AjaxIME_09.html

日本人の言語能力発達過程のコーパス化 (峰岸真琴)

<https://sites.google.com/site/yanyunenglifadaguocheng/>

スース地方 (モロッコ) の吟遊詩人による 20 世紀前半の音源のデジタル化 (小田淳一, 堀内正樹)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/chants_berberes.html

ツングース諸語の言語データデジタル化およびオンライン公開 (渡辺己)

<http://coe.aa.tufs.ac.jp/tungus/home.html>

インド演劇論根本教典の電子データ化 (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/engekiron.html>

アジア・アフリカ手話言語情報室 (AASL) の構築 (星泉, 亀井伸孝)

<http://aasl.aacore.jp/wiki/>

アラビア文字紀年銘変換プログラム (高松洋一)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/tarih.html>

「モッラー・ナスレディーン」修復デジタル化プロジェクト (近藤信彰)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/index.html

全文検索システム (町田和彦)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/server/fts.htm>

環インド洋におけるマダガスカルの歴史・文化・生業についての画像資料 (深澤秀夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/slideimages/>

フィールド3D マッピングプロジェクト：歴史と文化の時空間表現 (椎野若菜)
<http://aacore.cloc.jp/mosaic/>

Asian Photograph Selection (澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/asianphoto/>

インド洋民話のDB化 (小田淳一)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html

「ホイアン歴史民族誌」構築・公開プロジェクト (三尾裕子, 澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/DAMCSR/hoian-ethn.html>

植民地期台湾に関する人文科学的研究 (三尾裕子)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/cafe/Taiwan1.html>

地名にみる歴史の痕跡 (澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/>

『エジプト週報』のデジタル化と公開 (小田淳一)
<http://irc.aa.tufs.ac.jp/egypt/semaine/>

言語調査票のデジタル化 (町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html

タミル語 2000 語 (町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html

電子辞書プロジェクト (高島淳)
<http://www.aa-ken.jp/edic/>
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_25.html

インド・歴史書文献の電子データ化 (高島淳)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/rajatarangini_p.html

モンゴル語文献資料の電子化利用の研究 (栗林均, 町田和彦)
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>

多重置換システムの構築 (町田和彦)
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_02.html

ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析 (町田和彦, 萩田博, 萬宮健策)
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_08.html
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_09.html

アラビア文字紀年銘 (クロノグラム) 年代計算プログラムの公開 (高松洋一)
<http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/>

II-4.4.3 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣

講演：第41回栃木県オリエントセミナー「『イスラム国』を産み出したもの
イラク戦争とシリア内戦」

講師：飯塚 正人

日時：2015年5月30日 会場：栃木県立美術館 主催：栃木県オリエント協会

対象者：社会人

講演：日本イスラム協会公開講演会「アラブ諸国におけるイスラム主義運動の動向」

講師：飯塚 正人

日時：2015年6月13日 会場：東京大学文学部二番大教室 主催：日本イスラム協会

対象者：社会人

講演：警部任用科新課程第43期研修

講師：飯塚 正人

日時：2015年6月17日 会場：警察大学校第一講堂 主催：警察大学校

対象者：日本全国の警部・警部補任用予定者

講演：明治大学アジア史講座 No.21

「秦・漢帝国の実像に迫る 中国古代史研究の最新成果」第4回

講師：陶安 あんど

日時：2015年6月19日 会場：明治大学駿河台キャンパス

主催：明治大学リバティアカデミー

講演：映画『ルンタ』公開記念トークイベント「今、チベットを知るために」

講師：星 泉

日時：2015年7月2日 場所：東京堂書店神田神保町店6階 東京堂ホール

主催：蓮ユニバース

講演：第52回法務省入国管理局関係職員特別科（難民調査官）研修

「イスラム世界を理解する」

講師：飯塚 正人

日時：2015年7月17日 会場：法務省法務総合研究所

主催：法務省 対象者：法務省入国管理局難民調査官

講演：日本学術会議サイエンスカフェ

「ISILはイスラームではないのか—近現代イスラーム思想史から考える」

講師：飯塚 正人

日時：2015年7月24日 会場：文部科学省情報ひろば

主催：日本学術会議

講演：高大連携事業『東京外国語大学夏期世界史セミナー 世界史の最前線』

「なぜいま ISなのか—近現代イスラーム（思想）史から考える」

講師：飯塚 正人

日時：2015年7月27日 会場：東京外国語大学 研究講義棟227教室

主催：東京外国語大学 海外事情研究所

講演：東進ハイスクール「大学・学部研究会」招待講演「イスラム教徒の考え方と意を知るために」

講師：飯塚 正人

日時：2015年8月5日 会場：TKP ガーデンシティ品川 主催：東進ハイスクール

対象者：会員

講演：国際交流・国際協力活動セミナー・ワークショップ ムスリム観光客のおもてなしセミナー「ムスリム観光客受け入れのために―イスラームの基礎知識」

講師：飯塚 正人

日時：2015年9月11日 会場：コンベンションルーム AP 東京八重洲通り

主催：日本観光振興協会

講演：警部任用科新課程第44期研修「イスラーム情勢」

講師：飯塚 正人

日時：2015年9月2日 会場：警察大学校第一講堂 主催：警察大学校

対象者：日本全国の警部・警部補任用予定者

講演：NPO 法人地球ことば村・世界言語博物館9月のことばのサロン

「ニジェールのソングアイ民族のことばと生活・文化について」

「冗談とウソ?サハラのほとりのことばの世界」

講師：佐久間 寛

日時：2015年9月19日 会場：慶應義塾三田キャンパス

主催：NPO 法人地球ことば村・世界言語博物館

対象者：社会人・一般

講演：在マダガスカル邦人会文化講演会「ANDEVO・ZOMAKA・4mi

―アンタナナリヴにおける貧困層をめぐる歴史的・社会的背景―

講師：深澤 秀夫

日時：2015年9月19日

主催及び会場：駐マダガスカル日本大使館

Society of Japanese Residents in Madagascar, Embassy of Japan in Madagascar,

在マダガスカル邦人会

対象者：在マダガスカル邦人

講演：成田社会人大学国際社会課程『21世紀世界の社会と経済 深まる混迷と確執』

「アフリカの社会と経済 ニジェールのほとりから省みる」

講師：佐久間 寛

日時：2015年10月 会場および主催：成田市 市役所 大会議室

対象者：成田市民

講演：千葉県人権啓発指導者養成講座「イスラームとは何か」

講師：飯塚 正人

日時：2015年10月20日 会場：千葉県教育会館

主催：一般社団法人 千葉県人権センター

対象者：社会人

講演：国際テロリズム捜査研修

講師：飯塚 正人

日時：2015年10月28日 会場：警察大学校国際警察センター

主催：警察庁イスラーム情勢

対象者：全国都道府県警の国際テロリズム捜査担当者、

講演：第48回法務省入国管理局関係職員高等科研修「イスラーム世界を理解する」

講師：飯塚 正人

日時：2015年11月6日 会場および主催：法務省 法務総合研究所

対象者：法務省入国管理局上級職員

講演：平成27年度文化／社会人類学研究セミナー

「飛内悠子『帰還民の生活誌：南スーダン共和国カジョケジ郡におけるククの人々と聖公会』へのコメント」

講師：佐久間 寛 河合香吏（司会）

日時：2015年11月7日

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

301 小会議室, 306 マルチメディアセミナー室

主催：基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

共催：日本文化人類学会

講演：調布市北部公民館国際理解講座

『なぜいま「イスラム国」なのか 中東情勢と近現代イスラーム（思想）史から考える』

「「イスラム国」を産み出したもの イラク戦争とシリア内戦」（2015.11.18）,

「「イスラム国」を支持する人びと 20世紀イスラーム思想史の不幸」（11.25）

講師：飯塚 正人

日時：2015年11月18日, 25日 会場および主催：調布市北部公民館

対象者：社会人

講演：府中市立中央図書館講演会「2時間でわかるイスラーム」

講師：飯塚 正人

日時：2015年12月13日 会場および主催：府中市立中央図書館

対象者：社会人

講演：第12回法務省入国管理局関係職員専攻科研修「イスラム世界を理解する」

講師：飯塚 正人

日時：2016年1月27日 会場および主催：法務省 法務総合研究所

対象者：法務省入国管理局職員

講演：警部任用科新課程第45期研修「イスラム情勢」

講師：飯塚 正人

日時：2016年1月28日 会場および主催：警察大学校 第一講堂

対象者：日本全国の警部・警部補任用予定者

講演：在マダガスカル邦人会文化講演会

「2009年政争の近景と遠景を言説に読み解く—ラヴァルマナナ政権7年の光と影—」, 在マダガスカル邦人会文化講演会

講師：深澤 秀夫

日時：2015年2月20日

主催及び会場：駐マダガスカル日本大使館, 在マダガスカル邦人会

対象者：在マダガスカル邦人

講演：日本学術会議サイエンスカフェ「中国北方の少数言語：シネヘン・ブリヤート語について語ろう」

講師：山越 康裕

日時：2016年2月27日 会場：本屋 B&B

主催：日本学術会議

講演：2015（平成27）年度 東京外国語大学連続講座『暮らしの空間と女性』

主催：東京外国語大学, 府中市生涯学習センター

会場：府中市生涯学習センター 研修室

講師：3月1日：西井涼子「紛争状況下で日常を生きる—南タイのムスリム女性」

3月8日：椎野若菜「東アフリカ・都市と村に及ぶ変化と女性の暮らし」

3月15日：錦田愛子「パレスチナ・ガサ地区の女性が担う NGO 活動」

3月22日：星泉「チベット牧畜民の女の仕事—乳と糞のある暮らし」

II-4.5 公共的利用

II-4.5.1 共同利用スペース等の稼動状況

セミナー室 (301)

共同利用・共同研究課題研究会

- | | |
|------------------------|--|
| 2015/5/8 (金) ~10 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第20回研究会 |
| 2015/6/19 (金) ~21 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第21回研究会 |
| 2015/7/11 (土)・12 (日) | 共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」第5回研究会 |
| 2015/9/11 (金) ~13 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第22回研究会 |
| 2015/10/04 (日) | 共同利用・共同研究課題「公開資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第2回研究会 |
| 2015/10/9 (金) ~11 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第23回研究会 |
| 2015/12/5 (土) | 共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」第5回研究会 |
| 2015/12/11 (金) ~13 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第24回研究会 |
| 2015/12/19 (土) | 共同利用・共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」第5回研究会 |
| 2016/1/8 (金) ~10 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第25回研究会 |
| 2016/2/12 (金) ~14 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第26回研究会 |
| 2016/2/19 (金) ~21 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第27回研究会 |
| 2016/3/5 (土) | 共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治—文化学のために」第3回研究会 |
| 2016/3/11 (金) ~13 (日) | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)」第28回研究会 |

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究等

- | | |
|--------------------|---|
| 2015/4/7 (火) | 情報資源利用研究センター・国際ワークショップ |
| 2015/6/18 (木) | 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第1回公開セミナー |
| 2015/7/2 (木) | 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第2回公開セミナー |
| 2015/11/7 (土) | 平成27年度「文化／社会人類学研究セミナー」 |
| 2016/2/5 (金)・6 (土) | 言語研修チャム語フォローアップミーティング |
| 2016/3/4 (金) | 情報資源利用研究センター(IRC)ワークショップ「複雑系としての社会システム研究の可能性を考える：言語体系を例に」 |

小会議室 (302)

共同利用・共同研究課題研究会

- | | |
|---------------------|------------------------------------|
| 2015/5/9 (土)・10 (日) | 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研 |
|---------------------|------------------------------------|

- 究：思考プロセスの観点からのアプローチ」第7回研究会
- 2015/6/6 (土)・7 (日) 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第4回研究会
- 2015/6/20 (土) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」第9回研究会
- 2015/6/28 (日) 共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」第4回研究会
- 2015/7/11 (土) 共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化 (2)」第8回研究会
- 2015/7/26 (日) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」第10回研究会
- 2015/12/5 (土)・6 (日) 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」第8回研究会
- 2016/1/9 (土)・10 (日) 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」第3回研究会
- 2016/1/24 (日) 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第9回研究会
- 2016/3/26 (土)・27 (日) 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第6回研究会
- シンポジウム・ワークショップ・基幹研究等
- 2015/12/18 (金) 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第6回公開セミナー
- 2016/1/27 (水)・28 (木) ワークショップ「チベット文学と映画制作の現在」
- 大会議室 (303)**
- 共同利用・共同研究課題研究会
- 2015/7/12 (日) 共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」第5回研究会
- 2015/10/3 (土)～4 (日) 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」第1回研究会
- 2015/10/17 (土)～18 (日) 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」第2回研究会
- 2016/2/16 (火)～17 (水) 共同利用・共同研究課題「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存 (第2期)」第5回研究会
- 2016/3/18 (金) 国際ワークショップ Islam, Kingship, and Legitimacy in South Asia／共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」第7回研究会
- シンポジウム・ワークショップ・基幹研究等
- 2015/6/27 (土) 海外学術調査フォーラム
- 2015/11/01 (日) 地域研究コンソーシアム 2015年度年次集会における一般公開シンポジウム 2015年度 JCAS 年次集会シンポジウム
- 2015/11/27 (金) チベット映画上映会：『五色の矢』
- 2015/12/13 (日) 基幹研究「人類学におけるマイクロマクロ系の連関」公開シンポジウム「顔と身体表現に基づく異文化理解」
- 2016/1/9 (土)～10 (日) 第8回オスマン文書セミナー／共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」第6回研究会
- マルチメディア会議室 (304)**
- 共同利用・共同研究課題研究会
- 2015/5/2 (土)・3 (日) 共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」第4回研究

- 会
- 2015/5/9 (土)・10 (日) 共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」第1回研究会【公開】
- 2015/5/23 (土) 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第1回研究会
- 2015/6/7 (日) 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為」【公開】
- 2015/7/4 (土) 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」第1回研究会
- 2015/7/11 (土) 共同利用・共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」第4回研究会
- 2015/10/3 (土) 共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」第2回研究会
- 2015/10/10 (土)・11 (日) 共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」第2回研究会【公開】
- 2015/10/17 (土)・18 (日) 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」第2回研究会
- 2015/10/18 (土) 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第2回研究会
- 2015/12/6 (日) 共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」第6回研究会【公開】
- 2015/12/19 (土)・20 (日) 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」第2回研究会
- 2016/1/23 (土) 公開ワークショップ「ノダ文相当表現の通言語的研究」／共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」第9回研究会
- 2016/2/21 (日) 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」第6回研究会【公開】
- 2016/2/29 (月)～3/1 (火) 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」第3回研究会
- 2016/3/11 (金) 共同利用・共同研究課題「刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」
- 2016/3/22 (火)・23 (水) 共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」第8回研究会【公開】
- シンポジウム・ワークショップ・基幹研究等
- 2015/4/16 (木) AA 研フォーラム【公開】カール・アレクサンダー・アデラル (AA 研外国人研究員) “Linguistic Landscaping in South Borneo”
- 2015/5/18 (月)～21 (木) The Documentary Linguistics Seminar -Introduction to Documentary Linguistics- 【公開】
- 2015/5/31 (日) フィールド言語学ワークショップ：第10回 文法研究ワークショップ「名詞複数標識の多義性 —純粋複数・近似複数・曖昧・例示—」【公開】
- 2015/6/25 (木) AA 研フォーラム【公開】ファジャール・イブヌ・トゥファイル (AA 研外国人研究員) “Keraton (Palace) and the Politics of Adat in Indonesia”
- 2015/7/2 (木) AA 研フォーラム【公開】メフメト・オルメズ (AA 研外国人研究員) “10 Years of Old Uighur Suvarnaprabhasa-sutra Studies”
- 2015/7/9 (木) AA 研フォーラム【公開】朱東芹 (AA 研外国人研究員) “The Status quo, Problems and Perspective of the Filipino-Chinese Associations”, ピーター・ジョン・ワーズリー (AA 研外国人研究員) “Fact or fiction? Magical Realism and Mpu Prapañca’s Fourteenth Century kakawin Deśawarnana.”
- 2015/8/10 (月) AA 研フォーラム【公開】言語研修 (アラビア語パレスチナ方言) 文化講演：金子由佳 (日本国際ボランティアセンター)「パレスチナガザ地区・最新情報」
- 2015/9/4 (金) AA 研フォーラム【公開】言語研修 (アラビア語パレスチナ方言) 文化講演：菅瀬晶子 (国立民族学博物館)「パレスチナのキリスト教徒：その歴史、文化、現在」

- 2015/9/21 (月) ~24 (木) 中東☆イスラーム教育セミナー
- 2015/11/2 (月) 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第3回公開セミナー【公開】
- 2015/11/12 (木) AA 研フォーラム【公開】チャンロッチャナキット・パンディット (AA 研外国人研究員) “Thai Style Judicialization and the Problem of Parliamentary Supremacy”
- 2015/11/18 (水) フィールド言語学ワークショップ:テクニカルワークショップ「言語の調査・研究のための動画制作」【公開】
- 2015/11/19 (木) ~23 (月) フィールド言語学カフェ—世界の言語で読む Le Petit Prince—【公開】アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの「星の王子様」に関する展示
- 2015/12/2 (水) 基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」2015年度第2回国際ワークショップ【公開】
- 2015/12/10 (木) AA 研フォーラム【公開】佐久間寛 (AA 研所員)「明かされる場, 隠される者, 映される事—西アフリカ農村の命名式をめぐる映像=人類学」, 荻谷康太 (AA 研所員)「19世紀初頭のハウサランドにおける不信仰者の分類」, 呉人徳司 (AA 研所員)「フィールド言語学の楽しみと苦しみ」, 高島淳 (AA 研所員)「南インドにおける終末期の仏教」
- 2015/12/17 (木) AA 研フォーラム【公開】ジャルガル・バヤンダライエビチ・バダガロフ (AA 研外国人研究員) “Two Future Tenses in Buryat”, ジョン・フレデリック・ボーデン (AA 研外国人研究員) “An introduction to Colloquial Jakarta Indonesian: a language without grammar”
- 2015/12/18 (金) 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「領土の再編と地域研究: 南スーダン独立後「スーダン地域再考の試み」」【公開】
- 2016/1/9 (土) 基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」公開合評会【公開】
- 2016/1/14 (木) フィールド言語学カフェ・特別編「ブリヤートの言語と文化」【公開】
- 2016/1/21 (木) 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第7回公開セミナー【公開】アフリカのアニメーション: その表現の挑戦 上映作品: 1. 野ウサギとライオン (8分); 2. ソアンバ, サバンナの王様 (10分); 3. 氾濫 (1): プラスチックごみ (30分), コメントーター: 岡崎彰 (AA 研フェロー)
- 2016/1/28 (木) 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第8回公開セミナー【公開】
- 2016/1/30 (土)・31 (日) シンポジウム「チベット文学と映画制作の現在」【公開】
- 2016/2/3 (水) 情報資源利用研究センター・国際ワークショップ【公開】
- 2016/2/18 (木) ~20 (土) 共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」第9回研究会【公開】第3回オーストロネシア諸語の情報構造に関する国際ワークショップ
- 2016/3/10 (木) AA 研フォーラム【公開】退職所員記念講演: 宮崎恒二 (AA 研所員) 「ジャワ社会における交換・移動・文字文化: 研究の概略と環境について」
- 2016/3/13 (日) 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開シンポジウム「食と農のアフリカ史を考える」/共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化 (2)」第10回研究会【公開】
- 2016/3/21 (月) 言語研修シベ語フォローアップミーティング
- 2016/3/24 (木) フィールド言語学ワークショップ (特別篇)【公開】
- マルチメディアセミナー室 (306)**
- 共同利用・共同研究課題研究会
- 2015/5/10 (日) 共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」第7回研究会【公開】
- 2015/5/16 (土) 共同利用・共同研究課題「「もの」の人類学的研究 (2) 人間/非人間のダイナミクス」第4回研究会
- 2015/5/23 (土) 共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」第1回研

- 研究会
- 2015/6/20 (土) 共同利用・共同研究課題『『プレゼンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために』第1回研究会【公開】中村隆之(AA研共同研究員,大東文化大学)「詩の国民性(民族性)とは何か? 脱植民地化期のフランス語圏カリブ・アフリカ知識人における文学の問いをめぐって」
- 2015/6/28 (日) 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」第1回研究会
- 2015/7/05 (日) 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」第4回研究会【公開】
- 2015/7/11 (土) 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(3)」【成果取りまとめ】『他者:人類社会の進化』の執筆者による編集会議
- 2015/7/12 (日) 共同利用・共同研究課題「『もの』の人類学的研究(2)人間/非人間のダイナミクス」第5回研究会
- 2015/7/26 (日) 共同利用・共同研究課題「思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方」【成果取りまとめ】成果論集『科学と文化をつなぐ(仮題)』の執筆者全員による論文の読み合わせ
- 2015/10/3 (土) 共同利用・共同研究課題『『プレゼンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために』第2回研究会【公開】
- 2015/10/25 (日) 共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」第8回研究会【公開】
- 2015/10/25 (日) 共同利用・共同研究課題「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化(2)」第9回研究会 成果出版『食と農のアフリカ史』『総説』合評会
- 2015/11/7 (土) 平成27年度「文化/社会人類学研究セミナー」【公開】
- 2015/11/14 (土)・15 (日) 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」第2回研究会
- 2015/11/23 (月) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」第11回研究会【公開】ジャワ語史資料紹介
- 2015/12/5 (土) 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民/難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」第5回研究会
- 2015/12/6 (日) 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第3回研究会
- 2016/1/23 (土) 共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第4回研究会
- 2016/1/30 (土) 共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第3回研究会
- 2016/1/31 (日) 共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語:運用に基づく文法理論の可能性」第7回研究会【公開】
- 2016/2/15 (月) 共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第5回研究会【公開】
- 2016/2/21 (日) 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」第3回研究会
- 2016/3/2 (水) 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民/難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」第6回研究会
- 2016/3/5 (土) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容」第12回研究会【公開】
- 2016/3/12 (土) 共同利用・共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」第6回研究会
- 2016/3/13 (日) 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為」第7回研究会【公開】
- 2016/3/30 (水) 基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」研究機関研究員発表会【公開】
- シンポジウム・ワークショップ・基幹研究等
- 2015/05/27 (水) 基幹研究「人類学におけるミクロマクロ系の連関」国際ワークショップ【公開】チャイワット・サターアナン(タマサート大学)「タイにおける二重の紛

- 争と和解の問題」, 黒田景子 (AA 研共同研究員, 鹿児島大学) コメント
 2015/6/7 (日) 基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」公開セミナー【公開】
 『狩り狩られる経験の現象学』の著者菅原和孝氏を囲んで
 2015/7/4 (土) 基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」公開合評会【公開】「藤
 野陽平著『台湾における民衆キリスト教の人類学』(2013年, 風響社)」
 2015/7/10 (金) 第1回フィールドサイエンス・コロキウム: ワークショップ「データと論文
 の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」【公開】
 2015/8/21 (金) AA 研フォーラム【公開】言語研修(古ジャワ語)文化講演: 深見純生(桃
 山学院大学)「パレスチナガザ地区・最新情報」
 2015/8/28 (金) AA 研フォーラム【公開】言語研修(古ジャワ語)文化講演: 肥塚隆(大阪
 大学名誉教授)「ボロブドゥルとプランバナン—中部ジャワの二大建築」
 2015/11/4 (水) 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第4回
 公開セミナー【公開】
 2015/12/18 (金) ~20 (日) 中東☆イスラーム研究セミナー
 2015/12/26 (土) 第2回フィールドサイエンス・コロキウム: ワークショップ「データと論文
 の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」【公開】
 2016/1/8 (金) 中東・イスラーム基幹研究講演会: Sunil Sharma 氏を迎えて【公開】Sunil Sharma
 (Boston University) “Amir Khusraw as a Persian, Indo-Persian, and Persianate Poet.”
 2016/1/9 (土) フィールドネット・ラウンジ「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリテ
 ィと国家: 20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」【公開】
 2016/1/10 (日) フィールドネット・ラウンジ企画「装い/社会/身体: フィールドワーカー
 による通文化比較研究」【公開】

本郷サテライト

共同利用・共同研究課題研究会

- 2015/6/20 (土) 共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」第4回研究会
 【公開】
 2015/11/15 (日) 共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」第5回研究会
 【公開】
 2015/12/26 (土) 共同利用・共同研究課題「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」
 (編集会議)【成果取りまとめ】共同利用・共同研究課題成果物『前近代南ア
 ジア社会におけるまとまりとつながり (仮題)』の執筆による編集会議
 2016/1/11 (月) 国際ワークショップ: Court, Literature and Power in the Early Modern Persianate
 World/共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」第6回研
 究会【公開】
 2016/3/27 (日) 共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」第6回研究会
 【公開】

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究等

- 2015/4/8 (水) 国際ワークショップ Persian and Chinese Historiography in the Mongol Empire【公
 開】
 2015/5/1 (金) 中東・イスラーム基幹研究講演会【公開】Dr. Iqbal Surani (École Pratique des
 Hautes Études) “From Haridas to ‘Alidas”
 2015/5/31 (日) シベ言語研修フォローアップミーティング/第4回シベ語研究会
 2016/2/19 (金) マーレク・シャリーフ博士講演会「第1次大戦期オスマン・アラブ将校の回
 想録から」【公開】Hidemitsu KUROKI (ILCAA) Introduction of Dr. Malek
 Sharif, Malek Sharif “Swimming against the currents: On the unpublished memoirs of
 an Arab-Ottoman officer during WWI”
 2016/3/15 (火) アズファル・モイン博士講演会【公開】A. Azfar Moin (The University of Texas at
 Austin) “The Politics of Saint Shrines in the Persianate Empires”

II-4.5.2 文献資料室の利用状況

2015年度 来館数 (単位: 人)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
来館数	245	164	256	261	155	109	
月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来館数	226	223	234	184	209	171	2,437

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題
2015年度年次報告書

2017年3月10日発行

発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
